薄荷色の抱く記憶

のーばでぃ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宝石の国の主人公、フォスフォフィライトに人間の記憶がインストールされたお話。

※　原作ネタバレを含むうえに、原作通りの展開からズレるのでご了承ください。

目次

IF分岐　―夢の瞳―

IF―01話「しんじゅ」――― 2

IF―02話「決意」――― 30

IF―03話「目標」――― 51

本編

第01話「フォスフォフィライト」79

第02話「シンシャ」――― 112

第03話「ダイヤモンド」――― 132

第04話「記憶」――― 161

第05話「アドミラビリス」― 179

第06話「海」――― 197

第07話「ウェントリコスス」216

第08話「帰還」――― 234

第09話「議事録」――― 260

第10話「こんごう」――― 285

第11話「冬」――― 308

第12話「流氷」――― 330

第13話「排撃」――― 357

第14話「春」――― 389

第15話「獣」――― 419

第16話「しろ」――― 442

第17話「日常」――― 478

第18話「進歩」――― 503

第19話「編成」――537
第20話「用兵」――574
第21話「二重黒点」――609
第22話「アドミラビリスと過ごす日常」――640
第23話「宝石の国」――674
最終章　ラスト・メッセージ
シーン1「変化」――694
シーン2「前兆」――735

ＩＦ分岐　―夢の瞳―
ＩＦ―０１話「しんじゅ」

――何もかも想定とは違う。
一番ショックだったのは、連れて行かれた皆が粉にされてしまった事。
次にショックだったのは、先生が月人の為の道具だった事だ。
考え続けろと自分に言い聞かせた。
失い、奪われ、足掻けば足掻くほどに僕の両手から零れ落ちて行く。
それでも考え続けるんだ。考え続けなきゃいけない。
立ち止まって、正気になんて戻ったりしたら……きっと、崩れてしまうから。
例え粉になっても元に戻れるとルチルは言った。
だけど、砂粒よりも小さな粉にされて、みんな混ざって置き均されてしまったら、どうやって戻せば良いって言うんだ……？
アンタークは戻らない。
ゴーストも戻らない。

こんな状態で、元に戻れる筈がない。
――狂ってしまいそうになる自分を、必死になって押さえつける。
みんなを連れて行かせない。それだけ考えれば良い。
きっと、そうすればうまく行くはずだ。
月人が目的を達成できれば、みんなを連れて行く理由はなくなるとアイツは言った。
その為に……先生を動かし、月人を無に戻させるんだ。
「――恐らく……先生がまだ体験したことの無い事……」
今まで、月人は何度も何度も先生にアプローチし続けた。
永劫と言っていい時間をその為に使い続けた。
その全ての刺激は否定され、ボクは今ここにいる。
残った『未知』はどこにある……？
「それは――僕らの裏切りだ」
ああ、ボクはきっと、根っ子の一番大事な部分を失ってしまったんだな――思考のどこかでそんな事を考えている自分がいた。
今まで一緒に暮らしてきた仲間たちを言葉巧みに誘導し、この月に誘導する。
……ただ、先生を揺さぶる為だけに。
この行為が月人のやっている事と全く同じだと言う事には、必死に気付かないフリを

した。

「――わかった。試す価値ありとしよう。だが、君が向こうに渡るなら――監視はつけさせてもらう」

――そして、僕の体はまた欠ける。

代わりに、合成真珠の左目と言う枷がつけられた。

まるで僕の選択を責めるように、胸のあたりからドロドロしたものが這い上がってくる。

立てないほどの揺れる視界に囚われて――僕の意識は、暗転した。

@　@　@

瞑った眼の奥がぐにゃぐにゃに揺れている。

「……王サマん所の氷河っぷりを見に来たら、なんかスゲえもんを発見してしまった件」

――意識の奥底で、そんな気の抜けた声が聞こえた気がした。

@　@　@

「……う、あ……？」

頭の中をかき回されたような気分の悪さが続いている。

それでも、意識は手繰り寄せられたようだ。

……なんだ、ここ……医務室……？

やけに学校の医務室に似ている気がする。

月人が真似して作ったのか？

いや、そもそもなんでこんな所にいるんだ？

「そうだ……確かエクメアに目を取られて、倒れたのか」

額を抑えながら記憶を反芻してみる。

僕の体は色んなものが合わさっていた上に、そこに元々多構造のラピスの頭まで取り付けてしまったものだから、髪を少し切るのすら何が起こるか分からなくて怖いってルチルが言ってたっけ。

そんな状況で目を付け替えても僕を維持できるなんて、つくづく僕のインクルージョンは図太いものだ。

「なあ、セミ……」

「みーんみんみんみんみーん？」
「――は？」
よくわからない反応をされて、思わず後ろを振り向いた。
「……へ？」
「やっはろー」
――知ってる顔がある。
明るく透き通った薄荷色の輝き。その髪が肩まで延びている。
ニコニコした無邪気な顔。その表情には影が見当たらない。
――遥か昔に、失った顔。
合金じゃない腕。
アゲートじゃない足。
戦争に出たいと先生にねだって居た頃の、無責任でポンコツだった頃の――
「昔の……僕？」
「おや、そうなの？苦労したんだねぇ」
なんか、スゴいのんきな声が返って来た。
「え……月人が合成したのか？昔の僕の頭にそれを取り付けて……？」
「失敬な。ボクは純１００％、緒の浜産まれの歌って踊れたい皆のアイドル、フォスフォ

フィライト３００歳だぜ？」
え……？
あれ……え……？
「……フォス、フォフィライト？」
「そだよー」
「僕の後に、産まれたって事……？え、３００歳!?てことは僕は３００年寝てたってこと!?――いや違う、それ以前にここは月じゃないのか!?」
「おちつけー、おちつけー」
宥めるように背中をさすられた。
その手付きがまるで先生みたいで、なんだか泣きそうになる。
「混乱しているんならさ。ゆっくり出来事を追って行けば良いんだよ。ええと……君の名前は？」
「……フォス、フォフィライト」
「……。こりゃ凄い。僕と同じだねぇ」
何も考えてなさそうにふにゃりと笑う。
……なんか、力が抜けるなコイツ。僕ってこんなにノーテンキだったか？
「じゃあフォス。君の目覚める前の、最後の記憶は？落ち着いてゆっくり整理しよう？

――ボヤいてたの聞いたけど、月に居たんだって？」
「あ、ああ……。それで……目を、入れ替えさせられて……そのまま、意識が遠くなって」
「そこから目が覚めたらココに？」
「ああ……」
そうだ。
ゆっくり思い出して整理しても、さっきと同じだ。訳が分からない。
「――ねえ、フォス。良く聞いて」
昔の僕の顔をした彼が、僕に視線を合わせてやわらかく言った。
「ここは、月じゃないんだ。地球の、学校の医務室。緒の浜で生まれたように出てきた君を、ボクが見つけた」
「……学校……？そんな馬鹿な……っ！」
窓から入ってくる薄い光。
そこから見える外の景色は一面真っ白で訳が分からない。冬の仕事の時に見た、雪が見せる白だ。
……辺り一面の白は、月にもあった光景ではあるけれど。
……もしかして、『もう始まっている』って事なのか？
いつまでも起きない僕をエクメアが緒の浜に放り出したのか？

とりあえず皆を懐柔しろと?

——いや待て。それ以前……冬は当分先だった筈じゃあ??

「な……なにがなんだかわからない……」

頭がどうにかなりそうだ。

短い期間に色んな事が起こりすぎだよ……

「……うーん。もう少し状況を説明しようか?」

「……お願いします……」

「うん。——ここはね、鉱石で出来た体をした生物が住んでいる国でね……」

「あ、その辺りは大丈夫。……っていうか、僕ってどう見られてるんだろ?一応、この国で暮らしてた訳なんですが」

「そお?じゃあそうだな……今は見ての通り、冬の時期で仲間の大部分が冬眠してる。だけど、今年は月人の襲来がかなり変だったので、担当する人員を増やして交代で運用してる。

今起きてるのは、ボクと、先生と、シンシャと、アンタークの4人だけ」

「アンタークだってっ!!?」

忘れない。

色んな記憶を落として来てしまった僕だけど、それだけは絶対に忘れない……!

ボクの身代わりになって連れ去られてしまったアンターク。
月人に砕かれて、手を伸ばしても遠のいて行くアンタークのあの姿だけは、絶対に忘れない……！
「それに……シンシャも？シンシャも冬の担当を？」
忘れない。
自身から滲み出てくる毒液の為に、夜に閉じこもり心に蓋をしたシンシャ。
最初は……そう。
最初は……シンシャが夜から出れるような仕事を、探してあげたいって……そこから始まっていた、気がする。
彼が言う。
「今年の特別運用でね。先生とアンタークは据えたまま、最初はボクとシンシャが担当する。月人への対抗がてら、アンタークの冬の仕事も手伝ってるんだ」
「……え」
それって……このフォスフォフィライトが、戦争に出ているって事？
彼の体を上から下まで眺めてみる。
僕は、アゲートの足がつくまでまともに走る事が出来なかった。
僕は、合金の腕がつくまでまともに戦う事が出来なかった。

だけど彼の体には、そのどちらもついていない。

「……戦争に、出ているの？」

「へ？……ああ、ごめんごめん。別に戦争に出てる訳じゃないよ。ボクは体が脆いからまともに戦えなくってさぁ。

冬の担当は、戦闘員と非戦闘員から一人ずつ参加してるんだ。ボクは非戦闘員枠で、シンシャが戦闘員枠」

「待って、待って、色々待って」

あんまりサラッと話す物だから、ツッコミが全然間に合わない。

合金の手で両目を覆う。さっきまで月で大ショックを受けていたのに、こっちはこっちで大ショックだ。

そのまま数秒の間、何も整理できずに混乱したままで過ごした。

過去の僕の顔をした彼は、ニコニコしたままこっちを見ている。

――何も考えていないのだろうか。ああ、何も考えていないんだろうなどうせ。この顔の僕は結構そう言うフシあったわ。

「その……幾つか質問させて」

「もちろん、どうぞ？」

とりあえず……そう。確認だ。現状の確認。

僕の知っている事のすり合わせだ。
「アンタークは……連れて行かれた筈だよね？僕の身代わりになって、月人に」
「連れて行かれていないよ。まだ健在。ボクの知る限り、過去にアンタークが連れて行かれた事件はないね」
「シンシャは……夜に引き籠ってる筈でしょ？なんで冬の仕事に出られるんだよ」
「無理くり引っ張り出したんだよ、ボクが。シンシャは、毒液をある程度制御できるようになったから、しぶしぶ参加してくれた。彼は既に４器ほど月人を撃破してるけど、汚染と言えるような汚染は出してないよ。流氷割りも毒液を応用してソツなくこなしてる」
なんだよそれ……僕がシンシャにしか出来ない仕事を探していたのに、毒液制御出来たから普通に仕事出て来ましたってそれアリか？
「ゴースト……ゴーストは？この流れだと……もしかして連れて行かれてないのか？」
「普通にいるよ？図書館管理兼、長期療養所担当の非戦闘員だから、あまり連れて行かれる要素ない筈なんだけどなぁ」
「じゃあ……カンゴームは？カンゴームはどうしてる？」
「あー……ゴメン、誰だか分らない。新しく生まれた子かな？」
「いや……ゴーストの中にいるもう一人に、先生が、名前を付けて……」

——段々と。

まさか、そんな馬鹿なと言うような思考が首をもたげてくる。

……仮説を立てた。だけど、それでも辻褄が合わない。

「……ウェントリコスス、と言う単語に聞き覚えは？」

「あるよ。アドミラビリスの王サマの事だね。ボクの友達」

……。

……友達？

「ええと——ああ、ごめん。僕はそのあたりの記憶が曖昧で……なんか、海に行って足を失って、その代わりに貝殻に入ったアゲートと一緒に戻ってきたらしいんだけど、似たような事あった？」

「おー、ちょうど今年の事だよそれ。あったあった。結果はすこぶる違うけど」

嬉々として昔の僕が話し始める。

最初は月人がウェントリコススを学校に落とす所から始まり、そのまま食べられ、貝殻から復活し……ウェントリコススの言葉に乗って海を目指したんだとか。

ところがそれは実は罠で、目的地には月人が待っていた——と、僕の記憶の琴線にも引っかかる事を返してくれた。

——そうだ。

なんとなく、思い出した。
僕はそこで月人に足を砕かれて、連れて行かれそうになって……確か、ナントカとか言うアドミラビリスが大暴れしたおかげで助かったんだ。
だけど、彼は違うらしい。
最初から罠を想定して、海に行くメンバーに先生とジェードを入れていたんだそうだ。
海への遠征の目的は国交だったから、代表者とそれに近い者が行くのは殊更都合が良いだろうと。
……結果、月人の罠はことごとく先生が撥ね返し、大団円で帰還……と。
「――ああ、そうか。やっと解った。飲み込めたわ」
天井を見上げて嘆息した。
「お？解決？」
「解決解決。……つまりだね。僕は１００年前の夢を見てるんだよ。夢だから都合の悪かった事は全部良い事に置き換わってるんだ」
やることなす事すべて失敗して来たからね。
少しは、うまく行っている夢ぐらい見たって良いじゃないか。
きっと僕のインクルージョンは、そんな気を利かせているに違いない。そう決めた。

「――夢かぁ、なるほど。じゃあさ、一つだけ教えてよ。
……君が見ているこの夢は、良い夢？それとも悪い夢？」
彼が僕にそう問いかける。
「アンタークがいるなら……シンシャが夜から出ているなら……良い夢に決まってる。
それも、飛び切り良い夢だ」
「……そっか。それは良いね！
――じゃあ、もっと良い夢にしよう。説明だけじゃ実感ないでしょ？二人に会いに行こうよ」
そう言って、彼は僕の手をそっと取った。

@　@　@

昔の僕の顔をした彼は、どうやらこの夢の中では案内人的な役をしているらしい。
非常に都合がいい役のようで、僕の事をあんまり聞いてこないのだ。
なんでこんな色々ツギハギだらけの体になったんだとか、この合金の腕はどこまで伸びるのとか。
……特に、ラピスの頭がついている事とか、真っ先に気になる所なのにね。

いやいや、月に居たと知った時点で僕だったら質問攻めにしている自信がある。
……そうだ。彼は僕の事を聞かないでくれている。
ただ手を取って、ニコニコ笑いながら、近況や学校の中を案内してくれる。
あり得ない彼の存在も、僕がここを夢と判断している要素のひとつだ。
学校の中を回りながら、解らない事とかを色々教えてくれる。
１００年前の学校は、あまり僕の知っている様相と変わっていないけれど、いくつか僕の知らない道具とかがあったりする。
筆頭としてホイッスルって言うのを見せて貰った。息を吹き込めば高い音が出る。
主に助けを呼ぶ時に使っているそうだ。用途が泣ける。
歩んできた事柄も随分違うらしい。
特にシンシャだ。
冬の仕事の他に、彼はなんと二つもシンシャの仕事を見つけていたと言う。
さすが夢の中の僕だ。
――後でその辺りを詳しく教えて貰おう。丸パクリしたい。
廊下を通りつつ、ついでだったのでウェントリコススの貝殻を見させて貰った。
大きなヒビの入った貝殻だ。と言うか、ヒビ以前にゴッソリ欠けている。
彼が取り出された貝殻なんだそうだ。

ウェントリコススに食べられちゃう所はそのままなんだな、この夢。どうせ改変するならそのあたりのカッコ悪い所も改変しなさいよ。僕が華麗にウェントリコススを返り討ちにした、とかさ。……ああ、戦えないんだっけ。

そういやこの殻、マジマジ見るのは初めてじゃないか？

結局、僕が取り出された後の貝殻がどうなったのか知らないままだな。誰かがどうにかしたんだろうけれど。

……起きて地球に戻ったら、なんとなく聞いてみようか。

「――先生！」

次に連れてこられたのは先生がいつもいる部屋だ。

格子の入った大きな窓を見上げていた先生が、その声に気付いて振り返った。

「ふむ――目を、覚ましたようだな」

……先生。

人間に作られた道具なのだと、月人は言った。

僕らが攫われているのは、月人が先生を道具として動かしたいから。

攫われた仲間たちは皆、粉にされてしまった。

ならば……みんなが粉になってしまったのは……先生のせいか……？

――僕は、先生から皆を奪って、月に連れて行くとエクメアに言った。

僕は今、どういう顔をしているのだろう。
僕は今、先生にどう言う感情を抱いているのだろう。
「緒の浜に倒れていた君を、フォスが見つけ、私が連れてきた。――体調はどうだ？」
体調……体調、か。
「あまり……良くはありませんね」
「……うーん……良い夢なのに？」
「――夢？」
先生の反応に対して、隣の彼が唇に指をあてて制してる。
それがなんか、浅ましい僕自身に庇われているようで、少し変な笑いが出た。
「……罪の意識とか罪悪感をハンマーの形に固めて、全身をボコボコにぶん殴られている気分だ。
――僕は決めた筈なのに。自分で踏み込んでおいて……今更後ずさりしたくなるんだ」
彼の指が、僕の目元を優しくなぞる。
その指についた金色を見て、その行為が僕の流した合金を拭いとる為の物だと気づいた。
「……大丈夫だよ」

優しい声が、少しだけ——辛い。

「時間はたくさんある。少しずつ、ゆっくり……時には立ち止まっても良い。後ずさりしたって構わない。

——少しずつ、整理をつけて行こうよ。ボクも、手伝うからさ」

まるで全部許してあげるとでも言うように、彼の手が背中を撫でてくれる。

「……ありがとう。さすが、僕の夢だ……なんて僕に、都合のいい……っ、」

「——夢の住人にも願いがあるよ」

彼が、言うのだ。

「ボクはハッピーエンドが好きだ。……だから、この夢を良い夢にしたい。そう思ってる。

……だから君も、手伝ってね?」

——ああ……聞いていたな。

良い夢なのか、悪い夢なのかって。

良い夢……良い夢にして、良いのかな……

散々バカやって境界線を踏み越えた僕が、良い夢を見て良いのかな……?

「いい夢見たって、良いじゃない。だって夢だもの。……誰にも迷惑、掛けないだろ?」

「……ありがとう」

夢だから――誰にも迷惑かけない、か。
ああ、それは……少しだけ、楽になれる言葉だ。
「……先生。報告はボクから、後程」
「構わない。……ただ、一つだけ教えて欲しい」
先生の手が、僕の頭にそっと触れた。
「――君の名前は？」
金色に滲む視界の中で先生を見上げる。
「……僕の名前は……フォスフォフィライト、です」
先生は少し驚いたように沈黙して、そのあと優しく言ってくれた。
「そうか――フォスフォフィライト。我々は君を、歓迎しよう」

@　@　@

「おー、いたいた」
学校の入り口に回ると、シンシャとアンタークがこっちに向かって歩いてきている所だった。

「……アン、タ――ク……」

――フラッシュバックする。

『先生が寂しくないように、冬を頼む』――そう言って砕け散ったアンタークの姿。

「あらかた雪下ろしは終わった。2日ほどは持つだろう。……そっちも、目覚めたようだな……？」

「アンタ――ク……」

連れて行かれた。

僕のせいだ。僕の身代わりになって連れて行かれた。

何度も何度も後悔した。

あそこで剣を投げなければ。腕を伸ばしていれば。もっと早く腕を使いこなせていれば。もっと勇気があれば。

アンタークは――

「アンタ――ク……アンタークっ……!!」

「……え？……お、おい……ちょっ、なんだこの腕……っ!?」

「アンタ――ク――」

謝りたかった。

謝りたかったんだ。

ずっと君を探してた。
月で君が粉になっていると知った時、体の力が全部抜けて、目の前が真っ暗になるのを感じた。
――ここにいる。
アンタークは、ここにいるんだ……っ！
「――落ち着いて、『フォスフォフィライト』」
「……は？」
シンシャが声を上げている。
「アンタークは連れてかれてない。ここにいるんだよ。――だから、やりなおせるって事だ」
「……やり、なおせる……？」
「その通り。……ほら、腕離してあげなよ。君、頭まで変わっちゃってるんだからさ。アンタークからしてみれば、名前の知らない奴がなぜか自分の名前を連呼しながら腕をにょろにょろ伸ばして迫って来てるって図だよこれ。怖くね？」
……。
……少し、正気に戻る。
意識してない内に僕は、合金の腕を伸ばしてアンタークを絡めとっていたのに気付い

た。

「……それは……なんか、凄く怖いね」

「そーでしょうとも。ほれ、まずは居住まい直して自己紹介！」

「あ、はい」

急いで腕をもとに戻す。

ドン引きして固まっているシンシャとアンタークに対して、深々とペコリ。

「え、えーっと――フォ、フォスフォフィライトです。よろしくお願いしマス……」

……。

……。

「「――はあぁぁぁぁっっっ!!?」」

――とても変な声を上げられた。

……そうだよね。

例え夢の中であっても、こっちの方が普通だよねぇ……？

ドン引きさせてしまった……どうやって謝ろう。

色んな感情がごちゃ混ぜになった頭の中で、なんかそんな事を考えてる僕がいた。

これも一種の、現実逃避なんだろうか。

金剛「――彼は？」
フォス「寝付きましたよ。いっそそのまま冬眠に、とも思いましたけど。しばらくボクの生活リズムに付き合って貰うつもりです」
金剛「うむ、それが良いだろうな」
アンターク「……で、結局何なんだ？あいつ」
フォス「フォスフォフィライト、だよ。多分間違いないと思う。足はアゲート、腕は金と……白金かな？で、頭はラピスを取り付けて、左目は……なんか良く分からんかったけど」
金剛「あれはおそらく、真珠だろう」
フォス「――っスか。あの目だけくせ者ですよ。なんかぼうっと光ってたし」
シンシャ「……とりあえず、アイツについて、分かった事を聞かせてくれ」
フォス「あいあい。彼の言動を信じるなら、彼は月に連れて行かれたフォスフォフィライトだ。目を入れ替えられて気絶したら、なぜか緒の浜にいたらしい」

アンターク「この時点でツッコミどころ満載だな」
シンシャ「……そして、やっぱり、月人か」
フォス「月人によって目を入れ替えられたくさいから、あの真珠の目は何らかの監視、記録機能を持ってると疑った方が良いかもしれないね。
――ただ、警戒するべきかと言われるとチョッと迷いつつある」
シンシャ「……アイツの言ってた経歴だな」
フォス「そう。彼にとって、今は彼の感覚から１００年前の冬に当たるらしい。ただしそこに至るまでの経歴は、実際のボクらの経歴と符合しない。
どうやら彼は、王サマ騒動の時に一人で海に入ってそのまま罠に掛かり足を失ったようだね。どうもアドミラビリスと疎遠みたいだから、国交も無かったようだ。
……罠が成功してしまったのなら、王サマが罪悪感に潰されて関りを絶ったんだと考えられる」
金剛「あの時の、もう一つの結末か……」
シンシャ「いや、って言うかそれを信じるんですか？」
フォス「少なくとも本人は嘘をついていないとボクは思ってる。
シンシャは夜に閉じられ希望が無いまま過ごし、アンタークとゴーストは連れて行かれたそうだ。

……反応からしておそらく、彼とコンビを組んでいた可能性が高い」
アンターク「……コンビを？私が？フォスとか？？」
フォス「いつ変わったのか知らないけれど、パーツの入れ替えによって戦闘能力がつき、戦争に参加していた可能性があるね。あの合金の腕は便利そうだったし、ともすればシンシャと同じような戦い方も出来るのかもしれない」
シンシャ「……汚染の心配なさそうで羨ましいな」
フォス「僻まないの。……相当ハードな生き方してたみたいだよ。合金の制御が出来ずに、体にヒビを入れるぐらいだ。精神がボロボロで不安定になってる」
金剛「……あの目を、あの顔を、私は何度も見てきた。私の力が及ばず月人の誘拐を許してしまった時の……絶望と後悔にまみれた時の顔だ。
最も酷かったのはイエローだ。……あの時のイエローと、同じ顔をしていた」
フォス「体を失い、仲間を失い、その度にツギハギして生きて来たんだと思う。
……もしくは、そんな記憶を月人に埋め込まれた、か」
アンターク「記憶を埋め込むって……可能なのかそんなこと!?」
フォス「ナノマシン説が正しければ理論上可能だよ。ただ、月人にそんな技術があればボクらは既に終わってると思う。だから、その説は個人的には信じがたいね。
――荒唐無稽をそのままとめてみよう。

彼はボクらと違う歴史を歩み、１００年後に至るまで体と仲間を失いそれでも足掻き続け、ついに月人に捕まり左目を入れ替えさせられて、その後何故かボクらの時間軸に飛び込んで来たフォスフォフィライトだ。

そして今、都合のいい夢を見ているんだと信じている」

シンシャ「……」

アンターク「……酷いな。そのまとめを信じるかどうかは置いて……酷い」

フォス「……先生、お願いがあります。解くべき謎は山ほどあります。もしかしたら仇となるかもしれません。だけど……彼を受け入れて貰えませんか。

もし彼が月人側であっても、王サマの時みたいにきっと抑えて見せます」

シンシャ「フォス……お前がそこまで言う理由は何だよ？」

フォス「……なんとなく、思ったんだ。きっと本当の意味で、彼はもう一人のボクなんだろうなって。『記憶』を持たなかったボクなんだろうなって。

ボクに記憶が無かったら……こんな性格だからさ。彼の言う通りの道を、歩んだような気がしてくるんだ」

シンシャ「……」

フォス「それに、先生はイエローを例にあげたけど、ボクはちょっと前のモルガを思い出した。

――ボクはさ。ああ言うの、イヤなんだ。キライなんだ。ああ言うの……」
金剛「――許可しよう。もとより、受け入れるつもりだった。彼を助けてあげなさい」
フォス「先生……ありがとうございます」
シンシャ「……解ったよ。もとより、お前ひとりだけに押し付けて放っとく気はない。俺も、何が出来るか分からないけど……協力する」
アンターク「私が連れて行かれたと言っていたな……私も、気にかけてみる」
フォス「シンシャ、アンターク……ありがとう」
金剛「――ふむ、しかし差し当たって問題が出てくるな」
フォス「ふえ?」
金剛「名前だ。フォスが二人ではややこしいだろう」
フォス「ああ、それなら大丈夫ですよ!」
金剛「うん?」
フォス「ボクがフォス＝ワンで彼がフォスツーと――」
金剛「明日彼を呼んで相談してみよう」
アンターク「そうですね」
フォス「いけずぅ」
シンシャ「……。お前がアフォスで十分なんじゃないか……?」

フォス「……いけずぅ」

ＩＦ―０２話「決意」

僕の小さな欠片が寄り集まって行く。
カチリカチリと乾いた音を立てながら、僕の体が組みあがって行く。
気付けば僕は、大きな多数の泡で作られた何かの上で目覚めるのだ。
「……。久々に見たな、この夢……」
なんて言うんだっけ。
ええと……そう、明晰夢。
夢の中に居て、夢だと解る奴だ。
ラピスの頭つけて起きたばかりの時に良く見ていたんだよね。
「この短期間でまたずいぶん散らかったよね」
「――ラピス」
僕の頭の元になった宝石。
青い長い髪を右手で掻き上げながら、ラピスが周りを見渡している。
この多数の泡は記憶の塊だ。

この散らかりようが彼女には我慢ならないらしい。
「んもー、夢の中でぐらい休ませてくれたって良いのにさ」
……うん？夢？
でも僕はさっきまで夢を見ていた訳で……
――ふむ。夢の中で夢を見てるのか。新しいな。
「見事なまでの思考放棄だねぇ……まあ、気持ちはわかるよ。僕も同じ状況になったら色々放り出したくなってくるかもしれない。
……何だかんだ言って、自業自得の点は多々あれど、君は実質３００年の若さで他の石たちには無いハードな生き方をしてきたんだものね」
「わかってるならー……すこぉーしそっとして置いてくれても良くないかなぁ？……なぁーんて」
……。
そりゃあ、僕だって色々ヘンだとは思ってるさ。
でもそれを整理するのさえ、疲れてしまった。
ラピスの頭があれば、うまく行くと思ったんだ。
実際、色んな情報が頭に飛び込んでくる。整理も早い。今の僕なら――なんて、思ってしまっても良いだろ？

でも、ダメだ。何もかもが想定と違った。
月人の目的も。先生の事でさえも。
昔っからこうだ。何をやってもうまく行かない。現実はボクの想像を嘲笑うかのように、容易く飛び越えて行くんだ。
……先生を裏切って、みんなを月に連れて行く。
その決断でさえ、こうして優しい夢に揺られたら足元から崩れそうになる。
――きっと目が覚めたら、僕はもっと苦しい思いをしなきゃいけなくなるに決まってる。
何処が正しい道かも分からないままガムシャラに走って、また失敗するんだ。
だったら……この夢の中でくらい、何も考えずに居させてくれたって良いじゃないか。
「君のその考えはもっともだ。そして僕は、先生を裏切ると言う決断も含めて君を責める気は全くないよ。
ただ、勿体ない事をして終わりそうだからアドバイスしようと思ってね」
「……アドバイス？」
「そう、アドバイス」
ラピスが屈んで僕に視線を合わせる。

「あれが本当に夢であるかは僕にも解らないよ。夢であっても無くても不可解な事が多すぎる。例えば、もしこの状況が何十年と続くんだったら、僕のアドバイスは不要だと思う。

——でもさ。夢は醒めるものなんだ。いつまで居心地のいい場所に居れるかなんて分からない。

なら、醒めるまでの時間を思考停止して過ごすんじゃなくて……情報を集める時間、考える時間に費やすのはどうだろう？

もしかしたら……僕らが決断した道の外に、何か別の道が見つかるかもしれないよ？」

@　@　@

「……ごもっとも、ではあるか……ラピスは厳しいなぁ」

いつ醒めるか分からない、か。

彼のおかげか、とても居心地よく過ごす事が出来た。だから、もう少し……と思ってしまう僕は悪い子かしら。

「歩むスピードは人それぞれ、休むタイミングも人それぞれ。——でも、その考えを元に

したら堕落するばかりなんだよなぁ。ムズかしいもんだわ」
　隣からそんな声がする。
「――おはよ。良く寝れた？」
　昨日と同じ、昔の僕の顔をした彼が微笑みかけてくれていた。
　窓から薄っすら差した冬の光とクラゲの光を頼りに、バインダーに挟んだ紙に向かって何か書き物をしていたようだ。
「うん、おはよう。……僕、何か言ってた？」
　彼の言葉があまりにピンポイントだったから聞いてみる。
　モルガとゴーシェが僕に引っ付くようになった時も、結構寝言酷いとか言われたっけ。
「んー……疲れてんだから休ませれー、的な？――夢の中で、ラピスに怒られちゃった？」
「うーん……怒られては、無いかなぁ。ただ……いつ醒めるか分からない夢なんだから、勿体ない事するなってさ」
「あらら」
　いつ醒めるか分からない……か。
　確かにそうだ。

１０数えた後に目を開ければ、セミの顔がドアップで映ってましたとかありうる話だとは思う。

「――夢の住人としては、そこんトコどうなのよ？」

「うーん……夢の住人にも、そのあたり良く分かんないなぁ。ずっと醒めないならそれはそれで大歓迎なんだけどね。

……醒めるにしても、せめて予兆と時間は欲しい所だよ」

いきなりお別れはイヤだ、と我儘みたいな事を言う。

でも、その言葉には共感できた。

「ラピスかぁ……どんな石だったの？ボク、実はラピスとあまり絡んだ事ないんだ。勉強してた頃に連れて行かれちゃったから……。凄く理知的な天才だった、って事は聞いてるんだけどね」

「うん――ひと言で言うなら、それはラピスをとても良く表してると思う。

実際、僕も覚えてないんだ。ラピスとは……夢の中でしか話してない」

自分の頭をコンコンつついてみる。

「どうもラピスは、インクルージョンに自我をある程度残していたみたいでさ。夢の中でラピスと話す事があるんだ。明るく気さくで、理知的な感じがしたけど……ルチルのマッドな所を好奇心に置き換えたような感じもしたかな」

「好奇心で突っ走るタイプな訳ね……そう言えば、戦闘中に考え込んでしまった所を射られたって聞いたかな」
「ラピスの頭つけてから、それがどう言う状態だったか良く分かるんだ。月人を相手にしたときも情報収集と分析が勝手に進んじゃってさ……疲れる上に気を取られる」
「なんと。まさかの思考能力引継ぎっスか。あるんだねぇそんな事……いや、実例は既にあるか」
「何それ？」
聞けば、ウェントリコススに食べられた後で復活してから、アドミラビリスの言葉が分かるようになった事が、まさに能力の引継ぎに当たるそうで。
「アドミラビリスにインクルージョンが？」
「そう考えてる。でないと、いきなりボクだけアドミラビリスの言葉が分かるようになった説明がつかないし」
なるほど、言われてみればそうなのかもしれない。
流氷にもインクルージョンは宿っていて、僕はその言葉を聞く事が出来た。ウァリエガツスの言葉も僕だけが理解できたし。
海の物にもインクルージョンが宿っていて、そのインクルージョンによって言葉を共有できるという説は普通にあり得そうだ。

「……そう言えば、冬なんだよね」
「？うん。そだよ？」
「流氷割り、やる訳じゃない？」
「……」
あらかさまに目を逸らされてしまいました。
流氷も喋るんだよねー、と話を繋げようと思った矢先のこれです。
……あれ？僕も一応流氷割り付き合ってた筈なんだけどな。
「……ハブられました」
「……え？」
口を尖らせて彼がぼそりと呟く。
「いやね？踵でカツカツ穴開けるトコまではうまく行ってたんよ、ホント。自分でもウマく行ってたと思う。スゴく思う。マジで」
「あー、ほんのり覚えあるなぁそれ。
穴開けた後、剣を穴に叩きつけて流氷を割るんだけど、最初はパワーが無くてヒビしか入らなくってさ」
「そうそう、そうなのよ。しかも代償に腕が砕け散っちゃったりしてね」
「――ちょっと待とうか」

おいなんだそれ。僕はそこまでひどい事になんなかったぞ。
せいぜい体を伝わった衝撃が顔にヒビ入れたぐらいだぞ。
「腕大丈夫だった……ん、だよね。腕ちゃんとついてるし。……実は他の素材だったり？」
「大丈夫です。フォスさんは殊更砕けやすいので、外出の際は糊を常備しております。アンタークにその場で治して貰ったんだけど、その後流氷割り禁止令が発令されました。くすん」
インパクトひっどかったんだろうな。
僕の両腕がなくなった時のアンタークの狼狽えっぷりと落ち込みっぷり凄かったからな。
「ちょっとー気ぃつけてよぉ？僕は流氷割ってるときに両腕なくしちゃったんだからさぁ」
「え、マジで？」
「マジマジ」
そう――流氷で、両腕をなくして。
学校のストックには僕に合う素材が無かったから……だから、緒の浜に探しに行ったんだ。僕の腕に合う素材。

「そして……僕の腕がきっかけで、アンタークが連れてかれたんだ」
——あの日は、分厚い雲が出ていた。
大丈夫だった筈なんだ。
「……王サマと、出会った年？」
「うん」
「……冬眠入って何日目か、分かる？」
「忘れない。２２日目の昼だった。分厚い雲がかかっていたのに……いきなり、晴れたんだ」
「……今、１２日目だ」
——１２日目。
ああ……何とか流氷割りがモノになってきた時期だ。
結局、アンタークみたいに割る事は出来なかったから、のこぎり剣でギコギコ流氷を切って行く方法にシフトしたんだっけ。
「——新型？」
「そう。ピンクフローライトの断片を乗せた新型器だった。アンタークが霧散させたんだけど……直後、小さい初めて見る型が一器来て、アンタークを射貫いた」
手が、どろどろと溶けて行く。

あの時――僕がこの手をモノに出来ていたら、アンタークを助けられたんだ。
……いや、判断を間違えてさえいなければ。
遠ざかって行く月人に対して、剣を投げるのではなく手を伸ばしてさえいれば……！
「――大丈夫。これで、アンタークは助かる」
どろどろと崩れた手を取って、彼がそう言う。
顔を上げた。
「……たすかる？」
「助かるよ。相手が何やってくるか解っている。出現のタイミングも解っている。シンシャも、そして――君もいる」
やり直せる？
……アンタークが、連れて行かれないように……？
「手伝ってくれる？」
「手伝わせて」
気付けば、彼に縋り付いていた。
「僕が……怪しいのは解ってるんだ。でも、お願いっ……アンタークを、助けさせて」
先生並みに怪しい筈なんだ。
しかも月から来たなんて言ってる。

月人の仲間だって僕ですら思う。
……でもっ……！
「――大丈夫だよ。確かに君は、君の言う通り怪しいのかもしれない。
でも、君の言葉と君の気持ちが、嘘だとは、偽りだとは思わない。絶対に思わない。
ボクも……そして、みんなもだ」
――状況を、詳しく教えて欲しい。
昨日とは違う、凛とした声だ。
僕は縋り付きながら頷いた。
――ラピスは情報収集と考察に使えと言った。
もう一つある。僕にしか出来ない、もう一つの使い方がある。
……あの悪夢を、止めるんだ。

@　@　@

「――22日目、緒の浜。曇っていた空が突然晴れ、直後月人襲来。
最初は新型一器。ピンクフローライトで作成された武器を使う。球体に針と糸をつけたそれは、器に乗り込んできた石を糸で捉えた後に――爆散させると言う物だった。

これを霧散させると、次いで小さな二器目が来た。
それまでなかった型であり新型と思われるが、石を内包していたかどうかは不明。旧型と同じく、弓矢による攻撃しか見ていない」
地図の上に月人の駒を置きながら説明する。
「僕は……物理的に動く事が出来なかった。金と白金の合金を失くした腕の代わりに仮止めしたら、急速に融合して重みで動く事が出来なくなった。
迎撃はアンタークが行った。一器目を撃退するも、二器目の攻撃を受けて……連れて、行かれた」
恐る恐る顔を上げて、アンタークの反応を見た。
人差し指を口元に当てて考え込んでいた。
信じるのか？と言う類の発言は誰の口からも出てこない。
もう一人のフォスが言う。
「注目すべきは……一器目の持つ武器の特性とそれに続く戦法、かな。弓矢や鉾と違い、爆破はリスクが高い。
高空から目下のターゲットに対して絨毯爆撃するならともかく、この一器目の武器は中距離爆破に特化してる。
月人戦において中距離と言うのはイコール……器の上だ」

「爆破させたら自分も巻き添えになる……か」
「後続を見る限り、それを前提とした策に思えるね。一器目が自爆覚悟で特攻して確実な出血を狙い、二器目がトドメと回収を行う。二器目が小さいのは、奇襲を狙いやすくする為……かな？」
驚いたことがある。
この会議を引っ張っているのは、なんと昔の僕だ。
昔の僕ってこんな真似が出来るほど頭の造りがよろしかったけ？と思ってしまう。
……これはやっぱり、あれかしら。
夢だから、なんと言うかカッコいい方向に修正されているのかしら。
「雲がかかっていたのにも関わらず、晴れた瞬間に即行動した……って事は、この布陣は突発的な物ではなく事前に計画されており、実行する瞬間まで待機状態にあったと取れる。緒の浜は学校からかなり遠いから絶好の好機だ。
そして――大部分の仲間たちが冬眠に入るこの時期に確度の高い誘拐作戦を行うならば、それに別の意味を持たせた、さらなる襲来の計画もしていたんじゃないかと予想する」
「……いや、特にそれらしき事象はなかったように思うよ？」
あの時、アンタークを取り戻そうと月人の襲来を待ち望んでいたから間違いない。

襲来頻度、と言う点では特に変化はなかったように思う。
「――それは君に戦闘能力が付加されて、アンタークの代わりを務める事が出来るようになったからじゃないかな」
考え込んでいたシンシャが口を開いた。
「……フォスに戦闘能力がないなら……実質、月人が相手をすべきは先生一人になるな」
「そうなる。今まではアンタークがいたから出来なかった策が使えるようになる訳だ。先生がいくら強いと言っても、体は一つだからね」
……あ。
「……先生が出てしまったら……冬眠している皆が無防備になる……っ!?」
その恐ろしい状況に、たった今言われて気づいた。
当時の僕は戦力外だったんだ。
当時の月人からしてみれば、アンタークさえ除外できればもう守りは先生しかいないから、1器を囮にしてもう1器学校に強襲させれば高確率で冬眠中の皆を狙えたんだ。
もちろん、先生は「冬眠中の戦闘員を起こす」と言う方法を取る事が出来る為、確実とは言えないけれど……
心状的な問題で、それを取るまでに期間が空く可能性は十分にある。
そこを波状攻撃されたら?――さらに何名か連れ去られたんじゃないのか?

……？

　――いや、待って。

「……とても効果的だと思う。だけどそれ、出来なかった可能性の方が高いかもしれない」

「うん？」

「あの時……最終的に、緒の浜まで先生が来てたんだ。アンタークが連れ去られた後の空を、僕と先生で見ていたんだ。

　――つまり、学校が空になった状態が作られてしまってた。それでも、冬眠中の皆への襲撃は無かった」

「……うっわ」

　１００年以上前の事に今更ながら戦慄した。

　ダメじゃん、あれ。

　あの局面で先生出てきたらダメじゃん。近場ならともかく、距離のある緒の浜だぞ。下手したら皆そのまま誘拐されてた訳で……

「月人のあっぱっぱー再びか。月人って遠距離でも連絡する方法あるみたいだから、そのままもう1器要請されてたら詰んでたね。……リソース不足かな？」

「その可能性もあるけど……もしかしたら、月人は緒の浜まで来た先生の姿を見てな

かったのかもしれない」

あの時、先生が緒の浜に辿り着いた頃には月人の姿がだいぶ小さくなっていた。

……逆に、早く辿り着いていたらその方が危なかったのか。

「今まで月人の同時襲来の実績は3器――その3器襲来も滅多に発生しない所を見ると、リソース不足と言うのは普通にあるかもしれないね」

「月人のリソースは我々が想像しているほど無いのではないか、と言う点は前々から指摘されていたしな」

それでも戦力全て外に出す、と言うのは怖すぎるけどね。

「――さて、話を戻して本件への対策だけども」

彼がピッと人差し指を立てた。

「方針としては結構限定されると思う。

２２日目を籠って過ごしても次の晴れの日に事が起こるだけだから、あんまり意味がない。晴れの日に緒の浜に行かなければ良いのかもしれないけれど、それだと新型を温存されそうで気味が悪い。

かと言って戦力を緒の浜に集中させると今度はここが危ない。そしてこの件だけにしか対応できない布陣を組むと想定外の事態に反応できない。

――っつーワケで、月人が襲いやすくかつ新型二連戦を捻り潰せるメンバーを外回り

に当てるべきかなと思うわけです」
なるほど、趣旨は解る。
「つまり、強いけど弱そうなやつは外回りしろ、と」
「身も蓋もない言い方したらそんな感じ」
「強いけど弱そうって……そう言えばお前は戦力に数えて良いのか？」
「僕は強いよー、スゴく強いよー」
自分で言うのもなんですが。
モルガとゴーシェにもツッコミ入れられたなぁ。
「でも、元はアフォスだろ……？」
シンシャがスゴい怪訝そうな目線を向けてくる。
アフォスってそれ、こっちの僕も言われてたのか……
「へいそこ、さらっとボクまでディスるのやめようぜ。イジメカッコワルイ」
「――もしフォスの脆さが解消されているのなら、かなり強いのは私が保証しよう。なにせ死角からのボルツの不意討ちに完全対応して見せたからな」
ちょっ、えええええええええっっっっっ!!?
え、ちょっ、なんだそれ!!?
シンシャとアンタークも同じ反応らしく、変な声を出しながら一斉に彼に視線を集め

た。

当の本人は目の横でピースサイン作ってる。口で『キラッ☆』とか言ってる。

――なんだろう。僕ってここまでうっざい性格してたかしら。

「――まあそんな訳で。ボクが提案する布陣は、そっちのボクとアンタークが外回り、学校にはボクとシンシャが待機、んで先生が遊撃ってのはどーかなと」

本当は僕とシンシャを組にしたいらしいけど、シンシャは一度実力を見せてしまっているので囮には不向きなんだそうだ。

3器同時撃墜を一人でこなしたって……え？なにそれ??

と言うか、この時点で3器同時があったの!?もっと先じゃなかったっけ!?

ともかく、布陣としてはあの時の焼き増しだ。

――そして僕は、あの時とは違う。

「……思い切ったな」

「アンタークを守りきり、被害なしでこの冬を乗り切る。……その点に関しての意気込みは、彼が一番だとボクは信じてる」

彼が、僕の気持ちを汲んでくれているのが分かる。

――アンタークの「思い切ったな」の意味は、ちゃんと分かってた。

僕の実力が言うほど無かったり、精神的な面で隙を見せてしまったらと思うと相当な

リスクを抱える事になってしまう。
まして、僕は正体不明だ。
例えば僕が月人に寝返ってしまったら……僕が彼ならきっと、こんな布陣を敷く事は出来ない。
……。
月人に、寝返る……か。
つい2日前まで、僕はその事を考えていた筈なのに……ね。
皮肉なものだと思う。
「安定さ――と言う点で」
アンタークが僕を見て言った。
「私は、お前をかなり低く見積もっている」
「……」
正しいと思う。
僕自身も、そう思ってる。
「……だから、見極めさせてもらう。Xデーまで10日あるからな。
――もっとも、こんな日付なんてあって無いようなものだろうが……ついて来ると良い」

……ああ、アンターク。
やっぱり君は強くて、厳しくて……どこまでも、優しくて。
「――うん。ついてくよ。だから……アンタークに、僕を見ていて欲しい」
この決意は変わらない。
――そうだ、彼の言う通りだ。
アンタークを守りきり、被害なしでこの冬を乗り切る……その気持ちは、誰にだって負けてたまるものか。
「……異論は、無い様だな」
先生が僕達を見回した。
「――ならばこのシフトを許可する。頼んだぞアンターク、そして――フォスフォフィライト」
「はい」
やり直してみせる。
――必ず。

IF―03話「目標」

「――よっ、と」

勢い良く降り下ろしたノコギリ剣が流氷にヒビを入れた。

それはあらかじめ空けてあった穴に沿って次々と拡大し、ついには流氷を割り砕く。

――うん、絶好調！

ノコギリ剣を肩に担ぎながら崩れ行く流氷を眺めて、その結果に頷いてみた。

「ホラホラどう？ちゃんと出来たでしょ？」

昔は、流氷を砕けずに非力を嘆いた事もあったけど、今は違う。

他でもないアンタークにそれを見せられると言う事に、僕は不思議な高揚感を覚えた。

なんて言ったって、そのアンタークは直前まで懐疑的な目を向けまくってたのだ。

こっちの僕は流氷割りを試した途端腕が砕けたと言うし、いくら僕が「冬の仕事をやっていた」って言っても信じられなかったと思う。

「ああ……申し分ない見事な手際だ。その……フォス。腕は大丈夫か？」

「この通り、大丈夫だよ」
　この合金の腕はその重さ由来なのか、結構なパワーを僕に与えてくれる。
　そして柔らかいが故に砕ける事の無い靭性が、出来なかった事を出来る事に変えて行ってくれた。
　流氷割りも……そして、戦争もだ。
　ヒビなんて入り様の無い僕の腕を見て、アンタークがポツリと呟いた。
「……まさか本当に第2のフォスが現れて、雪辱を果たす事になるなんてな」
「……はい？」
「あ、いや、すまん。こっちの話だ」
　――お、おのれ流氷め……今はその勝利を噛み締めておくが良い。たとえボクが倒れても、第2第3のフォスが必ずや貴様を……
　……みたいな負け惜しみを言っていたそうだ。
　うわあ、すごい予言だわ。言った本人もビックリだろう。
「――では、フォスは向こう側を頼む。私はこっちから回る。……まぁ、昨日まで私とシンシャが砕きまくったからな。さほど時間も掛からず終わるだろう」
「うん、了解」
　アンタークは、自他ともに認める程に団体行動が苦手だ。

僕も雪降ろしの最中に誤って屋根から落とされてしまった事があったっけ。
今年の冬は月人を警戒した特殊シフトだと言うから、団体行動を始めたのも今年からの筈。
――こちらの僕も、雪降ろしの時に屋根から落とされてしまったりしたのだろうか。
ボクがやっていた冬の仕事を思い出す。
アンタークが居なくなってから、彼を連れ去った月人を撃破する事ばかり考えていた。
流氷を割り、雪を降ろし、校内を掃除しながら、いつも空ばかり見ていた気がする。
仕事の内容は多く、厳しかったけれど……アンタークを思い出したら、辛いと思う気にもなれなかった。
――ねえ、アンターク。
僕はずっと、君に見て貰いたかったんだ。仕事ができるようになった僕を、君に見て貰いたかったんだよ。
でも、君は僕の身代わりになって連れて行かれてしまった。
……ああ、そうだ。
その時からきっと、僕の中では……『仕事』と言う物が、無価値になってしまったのかもしれない。

冬の仕事も、戦争も……僕にとっては『ただの危険な作業』になってしまったんだ。
――なら、今は……？
ノコギリ剣を振り下ろす。
流氷にヒビが走り、割れて砕けて沈んでいく。
その景色の向こうに、同じく流氷を割り崩したアンタークが見える。
この世界が夢であるのならば、その夢の中で生きるアンタークは幻なんじゃないのか
――？
『――当たり前だよね』
声が聞こえる。
声がする方へ振り返っても誰もいない。
……いや、僕は知っている。
『いくら君がここでアンタークを救っても、それは全部無駄になるんだ』
流氷が、喋っていた。
「……不安を反射して増幅する、か」
昔、先生に教わった事だった。
流氷の持つ性質。
……こいつ等に何かを言われるのは慣れている。

性格悪いクセに、あんまり落ち込むと逆に慰めてくれる時もある。
今は性悪モード全開だ。こういう時は早めに割るに限る訳だけど……
「ああ……相変わらず痛い所をグサッとくるよね、君たちはさ……」
――アンタークを救っても、全部無駄か。
全部僕の見ている妄想だ……当たり前の話だ。
「――おいフォス、大丈夫か?」
「ん、え?」
気付けば、アンタークが僕の傍まで来ていた。
手が止まってしまっている事から心配させてしまったらしい。
「ああ……ごめん、アンターク。大丈夫……こいつ等に何か言われるのは、慣れてるんだ」
「こいつ等?」
アンタークが怪訝な顔をしている。
そりゃそうだ、ここには僕とアンタークの二人しかいない。
僕が幻覚でも見ているのかと疑っているのだと思う。
――君の幻覚は良く見たんだけどね、アンターク。
「流氷だよ。――こいつらが喋る事は、知ってるだろ?普通の石は何を言っているか聞

き取れないらしいけど、僕はしっかり言葉が解るんだ」
「……アドミラビリスのインクルージョンか。ウェントリコススにお前も食われた事があるんだったな。……流氷とも、話せるようになるのか……」
　話が早いな。
　そう言えば、僕の時はアドミラビリスの一件を記憶の喪失で報告出来なかったけれど、こっちの僕は国交を結ぶまで持って行ったんだっけ。
　しかも、アドミラビリスとお話しできる原因についても定説をつけるに至ってた。
　それらの情報があれば察しもつくか。
「――こっちの僕は、流氷が喋る事は言って無かったんだ？」
「瞬く間に流氷割り禁止令が出たからな。聞き取る時間も無かったんだと思う。……ところで、なんと言われたんだ？」
　意外にも、アンタークが食いついてくる。
「……大した事じゃないよ」
「大した事だ」
　怒ったように、アンタークははっきりと言い切った。
「先生が昔言っておられた。流氷は、見る物の不安を反射して増幅させる性質を持つそうだ。ならば、そいつらがお前に何かを言ったのであれば、それは今お前が不安に思っ

ている事の筈だ」

……。

……ご明察です、アンタークちん。

観念して嘆息した。

「――もし僕が見ているものが夢であるなら、何をしても無駄なんだって指摘されたよ」

僕の口角は意図せずとも、自嘲気味に歪んでいたようだった。

アンタークが問いかける。

「では、もし夢でなかったとしたらお前はどうしたい？」

「……え？」

夢でなかったら？

……認めろって言う事か？

僕が月に送ってしまった石達が無かった事になっていて、過去の失敗も無かった事になっていて……そんな都合のいい世界に生きても良いって事か？

……僕の生きていた世界を忘れて？

それは――甘い真綿で首を絞められ続けるような話だ。

「あのな、簡単な話なんだ」

アンタークが眉に皺を寄せて僕に言う。

「これがもし夢なら、何やっても無駄だ。無駄なら、別に何やってもやらなくとも良いと言う事だ。
　なら、夢でなかったら？……何もやってなければ後悔する。なら、どっちにしろ何かやった方が良いに決まってる。違うか？」
「……。
　……それは……その通りだと思う」
　ぐうの音も出ないロジックだ。
「こっちのフォスは、お前の夢を良い夢にしたいと言っていた。……私も、それに賛成した。
　だが、お前が良い夢にしたいと思わなければそれが叶う事は無いだろう」
「……」
「過去の失敗だのなんだのと色々渦巻いていると思うが、とりあえずその辺りは一度忘れて欲しい。考えた所でどうにもならないし、それを持ち出されても私たちとしては何と言うか……その、困る。実際は私たちとは関係のない話だしな」
　――どうしたいか。それは決まってた。
　アンタークを守りたい。例え夢の中でもいい。僕でもアンタークを守れるんだと……その光景を信じたい。

そうだ、前提が違う。……僕はたとえ無駄でも、夢でも良いと思ってるんだ。
「良い夢にするつもりは、あるさ。こっちの僕とも約束した。何もしないで終わるような事もないよ、アンターク。そこは安心して欲しい。
……でも、一度全部忘れると言うのは無理かな。それに……関係のない話、で終わる事も出来ないと思うよ」
「そんな筈はないだろう。こっちでは起きてないんだから」
「そんな筈はあるさ。君はきっと怒る」
怪訝な顔をしているアンタークに笑いかけた。
ああ、そうだ……君はきっと怒るだろう。
でも、だからこそ、僕はそれを言うつもりはないんだ。
この夢は、良い夢にしたいから。
「……仕事を続けるよ、アンターク。手を止めさせてしまってゴメン」
「おい、待て」
「まあ、めぼしい流氷が殆ど消えてるのは想定外だったよ。もう少し沖も探してみようか――」
「だから待て」
――ぐえ。

結構強引だなアンターク。襟首掴んでまで引き留めるのか。

「あのな、フォスフォフィライト。言っておきたい事が2つある。

――ひとつめは、沖の流氷を砕きに行くのはやめろ。特にこんな風に雪が降っている日は尚更だ。距離と方角を見失って戻って来れなくなる。

ふたつめは――私を舐めるな。具体的には判らんが、どうせお前が気に病んでいる事なんて、先生と月人関連だろう?」

――ギクリとした。

「……なんで……?」

「わかるさ。ウチの連中が大抵通る道だ。――今年からは少し毛色が変わって来た様だがな。

先生を問い詰める為に取り返しの出来ない行動でもしたか?それとも月人に寝返ったりとか?最悪仲間を差し出したとしても――言い切ってやる。

『忘れろ』――ここでは関係ない」

アンタークの言葉が信じられなかった。

アンタークは、先生を一番に考えていた筈だ。だから、アンタークの言うような実績を持つものが居たら、きっと警戒した上で排除しようとする筈だ。僕を絶対許しはしない筈だ。

その筈……その筈、だよ、な……？

……これも、僕の夢だから……？

「――君もなのか、アンターク」

絞り出す声が震えている。

「優しいんだみんな！こっちの僕も、先生も、シンシャも……みんな優しいんだよ！僕に何も聞かずにいてくれるんだ!!こんなに怪しい僕なのに!!

……ただ……僕の夢だからって、こんな……こんなの……っ！」

「……みんなを捻じ曲げているように感じる、か？」

罪悪感が半端ないんだ。

僕はきっと、僕の都合の良いようにみんなを動かしてしまってるんだ。

――そうする事で、色んな物から目を逸らそうとしている事を、突き付けられているようで。

「……お前は、根本的な所を勘違いしている」

アンタークが呆れたように口にする。

「私たちが何も聞かないのは、聞く必要が無いからだ」

……。

……？

「お前は私たちが聞くまでもなく、自分からかなりの事を喋っている。お前の過去を分析するには十分な情報をだ。だから聞く必要がない」

「……え?」

顔を上げた。

「フォスに対して結構零してただろう?あいつはちゃんとそれを記録して分析して、お前の心労を掛けないように立ち回った上で、分析内容を報告してる。気になるなら後でフォスにその辺り聞いてみろ。全てとは言わんが、おそらくアイツの纏めている事項はおおよそ網羅している筈だ。

お陰で早急に聞いておくべき項目がない。だからその辺りに踏み込んで居ないだけだ」

「え……え?」

ちょっと待って。

想定してなかった方向に話がズレて来てると思う。

こっちの僕が……なんだって?

「……お前が真っ先にやるべき事が分かったよ。まずは、私たちが辿った歴史を……フォスフォフィライトの事を、きちっと学ぶべきだ。

フォスの説明だけじゃだめだ。アイツは要点を伝えるのはうまいかもしれないが、な

ぜか自己評価が低いから自分の為した事についてはサラッと流す傾向がある。
そういう私も特異な体をしている性質上、アイツと話す事はあまりないのだが……アレキやユークのレポートを読めば、どう言う奴かおおよそ見えてくるだろう。
その後は、頼ってみろ。構えるのがバカらしくなるほどアッサリ請け負ってくれるぞ、多分」

@　@　@

結局、流氷割りは少しやったあたりで切り上げになった。
元々シンシャとアンタークがかなり進めていたので、当面やらなくて良い状態にはなっていたのだ。僕とアンタークが一緒に外回りする事になったから、惰性で出ていたようなものだ。
4～5日ほどは流氷割りに出なくても問題ないだろうとアンタークは言う。
帰り道をたどる時間は、僕と話をする時間として使ってくれた。
「――総合顧問？」
「ああ。あとは、博物誌編纂と……アマルガム計画主任も入れて良いだろうな」
話を聞けば驚く事ばかりだ。

こちらの僕は、手も足も変わってないしラピスの天才も無いのに、いくつかの仕事についていた。

博物誌の編纂は僕もやってた。でもその仕事は、何も出来ず不器用で脆い僕でも出来るようにと、先生がなんとか用意してくれたモノで……僕はそれを、退屈でしょっぱい仕事だと放り出してしまっていた、筈だ。

……今となってはもうほとんど覚えていない。

こちらの僕もやはり脆くて不器用なのは変わっていないらしい。アンタークもそう評価しているし、彼自身もそう言っていた。

それどころか、かつての僕以上にパキパキ割れているようにも思う。酷い時には週に8回割れるとか、流石に僕もそこまで脆くはなかったと思う。どういう生活していればそうなるんだ？

お調子者であだ名は『アフォス』、酷い時には『アフォスぎ』なんてちょっとウマいとか思ってしまう呼び方をされ、人の話を聞かずに暴走する事もよくあるそうだ。そして大抵失敗して、みんなに（特にルチルに）迷惑を掛けたりする。

……この辺りは、僕も覚えのあるエピソードだ。

だけど僕と決定的に違う点があった。

彼は、僕の何倍も勉強家だったそうだ。

常に筆記用具を持ち歩き、めちゃくちゃ汚い字ではあるけれど、何かを調べたり書いたりしている。

僕も、僕が寝ているときにクラゲの光を頼りに何か書き物をしている彼を見た事がある。

資料作成と縁の深いアレキ、ユークとは良く専門的な話をしていて、お世話になっているペリドットやルチルとも仲がいい。

お陰で各方面の知識に造詣が深く、よくアイデアを色んな所に提供している。

『総合顧問』と言う肩書きは先生から任されたものではなく、そんな事をやっている彼に対して自然に付いたものだそうだ。

特に戦略計画については恐ろしい物があり、アレキのレポートの中に彼の補足として書かれた月人に対しての考察や、実行されると危ない戦略とその対策については、『この資料が月人に渡ったら確実に石が何名か連れ去られる』と思わせる程の物であるらしい。

少なくともアンタークはその資料を見て『自分には対応不可能だ』と評価したそうだ。

これらの補足や戦略論はユークの手で別紙に纏められ、閲覧権限を高く設定して先生の手によって保管されている。

彼に対する概ねの評価はこうだ。

――残念な時は本当に残念だが、頼りになる時は誰よりも頼りになる、この国に無くてはならない石。

「……凄いや。昔の僕とは大違いだ」

『勉強』の重要性を僕が実感したのは、色々失った後の事だった。

きっと彼はそれよりもずっとずっと前に、それを実感して実践していたのだと思う。

脆くて不器用でなにも出来ない僕にも――出来る事があったのか。

「例えお前が月人側だったとしても自分が止めて見せるから、どうかお前を受け入れて欲しい――フォスはそう懇願したよ。フォスに曰く、お前は「きっと『記憶』を持たなかった自分なんだ」そうだ。

『記憶』と言うのが何の事を言ってるのか、私には良く分からなかったが……アイツはアイツできっと現状にもある程度の説明を付けているのだろうと思う」

「……『記憶』」

僕が体と一緒に失ってきたものだ。

何の事だろう。僕も……はるか昔に、失った何かがあったのだろうか。

「……アンタークは、さ。僕のことどう思ってる？」

ひと思いに聞いてみる。

「……私とコンビを組んでいたそうだな」

「え?うん、そうだけど……それどこかで言ったかなぁ?コンビと言うか、仕事を分けて貰ってたって感じだけど」
「フォスがそう分析していたよ。あと、監視を受けた上で月人と何らかの取引をした可能性が高いそうだ」
「……え」
——言ってない。
それは判る。絶対だ。僕は絶対にその辺りは言ってないぞ。
どう分析したらそんな事が解るんだ——?
「もしそれが、私が連れて行かれてしまったせいだったとしたら……お前がボロボロになってしまった原因が、私のせいだったとしたら……
……私は、怒れないなと……そう思った」
「そんな!?そんなの関係ない!アンタークのせいなんかじゃ……っ!」
斜め上な事を話し始めるアンタークの言に、思わず声を荒らげた。
彼は今、関係ないと言っていたくせに「僕の知っているアンターク」として語っている。
「月人は、私たちの仲間を連れ去る事で私たちの心を奪って行く。
……私はずっと一人で行動して来たから、幸いにもそれを経験した事は無かった。だ

が、フォスが流氷割りで腕を盛大に壊した時――怖かったんだ。壊れた腕が海に落ちてどこかに消えてしまったらと思ったら。腕でそれなのに、コンビを組んでいた石を月に連れてかれでもしたら……想像もしたくないよ。

お前は、きっとそれを2回も経験したんだろう？絶望と後悔にまみれた目だと、先生がおっしゃっていた。

そんなお前が良い夢を見ていると言うのなら――私はそれを手伝いたいと思うんだ」

――わかっていた。

アンタークが親切で、厳しくて、優しい石だと言う事は……ずっとずっとわかっていた。

でも、だからってこんな……っ!?

「なんでそんな風に言うんだよ!?ここでは関係ないって言ったのアンタークだろ！そんな言い方、まるで……まるで……っ！」

僕の犯した罪なのに、まるでアンタークが贖罪しているようじゃないか……っ！

僕の慟哭を聞いてアンタークが微笑む。

「……すまんな。別に、そんなつもりで言ったんじゃないんだ。関係ないと言ったのも本心だし、お前の知る私に取って変わるつもりもないよ。

――ただな。お前のような目をしている奴を袖にするような真似は、私には出来ない

と思った。たとえ怪しくとも、どんな過去があっても……だ。
それは皆も同じだよ。もちろん、先生もだ」
「……僕が、嘘をついているかもよ？」
「はは、その時は間抜けがいると盛大に笑えば良いさ」
幻視する。
――それは、『はかせ』が黒点から落ちてきたあの日。
雑な躱し方しかしない先生を問い詰める自分の姿。
同じ状況になってしかるべきじゃないか。だって、頭の上から足の先まであり得ない事で埋め尽くしてる。
それなのに……大きな愛で、包んでくれるのだ。
「……バカだ……」
小声で呟いたその言葉が誰に向いているのかすら――僕には解らなかった。

@　@　@

「……君の分析結果ぁ？」
「うん」

机に向って何かカリコリ書いていた彼に、そのまま突撃してみた。
慎重にとかそう言うのはもう、トラウマになりかけているので投げ捨てた上での突撃だ。
……この頃の僕は、たいして何も考えてなかったと思って色々油断していたと思う。
実際、たいして何も考えて居なさそーな顔をしているように見えたから仕方がない。
――でも、今度は油断しない。
「……なんだってそんなケッタイなモノをお求めなさるよ?」
「ダメ?」
「いや、ダメじゃないけどさ……気分よろしくないだろ、そんなの」
そう言う事をしているってのも含めて、と彼が言う。
「僕を気遣ってくれてるだけが理由なら、見せてくれないかな。
――僕は、大丈夫。大まかにはアンタークから聞いてるし」
「アンターク……融通効かないなぁ、もう……」
その手を止めて、彼がファイルしてあった幾つかの紙束をピラピラ捲り始める。
これと、これと、これと……と、いくつかの書類を横に分けている。
「答えないと見せないって訳じゃないけどさ……ホント、なんでそんなものを見る気になったの?もしかして怒ってる?」

彼の表情は、ばつが悪そうな色で塗りつぶされていた。
「いや。やっと僕が納得できる行動を君が取ってくれてたから、むしろ安心したんだ。あっさり見せようとするのは少し不可解に思ってはいるけどね。
理由だけど……君が僕をどう思っているかと、君の考え方が知りたい。……この世界を、よく知る為に」
「……なるほどね。そういう理由なら、気に入ったよ」
そして、分け終わった数枚の書類を僕に差し出してくれた。
「ありがとう――って、字が凄い汚いな!?暗号か!?」
「うるへーっ!君もフォスフォフィライトならどうせ同じぐらいの悪筆だろ!?黙って読みなさいよ!!」
「残念だけど、僕はちゃんと読める字を書く」
「なんだとうー!?」
残念ながら、僕の器用さは先生のほつれた直綴を修復できるほどに上方修正されたんだよ。字だってちゃんと書ける。
……まあ、合金の腕を付けた結果だったけれども。
それより前?……あまり、字を書いた記憶がないなぁ……
頑張って内容を見てみると、僕の語録集とそこから読み取れる分析結果が書かれてい

る。

「これは……分析結果と言うより、メモに近いんだね」

「そもそも別紙に纏めてた訳じゃないしね。考えの整理用に書いてる代物だし。……ただ、僕の考え方が知りたいって言うのであれば、ある程度の素材にはなると思ったの」

「ありがたいね」

――そこには、客観的かつ感情のない目で僕を見た時の、記録と分析が綴られていた。

見ていて気持ちのいい物じゃない、と言う彼の言葉が良く分かる。

でも僕にとっては、ちゃんと相応に見定められていたんだと実感できるこの文書が有り難かった。

僕が倒れていた緒の浜の詳細位置と発見時刻から始まり、外見から読み取れる情報や寝ぼけて口にした語録の端々から読み取れる情報まで、まるっと記録されていた。

月に居た事。月人の手によって目を入れ替えられた事。その事から、監視機能や記録機能がこの目に埋め込まれている可能性が高い事。

起きた時の第一声が「セミ」であった事から、砕かれ幽閉されたり、何らかの素材にされていた可能性は低い事。

目の入れ替えを認識しているのであれば、月人が僕に何らかの役割を求め、それを僕が応じた事が考えられる事。

もしそうならば、何らかの取引が発生したと考えるのが自然な事。

「……スゴい……」

僕の中にあるラピスの天才が、この分析材料と内容を追従して『妥当である』と言う結論をつける。

月の事だけじゃない。四肢を欠損したシチュエーション。その時々の戦闘力評価。そして現在の予想戦闘力。

――『僕』と言う石が、丸裸にされていた。

「……やっぱり、気ぃ悪くしない？」

そんな余裕は、もはや無い。

「――君は、誰だ？」

「は、え……？いや、皆のアイドルフォスフォフィライトさんですが」

「嘘だっ!!ラピスの天才が付随していなかった頃の僕に、こんな分析が出来るほどの頭があった筈がない!!」

「その悲し過ぎる結論やめて!?それは遠回しにボクの事ディスってる!!そして君自身の事もディスってる!!」

夢であるならば、僕の想像の範囲内に事象は収まっていてしかるべきだ。

この分析ロジックは……下手したら、ラピスの天才がついた今の僕を以てしても届か

ないんじゃないのか……!?
「……そうか、エクメアか!エクメアが僕を起こそうと外部から刺激してるのか!」
「やめたげてよう!?その『自分はバカなのだ』って言う結論から話進めるのやめたげてよう!?なんか凄く悲しくなるから!!」
――少しの間、混乱から収拾がつかなくなったりする。

……気がつけば僕は、心に貯めていたドス黒い泥を項垂れながら全部喋っていた。
「――だから僕は、先生を動かすために、新しい刺激を加える為に……先生を裏切る事に決めたんだ」
先生と月人の関係を疑った事。
月人の言語を探ろうとした過程で、ゴーストを連れて行かれてしまった事。
カンゴームの協力を得て、月に乗り込んだ事。
月では皆が粉にされていた事。
月人の目的は、先生を道具として動かす事で……誘拐は、先生を煽る為だった事。
そして先生を動かす事が出来れば、仲間を連れて行く必要はないとエクメアが言った事。
もう近いところまで分析されていたから、それならばと開き直って全部喋っていた。

彼は、僕を怒るでもなく咎めるでもなく、僕の話をじっと聞いていた。
「……ありがとう。辛かったね」
心なしか低い声だった。
でも、その内容は優しかった。
「やめてくれ！僕を愛で包むのは……っ！混乱するんだ……なにも考えられなくなる……っ！」
崩れた両手で目を覆う。
正気に戻るな。考え続けろ……僕はずっと、自分に言い聞かせていたんだ。
「――ムカつくよな。なんでそんな事の為に、ボクたちがこんな心を砕かなきゃいけないのかって」
ドスの利いた声だ。
僕は、ここで初めて顔を上げて彼の表情を見た。
――目に見えた怒りが滲み出ている。
「粉……粉だと……？よりにもよって、装飾品通り越して粉にして月に撒いてるだぁ……？先生に祈って貰いたいから煽っていただと……？ワザと返してきていた石たちは皆偽物の合成品だとぉ……!?
そのおかげで、誰も彼もが心をボロボロにしてるんだぞ……っ!?ふざけやがってっ

!!」

ぐしゃりと、彼の手が記録に使っていた用紙を握りつぶす。

それは、僕に対してではなく――月人に対しての激しい怒りだった。

「――信じる、の？君が大好きな先生は、人間が作った道具だったって言うんだよ……？」

「んなもんとっくに知ってんだよ！ってか、この国の皆全員知ってる!!」

「はあぁっ!?」

ちょっ、なんでそんな事になってるのさ!?僕がその情報を仕入れるのにどんだけ犠牲を払ったと思ってるんだ!?

「――君には後でナノマシン説の論文見せてあげるよ。ユークが清書してくれたからね。……端的に言うと、人間が先生を作り、先生が僕たちを生んだっていう内容だ」

「はあぁっ!?」

先生が……僕達を……!?

なんだそれ、アイツ等の言う事が正しいのなら、僕たちと先生は本来無関係の筈だろ!?

「――しかし、んな事は今はどうでもよろしいっ!!」

ガシッと彼の両手が僕の顔を掴む。

ピシリと、彼の手から欠けるような音がした……しかし彼は気にも留めない。
「先生を『裏切り』を以て刺激し、『祈る』事を誘発させる……それだと失敗時のリスクはもとより、支払う物が多すぎます。何より奴らに対しての打撃がありません。そんなのダメです。ダメダメです。到底許せません。絶対許せません
――外しちゃダメだろ。
『報い』は絶対、外しちゃダメだろ……！」
怒りに満ちた目が僕の顔をのぞき込む。
もはや、声も出せない。
「ボクも噛ませろ」
有無も言わさず彼が言う。
「粉にされた宝石たちは全部救う！先生にも皆にも手出しはさせない！そして奴らを『終わらせる』！連れ去られた皆の報いを受けさせる！
総取りどころじゃない――
――倍返しだっ!!!」
彼が太く叫んだ。
――都合の良い話だ。

どうすればそんな事が出来るのか、僕には欠片も浮かばない。
でもそんな反論を、彼の目は絶対に許してはくれなかった。
……この時から、『良い夢で終わらせる』と言う僕のある種の諦めを帯びた目標は、彼によって別の方向に向いて行く事になる。

本編

第01話「フォスフォフィライト」

物心ついた頃から、妙な違和感を感じてはいたのだ。
なんかこう、教わった事はなんとなく知っていたなーとか、教わってない事を何故か覚えてたなーとか。
それの名を「既視感（デジャヴ）」と言うらしい事は先生が教えてくれたけど、なんかその単語も聞いたら知っていた気がしたもので。
何処で聞いたのだったか、何か思い出せてないんじゃないかと首をひねりながら歩き、そのまますっころんで打ちどころ悪く砕け散った事が何度か。
コレのせいで記憶スッ飛んでるだけじゃねぇの?とは誰に言われた言葉だったか。
ボクは果たして、誰に蹴りを入れれば良いのであったか。
「フォスー!いるんだろ!」
太陽の光を浴びながら、伸び放題の草原に寝っ転がってあーでもない、こーでもないと記憶を探っていると、ボクを呼ぶ声が耳に入る。
——モルガだ。

モルガナイト。硬度7半。ピンクでロングで粗雑なアン畜生。
……モルガだったら言いそうな気がする。
「モルガ！蹴らせろヴォォォイッツ！」
「はぁぁっ!?ワケわかんねぇっっ!!?」
じょわっと草原から飛びあがり、きっと正当な気がすることにした無礼への報復キックはひらりと避けられ、ボクは勢いのままにゴロゴロと草原に落下する。
硬い石でもあったらまた砕けてしまうじゃないか。モルガめ、何をしてくれる。
「こっちのセリフだ！なんでいきなり蹴られなきゃならねえんだよ！っつーか、当たったら砕けるのお前の方だぞ硬度三半」
「うるへー硬度七半」
あ、レッドの作ってくれた服にしつこそーな泥がついた。怒られるかなコレ。
「……ったく……フォス、先生が呼んでるぞ」
「え。なんだろう?」
「さあな」
そっけない反応をするモルガにぶぅーと口をとがらせてみる。
「うーん、最近は特に何も壊したりしてないんだけどなぁー……むしろボクが壊れる事の方が、多かった、ような……」

「心当たりはお叱りだけかよ。フォスお前、考え込むのは良いけどもうちょっと周りを見ないと瞬く間に月人に連れ去られちまうぞ」
「そうなのよねぇー、ボクってほんとキャワイイからねぇー」
モルガよりも、まで口にすると報復キック返しが来そうなのでさすがにお口チャック。
しかし察したモルガがコンニャロと軽く小突いてきた。
欠けたらどーしてくれるんだくそう。
「モルガ！」
じゃれているとゴーシェの鋭い声が聞こえてくる。
ゴーシェナイト、モルガと同じ硬度7半。銀髪ショートの気配り屋さん。
「なに遊んでんの。南に予兆の黒点が出たよ。小さいけど、先生に報告行くぞ！」
——イヤな知らせだ。
慢性的に出現する人攫いが顔を出したらしい。
口の中で小さく舌打ちして、ボクは素早く身を起こした。
「よし！小さいなら二人で追い払おうぜ！」
「ええ!?」
モルガがバカな事を言い出し始める。

「平気平気、たまには先生に楽させてあげなきゃ。ああ見えて歳なんだしさ」
「――おっけー、その発言と一緒に先生にチクっとく」
「げ、い、いや、ジョーダンだってジョーダン……」
騎りはいくないぞモルガ君。いくない。
今のはまんま死亡フラグを立てた喃ませキャラの台詞だ。
「とは言えさぁ。近いんだったらどっち道、足止めが必要なんじゃないのか？足遅いぞおフォスは」
「こんにちは。全力疾走してみたら、体が文字どおりバラバラになった繊細美人のフォスフォフィライトです」
「……あー……しょうがないよね。護衛しながら、一緒に先生に報告しに行こう。月人が出てるのにフォスから目を離すの、怖すぎるから」
あれぇ、ボクもしかしてゴーシェにディスられてますか？
「いや、その……ちゃうねん。硬度と靱性が低いもんだから、全力稼働すると体が耐えられないだけやねん。ポテンシャルだけならきっと、ボルツに匹敵するハズやねん」
「なんだ？どこの言葉だよそりゃ」
「流石にボルツは吹き過ぎ」
解せぬ。

照れずにもっと愛をくれても良いのよ？

少し駆け足ぎみに道中を急ぐ。

このぐらいのスピードなら何とでもなるのだけど、本格的に「走る」的な事をすると足の末端から細かいヒビが入り始める。

全力疾走しようものなら３０秒で足が砕け散る。

我ながら本当に脆い体だわ。

二人がボクに合わせてくれている。

完全に足でまといだ。

いざ接敵したら、二人はボクを逃がして足止めに回るだろう。それが一番合理的だから。

その事実がボクをフクザツな気持ちにさせるのだ。

「――おい、見えたぞ」

振り返る。

南の上空。

青い空と雲を背景に、人攫いの一団が浮かんでる。

平たいお皿のような雲にのって、インドの王族のような装いをした人形のなにかが、瞳孔も光彩もない無機質な瞳で深皿を持ってこっちを見ている。

その回りにはどっかの天女でもリスペクトしているのか、無意味に羽衣を靡かせた取り巻きが無数に座していた。
——追い付かれた、と言うワケだ。
「……フォス」
「……うん……先生呼んで来る」
二人が剣を抜いて足を止めた。
『それが一番合理的だから』
「——行けそうだな、ゴーシェ」
「うん」
モルガがニヤリと口の端を持ち上げている。
「フォス、あんまり急がなくても良いぞー。戻ってきた時には終わってる」
「驕るなモルガ！」
「だって急いだら身体砕けちゃうだろ硬度三半」
モルガとゴーシェが、笑顔を作ってボクを見ていた。
「——ッ、戻ってきた時にフラグ回収してたら承知しないからな硬度七半っ!!」
「フラグって何だよワケわかんねぇ！良いからとっとと行っちまえっ！」

@　@　@

「――はっ、はっ、はっ、はっ……っ、」
ピキピキイヤな音が足から聞こえる。
月人が大嫌いだ。
この間はヘリオドールを連れてった。
当時ヘリオとコンビを組んでいたのはゴーシェで、あの時のゴーシェの塞ぎ込みようと言ったら、見ていられない程だった。
あいつらは、ボク達を拐って砕いて装飾品にするらしい。
あいつらにとってボク達は象やワニとかと同じ系列なワケだ。
「――先生！金剛先生！」
足にヒビが入るほどに走って学校に駆け込んだ。
元々ボクを呼んでいたからか、先生が窓の外を眺めながら待っていた。
「ああ――来たか、フォスフォフィライト」
――金剛先生。
性別が曖昧な作りに「整えられている」ボク達だけど、金剛先生だけはハッキリと「男」と解るような体格と顔をしている。

お坊さんのように髪の毛は無く、お坊さんが着るような袈裟を纏ってる。でも、先生がお坊さんのように合掌したりお経を唱えている所は見た事はない。
瞑想と言う名のお昼寝をしてる所はよく見るけどね。
金剛石、から名前が来ているのであれば恐らくダイヤモンド属だと思うのだけど、詳しい身体の話は聞いたことがない。
ただ、先生は硬度や靭性なんぞ関係ないねと言わんばかりに強い。恐ろしく強い。
先生と相対して１０秒持った月人をボクは知らない。
「お呼びだと伺いましたが、すみません。先にお耳に入れたい事が」
「ああ、月人が出たようだな。今にも足が崩れそうだ」
先生はそう言ってボクの肩に手を置くと、そのままひょいとボクを横抱きにしてしまった。
「うえぇっ!?」と口から変な声が出てしまう。
「足止めに向かった子は居るか？」
「あ――はい、モルガとゴーシェが時間を稼いでくれています」
「うむ。このまま案内しなさい」
「あ、え、……こ、このまま？」
「そうだ。この状態では、歩くと砕けてしまうだろう？」

でぃすいず『お姫様だっこ』

……狼狽するけど、気にしてる余裕も無いんだった。

大雑把にまずは「草原の方です！」と指を指して伝えた。

@　@　@

ゴーンゴーンと清んだ鐘の音が鳴り響く。

月人襲来、総員第一種戦闘体制に移行セヨ。鐘の音がみんなに向かってそう叫んでる。

戦闘班がバタバタと剣を引っつかみ、ボクを抱えた金剛先生の後に続いた。

「モルガ！ゴーシェ！」

――月人は、顔の半分から上が既に斬り飛ばされていた。

しかし様子がおかしい。欠損が発生する程に損傷を受けた月人は、通常ならそのまま霧散する筈だけど、未だに戦闘が継続されている。

さらに、ゴーシェの右腕が砕かれていた。利き腕がやられているから、左手でぎこちなく剣を支えている。

敗北一歩手前の状態だ。

思わず、「間に合った……！」と安堵の声が漏れた。
辺りに散らばる矢を見ると、鏃に宝石が使われているものが含まれていた。
あの輝きは……まさか、ヘリオドール!?
あいつら、拐ったヘリオドールをよりによって鏃なんかに仕立てやがったのか!?
「……先生……」
先生がゆっくり労るようにボクを降ろすと、そのまま月人を睨め付ける。
――先生と相対して１０秒持った月人を、ボクは知らない。
一瞬だった。
ヒュッ、と先生が手を払うと、月人がそれだけで根こそぎ霧散してしまった。
……あの攻撃、何度見ても何をやっているのかわからないんだよね。
いっそ「法力で一掃している」とか言われたら納得してしまいそうだ。
戦闘終了。
残った月人が居ないことを確認して、ボクはゆっくり立ち上がった。
「――モルガ、ゴーシェ。良く持たせてくれたな」
先生が彼らに声を掛ける。
「先生――ヘリオ、ドールが……」
「うむ。鏃を全て集めよう。繋ぎ合わせればヘリオドールも元に戻るだろう」

ピキピキ足が悲鳴を上げている。
そうっとそうっと歩み寄り、ボクはモルガの肩に手を置いた。
「あ――ダメだこれ。ごめんモルガ、体重預ける」
「お、おいおいおいおいっ!?」
うん、ホントに肩に手を置くだけのつもりだったんだけど、ちょっと足が持ちそうに無かったので両手をかけて体重を任せてしまった。
「――お疲れ、モルガ」
「そう思うなら人を杖がわりにするの止めてくれよ……」
「あ、うん、そこはマジでごめんなさい」
ホント儚い我が身がちゅらいわぁ。
モルガがめっさ眉を歪ませてボクの足に視線を止めている。
「……急がなくても良いっつったろ硬度三半」
「負ける寸前だったじゃんかよ硬度七半」
「ちぇっ、あそこから巻き返す予定だったんだよ」
「そうは見えないツスけどねー？」
「うるへー」
ぼやきつつ、モルガがボクのお尻に手を回してそのままボクの体重を抱えてくれた。

――もしかして今日はボク、誰かに抱えられる日、なんだろうか。
「……心配かけて悪かったよ。先生呼んでくれて助かった」
「あ、ううん……ボクの為に残ってくれたんだもん。こっちこそ、持たせてくれてありがとう。おかげで間に合ったよ」
「――おう」
負けそうになってた自覚はあったらしい。
ヘリオを連れてかれた時のゴーシェを間近で見ていた事もあって、最悪の事態に思考がたどり着いたんだと思う。
モルガは凄い素直だった。
皆が月人の矢を拾っている。
月人のメイン武器は上空からの弓矢の一斉掃射だ。今回はその中に混じって、ヘリオの欠片が入ってる。
……いや……もしかしたら……
「ヘリオ……戻るよな。先生も、そう言ってたし……」
「……」
無理だ。
――ボクには、その一言が言えなかった。

いや、可能性はあるのかもしれない。ボク自身、それを期待している所もある。無理と断言するのは流石に早計だ。

……でも、無理だと思っている事はモルガにバレてしまったみたいだった。

悲しそうに眉が歪み、耐えるようにギュッと瞼を閉じて、努めてゆっくり息をつく。

そんなモルガの仕草の中に重くて辛い葛藤が詰まっているのが見て取れて、ボクの心を締め付けた。

――嫌いだ。月人なんて、大嫌いだ。

「……意見を聞かせてくれよ、『顧問殿』」

モルガが公私を分けてきた。

それは、何を聞かされても取り乱さないという覚悟の証だ。

ボクも、真剣に真摯に応えなきゃいけないと目を閉じる。

「……多分、絶対数が足りないと思う。今回かなりの量が戻って来たけど、それでもきっとヘリオになるには量が足りないって話になると思ってる。

今までアイツらの装飾品になって帰ってきた例がそれなりにあったけど、いずれも元に戻れた事が無いんだ。この視点で図書室の資料ひっくり返した上で先生にも確認取った事があるから間違いない。

――加えて、今回は「鏃」でしょ?この一件で確信したよ。アイツらきっと、ワザと

やってる。

　ボクらはヘリオを取り返したんじゃない。アイツらが返してきたんだ」

「……鏃、だとダメなのか？」

「確かに綺麗だよ？ヘリオは硬度七半、鏃に仕立てても一定の威力だって見込めるのかもしれない。でも、使うシチュと量がフザけ過ぎてる。意図した物だと言われた方がしっくり来る」

　……あの人攫いどもは、大体２００年に１人ボクたちの誘拐に成功する。翻って、襲来回数は一年に２００回をオーバーする頻度だ。

　ボクたちは数字にすれば９０％を大きく上回る確率で防衛に成功し続けてる。

　――つまり、あいつらにとってボクたちは結構稀少性の高い物の筈なんだ。

　１～２本の使用なら分かるよ？

　宝石を武器に仕立てれば、なんかこう中二めいたカッコ良さが有るのかもしれない。そのセンスを否定はしないさ。

　作ってみたら思いの外良くできた物だから、少し使ってみたくなると言う流れもまあ理解できる。

　――でも、ロストの危険性が高いにも関わらず、威力評価もせずに稀少性の高い鏃を大量投入するとかワケがわからない。

前々からフザけてると思ってた。たまに装飾品を着けて来る月人のこと。向こうにとって成功率がかなり低いミッションにも関わらず、何故にレアアイテムを身に付けて来るのさ。置いてくるだろ普通。

……実は「ロストしたがってる」んじゃ無いの？

モルガは、ボクの推論を静かに聞いていた。

「――頭に来る考え方だけどさ……」

視線をずらし、表情を歪ませてモルガが言った。

「ヘリオを手に入れてみたけど、思ったほど良いものじゃ無かったので消耗品にしてみました――って理由は無いのかな」

本当に、考えたくないほど頭に来る理由だけれど。

「ヘリオが全部……いや、9割以上揃ったら、その理由アリだと思う。もしくは、次の月人が使ってくれれば……かな。フザけてるけど、ボクたちとしては期待したい所だよね。ヘリオが元に戻る事になるから。

――ゴーシェ、きっと喜ぶよ」

視線の先で、ゴーシェがヘリオのくっついた矢の束を大事そうに抱えて顔を綻ばせてる。

……全部揃いますように。

そう祈らずにはいられない。
「……ごめんね、こんなイヤな話して」
「……お前は聞かれた事に答えただけだろ、バカフォス」
――本当に、月人なんか大嫌いだ。

@　@　@

「――話が遅くなってしまったな」
先生の元々の用件は優先度が低めだったらしく、本題に入れたのは月人襲来の報告書を纏めた後だった。
――ちなみに、今回の月人は損傷を受けても霧散しなかった事、ヘリオを鏃にされた事が特記事項としてあった為、後日懸念点と対策案をまとめて会議する事になっている。
……ヘリオは、やはり戻れるだけの量は集まらなかった。
「ようやく、決心が着いた。……優先度は低くて良いので、新しく仕事を頼みたい」
手渡されるのは紙の束とひとつのペン。
「フォスフォフィライト――お前には、博物誌を編んで貰う」

ぱちくりと瞬きしてみる。
手渡された真っ白い紙の束に視線を落とす。
「……博物誌、ッスか」
なんか、思った以上にフワッとした話だ。
「この国の成り立ちは記憶しているな？」
「え？あ、はい」
「序文を述べよ」
若干戸惑いながらも、ボクは覚えているこの国の成り立ちを諳じ始める。
この星は6度流星が訪れ
6度欠けて　6組の月を産み　痩せ衰え
陸がひとつの浜辺しかなくなったとき
すべての生物は海へ逃げ　貧しい浜辺には不毛な環境に適した生物が現れた
月がまだひとつだった頃　繁栄した生物のうち逃げ遅れ海に沈んだ者が
海底に棲まう微少な生物に食われ　無機物に生まれ変わり
長い時をかけ規則的に配列し結晶となり　再び浜辺に打ち上げられた
――それが、我々である
……どれだけ前に聞いたのだったか。

宝石で出来た手を何となく眺めてみる。
白粉を塗られた硬質の手だ。
人類が生まれる遥か前のジャイアントインパクトから、地球は月が生まれるほどの隕石衝突を五回経験しているそうな。
ジャイアントインパクトは人類誕生より４６億年前と言われてた筈だから、それを基準に考えると有史から２５０億年は経ってる事になる？のかな？
途方もない未来だ。
それほどの時間が経てば、太陽が寿命を迎えて地球を飲み込むと言われていた筈だけど、そんな事は無かったらしい。
もしくは別の星系か別の世界か。
どちらにしてもＳＦでロマンである。
「『人間』……と言う単語を、お前は知っていたな」
「はい」
ボクらの元になった命。
月がひとつだった時に繁栄した霊長類。
ボクが教えられるまでもなく、「記憶」していた単語だ。
「我々の知性は人間から引き継いでいると解釈する事が出来るが――フォスフォフィラ

イト。お前はどうやら、知性だけではなく記憶も引き継いでいるのだろう」
「ふふ……信じるんですね。他のみんなは夢だの幻覚だの言ってるのに。ボクってしょっちゅう割れるもんだから」
「――『人間』は、実在した」
先生は視線を伏せながら、そう口にした。
観念するような、白状するような声色だった。
……ちなみに、過去の資料に『人間』と言う単語が無いのは確認済みだったり。
「あー……なんか、先生が直に会った事があるように聞こえるんですが」
「ある」
……マジすか？
「――あの。人間が滅んで、ボクたちのような形に進化する程の時間が経ってる筈なんですが。少なく見積もっても億は行ってる筈なんですが。
……先生ってガチでおいくつ？」
「覚えていない。……確かに、億は行っているような気がするが定かではない。
いやだって、億だぞ？歳なんて覚えていられないだろう正直」
「――ッスね」
正論です。

ボクも３００年近く生きてるけど忘れそうになるもん。
「話を戻すが。そういったフォスの記憶上にあるものも編み込んで行ってほしい。もちろん、情報ソースが記憶によるものかどうかは明確にして欲しい所だが」
「ああー、なるほど。だから博物誌ですか」
「フォスの記憶に対する研究にもなるだろう。日頃、色々メモを取っているようだからな」
おかげで製紙担当のペリドットとはよくお話しします。
紙の白さや耐久性について、結構研究に付き合ったりもしたなぁ……
そう言えば今年は原料の麻が足りないから、紙も量が作れないってぼやいてたっけ。
麻は服の素材にもなるから、服飾担当のレッドベリルとは素材の取り合いになる事もある。
「不安な点があるとすれば――」
先生がポツリと言う。
「――フォスの書く博物誌が、読むに耐える字であるかどうかだが」
「うぐはっ!?」
やめてください先生。その口撃はボクに効く。
……生来、ひどく不器用なんです。

精密作業を行うと手が変な所にブレちゃうんです。
おかげで、メモも壊滅的な筆跡だったり。
ボク自身、後で見返しても内容が訳分からなくなりそうなレベルだもの。
「……がんばります」
「務めて欲しい。解読がアレキやルチルでないと難しい、なんて状況は避けたい」
「はぁい」
字……もうちょっと練習しなきゃなぁ……
紙の束をぴろっと眺めてみる。
幸い、書くものはイメージ出来ていたりする。
と言うか、ボクが博物誌を編むなら、最初のページに何を書くかは前々から決まっているのだ。
——自然と口の端が持ち上がっていたり。
「……もう一点、話があるのだが」
「あら？」
先ほどから観念したような口調だった先生が、今度はさらに苦渋を舐めるような表情をしていた。
決心しても、トリガーを引くのがつらい、みたいな様子だ。

「あー……先生？」
「……アマルガム計画の事だが」
　――ひゅ、っと息が止まった。
　アマルガム計画。ボクが進めたいと申請を出していた奴だ。
「――許可しようと思う」
「本当ですか!?」
　思わず身を乗り出してしまった。
「ただし！――細心の注意をもって、数十年単位の長期計画で進めるように。関連する事になるルチル、ペリドット、スフェン、ユークレース――そしてシンシャには再度計画参加への意思を確認する事。不参加が出たら解消されるまで計画は凍結。
　そして、計画実行に当たっては工程表を作った上で進捗とスケジュールを密に報告する事を約束しなさい」
「は、はい！もちろんです！」
　ガッツポーズとともに返答してしまいました。
　テンション爆上げ。やべぇ。やっべえ！
「……それと。レッドベリルとボルツも噛みたがっていたので、計画を進める際には声をかけてあげなさい」

「へあ?……え、レッドベリルはともかく……ボルツもですか?」
「そうだ。この計画は靭性の克服が目的のひとつだろう?その関係で興味を示していた」
「……あー……」
ちょっと分かる気がするけど、しかしまぁボルツが直接戦闘以外に興味を示すとは思わなかったなぁ。
靭性特級のくせに、何か悩みでもあるのかな?
「――頼んだぞ。シンシャを活かしたい気持ちは、私も同じだ。この計画が失敗したら、シンシャはますます遠ざかってしまうだろう」
皆、考えていることは同じ。
危険性は高いけれど、それでもシンシャの為に心を砕きたいのだ。
「はい。ご安心ください。……その為のアマルガム計画です」
自信満々に、ボクはそう答えて見せた。
「――時に、なんで目の前で手を組んだ?」
「お約束ですので!むふー!」
「……不安だ……」

@　@　@

ボクらにはシンシャと言う仲間がいる。
硬度はボクより低い2を示し、色は鮮紅色。
セミロングの髪をした切れ長目の美人さんだ。
彼には厄介な特殊能力がある。
体から、ほぼ無尽蔵に銀色の毒液を出すという特殊能力だ。
この毒液はボクたちが触れると接触面を濁らせ光を通さなくしてしまう代物であり、さらにボクたち以外の生物に対しても非常に高い毒性を示す。
完全制御出来れば良いのだけれど、シンシャは自身から滲み出るこの毒液を制御出来ないため、ボクたちとは距離を置いて暮らしているのだ。
ボクたちは現在２８名。対し、月から無数に人攫いが来る現状では皆がひとつやふたつ、何かしらの仕事を担当して月人に対抗している。（ボクの仕事?はかなり特殊ではあるけども……）
その中でシンシャは、ボクたちと触れ合う機会を極限に少なくするため夜の警護を願い出た。

ボクたちは無機物の中に内包している微小生物が光を食べる事で活動している。つまり、光のない夜や冬は一部の例外を除いて動きが鈍ってしまうのだけれど、シンシャはその毒液が微細な光を集める事で夜でも活動する事が出来るのだ。

だからみんなの動く事が出来ない夜に、見回りを行う。

――ここだけ取り出せば確かに、適材適所の役割なんだろうけども。

資料に残る記録を含めたここ数千年間……月人が夜に来た記録は1度もなかったのだ。

万にひとつへの警戒。なるほど、大切ではある。

でもその実態は違う。

制御できずに毒液をまき散らすシンシャを恐れ、持て余し――夜に閉じ込めているだけなのだ。

シンシャは自分から距離を取っている。

毒液をまき散らす自身が恥ずかしいから。妬ましいから。毒を振りまきたくないから。

――いつだっただろうか。

存在価値のない自分は月に攫われてしまえばいい。月人だったら、もしかしたら自分に存在価値を見つけてくれるかもしれない。

そう言って泣いたシンシャをぶん殴った事がある。
時期的にヘリオが連れ去られた直後だったので手が出るのも早かった。
ちなみに結果はドロー。硬度２のシンシャだったからボクでも割る事は出来たけど、劈開が完全……つまり割れやすいボクたちがぶつかった訳だから、ボクもあっけなく砕けました。
靭性最下級だからね。仕方ないね。
「――夜の見回りよりずっと楽しくて、君しかできない仕事を、ボクが必ず見つけて見せるからっ!!
だから、だから……月に行くなんて言うなバカぁっ!!」
特大の啖呵を切って見せたのだ。
――アマルガム計画は、その答えのひとつでもある。
ちなみに、ボクと組んで漫才やるとか毒液を操って人形劇やるとかの案はすげなく却下された。
もっと真面目にやれだってさ。娯楽も大切だと思うんだけどな。
特に人形劇とはボクとしては超乗り気アンド渾身の提案だったんだけどなぁ……
さて、諸悪の根源であるこの毒液。
生物に有毒で銀色の光沢を示す訳だけど、シンシャ（辰砂）で銀色の毒液と来ればそ

の正体はピンとくる。

原子記号Ｈｇ。唯一常温で液体の金属である「水銀」だ。

水銀と人類の関わりは相当古くて、その歴史は紀元前までさかのぼる。

辰砂を火にかけると水銀の蒸気が出来るので、人類はそれを集めて冷やすことで水銀を得ていた。

その辰砂だって希少宝石だったから、辰砂の出る鉱脈を見つけたらお金持ち間違い無しだったそうだ。

古代中国においては辰砂は「丹（に）」と呼ばれ不老不死の霊薬とされたし、西洋錬金術では賢者の石として挙げられる事もある。

わかるかねシンシャ君？君、大人気だったんだからね？

確かに、その用途については人類はバカやってたよ。

水銀を薬として飲んじゃうんだもの。中毒待った無しだった。

しかもそうやって死んだ人の体が腐敗し難くなっちゃったものだから、不老不死の迷信に拍車がかかった。

つーか、ボクらが既に不老不死だしね。その用途を望んでるワケじゃないけどね。

アマルガム計画はこの水銀の性質を利用する。

その過程で水銀に触れる機会がどうしても出てくるから危険が伴う代物だけど、成功

すれば新しい医療のきっかけになる。
何よりボクが恩恵を受けたくて計画したんだけどね。
うまく行けばボロボロ砕けるこの体も、ちったぁマシになる気がするのです。
――っつーワケで、ボクはシンシャに割り当てられた部屋ではなく、そこから家出かましてるシンシャの塒までやってきたのだ。
「シーンーシャくんっ！あっそびっましょーっ？」
銀色の液体に浸った岩の床。海が臨める洞窟。
シンシャは昼間はここに引きこもって夜に徘徊するという超不健康な生活を繰り返している。
……ハズ、なんですけども。
今日に限って返事がない。
「……あれぇ？シンシャ君いらっしゃらない？おーいシンシャやーい。ボクの部下よどこに行ったー？」
洞窟の中は暗くてかなわない。入口の所しか光が差していないのだ。
しまったな。中を探すにしても灯りがない。
灯りがないとすぐ転んで砕けちゃうから踏み込めない。
……今日は気分が乗って外出したのかしら？

ひとしきりシンシャを呼んで無反応を確認したボクは、なんとなくそう考えた。
――他のメンツに声をかけるのも良いけど、このニュースだけは真っ先にシンシャに伝えたい。
「あー……仕方なし。探してみますかぁ」
ボクはそのまま洞窟を背にして、ぽつぽつと練り歩いてみた。

――南の浜。
「居ないなぁ」

――間の原。
「おーいシンシャー？草原に埋まってたりしないかー？」
「あ、おいフォス何ひとりで出歩いてんだよ!?せめて護衛つけろ!!」
「お、モルガ見っけ。ねえ、シンシャ見なかった？」
「……は、シンシャ？昼にアイツが出歩く事なんてあるのか？」
「見てないかぁー、そっかぁー……ありがと！」
「あ、おいっ!?」

――双の浜。

「居ないにゃぁー……あ、クラゲがいる。おいおい浅瀬だぞココは。どこから迷い込んだよ」

――白の浜。

「あ、ボルツとダイヤだ。そういや、ボルツも計画に参加したいって先生に聞いたけど……うん、明日だな明日。君はシンシャの後です。

……あれ？そうなると後々ボルツがボクの部下になる？

……想像できないなぁ……」

――そして虚の岬。

「……くっそー、大分歩いたぞ。もう太陽傾いてるじゃん。シンシャめ、ボクの部下だと言う自覚が足りんぞクソウ。まだ計画始まってないけど！」

岬の上で沈みゆく夕日を眺める。

……絵になるのは良いんだけどさ、捜索時間がもうないって事なんですけども！

「洞窟に戻ってみようかなぁ……もしかしたら戻ってきてるかもしれないし……」

それでいなかったら明日に持ち越しだな。

あーくそ。
悪態つきながら回れ右。
茜色の夕日を背にするボクって結構カックイイんじゃないかしら、とバカなことを考えながら地面に伸びるボクの影に視線を向ける。
西日を浴びて濃い色を落とすその陰の背中辺りから、左右に線のようなものが伸びている。
……？あれ？何ですかこれ??
振り返った。

――月人の黒点だった。

人攫いどもが現れる。
太陽を背にして楽しそうに笑ってる。
獲物がいたぜ、と言わんばかりにボクに向かって弓を引く。
「ちょっ……ちょっ、待とう!?ちょっと待とうっ!?最近頻度高くありませんかっ!?ちゃんと有休消化してますかっ!?」
大慌てで懐からホイッスルを取り出し、大きく大きく吹き鳴らした。

ピュイイイイイイイイイイイイイイイーーー!!

乾いた音が黄昏時の空に響いて行く。
――気休めだ。こんな所に、こんな時間に、誰かがいる筈も無い。
矢が放たれた。
海に飛び込めばまだワンチャン……あ、ダメだ。これ間に合わねえ。
無数の矢が迫り来る。
ボクの身体能力じゃ躱せない。
もう駄目だと身を固くしたとき、目の前に銀色の膜が広がった。
放たれた矢を、その膜がことごとく撃ち落としていく。
「――これは、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）!?来た！ケイネス先生来た!!
コレで勝つる!!」
「俺を変な名前で呼ぶのやめろ!!」
ボクをかばうように立ちふさがる背中。
鮮紅色のセミロングが、西日を受けて輝いてる。
――探し人の、シンシャがそこに居た。

第０２話「シンシャ」

水銀の槍が月人を貫く。
シンシャは硬度2と言うやわらかい鉱物の中にあってなお、戦闘能力が突出している。
いつ見てもこの水銀は凄い。シンシャは環境を汚すから嫌悪していたけれど、使い方を習熟すれば最強だと思う。
変幻自在で無尽蔵。
水銀は1リットル当たり１３ｋｇと言う水の１３倍もの密度を誇る。これを高速で展開させる事で、絶大な破壊力を持つ槍にも鉄壁の防御力を持つ膜にもなる事が出来る。
体が脆いからやらないけど、いざとなればシンシャ自身を持ちあげて高速移動にだって使う事が出来るだろう。
しかも有毒。触れるだけで損害が出る。
相対する敵の身からしてみれば絶望しかないんじゃないだろうか。
ボクら２８人の中で先生を除いて最強と言われてるボルツだって、ＶＳシンシャとな

れば攻めあぐねる筈だ。

「――お見事」

霧散して行く月人を確認して、ボクは称賛の声をかけた。

……この水銀運用、月霊髄液の特性とかを元にアイデアを出したらかなり凶悪になってしまった背景がある。

戦う度に色んなものを汚してしまう事を嘆いたシンシャへのアドバイスのつもりだったんだけどね。

ポイントは「水銀を新しく出すのではなく、常に一定量を用意してこれを運用する」「水銀が持つ密度を圧力として利用する」と言う考え方だったんだけど、シンシャにとってはこれが天啓だったみたいだ。

月人を貫いていた水銀がシュルシュルとシンシャに戻って行く。

そのまま八つに分かれ、銀色に輝く玉となってシンシャの周りに滞空した。

「また、汚してしまった……」

悲しそうな声でシンシャが呟く。

制御しきれなかった水銀が幾らか、海や草原に散っていた。

……いやでもシンシャさん。戦闘の度に大質量の水銀を大量にぶっ掛ける方法をとっていた当初と比べたら、すっごい成果だと思うんだけどねこれ。

「ありがとうシンシャ、助かった」
　――あ、やべ。表情が怒りに変わった。
「フォス!!こんな時間に何で一人で出歩いてるんだ!!弱い上に脆いんだから瞬く間に攫われるだろ!!」
「あ、いや、その……ずっとシンシャを探してさ……」
「俺を……?でもそれは一人でいる理由にはならないぞ!!」
「ご、ごめんなさい。おっしゃる通りですぅ……」
　最初はすぐ見つかるだろうと思ってたから、色々ガバガバでした。
　途中モルガにも同じこと言われたな。
　いやでも、見張り班ひっ捕まえてシンシャ探すために連れ回すのもさ……
「え、えーと……いつか約束したでしょ?シンシャにしか出来ない仕事を、ボクが見つけて見せるって。――その仕事の話を持って来たんだ」
「え……?」
　お、意表を付かれて怒りが和らいだ。
　よっしゃ、畳みかけるように情報を突っ込むのだ!
「結構規模が大きい話だから、計画書を作って先生に申請してたんだ。今日、やっと許可を貰えたからさ。いの一番にシンシャに伝えたかったんだよ」

だから許して、ね?と両手を合わせてみる。
シンシャの顔が赤くなっているのは、果たして西日のせいか違う理由か。
「た……楽しい、仕事なのか?」
怪訝そうにシンシャが眉を歪ませる。
——夜の見回りよりずっと楽しくて、君しかできない仕事を、ボクが必ず見つけて見せるから。
大丈夫。ボクはちゃんと覚えてるよ。
「楽しいよきっと。かなり困難もあるだろうけど。これ、計画書のコピーね。」
原始的なガリ版印刷されたそれを受け取って、シンシャがポツリと計画名をなぞる。
「……アマルガム計画」
「うん」
「ルチルの字じゃないのか?これ」
「そうだよ。ルチルも絡んでる。……その、ボクの字では解読が大変だからって清書してくれたんだ」
「賢明だ。——ルチル、ペリドット、スフェン、ユークレース……俺たちを入れたら主要メンバーだけでも6人?それにこのメンツ、あまり関連なさそうに見えるが……」
「レッドとボルツも噛みたがってるって聞いたから、多分さらに増える。よく考えてみ

たらボルツはともかくレッドは絶対必要だったから、改めてボクからお願いするつもり」
「はぁ？」
　計画名とメンツだけだと訳が分からない。
　きっとそう考えているシンシャの目が、目的、概要と文字の上をするする滑って行く。
　――そして、みるみる内に表情が険しくなって来た。
「こ、こんな……できる訳がない!!ふざけてるのか!?」
「出来るよ。ボクは本気だ」
「相当な危険が伴うぞ!?」
「それを軽減する為の技術の開発も計画に含んでる。数十年単位のビッグプロジェクトさ」
「だがこれは、失敗したら――」
「『だから』シンシャが要る」
　ボクはまっすぐシンシャの目を見て行った。
「君はとても慎重で賢く、視野が広い。ボクは結構思いつきの猪突猛進タイプだからさ……君みたいな人が傍で見ててくれないと、こんな危ない計画はとても実行できないよ。

確かにこれは君の為の計画だけど、ボクの為の計画でもある。もし君の毒液が無かったとしても、ボクは絶対君を誘ってた。

――ボクにはシンシャが必要なんだ」

まるで告白みたいなセリフだな、と内心苦笑しながらそう言った。シンシャも同感だったらしく、「う……あ……」と顔を真っ赤に染めて狼狽している。

視線があちこちをさまよっていた。

「……た、楽しい……かな？」

「きっと楽しいよ」

「……」

しばらく落ち着かなさそうに視線をきょろきょろさせて、そっぽを向いたままおずおずと口を開く。

「わ……かっ、た。協力する……」

「うっしゃあああ!!」

落ちた!!

「お、落ちたって言うな!!」

あ、声に出てた。

「えーと……そんなワケだから、近い内にメンバー揃えて説明会やります。一番最初に

シンシャに伝えたかったから、他のメンバーへの連絡と説得はまだなんだ。
　日程が決まったら朝礼で連絡するから、なるべく朝礼には参加してってね」
「……わかった。なるべく参加するようにする。――他メンバーの説得って事は、メンバーが揃わなければボツも有りうるのか」
「揃うまで凍結、って事になる。ルチルとペリドットは計画段階から巻き込んでたから否はないよ。スフェンとユークレースは説得出来ると思う。
　……問題はレッドなんだよなぁー」
「……レッドに何をさせる？服飾担当が関係するとは思えないが」
「防護服」
「……あー……なるほど。……なるほど。かわいくない服なんて服じゃない！とか言いそうだ」
「それなんだよねー。……ま、何とか説得してみるよ。期待してて！」
　良く考えたら、真っ先に負担が行きそうなトコなんだよね。機能性重視だから絶対レッドでないとイケナイ訳じゃ無いけれど。
　説得の方向性としては……どうしようかなぁ？
「――フォス」
「ん？」

「俺は――期待してなかった。どこかで期待してたけど、期待してなかったんだ。
出来る訳が無いって思ってた。出来る訳が無いって……っ。
……けど。
けど……俺は、期待してみても、良いのかな？」
水銀が、目尻から滲み出てる。
顔をクシャクシャにして、シンシャがすがるようにそう言った。
――夜から抜け出したい。
シンシャがどれだけそう願っていたかが良く分かる。
「もちろん。――その為のアマルガム計画だからね」
ボクはサムズアップしてそう答えた。

@　@　@

「――ってな事があったんじゃよ」
説得2戦目。ペリドットとスフェン戦です。
たまたま二人一緒にいた所をとっ捕まえました。
「あー、ここで計画凍結となったらシンシャすっごい落ち込んじゃうんだろぉーなぁー。

唯一の希望の光が見えなくなっちゃうんだもんなぁー。この世の終わりぐらい落ち込んでしまうんだろぉーなぁー」

「……いやフォス、そんな罪悪感煽らなくても普通に参加するから」

ペリドット。

硬度６半、緑色のショートカットが光る製紙担当。

白くて美しい紙を作る為に魂を燃やす工芸組の一人。

とは言っても紙に魂を燃やしているが他の工芸も出来なくはない。

彼の作る紙にはいつもお世話になってます。正直白さはどうでも良かったりするんだけど、ペンの滑りがとても良いんだよね。

アマルガム計画立案当時から相談しているぐらいにはボクがいつも話をする一人だ。

実はアマルガム計画を進めるために、彼だけ一人で独自にフライングしてたりする。

まあ、ペリドットが協力してくれる事は最初から分かってたからね。

今度は視線をスフェンに向けた。

「あー、ここで計画凍結となったらシンシャすっごい落ち込んじゃうんだろぉーなぁー。唯一の希望の光が見えなくなっちゃうんだもんなぁー。この世の終わりぐらい落ち込んでしまうんだろぉーなぁー」

「計画の内容は前々からペリドットに聞いてたし、俺も参加するよ。するけどさぁ……

それ皆にやるの？」

スフェン。

硬度は5、一部緑がかったオレンジのおさげさん。

意匠工芸担当で、ペリドットと違い家具や道具など幅広く手掛けているけど、敢えて得意を挙げるなら木工だろうか。

ボクら２８人の中では年長組さんだ。

ペリドットと二人で工芸お兄さんコンビである。この二人は計画から絶対外せない。

「ふはは、シンシャに先に了解を取った事は他の皆を脅は……説得する為の武器にもなる事に気付いてしまったのです。流石ボク、やはり天才か……」

「めっちゃ性格悪いな!?」

「っていうか今、脅迫って言いかけた？」

そこに気付くとは……やはり天才か。

――とりあえず工芸お兄さんコンビクリア。

＠　＠　＠

３戦目、ルチル。

硬度６の医務担当。
ルチルの和名は金紅石って言うらしいよ。本当にこんな色の宝石があったかどうかは知らないけど、確かにルチルの髪の毛は金と紅のツートンカラーだ。
金の方はちょっと針っぽい。あの髪って実はセットしてたりすんのかな。
ボクが脆くてよく割れるからと言うのもあるけど、もしかしたらペリドットよりもよく話しているかもしれない。
「……は？当たり前でしょう。――って言うか、内容的に私を除いて進められるんですか？」
そして難なくクリアです。
まあ、ルチルも協力してくれる事は分かってたしね。
「ただの確認だよ。先生が計画実行の条件として、主要メンバー全員の意思確認しとけって」
「ああ、なるほど……確かに、危険が伴いますからね」
ほとんど勝手知ったるなんとやらだ。
「……実は怖かったりしない？」
「ありませんね。計画立案に絡んでいたので我ながら――と言う形になるのかもしれませんが、危険管理もよく練られた計画だと思いますよ。技術目標としても申し分ない」

――でも。

「――パパラチアを助ける技術が得られるかどうかは、わからないよ？」

この計画はシンシャの為だ。

ルチルの目標である、眠り続けるパパラチアを起こす技術は視野に入っていない。

「……いつか、漏らしてしまった件ですか。『パパラチアを助けられない医術に意味なんてない』」

医務室の片隅に安置されている、パパラチアが眠り続けている木箱。

そちらに視線を向けながら、ルチルは小さく肩をすくめた。

「――では私も、あなたがいつか言ってくれたセリフを出しましょう。『目的を持つ事は良い事だけど、最短距離を求めたら別の道を進んでしまってた、なんて良くある事じゃないか。ＬＥＳＳＯＮ５――遠回りこそが一番の近道、だよ』」

……確かに、いつか言った気がする。

シチュエーションは良く覚えていないけれども。

「……ありがとう。とは言えこの計画だけが全てじゃないから、パパラチアの件も手伝うよ……ボクに何か出来るかは怪しいけどね」

「ありがとうございます。――大丈夫です。ここ数十年は久しぶりに『進んでいる』と言う感覚を感じていますから……あなたのおかげでね」

「そう言ってくれると、ボクもうれしいよ」
　医術なんて解らないから、感じた事、覚えている事、疑問に思った事を口に出しているだけなんだけどね。
「――時にフォス。あの時はあなたのセリフに感銘を受けて流してしまってたんですが、ＬＥＳＳＯＮ５って何の事です？」
「忘れてくださいお願いします」
　ＪＯＪＯネタを説明しろとかハードル高すぎですからね。
　ＪＯＪＯは人生の地図だから思わず使っちゃっていたけども（真顔）
　ああー……荒木飛呂彦先生がＤ４Ｃとか使ってこの世界に舞い降りてきてくんねーかな……
　……あの人ならガチで出来るんじゃね？（真顔）

＠　＠　＠

　４戦目、青と白のツートンカラー、ユークレースです。
　硬度７半の書記担当。日々の見張りの計画作成はユークが練ってる。
　書記能力もさる事ながら、計算とか予測とか得意なのでこの計画を縁の下からしっか

り支えてくれるに違い無し。
　ユークの説得は簡単だ。ユーク優しいからね。伝家の宝刀が光りまくる訳ですよ。
　ではさん、はい。
「あー、ここで計画凍結となったらシンシャすっごい落ち込んじゃうんだろぉーなぁー。唯一の希望の光が見えなくなっちゃうんだもんなぁー。この世の終わりぐらい落ち込んでしまうんだろぉーなぁー」
「……あの、フォス？顔を出すなり一体何のお話？」
　くそ、予測が得意なクセに読み取ってくれねーよこの宝石。
　伝家の宝刀が出だしから挫かれるとは想定外。この状況は読めなかった……このフォスの目を持ってしても！
　ちなみに、ユークとペアを組んでいるジェードが可哀そうなものを見るような目でボクの事を見てたりする。
「たまに言動が宇宙に吹っ飛んでいくからな、フォスは。――で、今度は何をしでかしたんだ？」
「遺憾でござる。何かしでかしたこと確定なんスかジェード議長」
「お前は頼りになる時とならない時のギャップが激し過ぎる。今は後者だ」
「欠点もチャームポイントだと思って愛しなさいよ」

硬度7、ルチルに曰く「堅牢のジェード」
靭性8と言う脅威の堅牢さで壊れ難さなら先生を除いてＮｏ．２を誇る。
翠色の髪を後ろでちょうちょ結びにしてるマジメさんだ。
「お納めくださいユーク様。シンシャを夜から引きずり出すぜ計画の計画書コピーでございます。そして参加するのだ」
「……アマルガム計画？」
手渡された計画書を眺めて目をぱちくりさせるユーク。
シンシャと同じくユークは前情報無かったからね。仕方ないね。
「アマルガム計画……噂になっていたアレの事か？」
「知っているのか雷電」
「誰だよ。――先生から概要は聞いている。フォスが主導で進めている、シンシャの毒液を活用する為の計画だろう？先生が許可を出したのも聞いたよ」
へぇ～、と間延びした相槌を打ちながら、ピラピラと計画書のページを捲っているユークの視線は結構真剣な色を帯びている。
「――面白いね、コレ。リスクも高そうだけど、リターンは更に高い。……幾つか質問しても？」
「あ、それは近いうちに説明会開くんで、その席でお願いします」

「なるほど、当然かぁ……計画書は貰って良いんだよね？」
「モチ。さっきも言ったけどそれはコピーだから、書き込むなりなんなり好きなようにしちゃって」
「例のガリ版印刷かぁ……便利だよね。お陰で紙の需要が爆上げされたってペリドットが嬉しい悲鳴上げてたよ」
「ボクとペリドットの自慢の共作です。ボクはほとんど口出しただけだけどね！」
「ふふ……フォスの場合、その口出しが怖いんだからなぁ……」
この短い間に目を通し終わったのだろうユークは、パシッと計画書を小気味良く叩いた。
「良いよ。……ううん、参加させて。僕、ちょっとワクワクして来たよ」
「そうこなくっちゃ!!」
――ユークレース、クリア！
「……その説明会、私も参加していいか？」
ユークレースの後ろで計画書を眺めていたジェードが声を上げた。
「あれ、ジェードも興味あるんだ？参加する？」
「目的は聞いてるから、できる限り協力はしたいと思ってる。……ただ、危険を伴うモノとも聞いているから、まずは全体像を把握しておきたい。――ゆくゆくはシフトの組み

直しも考慮する必要があるかもしれないし、参加以前に私の立場からして聞いておかなきゃいけない案件だろう？」
「なるほど、それもそうだ。――説明会の日程は、決まった時に朝礼で連絡するつもりでいるんだ。その時は声かけるね」
「ああ、頼むよ」
――ついでにジェードも確保（仮）完了！
５戦目……は、もう深い時間だし明日にしよう。
残る標的はレッドとボルツだ。

＠　＠　＠

「――あれ？シンシャがいる！」
朝礼の場で声を発したのは誰だったか。
振り返ると、凄く気まずそうな顔をしながら、誰かを汚染しないように８つの水銀球を極力上方に浮かべたシンシャが隅っこの方に立っていた。
「――シンシャ！来てくれたんだ!!」
「ちょっ、よ、寄るな!!危ないだろう!!」

明らかに水銀球が当たる角度ではないのに、シンシャは過剰に距離をとるので少しばかり傷ついたりする。

何だよぅー、フォス菌が移るぞとか言い始めたら泣くぞボクは。

「シンシャ……良く朝礼に出てきてくれた」

先生だった。

今まで顔すら合わせようとしなかったシンシャだ。朝礼に出てきてくれた事に感極まっている。

ボクは視界の端でルチルと目が合って、自慢げにピースサインをしてみた。

「あ――よ、寄らないで、ください。俺は……ここで、朝礼に参加しますから」

「む……そう、か……」

残念そうに先生が肩を落とす。

流石に、みんなの中に参列するのは無理なようだ。

「――足元にも出入り口にも毒液が落ちていない。制御力を格段に上げたのだな、シンシャ。素晴らしい成果だ」

「あ……ありがとう、ございます」

「ふむ。その上に浮かんでいる、８つの毒液の球体がその秘訣か？」

「はい。……フォスが、キツカケをくれました」

「フォスが。そうか……」
先生の視線にダブルでサムズアップしてみたり。
わはは、もっと褒めてくれても良いのよ？
シンシャが照れたように呟く。
「――フォスには、感謝しています。まだ完全ではありませんが……昨日の月人戦も、以前ほど土を汚さずに霧散させる事が出来ました」
そうそう、昨日の月人戦も――
「……あ」
ピシリと、ボクの中で空気が固まった。
「……フォス？」
先生の声のトーンが低くなった。
……ええ、はい。
主要メンバーの説得にかまけて……
――月人戦の報告忘れちゃってたあああぁぁぁ!!
「あは……あははは、はは……」
チラリ、と逃走経路を確認。
「――さらばぁっ!!」

「え?あ、おいフォスっ!?」
シンシャの声なんぞ知らぬ!
走れ、風のごとく!!
足が砕ける?……砕けるまで逃げるんだよォォォ――――ッッッ!!

@　@　@

「――報告忘れていた事に今気づいたな、アイツ……昨日の内に俺から報告入れてたのに……」
「うむ。経緯は解っていたのでちゃんと謝れば不問としたのだが……即刻逃げるとは少々灸を据える必要があるか。――ルチル、あの様子では廊下辺りでバラバラになっているだろう。後で治さずに私の所に連れて来なさい」
「はい、わかりました。……フォスはホントに、残念な時は残念ですねぇ……」
「――よろしい。それでは朝礼を始める」

……もちろん、ボクはこんな会話がされていた事なんて知る筈も無く。
この後無茶苦茶お説教されました。

第０３話「ダイヤモンド」

先生から逃げて絞られて朝礼参加できませんでした。
シンシャも成果を聞く前に呆れて戻っちゃったみたいだし。
しかしウーム、まさかワシントンの桜の木が最適解だったとは不覚。
ルチルにパパっと直して貰った後、とりあえず説得作業に戻るボクです。
初期主要メンバーは既に参加の意思を確認しているから、後は先生から聞いた二人。
レッドとボルツだけなんだよね。
昨日は夢に見るほど、この二人の落とし方について考えておりました。
……でね。フォス君は気づいてしまったワケよ。
確かにレッドは説得しなきゃイケナイ対象だと思う。主要メンバーに入れなきゃイケナイ人物だと思う。
コッチから頭下げてぜひ加わってくれとお願いしてしかるべきだ。レッドが拒否したら計画凍結はワカる。
――だがボルツはどうなのよ?

特に必要な人材じゃない。主要メンバーには適さない。
声は掛けよう。しかし拒否されても計画凍結はあり得ないんじゃなかろうか？
っつーか計画に参加するとしてアイツ何やるんだ？とことん戦闘バカだぞ。
そもそもよ？
レッドとボルツは自分から「参加したい」と言っていた訳で、これはつまり参加の意思ありとみなしても良いのではなかろうか。
「――そこんトコどう思われますかレッドさんよ」
「知らないわよ。なんで意思確認しなきゃいけない対象にそれ聞くの。……まあ、ボクは参加するけど」
レッドベリル。硬度7半。
赤い髪形はいつも試行錯誤していて顔合わせる度に変わってる。
オシャレに命を懸ける服飾担当。
ボクが結構話す人物の一人でもあるけれど、アマルガム計画の事をボクの口から出したのは今が初めてだ。
普段はデザイナーとモデルの仲なんだよね。
「えっ、いいの？『――可愛くない服なんて服じゃないんだからぁ!!』とか言うと思ってたけど」

「何言ってんの。可愛い防護服作るに決まってるでしょ」
「……ですよね」
　どんな時でもレッドはレッドだわ。
　デザインに拘りすぎて納入遅れたり、実用性が削れたりするのは勘弁なんだけど、レッドの前でそれはかなり言い難い。
　ことファッションと言う一分野において彼女に逆らう事は、例え先生ですら許されない悪夢の所業なのです。
「僕にとってはさぁ、この計画ってある種のリベンジなのよね」
「――リベンジ？」
　良く分からない切り口を作ったレッドにオウム返しすると、「そっ」と苦笑付きで返された。
「フォスの生まれる前だったんだけどねぇ。僕も防護服と言う切り口で、シンシャを何とかしようと頑張った時期があったワケなのよ。――その時は成功まで持って行けなかったけどね。
　チョッと失敗して、指を少し削る事になったんだけどね。大した被害じゃないって言うのに、シンシャから拒否されちゃってそのままなワケよ」
　そうやって両手を広げるレッドの指をのぞき込む。

「うーん……ごめん、良くわからないや」
「でしょ!?ホンっと大した被害じゃなかったのよ!!メチャクチャ悔しいでしょ!?
——だから、この計画のウワサを聞いた時、リベンジのチャンスだと思ったの。フォスがダメって言っても、僕は先生に直談判してでも参加するからね!!」
——なんか、すごくうれしい。
ボク以外にもシンシャを何とかしてあげたいって人はちゃんといたんだと実感した。
「こちらこそよろしく、レッド。一緒に計画を成功させよう!」
レッドベリルも参加決定。
今日は出だし挫けたけど、それでも成果は上々だ。

@　@　@

あとはボルツだけなんだけど……アイツ今日はどこ担当なんだろか。
ダイヤとペアを組んで見回りやっている筈なんだけど、朝礼不参加だったから誰がどこ担当なのか聞いてなかったんだよね。
……昨日散々歩き回って月人に襲われた身、流石にこれ以上長時間一人で出歩くのはちとマズい。

見回り計画を決めているユークレース、もしくはジェード議長ならボルツがどこいるか知ってるだろう。
仕方がないので聞きに行く事にする。
「ユークレー、ジェードー」
あの二人は大抵会議室周辺にいるからね。探すのは容易な方だ。
丁度二人して歩いていたのを呼び止めた。
「お、フォス……もう直ったのか」
朝礼全力ダッシュで砕けたボクの足を眺めながらジェードが言う。
「そこまで盛大にバラバラになった訳ではなかったので……ルチルが３０分掛からずに治してくれました。いっつもお世話になるけどさ、最近ルチルのオペ速度爆あがりしている気がするわ」
「――フォスはここのところ毎日治してますからね。欠片見ただけでどのあたりのパーツか解るようになってきた自分がちょっと怖いです」
何処からともなくルチルが会話に参加してきた。
手には何故か、トンカチを持っている。
「ふふ……お疲れさま、ルチル」
「ありがとうございますユークレース。しかしもう慣れました。フォスの残念っぷりも

併せてね」
「――みなさん、もう少し風当たり弱くしてくれても良いのよ？」
「お前は反省しろ」
「……はァーい」
さっきの今だと、流石にボクもおとなしくしておく他ないのだ。
「――時にさ、ルチル。そのトンカチ一体何なのよ？ノミでも使ってた？」
「ああ、これですか？」
目の前にプラプラと掲げた後、おもむろかつ躊躇いなくそれをジェードに振り下ろす。
キンッ!!
「ひぃっ!?」
突如行われるルチルの凶行。あんまりボクが働かしちゃった物だから、ついにノイローゼになってしまったのだろうか。
ジェードは電気ショック浴びたかのように、反響する打撃音をバックにして固まっていた。
ユークなんか、口元を両手で覆って「いつかやると思ってたけどついに……っ!!」と慄いている。

何をやると思ってたんだろう。
「な……何をするルチルっ!?」
「失礼、衝撃テストです。１００年に1度靭性再調査を行っております。固さを示す硬度は触れば解りますが、割れ難さを示す靭性は結晶構造や劈開など要素が複雑で、慎重に体系化しておりまして。ジェードには高基準値を出す為にご協力頂きたく」
「断る前にやるんじゃない!!」
「ではもう一発行きます」
キンッ!!
「ひえぇっ!?」
この澄んで乾いた高い音が凄くコワい。
……ボクがやられたらボロボロにされちゃうよ。
「うん、流石堅牢のジェード。音が違いますね」
「こ――断ろうとするんだったら返答を待って欲しいんだが!?」
「些事でしょう?」
ひでぇ。
「――し、しかしちゃんとした理由があるのであればこのフォスフォフィライト、日頃ルチルにめがっさ迷惑かけまくってるので体を張るのは是非も無し!完全劈開を持つ硬

度三半、華々しく散ってやろうじゃねぇか！

さあ来いルチル！ボクは一発小突いただけで死ぬぞオオオ!!」

「あ、覚悟完了しているところ恐縮ですが、あなたは結構です。靭性最下級過ぎて参考になりません」

ひでぇ。

――ってぇーと……？

ボクとジェードの視線がユークレースに注がれる。

「ひっ!?……っや、やめて!!僕に乱暴する気でしょう!?エロドウジンみたいに!!エロドウジンみたいに!!」

「――フォス、あなたのおバカ語録を他の者に伝染させるのやめて貰えませんかね。この間もモルガに調査協力をお願いした時、てめえの血は何色だとか何とか言われて気が遠くなりましたよ」

「……（＊´ω`＊）ハヤル！」

「流行らないし、流行らせませんよ。とりあえずそのムカつくツラやめろ」

（´・ω・`）ショボーン

「――ああ、ユークレースも結構ですよ。あなたも完全劈開ですから基準値としては不適当ですし」

「ああよかった……僕だと開くの確実だったから物凄くコワかったよ……」
「ジェードにモルガってことは、劈開がない奴をサンプルに集めてるのか。……って事は可哀そうに、ゴーシェもルチルの餌食に……」
「ボルツやジルコンも該当するね。ボルツは……ボルツなら何とかルチルを止めてくれるかも……！」
「――あなた達やっぱり一発行っておきますか？」
「ごめんなさい!!」
まったく、考察が微妙に合ってるのがイライラしますねとルチルがブチブチ言っている。
くわばらくわばら……
「――ケンカ……では、無いようだな」
「あっ、先生」
トンカチを構えたルチルに変な誤解をしそうになったのか、奥から歩いてきた先生が声をかけてきた。
「はい。多少じゃれていましたがケンカではありません。ルチルが１００年に一度の靭性テストを行っていると言う事で、それに協力しておりました」
流石ジェード議長。すぐさま報告に移るところが流石。

「靭性テストか……なるほど、そう言えば報告を受けていた記憶がある」
「あ、ちゃんと報告入れてたんだ」
「あたりまえでしょう。あなたとは違うんです」
「――ツクハッ!?」
流石ルチル、正確に抉ってくるぜぇ……っ！
「フフ……フォスも反省したようだし、これ以上責める事はない」
先生がボクの頭に手を置いてくれた。
あぁー、慈悲の御心が染み渡りますだー……
「……そーいや、先生はサンプルになるのルチル？先生の劈開とか知らんけども」
「え？」
皆の視線がルチルに集まる。
「いえ……靭性テストのサンプルとしては情報不足過ぎて不適切です。不適切なんですが……私も少々興味ありますね。
先生、もし差し支えなければ腕を少し叩かせて頂いてもよろしいでしょうか？お時間は取らせません」
「うん？……ああ、もちろん構わない」
先生が袈裟の右腕を少したくし上げ、ルチルに差し出した。

脈をとるようにそれを左手で抑え、ルチルのトンカチが2回ほど別々の方向から振り下ろされる。

――カッ！カッ！

ジェードのそれとは違い音の響きが抑えられたそれは、なんとなく「ギッチギチに詰まった物を叩いた」と言うような印象を受けた。

「――ありがとうございました」

「うむ。何か参考になっただろうか」

「はい、大変興味深いデータが取れました。……そうですね、先生にはやはり劈開は無いようですね。それと、この感触は六方晶系でしょうか。硬度もかなり高いですし、やはり先生は別格ですね」

「すごい、叩いただけで解っちゃうんだ?」

「慣れで大体掴めてきますよ」

職人さんみたいだなぁ、ホント。

治療の時にもノミ使ったりするし、医師ってよりもイメージはますます職人さんだなぁ。

ボクらの体の構造上、仕方ない所はあるけどさ。

「しかし等軸晶系じゃなくて六方晶系かぁ……んで、『金剛』と。

……うん？もしかして先生って、ロンズデーライト（六方晶ダイヤモンド）？」
いやいやまさか、ロンズデーライトっつったらＳＦで出てくるような素材だぞ。
確かに隕石からごく微量発見されてはいた筈だけれど、いくら何でもそんな――って、先生が思いっきり目を見開いていらっしゃる!?
「……ア、アカン奴だ！暴いちゃアカン奴だったんだこの情報!!」
「こ、こらフォス！先生はプライベートな情報に踏み込まれるのは苦手でいらっしゃるんだ！もっと自重しろ!!」
「す、すみません。私も興味本位で余計な真似をしてしまいました」
「で、でもほら。きっと誤診ですよ。いくら何でも叩いただけでそんなに情報が分かる訳ないですしっ！」
先生の反応から一斉にフォローに回るボクたちを見て、先生がポカンという顔をしてる。
この人凄い顔に出るからめっちゃ解りやすい。
「……ジェード……もしかすると……私はこう言った方面で、結構皆から気を使われていたりするのだろうか……？」
「え？あ、いや、その……あ、あはははは」
ンもうこの誤魔化しや嘘が苦手な真面目さんめ！

オラ、先生目に見えて落ち込んでんだろーが！
「そ、そうか……気を使わせてしまってすまない……それとフォス。私の組成については、なんだ、その……ひみつだ」
「――アッハイ」
先生もちょっとガバガバ過ぎィ!!
もうちょっと組成と同じぐらいの固さ保って!?
「……ジェード。私は少し本堂に居る。何かあったら直ぐに知らせなさい」
「は、はい！わかりました！ごゆっくりどうぞ!!」
なんかショックを受けた様子を隠そうともせずに項垂れながら（もしくは本人的には隠そうとしているのかもだろうけど）本堂へ向かう先生の背中は、少しだけ小さく見えた。
……ちなみに、先生が本堂に向かうと言う事はお昼寝すると言う事と同義だ。
本人は瞑想と言って憚らないけど。
（（（……フテ寝だアレ……）））
なんだかボクはこのとき、皆と心が繋がったような不思議な感覚を覚えた。

@　@　@

トンでもない爆弾掘り起こしちゃったけども、微妙になった空気を乗り越えて何とかボルツの担当を聞き出したボクは、少し小走りぎみに切野の湿原に向かった。
昨日みたいに月人に襲われたら堪らないので、早めに戦闘班と合流する必要があるのよね。
……しっかしまあ、それにつけても最近の人拐い連中、ちょっと色々おかしいと思うわ。
頻度もそうだけど、ヘリオの事だってそうだ。
――シンシャにしゅんころされたあの連中は、ヘリオの鏃は持ってなかった。
いよいよもって「ワザと返してる」説が濃厚になってきた気がしてならない。
そもそもその前の先生にしゅんころされた奴らだってヘリオの事を除いても変でしょ。――ダメージ入れても霧散しなかったんだぜ?
でもシンシャが相手した方は霧散した。
……なんだ?この違い。
ヘリオを持っているかどうか?ンな筈はない。
欠損ダメージ受けて霧散する仕組みになっているか否かだ。
――霧散しないタイプを新型、霧散するタイプを旧型と呼称するとしてだ。

シンシャ戦で出てきた奴が旧型だったのは何でだ？
ヘリオを持ってた方は実は戦力評価機だった？あのフザけた鏃はあの量であってもテストで済ますレベルだった……？
ならシンシャにのされた方が旧型なのにも納得するけど、そうなると頻度がおかしい。新型の後にブランクを置かずに旧型を送るのが不自然だ。
……月人にもグループがあるのか？
複数グループがボクらを狙ってると仮定したら、どうだろう。今までは暗黙に決まっていた頻度だけど、そのタガが外れたとか。
……一応、こじつけにはなる……のかな？
でも、タガが外れたって事はアイツら、勝負を賭けに来たってこと？
それにしては温くない？そもそも兵力の断続的投入とか今までが既にフザケ過ぎな訳だｋ
「へちんっっ!!」
パキッ！
「ぐあああああまたスッ転んだし!!っつーか手首割れたクッソ！外出る度に割れてないかボクは!?」
割れ方が綺麗に真っ二つだからボクにも直せるけども！

「あらあらフォス、大丈夫？また考え事しながら歩いてたの？」
手首の断面を合わせるボクに声が掛かる。
見上げれば、太陽の光をキラキラ反射しながらダイヤが心配そうに覗き込んでいた。
ダイヤモンド。誰でも知ってる硬度１０。
見た目女神。性格も女神。つまりは女神。
存在が眩しくて時折直視出来ない。
そんなダイヤの担当は戦闘班。強くて綺麗で性格も良いって凄い……凄くない？
「おお、ダイヤ様。ご機嫌麗しゅう」
「ふふ、なぁにそれ？」
そんな他人行儀だと僕寂しいなぁ、なんて言って起こしてくれるダイヤがマジダイヤだわ。
――あ、手首くっついた。
コレ絶対ダイヤ効果だわ。
「……時に、ボルツ見なかった？ボク、ボルツを探してたんだけどさ」
「あら、フォスも？僕もそうなの」
「えええ、なにそれ!?」
ボルツとダイヤはペアで見回りをしている。

と言うか、見回り組は不測の事態に備えてツーマンセルが基本だ。
ダイヤが知らないと言う事は、ボルツが勝手に動き回っている事を意味する。
――ちなみにダイヤが勝手をしている線はあり得ない。
何故ならダイヤが白と言えば世の中は全て白なので、間違っているのは常にボルツなのである。
異論は認めない。
「何だアイツ、勝手な奴だな！ダイヤを蔑ろにするとは笑止千万。先生にあること無いことチクってくれる！」
「そう言わないで？……ボクが、ボルツに付いて行けてないだけなの」
「付いていけない見回りって何なのさ？」
「あー、うん、まぁ……見回りそのものは、そうなんだけどね？戦闘になると付いていけなくなるの」
「やっぱりボルツが勝手してるんじゃないか！ダイヤをハブにしてたって言い触らしちゃる！」
「あんもう、そんなイジワル言わないで？ほら、この通りよフォス」
ボクが割れないように服の上から優しくぎゅうっとしてくるダイヤ。
「――仕方ねえ、今回だけだぞ」

「ふふ、ありがとうフォス」
　クッソこの女神あざといわマジで。
「……でもさ。見回りの度に互いに探しているような事になってるなら、ちょっと由々しき事態だよ？一度ボルツにガツンと言った方が良くない？」
「ううん――本当に、僕が付いていけなくなってるだけなの。
　ボルツはね、最近ますます強くなっちゃって……見回りも、撃滅も、全部一人で終わらせてしまうから。僕なんか、戦わせて貰えなくなっちゃってる」
　ボクに回されている手が、すがるように強くなる。
　――うん、まあ、「付いて行けない」の意味は解った。
「――ダイヤは、戦いたいの？」
　恐らく違うだろう質問を投げる。
　……ダイヤからの返答は無かった。
「……でもね、フォス。強くなければダイヤモンドでは無い。だから僕は、ボルツみたいになりたいの」
「その結論はなんだか悲しいよ、ダイヤ。光輝いてこそのダイヤモンドだと思うけどなぁ」
　確かにボルツは強いけど、それは組成も性格も戦闘に全振りしてるからだ。

ダイヤがボルツみたいになっちゃったら、ボクはきっと悲しすぎて砕けちゃうよ。
「――僕にはね。強いボルツがとても輝いて見えるの」
悲しそうな目をしてダイヤがその体を離した。
その手が腰に下げた剣にのびる。
「それに……強くなければ、フォスだって守れない」
「――ッ!?」
ダイヤが剣を抜き放つのと、ダイヤの様相から事態を察した僕が振り返るのはほぼ同時だった。
――良く晴れた青い空の中で、月人が後光のように太陽を背にして浮かんでいた。
「何だってんだここ最近ッ!?」
「昨日も来たのよね?――まるで勝負を賭けに来たみたい!」
なんだ、上司にノルマでも決められたのかコイツら?今月は宝石拉致強化月間だってか!?
ダイヤの後ろに下がりながらホイッスルに思いきり息を吹き込む。
ピュイイイイイイィィィーーーッ!!
……ボルツが近くに居る筈だ。
ボクたち２８人の中で最硬にして最強のボルツが。

月人の矢が放たれる。
ダイヤの邪魔にならないようにさらに下がりながら、ボクはその戦いを見続ける。
――ここで逃げるのとボルツを待つの、どちらが確度が高いかを計算しつつ。
ダイヤの剣が翻る。
ほとんどの宝石たちは、この矢の一斉射撃を叩き落とす事で対処する。
……しかし、ダイヤは別の解を見出したようだった。
「――っい、せぇツツー」
器用に剣を使い、飛来した矢を月人に向かって跳ね返した。
撃ち放たれた矢の雨は、そのまま天女もどきの体を貫いて行く。
思わずボクの口から感嘆の声が漏れる。
「――す、すごいっ!!はね返すなんて!!」
ボルツみたいになりたい、とダイヤは言っていた。
だからこそ、新しい戦い方を模索し続けているんだろうと思う。
「――ううん……まだよ」
ダイヤの言葉通り、月人は依然健在だった。
弓矢だと跳ね返されると思ったのだろうか。各々が投げ槍に持ち替えている。
!?――ダイヤ!その戦い方は凄いけど、ボクたちの体を砕ける程の攻撃を複数一度に

跳ね返すのは、剣と腕への負担がかなり大きい筈だよ！連発は危ない!!」
「っ、……フォスもボルツみたいに言うのね……」
コンプレックスを刺激されたのか、ダイヤの眉が辛そうに歪む。
――ああもう、ボクの言いたい主眼はそこじゃないんだ！
「聞いて!!――その方面でアプローチするのなら、跳ね返すのを一本に絞るか、地に落ちた矢の鏃とかを剣先で引っ掛けるなりして投げ返した方が確度が高い筈だよ！負担も減るし狙いも正確になる!!
月人の雑（ぞう：周りにいる天女もどきの事）は全て倒す必要はないんだ！中枢さえ正確に崩せば終わらせられるッ!!」
「――ッ!?」
投げ槍の雨が飛来する。
ボクの言葉を一瞬で汲み取ってくれたダイヤは、跳ね返そうとしていたその構えを切り替えて槍の雨を潜り抜ける。
大地に突き刺さっていく槍はやはり矢よりも威力が高かったようで、はじけ飛んだ土が余波となってボクに飛来した。
「うっ……」
何とか砕けずに済んではいる。

顔をかばった両腕の間から、ダイヤが勢いよく突っ込んで行く姿が見える。
その先には先ほどはね返すまでもなかった矢が落ちている。
「――せぇ、の……っ!!」
月人の矢は3股になっている独特なものだ。
その鏃にうまく剣先を引っ掛け、大きく振りかぶったダイヤが月人に向かって狙いをつけた。
「いっけえええええぇぇぇーーーっっっ!!!」
剣のしなりとダイヤの身体能力。
それが、ボクらの体を砕き得る鏃に対して強烈な加速をかけて撃ち出した。
明らかに弓で放たれるよりも威力を乗せられた矢が、趣味の悪い雲の中央で座す月人の喉笛を食い破って空の彼方へ消えていく。
……そして、月人の体が霧散して行った。

@　@　@

「うっしゃあ！大当たりぃっ!!」
思わず渾身のガッツポーズ。

ダイヤも嬉しかったのか、「やったぁっ！」と胸の前でコブシを並べている。……うん、君のガッツポーズなんかズルいと思うわ。

しかし凄いな……アドバイスから試行一発で見事に決めて見せるとは。あの跳ね返す戦法を選ぶ所もそうだけど、ダイヤって相当器用だよね。

そのまま技術職出来ちゃうんじゃないの？

「ふふ……なぁんだ。最初っからフォスに相談していれば良かったのね」

今までムキになっていたのがバカみたい、とダイヤが笑った。

「いやいや、ダイヤの器用さがなせるワザだと思うよ今のはマジで。

……一応コメントしとくけど、今のやり方も欠点目立ってるから注意して。鏃を剣に引っ掛ける時に、どうしても一瞬無防備になってしまうから。そのままはね返すか地に落ちた矢を使うかで駆け引きが必要になる筈だよ」

「うん、ありがとうフォス。……元々はね。どうにかして遠距離から攻撃出来ないかって考えた結論がアレだったの。ボクが遠距離攻撃できれば、ボルツはそのまま近距離でバランスが取れるかな……なんて、ね」

なるほど……ボクもそれは何度も考えた。

ボクの場合は結論が投石紐だったんだけど、器用さが最低値のボクは３ｍ先の的にすらマトモに当てる事が出来なくて、護身用で持つにしてもホイッスル持ってた方がマシ

と言う結論になったんだよね……

何だったらダイヤに投石紐教えてあげようかな？

「――ダイヤ!!」

ホイッスルの音を聞きつけたのか、ボルツが血相変えて飛び込んで来た。

５つに分かれた黒い長髪が翻る。

――ボルツ。彼はブラックダイヤモンドだ。

ダイヤと同じ硬度１０。しかし劈開がある為衝撃に弱いダイヤとは違い、多結晶から構成される彼は劈開が無いため靭性が最上級。

つまりもっとも壊れにくい宝石なのだ。

そのせいか戦闘力もずば抜けてる。

……お陰で、性格まで戦闘狂だ。

「ボルツ……コッチはもう終わったよ。ボクも結構、やるものでしょう？」

「お前は！――勝手にどっか行ったと思ったら、まさかまたあのヘンな戦い方を試していたのか!?」

「へ、ヘンじゃない……フォスにも相談に乗って貰ったもの。無事に月人も撃破できたし」

……わぁお。

どうやらワンマンプレーやってたのはボルツじゃなくてダイヤだったみたい……
いや、でもダイヤは女神だしやっぱ全てにおいてボルツが悪いわ、うん。
「――おいそこのグズ！ダイヤに何を吹き込んだ!?」
「ちょっ、ひっどいなぁ……全弾はね返すのは剣も腕も負担が大きくなるから、一発だけはね返すか、落ちた弾を投げた方が良いって言ったんだ」
「なんだと……!?一発だけはね返す事を意識すれば他の弾への対処が疎かになるし、投げる事を選べばどうしても無防備な瞬間が出来上がる！防御力が激減するだろうが!!
貴様はダイヤをバラバラにしたいのかッツ!?」
「ま、待ってボルツ！フォスはその辺りもちゃんと忠告してくれたわ！」
「そもそも、こんな戦い方を模索してどうするって言うんだ!!」
他の弾への対処――って所はなかったけどね。
話聞いただけで直に欠点を指摘できる所はまあ、凄いと思うけどさ。
「ボルツさぁ……その剣幕ずっと続けてたらどんどん関係が悪化するばかりだよ?」
「なんだと!?」
「ダイヤが何て言ってたと思う?――ボルツが強すぎて戦う事すら出来ない。強くなければダイヤモンドじゃない。ボルツみたいになりたいって、スッゴい思い詰めていたんだぞ！」

「フ、フォス、それは……っ！」
　ゴメンねダイヤ。
　言われたくないとは思うけど、コレは言った方が良い場面だ。
「……バカな事を……っ！」
「バカな事じゃ無いさ。ぜーんぶ、君の剣幕がダイヤを追い詰めた結果なんだぞ？」
「――なにを？」
　懐をあさって計画書のコピーを取り出す。
「……アマルガム計画？」
　その行動が何を示すか解らずに眉を顰めるボルツの横で、ダイヤがその表紙を読み上げた。
「ボルツは靭性特級だ。……つまり、ダイヤの為だったんだろ？」
「ぐっ……」
　ボルツがばつが悪そうに視線を逸らす。
　心なしか、その頬は赤く染まっていた。
「え……何？この計画がどうしたの？」
「つまりさダイヤ。ボルツはねぇ、ダイヤの事が好きで好きで好きで好きで好きで好きで好きでメチャクチャ好きでたまんなくてぇ、ダイヤがちょっとでも傷ついたら発狂し

そうになるぐらい好きでぇ」
「お、おおおおい、口を閉ざせこのグズっ!?」
ヤなこった。
「特に月人戦とかでヒビが入ったり砕けるダイヤを見るのがスッゴイ嫌なもんだから、だったらダイヤが傷つく前に自分が全部片づければエエやんと言う脳筋極まった結論に達してそれを実行し続けていた訳よ」
「……ボルツ?」
「しし、知らんっ!!全部このグズの言いがかりだっ!!」
だったら視線ぐらい合わせてくれませんかねぇ、ボルツさんよぉ?
「このアマルガム計画なんだけどさ。詳しい内容はすっ飛ばすけど、成功すると靭性を克服できる可能性があるのよ。……んで、その計画にボルツは参加したがっていたのね。靭性特級のボルツが。
……この状況に至れば、誰の為に参加したがっていたのかもう明白だよねぇー……?」
ああ、ニヨニヨが止まりませんなぁ。
きっとすごい邪悪な顔をしているんだろうなぁと自覚しつつ、ダイヤの耳元に口を寄せる。

「証拠見せてあげるよダイヤ。さっきボクにしたみたいに、ボルツに抱き着いてみ？
……きっと面白いようにフリーズすっから」
「え？……う、うん」
「お、おいグズ何を囁いたんだ今!?おいちょっと待てダイヤ!?何だそのワキワキした手は――っ!?」
ああ良いなぁ。生まれてこの方３００年、ここまで狼狽するボルツ初めて見るなぁ。
くひひひ、これがいわゆる愉悦って言う奴ですかねぇ？
カメラあればなぁー。もうパシャパシャしまくってたんだけどなァーっ！
「……か、かくほー」
「え!?え、え、えええっ!?」
カチコチになったボルツが「え」しか言えなくなって――
……凄い形相で、ダイヤを突き飛ばした。
「――え？」
一瞬、「拒絶した？」と思ったけどそうじゃなかった。
ボルツが剣を抜き放っている。
睨みつけたその視線の先に――予兆の、黒点。
「……嘘だろ？」

今日、２回目なんですが。っつーか、今倒したばっかなんですが。
……口の中で呟いたそのセリフなんぞ知る筈も無く――月人が空に現れた。

第０４話「記憶」

――すわ、第2戦と思っていたのだ。

今度はボルツもいるし苦戦はしないだろうと少し楽天的に考えもしたけれど、事態は想像の斜め上を行った。

月人の乗った雲が、あさっての方向へスーッと遠のいて行ってしまったのだ。

ボクたちはそれをポカンとしながら見上げている。

「無視、した？ダイヤやグズがいるのにか？」

「……顧問さん、どう思う？」

いや、ボクも訳が分かんない。

「ボルツに恐れをなして逃げてった……だと、ありがたいんだけど。あっちは学校の方だしね」

何らかの目的があるだろうな、とは思う。

そしてそれはきっと禄でもない事なんだろうな、とも思う。

「あれ……何かしら？後光にしては大きいような……？」

ダイヤが月人の雲に何か見つけたようだけど、ボクには良く見えなかった。
ダイヤは視力も女神クラス?
「なんにしても、学校の真上だもの。きっと先生が見つけてるわよね」
「――あ」
視線がボクに集まった。
「悲しいお知らせです……先生、フテ寝中だわ」
「なに?……それは、マズい……!」
普通学校の中に戦闘班はいない。
最大戦力が先生だし、有事の際にはユークとジェードが動くからだ。
それに、今まで学校で月人を迎え撃った事例が無かったというのもある。
――まさかそのシフトを把握して攻めて来たとでも言うのか?
本当に、ここ最近の月人は動きが異常に過ぎる!
「――チッ!」
ボルツの行動は早かった。
先ほど抜き放った鞘を引っ掴み、黒い髪を靡かせてあっという間に走り去って行く。
「あ、ボルツッ!?」
「フォス、僕たちも行くよ!」

そしてボクも瞬く間に横抱きにされました。
靭性が低くてもさすがの最硬ダイヤモンド属。
それが身体能力として反映されているのか、ややボルツに後れながらダイヤが駆ける。
景色が見る見るうちに流れて行く。
身体スペックがボクなんかとは全然違う。
ボクが例え足が粉々に砕ける事を覚悟して全速力で駆けても、ここまでの速度にはならないだろう。
しかもこれを、ボクと言う重りを担いだ上で出してるのだ。
……さすがに、「サラマンダーより、ずっとはやい！」は自重しておいた。
落ちないようにボクもダイヤの首に手を回していると、不吉な事に気が付く。
「――あの、ダイヤさん」
「うん？」
「何か……右腕大丈夫ですか？キシキシ言ってる気がするんだけど」
「ふふ……バレちゃうなぁ。でも大丈夫。余裕で持つわ」
――ッ！
そうか、一回目のリフレク攻撃の時か!!

負担が掛かると思っていたけど、１回やっただけでダメージが酷い事になってたんだ！

「ダイヤ……ッ！」

「大丈夫、本当に心配ないわ。……だって……」

あっという間に警鐘を超え、学校の真上に座する月人を望める場所まで辿り着く。

既にボルツは、学校の外壁を足場に月人へ突っ込んでいる所だった。

「だって……今回も、何もさせてくれないものね……」

ボルツの剣が月人を唐竹割りにしているのが見える。

切なげに嘆息するダイヤの声が、やけにハッキリと聞こえた。

＠　＠　＠

――結局、なんだったんだ？

２回連ちゃんで出ておいて、しかも一つはボクらを無視して学校を強襲して、結果はあっけなく霧散。

嫌なことが起こってない筈がないのに、それがない。

訳が分からないのでとりあえずユークに相談しに行ったら、何かでっかい変なのが池

の近くに座している。
それを見つめて、ユークとジェードが途方に暮れていた。
「ユーク……なに、この……なに?」
いや、ホントに何?
なんか大きなヒビが入っている、でっかくて固そうな何か。
……うん?
引いて見ると全体像がなんか、カタツムリの貝殻に似ている、ような……?
「ああ、フォス。丁度いい所に。意見を聞かせてくれないか?」
声をかけてくるジェードの隣で、ユークが剣の鞘でコツコツそれを叩いていた。
「……このデカ物の事?」
「そうなんだ」
角度を変えて見てみる。
全体像は大雑把に円形。外周から中央に向かって螺旋を描いている。
象牙色のベースに、中心から外周に向かって薄紅色をした放射状の模様が伸びている。
……見れば見るほどカタツムリの殻だけど、その大きさが尋常じゃない。
「どっから湧いて出て来たのさ、こんなの?」

「見てなかったか？――月人が落としたんだよ」
「……あ？」
殻を触ってみようとしたボクの手が、ジェードの爆弾発言によってピタリと止まった。
「ああ、フォス。そう言えば、博物誌編んでいたのよね？この変なのが何なのか調べてくれない？
……フォス？」
ユークが暢気にそんな事を言っている。
固まるボクの様子を見て変な勘違いをしたのか、ジェードが声を掛けてくる。
「もしかして、これがなんだか知っているのか？」
「……とりあえず、離れましょうよユークにジェード」
緊張したボクの声を怪訝に思ったのか、二人が顔を見合わせた。
ボクはと言えば、固まった手を再起動させて軽く拳を作り、殻と思しき物をノックするように叩いてみる。
――水分を含む何かが、中に詰まっている様な反響と感触だった。
「中身付き……これ、アカン奴だ」
「……うん？何か知っているのであれば教えて欲しいんだが」

「知らない。――でも、月人が落とした上に中身が入ってるってだけで第一級危険物じゃん、むしろなんでそんなにノンキ出来るのさ!?先生叩き起こそうよ先生を!

――ちょっと皆、まだ警戒態勢解かないで!?」

やべえ、戦闘班は間合いの外だぞ。

遠目に見えるボルツはダイヤの腕を目ざとく見つけてなんかガヤガヤしてる。

みんな終わったと思ってる……っ!

ボクの様相に少しユークがオロオロし始めた。

「あ、あの、フォス……なんでそんなに警戒しているの?月人はとっくに霧散したよ?月人が霧散したのに残っているって事は、きっと月の物じゃないんじゃないかな?」

「いやいやいやいや、普通に考えてもトロイの木馬でしょコレ!月人が落として言ったのは不可抗力だったと仰る!?」

「木馬ぁ?これがか?」

そうだよね!ゴメンね!通じないよね!!

「トロイの木馬ってのはさ、はるか昔にあったとされているトロイア戦争の勝敗を決したーシーンの事で……」

――思い返してみれば。

二人への説明の為とは言え、要警戒第一級危険物から目を離したボクはいくらなんで

もウカツに過ぎました。
　視界がなんだか薄暗くなり、何か大きな物の日陰にいるのだと気づいた時にはジェードが切羽詰まって叫んでいた。
「――フォスッッ!!」
　反射的に、ジェードがボクの腕を引っ張った。
　回避させようとしたのだと思う。
　しかし脆いボクの体はその急激な負荷に耐えきれず、ジェードに引かれた腕だけがパキンと言う音を残してついていった。
　絶望に染まるジェードの表情をバックに見たものは、上から降ってくる半透明でピンク色をした軟体の何か。
　――視界が、真っ黒に染まる。
　熱い。痛い。
　鈍感な宝石の体なのに、まるで真っ赤に熱した針を全身に刺されているようだ。
　体がピクリとも動かない。
　手足の先から「ボク」が消えて行くような喪失感に襲われた。
　……ダメだ。
　まだ、死ねない。終われない。

ボクがいなくなったら……シンシャは……
（た、すけ……）
がむしゃらに手を伸ばそうとしても、もはやその手の感覚が無い。
――そこから、ボクの意識は途切れている。

@　@　@

……気がつけば、何故か草原に大の字になって寝転がっていた。
太陽がさんさんと『僕』の体を照らしている。
視界に入る僕の前髪が、風に撫でられてキラキラと緑色に輝いていた。
それをぼーっと眺めながら、やっぱ僕ってキレイだよなぁー、月人にモテモテな事自体はもう仕方ない事だよなぁーとアホなことを考えてみる。
「あ〜ー……太陽がおいしい……」
僕のすぐ隣で蕩け切った声が上がる。
互い違いに頭を寄せて大の字に寝ているみたいだ。
「……そーだねぇ……」
僕もまた蕩け切った声を上げる。

この状況に対する疑問は全然沸かなかった。
押し寄せる眠気にウトウトするぐらいだ。こんな素敵なお天気の中で昼寝なんて、なんとゼイタクなんだろう。
「インクルージョンがねぇー……活発になってる筈なのに、不思議と眠くなるんだよねぇー……」
「あー、わかるわぁー……多分それ、『ボク』の時からの名残だと思うわぁー……ボクもウトウトしてるもの……」
うにゅ、と口から変な声が漏れつつも視線を横に向けてみる。
宝石とは違う、さらさらとした黒髪が控えめに揺れていた。
黒髪が聞いてくる。
「でもひっさびさだよねぇ……しょっちゅう砕けてんのにさぁ、意識飛ばすレベルまで行くのは……前の時はたしか、首がポロリしちゃったんだっけ……？」
「ちょっとぉー、話題としては最悪だと思うんですけどそこんトコどう言う見解よ？……あん時はルチルに大目玉食らっちゃったし、もう思い出したくないんだからさぁ……」
「あははは、ルチルさんには頭上がらないよねぇホント。毎回毎回あんな細かい立体パズル良く出来るなとか思うよ。あれ程の技術持っといて、なんでパパラチアさんを治せ

ないのか不思議で仕方ないわ」
「それなー。最近パパラチアのインクルージョンツンデレ説が僕の一押しになって来てるわ。次点で好きな子ほど虐めちゃう性癖説」
「あっは、ルチルさん報われなさすぎだねそれは」
「ルチルはパパラチア相手だとすっげー献身的に尽くしちゃうタイプだからなぁー……」
　ゴメンねルチル、ダシにしちゃってと頭の片隅で思いつつ、それでも頭のゆるーい会話をグダグダ続けてみたりするのだ。
「……あ〝ー……なんか、だんだん思い出してきた気がしたわ」
「気がしただけっすかフォスさん」
「いやいやそんなことねーよ　さんよ。……でもさ、思い出したは良いけど具体的に何されたん？僕」
　最後に見たものは砕ける右腕と上から降ってくる半透明でピンクな軟体だぞ。状況把握しろっつー方が無理だと思うワケですよ。
「んー……なんかね。モグられたみたいよ？」
「……モグられた？」
「うん。モグモグごっくん」

「うわぁー、マジかぁー……」
それいちばんアカン奴じゃん。
思わず両手で顔を覆ってしまう。
オイどーすんだコレ、これで戻れなくなったらシンシャはもちろんの事、僕の腕を掴いじゃった上で助けられなかったジェードとか自殺モンのトラウマ刻んじゃうじゃないかよ。すっごい真面目なんだぞジェード議長は。
ボクら不老不死なんだからＳＡＮチェックとかダイレクトにダメージ入るんだぞ。
「一体ナニモノよ下手人。やっぱあの殻はカタツムリなわけ？」
「いや、その辺はボクにはどーにも……ただ、復活は出来そうな気はしてる」
「え、マジで？」
「マジマジ。まだインクルージョンは生きてるくさい」
「うはぁ、すげえ根性だな僕のインクルージョン。でもさすがのルチルでも消化されたモンをどうにか出来るのかね？」
「うーん、そのあたり突っ込まれると辛くはあるけども……」
っつーか僕ら、結構深刻な話題なのに何でここまでゆっるゆるで会話できんだろ？
お日様のせいか？……お日様のせいか。
「……そーいやさ。これを機会に人格交代とか企んじゃったりしないの？おたくは？」

まったく危機感持たずに聞いてみる。
なんかこう、サブカルチャー界ではお決まりのストーリー展開じゃん。
ついでにのちの和解とか統合でパワーアップも見込めたりすんだよこのイベント。
「あっはっは、バカだなぁ。人格交代も何も、ボクはとっくに君になってるし、君もとっくにボクになってるじゃない。ついでにパワーアップイベントも無いよ」
「なんだよ面白みねーな」
「初期チートと言って頂きたい」
「そんな稚拙設定、ハーメルンとかだと大目玉食らうんじゃないの？」
「それ以上はいけない」
やめて。最後だけ真顔になるのやめて。
「……でも、気になるんじゃないの？この草原は、僕と君の二人だけだ。
――だから時々、凄く寂しくなる」
さあああぁぁぁ、と良い匂いのする風が通り過ぎる。
「……いやあ、確かに『ずっと一緒だよ』なんて約束はしたけどさ。流石に人生跨いだら時効でしょ。……君が背負う必要なんてないし、その「寂しさ」はボクだけの物であるべきだよ」
なんか、凄い寂しい事をほざき始めるヤツに無言で裏拳を叩き込んだ。

――パキッ！

「ちょっ、ウッソここでも割れんの手首？ダメだろこういうシチュっつーか空間で割れたら」

「待って、痛い!!なにこれ痛いっ!?欠片が目に入ったっ!!なにこのヒドい攻撃スゴい痛いっ!!取って、取ってえぇっっ!?」

向こうは向こうで悲惨な事になってるし。

「ちくしょう、ヒドい、あんまりだ。訴訟も辞さないぞボクは……」

「許してヒヤシンス」

「ヒヤシンスやめぇーや！」

――あれ？僕ちょっと意識薄れて行ってない？

何というかそう、夢が終わって行くような感覚と言うか……

「え、ここでぇ!?復活イベントここでぇ!?ルチルさんどんなマジック使ったのマジで!?っつーかここでぇ!?」

「――あ、なんかもう時間なさそーだから巻きでお願いします。何か言いたい事あったらあと５秒くらいで」

「塩過ぎるっ!!結局ボクの目潰しただけじゃん何それっ!!ああ、クソ、えーっと、えーっと……

――もう来んなっ!!」

@　@　@

パチリと目を開ける。
『ボク』の目に飛び込んで来たのは、あまりにお世話になり過ぎて申し訳なくなるほど見慣れた医務室の天井だ。
視線を周りにずらせば、何やら片づけを行っている皆の姿。
メンツに先生も混じっているとか相当ですぜこれ。
ピンぼけた思考回路のままで、衝動的に口にする。
「……必ずしもお約束は出来ませんが、鋭意努力させて頂きます……」
「あ、フォス。意識が戻ったんですね」
ボクの呟きを真っ先に拾ったのはルチルだった。
「あー……なんか、愉快な夢見てた気がする……」
うんせっと体を起こして一息ついた。
全身オペの大手術だったらしい。服が制服ではなく、薄いガウンのような専用の物に

なっている。
　ジェードが血相変えて駆け寄ってきた。
「フォスっ!!……すまない、私は……私は……ッッ!!」
　あーあー、やっぱ変なトラウマ刻んじゃってるじゃんかよ。
　ちゃんと直して貰っている右手でジェードをヨスヨスしながらなるべく軽く言ってあげる。
「まぁまぁ、気にすんない。美人薄命ならぬ美人薄『体』はフォスフォフィライトさんの宿命なんじゃよ。ここンとこ毎日パキッてるしさ。最終的に治りゃあ良いんだよ治りゃあ」
「治すの私なんですがね、フォス」
「……今回ばかりは許してヒヤシンス」
「どっから出て来たんですかヒヤシンス」
　うーん、フォスさんとしては「パキッてる」というパワーワードが結構良く出来たと内心思っているのに、誰も突っ込んでくれないのが寂しいですぞ。やっぱネタは被せたらダメだな。
「――時にさ」
　傍に置いてあった、水の張った桶の中に入っている物に視線を向けた。

「何、この……なに？」

うねうねした何かが水の中に浸かっている。

何と言うか……喩えるなら、ピンク色のウミウシ？

ウミウシとして考えると結構でかい。少なく見積もっても全長３０ｃｍはあるぞこれ。

ダイヤが合図した。

「今よ。さん、はい」

『ごめんなさい』

ペコリ、とウミウシがお辞儀した。

「……はい？」

……え、ちょっと、何今の？意味分かんないんだけど。

超展開が続きすぎてちょっと思考回路がショート寸前なんですが。

そんなボクの混乱を背景に、なんか「すごい賢い！」「フォスよりかわいい！」とかいう歓声が聞こえてくる。おいちょっと待て、ボクより可愛いたァ聞き捨てならんぞコラ。

……いやいや、違う違う。ソコじゃないだろ。

「――あの、誰か状況説明！状況説明をお願いします！流石に訳が分かんない！」

あのさ！なんでさぁっ!!

――ウミウシが喋ってんだよ!!?

第05話「アドミラビリス」

事の推移を聞きました。

ボクはどうやら、でっかいカタツムリに食われたんだそうな。

すぐさまユークとジェードが動いてくれたんだけど、カタツムリは受けた攻撃をすべて溶かすと言うイエローテンパランスのごとき能力を展開。

剣身を柄まで消失させ、ボルツの硬質黒髪ブレードすら溶解せしめるその能力は宝石側をジリ貧に追い込んだ。

しかし、通常攻撃を封じられた時点でジェードが、ボクが食われる前に提示した「先生を叩き起こす」コマンドを実行し、先生の召喚に成功。

そこからは一瞬にして形勢逆転。

先生の遠距離攻撃オラオラ3ページ半ラッシュを全身に叩きこまれ、なんか変な汁をまき散らしながら海の中に押し込まれたそうな。

するとあら不思議。巨大カタツムリの中身が見る見るうちに縮み、最終的にピンクの大きなウミウシになりました、と。

所詮はナメクジの類だから潮水（＝塩）で縮むとは余裕があればすぐ解ったものを、ボクが真っ先に捕まったせいで無駄に消耗した――とはボルツの弁だそうな。

……んなわけねーだろアホボルツ。

ナメクジが塩で縮むのは浸透圧でナメクジ体内の水が排出されるからだ。

潮水も確かに多少排出は発生するだろうけど、良くて塩分濃度４０％だぞ。全長数メートル、体積数千リットルものナメクジ相手に、短時間でそこまで顕著な効果が出てたまるか。

ウミウシになったのは多分、浸透圧ではなく他の理由だ。

例えば……ニュアンス的には「脱皮」のような。

ともあれ、そっから先がてんやわんやだったそうだ。

カタツムリの殻の中は空っぽで、ボクの姿はどこにもない。

破片になって海底にバラまかれた形跡もない。

サイズ的に考えて、ウミウシの体内にいる訳も無い。

フォスは一体どこに行ったと騒ぎになったあたりで、このウミウシが「フォス」という言葉に反応しやがったのだ。

まさかまさかと思いながら、みんなの意見が一致する。

――世界初ッツッ！ウミウシに生まれ変わった宝石ッツッ!!

……何やってんの。
いや、みんなは良いけどさ。先生、あんたまで何やってんの。
なに？あんまり素直に「フォス」の呼びかけに反応するからちょっとガチで信じちゃった？
ボク泣いて良いですか。
救ってくれたのはシンシャだそうだ。
次の日の朝礼で訪れたシンシャが事の推移を聞いて事態を察し、頭の可哀相な人を見る目で先生を見てしまったそうで、先生がガチで落ち込んでいたとか。
泣ける。
……とは言え、確かに推理の為には前提知識が必要な事件だった。
殻持ちの生物には石を食べて殻を修復・強化する習性があるんだそうな。
砂浜の白い砂を食べている殻持ちは白い殻だし、崖の赤い砂を食べているものは赤い殻なんだと。
シンシャはこれを長年の夜の見回りから知っていたのだそうな。
ちなみにこの知識はボクも初めて知りました。勉強になります。
シンシャ君、ボクと一緒に博物誌やらない？
マジで誘ってみようかしら。

案の定、ボクはカタツムリの殻の一部になって薄荷色の模様を形成していたそうで。
後はみんなで殻を引き上げて、ボクの色をした模様を削り出しルチルがオペをして今に至ると。
しっかしまぁ、１００％信じたわけじゃないんだろうけど、それでもルチルまで引っかかるとはなぁ……
『――おまえ、愛されとるなー』
ウミウシがなんか言っている。
『姿形が変わっても、フォスであるならばそれで良い。生きていてくれるだけで嬉しい。元に戻す方法は根気よく探して行こう……そういう意見が多かったぞ』
「……」
『……一人、ひたすらにわしに謝るものがいた。緑色の生真面目な子じゃった。フォスがこうなったのは全部自分のせいだ。だから自分がこれからずっと、フォスの手足になる。思いつめた声でそう言われた……少し、いたたまれなかったよ』
「……」
ジェード……あのばか……
もし戻ってこれなかったらと思うとゾッとするよ。
さっきだってひたすら謝られたからな。事の推移を聞いている途中も謝られた。

これ、本当に嫌なトラウマになってるな……夜辺り、ジェードの部屋に行ってみるかぁ。

……何回目だよ。カウンセリングの真似事をやるのは……

「……そんで？」

『うん？』

「なんでボクだけ、王サマの声が聞こえるようになっちゃってるんだ？」

『まあ、普通に考えておまえを食べちゃったからじゃない？いやあびっくり、こんなことってあるんだね』

事の元凶のくせに、すげぇ暢気しやがってんのがムカつく。

てめぇのせいで完全に治ってないんじゃないかとめがっさ疑われたんだぞボクは。

食べられた恐怖でノイローゼになったんじゃないかってジェードがオロオロしてたしさ。

一応、目隠ししたままジャンケンして相手の手をコイツに申告してもらう方法で「聞こえている」事を証明したけどさ。

まあ、事情聴取はしやすかったからね。

そこだけは良かったと思うわ。

――こいつの名前はウェントリコスス。

ここの近海に棲んでいるアドミラビリス族の王なんだそうな。
美しい殻を持つアドミラビリス族は、それ故に月人に根こそぎ連れていかれ、月の甘い水と砂によって肥大化し、思考能力を奪われ養殖にされていたそうな。
ボクを食べたのはただの本能。蒙昧とした思考の中で、なんか色が美味しそうな奴を見つけたのでつい反射的に、と供述している。
現在のウミウシ状態が本来の姿であり、小さくなって思考能力も元に戻ったそうだ。
ちなみにこの状態だと、潮水に浸かっても縮まない。
……月の砂と水は地球の海と相性が悪いって事なのかね？
「――貝の王よ。私達と有り様は異なれど、貝もまた宝石のひとつ。歓迎いたします」
一連の境遇を聞いて先生が出した答えがそれだった。
とりあえず、唯一王サマの言葉がわかるボクが常に側にいて通訳することになる。
博物誌の一貫としてアドミラビリスの生態を研究すると言う名目もついている。
ボクとしてもその点に異存はない。
――ただ。
先生にはその気は全く無いのだろうけれど、ボクは研究の他にもうひとつ役目を任されたのだと理解している。

@　@　@

『しっかしまあ、かわいこちゃんばっかじゃのーこの国！眼福眼福』

宝石たちを見る度にひゅーひゅーと愛想振り撒いているそのザマは、王サマっつーかオヤジまんまだ。

ちなみに先生にも「良い男」とかほざいてハートマーク撒き散らしてたのよねコイツ。

「可愛い子筆頭のボクが側についてるんだから、もうちょっと自重しなさいよアンタ」

『うーん、わしこう見えてちょっとツンとした子がタイプ。あの黒髪のながーい子とか、赤くて銀色の球を浮かべてる子とかが好き』

「ゼータクなウミウシだな。その二人が王サマの声聞こえてたら、瞬く間に殺されちゃうよ？」

みじん切りと串刺し圧殺、死に方としてはどっちがマシなのかね。

あーそう言えばコイツ、女神にも色目使ってたな。もう棺桶に片足突っ込んでるじゃん。

ボルツにチクられてないあたり、ボクの慈悲っぷりに涙して五体投地して欲しいわ。

『黒髪の方もそうだが、あの赤い子は特に纏う空気が違ったのう。おまえが殻になっていたことも間を置かずに見抜いて見せたし。――あの子が浮かべてる銀色の球ってア

レ、なんじゃ？』

……。

……まあ、いいか。

「水銀って言う液体でね。シンシャは生来、アレが体から滲み出てくる特異体質なんだよ。滲み出てくるのを抑える事が出来ないから、滲み出た液体の方をああやって球にする事で制御してんの。

――下手なことして怒らすなよー？アレは矛にも鎧にも形を変える事が出来る上に毒性も持ってる。カタツムリの時に対応したのが先生じゃなくシンシャだったら、王サマ既に召されてるからね」

『わお、トゲがあるトコもワイルドで素敵。――でも怒らす以前に朝礼の一回しか会えて無いのう……』

……そう言えば、アマルガム計画についてボルツの返答貰ってないな。

返事貰うよりからかう方に意識行っちゃった上に月人二連発とモグモグごっくんだし。

後でもう一回会っとかないとなぁ。

今回の件で前々から立ててた仮説の裏付けに近い事象が起こってるし、もーやる事山ほどあるわ。

なんだ、一日ダウンしただけで仕事が積まれて行くって社畜リーマンか何かかボクは。

ふうっとため息をついて視線をずらした。

「……いーよールチル。くっだらない雑談しかしてないから」

「――そうですか？では、失礼して」

ボクらに気を使ってタイミングを見計らっていたルチルが、ボクの隣に腰を降ろす。

「インクルージョンについてでしょ？ウミウシの消化にも耐えちゃったし、なんか言語機能が追加されてるし」

『そろそろアドミラビリスって呼んでくれんか？』

ヤだよ長いし。

「そちらも興味深いですけどね……まずは、あなたの事かな、と」

「……うん？」

想定と違う状況に視線を向けると、ルチルがけっこう真剣な目でボクの事を見ている。

「――体に違和感はありませんか？……何か、思い出せないことは？」

「ああ……問題ないよルチル。いつも通りパーフェクトな仕事ぶりありがとう」

ボクたち宝石は群体でひとつの個を形成している。

無機物で形成された体の中には無数の微少生物（インクルージョン）がいて、それらがボクたちを動かし、ボクたちに知性を与えてくれている。
つまり、インクルージョンの喪失は知性、ないしは記憶の喪失に他ならないのだ。
――今まで生きて３００年、毎日のようにどっか割れてるボクだけど、日頃の行いが良いのか神様にも愛されちゃってるのか、喪失を経験した事はなかったのよね。
「今回は流石に勝手が違いますから……どんな影響が潜んでいるか判りません」
「と、言われてもね。少なくとも自覚症状はないなぁ。記憶も思考もちゃんと動いてるし体に違和感もない。
――イヤ、唯一王サマとおしゃべり出来る事が後遺症っちゃあ後遺症か」
気を揉んでもしょうがないじゃない。
ケ・セラ・セラ。なんかあったらその時に考えましょ？
そう言って肩をポンポン叩くボクが相当楽天的に見えたらしく、ルチルは頭を抱えてしまった。
「……あなたはどうも、自分の体に対して頓着が無さすぎると思います」
『あ、それわしも思った。無意識とはいえ自分を食った相手に警戒無さすぎるし、ジェードに対してもあっさりしすぎてないか？不老不死だとみんなそうなるのか？』
「いやいや、常日頃からパキッてるからある種の悟りを開いてるだけだよ。警戒だって

大丈夫、ちゃんとしてるしてる」
『軽すぎる……ッ！』
そりゃ、軽く喋ってるしねぇー。
実際問題、前例無さすぎるんだから仕方ねーべよ。
それに、所詮自分事だし？他人事より気を使わなくても良いから楽なもんさぁ。
「――後で身体測定はさせて頂きますからね」
「ああ、うん、了解。もしかしたら体積増えてるかもだしね」
『……？なんでじゃ？成長はせんのだろう、おまえたちは』
「王サマとおしゃべり出来る事に理由をつけるとそーなるんだよ。ボクたちはインクルージョンでモノを考えているから、既存機能据え置きのまま言語野が増えたのなら、その分のインクルージョンを追加で取り込んでいる筈じゃない？なら、その分体積は増えるってぇロジックよ」
『……！な、なるほど……！』
実際、どうなのかねぇー？一体どういう奇跡が連鎖して今の状況になったのかワケわかんない。
もしかしたら王サマの貝殻を粉にして飲んだりすれば、みんなお話しできるようになったりするのかな？

『しかし、それが正しかったとしたら……わしにも棲んでることになるのか、インクルージョンが……？』
「ボクたちはこの近海から生まれて緒の浜に流れ着いてるからね。その近辺で生活してたのなら、可能性はあるんじゃない？」
『――なるほどな』
「……？」
何か納得したように、王サマが呟いた。
『……わしの故郷の事を思い出したよ。海にはな、おまえたちに良く似た姿形の者がおる』
「……海に、ボクたちに似た生き物が……？それって、ボクたちみたいに動く鉱物、ってこと？」
側にいるルチルにも内容が解るように、王サマの言葉を反芻した。
ルチルに軽く目配せする。
『いいや、純粋に姿形がって意味じゃ。無機物じゃない。わしらみたいにプニプニでプリチーだぞ』
「肉で出来た、ボクたちと似た姿の生物……」
……それはつまり……「人間」って事……？

王サマが、なんか不敵に笑ったような気がした。
『――面白い話を聞かせてくれた礼じゃ。わしらの故郷に伝わる伝説を話してやろう』
アドミラビリスに伝わる伝説は、ボクらのルーツを考えるにはとても興味深いものだった。

@　@　@

――この星にはかつて「にんげん」と言う動物がいたと言う。
この星が五度欠けた時までは陸にしぶとく生き残っていた。
しかし六度目にはついに海に入り、『魂』と『肉』と『骨』――この3つに別れたと言う。
『肉』となった者たちは、海の中で生殖と死を細やかに繰り返しながら、知を重ね紡ぐ特性を受け継いで行った。
一方『骨』となった者たちは、他の生物と契約し、長い時を渡る術を身に付け陸に戻って行った。
そして『魂』となった者たちは、ついに清らかな新天地を得、再興の為に肉と骨を取り戻すべく彷徨っていると言う――

@　@　@

「――以上、ウェントリコスス王から聞いた、かの地に残る伝説です」
会議室の全員が固まっていた。
当然だ。この伝説はボクらの成り立ちに似過ぎている。
そしてボクらが学んできた成り立ちにはない部分が補完されている。
『肉』はボクたちに似ていると言う海の者たち。
『骨』はボクたち宝石生物。
そして『魂』は……月から来る、あの人攫いだ。
――ボクの頭の上で王が言う。
『金剛さん、寡黙クール系だと思ったらあんな表情も出来るのね。ビックリした顔もギャップがあって素敵』
黙れこのウミウシ。人の頭の上でサカってんじゃねぇよ。
「じゃあ、月人は……人間に戻る為に、私たちを攫っていると言う事か……？」
ジェードの言葉を聞いて、ハートマークまき散らしていた王様がピタッと止まる。
『……わからぬ。これはあくまで伝説だからの、字づら通りにはなるまいて。

……ただ、月に居た時に感じたのは――つくづく月人が何を考えているのか不気味で不可解だと言う事だ。月人は敵もいないのに争う事を好み、満足する事が無い。なんとなくだが……理由なきあの焦り様は、にんげんがそういう生き物だったのかもしれぬ……とな』

王サマの言葉を皆に伝えながらも、ボクは少しだけ耳の痛さを感じていた。

敵もいないのに争う事を好む。理由なく焦りながら生きている……なるほど、違う種から見れば、人間と言う奴はそんな哀れな生き物に見えるのかもしれない。

ならば月人は、最も人間に近い物たちなのだ。

強欲で、自分たち以外の種には無頓着で、ボクたちを攫う事にもなんら抵抗が無い。

ああ――確かに奴らは『人間』だよ。

「――私たちは……」

先生が口を開いた。

「私たちはもしかしたら、人間の骨から進化したかもしれないが……既に考える知性と心を持っている以上、今更人間に戻る事が出来るとは到底思えない。海に住むと言う肉の者も同じだろう」

チラリとボクの方に視線を向ける。

……そう、あるいはボクこそが、月人が望む魂と骨の融合した姿なのかもしれないけ

れど。

「月人が争い続け、欲望に焦り続ける種と言うのならば……私たちは、よほど好ましく進化したと言う事ではないだろうか。――ならば私たちは、月人のように奪い争うのではなく、手を取り合い言葉を交わす事で共に進化する道を歩みたい。

……ウェントリコスス王よ。あなた達アドミラビリス族とも勿論ながら……海に住まう『肉』の者たちとも、私たちは友好な関係を築きたい」

先生がまっすぐ王様を見据える。

『金剛さん……それは――

――わしと、付き合ってくれるって事で良いですか？』

……。

……。

……むんずっ。

「さあ九回裏ツーアウトランナー満塁の崖っぷち、ピッチャーフォスフォフィライト慎重に握りを確認しております。セットポジションについて運命の第一球、大きく大きく振りかぶった――ッッ!!」

「フォス!?フォス!?」
『待って待って争ってる!今まさに奪い争ってる!!』
「黙れ色ボケウミウシ王!この局面でシリアスブレイクとかボクでもやらないぞッッ!?」
『アアンごめんなさい!!だってだって金剛様凄いカッコ良かったんだもの!』
「るっさいわ!!翻訳するボクへの嫌がらせか!?」
どうどうと宥められながらダイヤに羽交い絞めにされました。
チックショウ、今回はボク悪くないぞ!絶対ボクは悪くないぞ!
グダグダした中でダイヤを避難場所に選んだらしく、『ああんあの人いきなり怒り出して怖いわぁ』と媚び売りながらダイヤに飛びつく色ボケ王である。
――よし殺れボルツ!その剣を抜き放て!ボクが許す!
『――友好を結べるかどうかまでは何とも言えぬよ。互いに顔を突き合わせ、互いに努力を行ってからこそ初めて論じれるモンだと思わんか?』
「ああ!?」
ダイヤの頭の上にうまい事収まって、ヤツがボクに向き直る。
『――案内ぐらいならしようじゃないか。ドキドキワクワク、わしの故郷へおいでませ海のお散歩ツアーじゃ。愛くるしいガイドじゃろ?

――友好を結ぶに足る者かどうか……その目と耳で確かめるがよい』

第06話「海」

夜の浜辺をクラゲのランプで照らして歩く。
ぼんやり照らされる砂の絨毯は、良く見ると貝や蟹が埋まっている。
寄せては返す波の境界線には、海草や珊瑚の欠片が流れ着いていることもある。
夜にランプ程度の明かりではあまり良く解らなくて、さっきからしゃがみこんで観察すること数回。
なるほど、見当たる貝殻の殆どが砂と同じ色をしているなあ、と感心したりもした。
「――お前、こんな時間に何してるんだよ……」
呆れたような顔をしたシンシャがいる。
「シンシャと話したくてさ。ついでに博物誌書く為の観察、かな」
特にメモってはいないけどね。
おねむの所をつまみあげていた白い貝殻を、砂の中にそっと戻して立ち上がる。
「ろくにお礼も言えなかったしさ」
「――お礼の件も朝礼に出れていなかった理由も、ルチルから聞いてるよ。……王サマ

とやらは良いのか？」
「おねむしてるよ。だからこそ、ボクがシンシャと話せるのはこの時間しかないって気づいたんだ」
　王サマ担当のボクは、だからこそ朝礼には参加できない。防衛計画のすり合わせが毎回行われる朝礼は普通に考えて機密事項だしね。
　先生は別に参加しても構わないってスタンスみたいだけれど、流石にジェード、ルチル、ボク、おまけに王サマ自身にも反対されたので考えを改めてくれた。
　これは王サマへの信用ではなく、情報取り扱い者としての意識の問題だ。
　……でもそのおかげで、シンシャが気を揉む事になってしまって申し訳ないと思ってる。
　朝礼に参加してくれるようにお願いしたボクが参加できない事態になるなんて、全然想定してなかった。
「改めて、助けてくれてありがとうねシンシャ。――あのまま戻れなかったと思うと、ちょっと色々ゾッとするよ」
「……別に。今回は本当に『口を出しただけ』で大した事はしていない。……いつものお前と、同じ事をしただけだ」
　そっぽを向いてシンシャが呟いた。

『口を出しただけ』……か。

いつもお礼を言われたボクが言うセリフだけど――それでも、当事者になってみると嬉しい事だったんだなぁって思う。

「今日も変わらずツンデレだなぁ」

「……なに言ってるか判らないが、ロクでもない事喋ってるってのぐらいは判るぞ」

あ、『ツンデレ』を博物誌に記載してシンシャに見せると言うプレイは凄く楽しめるのではなかろうか。

……悟られたのか、怪訝な目で睨み付けられました。

「あー……まず、朗報を。アマルガム計画のメンバー全員、参加の意思を確認出来たよ。つまり、計画スタートが決定した」

「!……そ、そうか……。いよいよ、始まるんだな」

シンシャがメインになる大プロジェクトだ。

今までの水銀に対するあれこれがプレッシャーになっているのか、若干緊張の固さが見える。

「……で、少しだけ悪い知らせが。直ぐの開始がなくなった。状況によるけど、説明会がちょっと伸びる」

「今の、現状の事だな。博物誌で伸びるのは考えにくいから……王サマの件か？」

「うん――ごめん」
「別に……フォスのせいじゃ無い。誰が悪いって訳でもないけれど。
　――ただ気になるのは、並行作業も出来なくなるほど優先度が高く重要な案件を、恐らく王サマが持ってきたって事だろう？何があったんだ？」
　ああ、シンシャは察しが良くて話が早いわ。
　そして残念な気持ちを顔に出さないようにしているのとかスゴい健気。
「……その件でちょっと相談したかったんだ。アドミラビリスの住む地に伝わる伝説があるらしいんだけどさ……」
　ボクは会議室であった事をひとつひとつシンシャに話していった。
　魂と肉と骨の話。月人の目的の話。
　海にいると言う、ボクらに似た姿の肉を持つ者の話。
　――そして、王サマの故郷へ行く話。
　最後の辺りで、シンシャの眉が歪んだ。
「月人が故意に落としたヤツの言に乗って、未知の海に行く……のか？」
「そうだよね！やっぱそこ気になるよね!?そこだけ切り取ったら普通に罠だよね!?
　……だからボク、王様と二人の時に聞いてみたんだよ。その『肉の者』とアドミラビリスってどんな関係なの、って」

「なんて答えた？」
「サプライズじゃ、行けば分かる。度肝を抜くぞ……だってさ」
「真っ黒じゃないか」
「そーなんだよ」
でも、話自体無視する訳にはいかない内容なんだよね。
即興で考えたにしては筋が通ってるから、多分ある程度真実が混じってる。
その真偽確認の為だけにリスクを冒すとしても価値のある案件だと思う。
重要なのはこれが罠であった場合、その事実がそのまま大成果に繋がると言う事だ。
なぜって、この件に月人が絡んでいるのなら、それは月人とコンタクトをとる方法があると言う事の証明に繋がるのだから。
うまくいけばそこから月人の目的を探ったり交渉したりと言った領域に踏み込むことが出来る。
数千年、数万年と変わらず続いてきた『誘拐犯と撃退者』と言う意味の無いサイクルを終わらせる事が出来るかもしれない。
「……つまり、罠前提で挑む訳か」
「そうなる。で、海に行くメンバーを検討中。ボク個人としては……シンシャに来て欲しかった、んだけども」

「お、俺は無理だ！海なんて、そんな……毒液をまき散らしてしまう」
「はい、察しておりました……」
今ではかなり上達している水銀制御も海の中でどうなるかは未知数だ。絶対拒否が来る事は分かってた。
それに多分、無敵の月霊髄液も海の中では通常通り運用する事は困難だろう。
そんなわけで、一応今考えている編成をシンシャに伝えてみる。
「――ッ!?そうか、その手があったか！名目も立ちやすい。良い人選じゃないか」
「いえ。足りないのです……」
「足りない？何が？」
「頭脳役」
うちのメンバー、なんと言うかこう、戦闘力と頭脳が両立している奴がシンシャぐらいしかいないんだよなぁ。
って言うか頭の回転と硬度（≒戦闘能力）の値が反比例しているように思えて仕方がない。
ボルツなんてあれ、戦闘力はあってもほぼバーサーカーだぞ。ＦＧＯとかに参戦したら絶対バーサーカーだ。
ダイヤは器用だから戦略計画も学べば高水準で纏まってくれるとは思うけど、現時点

では経験はない。
ジェードは頼もしいけど頭固めだから、多分搦手に対応出来ず、単体では頭脳役には一歩届かない。
最適解はシンシャだけど海と言うフィールドが邪魔だ。
ユークに劈開が無ければ、もしくはある程度戦闘も務める事が出来たって言うラピス・ラズリが今も残存していてくれれば喜んでメンバーに入れたのにぃっ！
「必要ない」
シンシャがそう切って捨てた。
え？っと視線を向けてみれば、まっすぐ伸ばした人差し指をボクの額に突き付けている。
――なにを示しているのか、解かってしまうのが嫌だ。
「……いやぁ。いやいやいやいや。いやいやいやいやいやいやいやいやいや」
「適任じゃないか。どうせ参加は確定してるんだろ」
「そぉだけどぉ！ボクには荷が重すぎるってぇ!!
たまに何て呼ばれるか知ってる？『アフォス』だよ!?アホとフォスで『アフォス』だよ!?さらにレベルアップすると『アフォスぎ』になるんだよ!?ちょっとウマいとか思っちゃうんだよ!?」

「言い切って良いけど、」
　突き付けた指を下ろしながらシンシャが言う。
「フォスが出したメンバーの中で、罠前提で考えているのは恐らくフォスしかいないだろう。先生だって、純粋に『肉の者』とのコンタクトしか考えていない筈だ」
「う……それは……そうかもしれないケド……」
「前、言ってたな。計画の事を話してくれた時――自分は結構思いつきの猪突猛進タイプだって。俺はそうは思わない。……確かに、思い付きで行動する面もあるとは思う。だけどそれ以上に、お前は色んな事を考えてると思う。
　毒液の事が無くても俺を計画に誘ってた、って言ってくれたな……俺も同じ事を返すよ。
　――俺がそのメンバーを検討するのであれば、フォスフォフィライトの名は絶対に入れる」
　うっく、と声が詰まった。
　シンシャが真剣に、ボクの目を見てそう言っている。
「……そ、ぅ、かな……？」
「出来るさ。――そもそも、今回は最低限行って戻って来れれば大成功なんだろう？『肉の者』との友好、開拓。月人の情報、ともすれば交渉や月への航路開拓か？――確か

にチャンスはかなりあるだろうけど、所詮付加価値に過ぎない。行って戻る、さえ出来れば付加価値なんてなくとも十分過ぎる」

「……」

そうだ。

だからこそ、海に行く事を決めたんだ。

「――気負い過ぎなくていい。これが最後のチャンスかも知れなくとも、知ったことか。みんなそう言う。先生も、ルチルも……俺だって。ちゃんと、戻って来てくれれば良い」

「シンシャ……」

視線を逸らしてそっぽ向きながら、それでもシンシャはそう言ってくれた。

――ランプの明かりにぼんやり照らされるシンシャの顔は、心なしか赤く染まっている気がした。

「……うん。ありがとう。やっぱりシンシャと話せてよかった。

――やってみるよ」

覚悟は決まった。

シンシャが小さく、「……気を付けて」と激励してくれた。

@　@　@

「――約束！この一回こっきりだけだからね！」
未完成な上にそもそもジャストサイズじゃないんだから！とプロの不満を並べるレッドさんです。
レッドの言うジャストサイズの意味がボクにはわからない。普通に着れるんだけどなぁ……この防護服。
防護服の目的は海中の危険から身を護るため……ではなく。
砕けてもバラバラに飛び散らないように、つなぎのようなワンピースタイプの服を要求した為だ。
条件に合う服を聞いたら、以前作っていたと言う対シンシャの毒液用防護服が該当したなんてすごい偶然。
「うん、わかってる。ありがとうレッド」
体をねじって動きを確認。
……なんてーか、普通に良く出来てるなこの防護服。
仕組み上、前をボタンで止める必要があり、何らかの作業で引っ掛ける可能性がある事が弱点っちゃあ弱点か。ファスナー作る技術はないから仕方ないけど。

「フォス～、本当に持ってくつもり～？備えが必要って言うのは判るけど、海の中だよ辛いと思うよ～？」
「私もその点は不安だが……出来る事はやっておきたいと言われてはな……」
ボクの代わりに先生が答える。
オブシディアンから受け取ったのは、彼が作った中で一番軽い剣だ。
例え一番軽くても、受け取ってみるとズシリと重い。
少しだけ抜くと、黒く輝く刀身にボクの顔が映った。
――このぐらいならいけるかな、と思う。
「使う機会がないなら一番良いんだけどね。未知の場所に行くなら、守ってばかりでもなお手が足りない時を想定しておきたくて……さ」
腰に差しながらテクテク離れる。
長さも重さも、一番軽いというこの剣がボクにはちょうどピッタリのようだった。
『かつてのボク』をイメージしつつ、ゆっくり吸って、そっと吐く。
「――フッツ!!」
抜刀。
シュピッ、と黒い刀身が空気を裂いた。
柄を正中線に置いたまま足を引いて体を開けば、隙無く刹那に剣は抜ける。

――抜き即斬。
そして一歩踏み込み、腰と胸の力を使って斬り上げ、間髪入れずに袈裟斬り。
手の内は斬る瞬間に小指から順に締めれば、刃の重さと鋭さで綺麗に斬れる。
「――疾ッツ!!」
下がりながら左右に斬り返し。
……腰の辺りがピキリと鳴いたけどまだ大丈夫。
腕で振ったら腕の付け根が割れそうな我が身の脆さが目に染みる。
体が悲鳴をあげたので、最後に正眼に構えて終わりにしておく。
ゆっくり呼吸して残心。
そのまま剣を回して納刀――ツッ!?
「――どわっとぉっ!?」
後ろから袈裟気味に飛来した黒い剣閃に対して反射的に抜刀した。
ギャリリリリリッツ!!と音を立てて、その一撃を受け流す。
やべっ、体勢とタイミングが悪い、体勢が、たi「パキンツ!」――あふん。
「……ほう。寸止めしてやるつもりだったが、しっかり反応してくれるんだな」
こういう真似する奴は一人しかいない。
「ボ、ボルツさん……弱い者イジメはカッコ悪いとフォスさんは思うんですが……」

「しっかり反応した上に完璧に受け流しておいて弱い者イジメとは心外だ。半端に剣を握るぐらいなら持たない方が良いと思っていたが……なるほど、最低限一手稼ぐだけの技量はあるみたいだな」

それ確かめる為に死角から袈裟切りとかちょっとボルツさん厳しスギィッ！

「ボルツ。意図は解るが……今のは少し危な過ぎる。以後、控えなさい」

「……はい、先生。すみません」

先生に頭を撫でられると途端にしおらしくなるボルツである。

でもね。謝る先は先生じゃなくてボクだとフォスさんは思うんですけどもね？

「フォス。今のはもしかして、イアイ＝ドーとか呼ばれる技か？鞘中にて相手を牽制すると言う……」

「え？……あ、はい。ボクのはある意味で我流ですけども」

「ふむ。……オブシディアン、片刃で三日月状に反っている剣はあるだろうか？」

「ええ？う～ん、さすがにそんなヘンテコな剣は作ってないですね～」

「あ、刀身短めだからこのぐらいなら直剣でも大丈夫です。無理に刀に仕立てなくても取り回せます」

何度か振ったら体がバラバラになりそうだけど、は言わなかった。

っつーか、アホボルツのせいで腰が既にお亡くなりになってるんですけども。今ボク

の上半身、『乗ってるだけ』になってるんですけども。
「――すまなかった、フォス。どこかでお前を見くびっていたのかもしれない。剣を持つ事を許可しよう。今回は間に合わないが、後でオブシディアンと相談して、お前に合った剣を作って貰いなさい」
そう言って先生の手が優しくボクの頭に置かれ……
「――あ、」
ガシャン、と今日のノルマを達成してしまうのでありました。
――ちなみに、帯刀許可は2秒で取り下げになりました。
今回の遠征時もダメだってさ。
……ボルツめぇ……ッ！

@　@　@

『宝石の体だと、色々準備がいるんじゃなぁ』
耐塩樹脂をペタペタ塗るボクの隣で王サマが感心するような声を上げる。
「ボクらの今見えている肌の色は白粉の色だからね。このまま海にはいると白粉が流れてスゴい姿になっちゃうんだよ」

『ありのままで、じゃイカンのか？』
「宝石の反射率や屈折率舐めちゃダメよ？そのままだとどこが目でどこが鼻か判んなくなるんだから。自分自身でもキラキラしすぎて前が見にくくなる」
『難儀な体じゃなぁ』
「その点については同意かなぁ。潮水もあまり良くないし、そうでなくとも毎日割れるし」
『それお前だけな』
　このウミウシめ、余計な知恵をつけやがる。
「王サマの故郷って、どんな所？」
『うん？……そうさなぁ……』
　王サマ用の器の中で物憂げに延びをした。
『当然ながら景色の様相が陸とは大分違う。わしの故郷に限らんが、朝日の差した水面が波で揺れる様はたいそう綺麗でな。お前の髪もいい線いっとるが、あの景色には負けるな』
「なにおーぅ？」
『はっはっは。……海には木々の代わりに珊瑚と呼ばれる石灰質の木が生えていてな。これもまた色鮮やかで、群生した珊瑚の森林に光が差し込んでいる景色など圧巻の一言

だ。

　残念ながらルートがズレるので今回は見ることは出来んが』

「へぇー……魚はいるの？ボクなんだかんだ言って、海を泳ぐものはクラゲしか見たことが無いんだ」

『おるぞ。ときどき群れを作った者達が、頭上を横切って行くのを見る。意思の交わせない下等な者たちであるが、その姿は美しい』

「おおぉー……」

　遥か昔にテレビで見た、スキューバダイビングの様相そのままが王サマの口から語られてる。

　隕石墜落×６と言うイジメもかくやな環境破壊を受けてどうなってるんだろうと思ってたけど、どうやら宇宙船地球号は思った以上にタフだったようだ。

『――ただな』

　王サマが寂しそうに口にする。

『それは月人に我々が蹂躙される前の話じゃ。……きっと、美しい物は荒らされ、奪われているのだろうと思う。今の姿はわしにも解らぬ。

　――本当はな。海に肉の者がいると言うのは嘘ではないが……故郷の姿を見ておきたかったんじゃ。

二度と戻れぬ覚悟はしたが、かつての海がそこにあると解ってしまえば、どうにもなぁ……』

荒らされているのだろう。

かつての姿は残っていないのだろう。

きっと、絶望しか無いのだろう。

――それでも、故郷に帰りたい。

弱々しくそう口にする王サマの言葉が耳に残る。

寿命があるからこそ、それが終わらないうちにと言う王サマの気持ちは、すんなり汲み取ることが出来た。

……この渇望に、きっと嘘はないから。

『……すまん。苦労を掛ける』

きっと色んな意味が込められているその言葉に、ボクも色んな意味を込めてこう返した。

「いいさ。ボクと王サマの仲だもの」

――きっと、互いに気付いている。

@　@　@

皆が見送りに来てくれていた。
その見送りの中に、遠巻きに此方を眺めるシンシャもいる。
その姿に向かって親指を立てると、照れ臭そうにそっぽを向くのだ。
――留守の事は任せてあった。シンシャなら、信頼できる。
警戒シフトも特殊なものだ。
学校周辺に見張りを限定し、月人にはボルツとシンシャの二人がそれぞれ警戒の輪を作る。
新型旧型含め、これを抜けられる月人はちょっと考えられない。
「留守中は苦労を掛けるが――任せたぞ」
「はい。ご武運をお祈りしています」
「ユークレース。負担を掛けてしまうが、後を頼む」
「大丈夫。安心して行ってきて！」
王サマの入った容器をしっかり持って、海を臨む。
『まさか彼が一緒に来てくれるなんて、わし今から超楽しみ』
「道中ナンパな事ばかり通訳させないでよね、王サマ！」
「ではウェントリコスス王。此度はよろしくお願いいたします」

「よ、よろしくお願いいたします！」
『あ、ちなみにわしのエスコートは金剛サマがやってくれるとさらにテンション上がったりするんだけど、どお？』
「……こちらこそ、よろしくお願いします。よき旅にしましょうとおっしゃっています」
『ヘイッツ!?』
始まる前から頭痛を覚えたりもするけれど。
金剛先生。
ジェード。
そしてボク、フォスフォフィライト。
「行きますか。博物誌の1ページじゃない——これは、歴史の1ページだ」
——海へ、挑みます。

第０７話「ウェントリコスス」

波は思っていた以上に穏やかだった。
初めて入った海の底は、ほのかに碧がかった紺色をしていた。
青白く光るクラゲが、透明のスカートをたなびかせて、ゆったり波の中を漂っている。
上を見れば波の形に区切られた日の出の光が差し込んで、幾重もの光の筋を海底に届けていた。
サンゴの木の中から、小指ほどの大きさをした銀色の魚が何匹も群れになって飛び出した。
海底に届いた光の筋を、その体全部を使ってキラキラと纏っている。
「う、はぁ……」
――声に出したのは、誰だったか。
この光景を見ただけで価値があると思えるほどに美しい景色だった。
はっ、と我に帰る。
「や、やるじゃねぇか……ボクの次ぐらいには」

自分でも解るような負け惜しみを口にしてしまった。

『はっはっは、奇麗じゃろ？わしの好きな景色も』

「ええい、このフォスフォフィライト、宝石史上最も美麗な容姿を持つ者。ボク以上の美しさをそう簡単に認める訳には……ッ！」

「何言ってるんだお前。頼むからこの大事な時にアフォスを表に出さないでくれ」

「身内の対応が塩過ぎるッ!?」

戦争なんじゃよ!?このウミウシ、事欠いてボクより奇麗とか言っていたから、これも戦争なんじゃよ!?

「海は――広く、大きく、美しいが、その分だけ危険も身近にある場所だ。はしゃぐのも解るが、注意しなさい」

「……ふぁい」

先生に頭ヨスヨスされたでござる。

この余裕。流石大人の男は格が違った。

「今更ですけど、先生……その格好で大丈夫ですか？ボクの防護服やジェードの制服は布の数が少ない方ですから十分動けますけど……先生のは直綴（じきとつ）に五条袈裟そのままでしょ？」

しかも下は切袴（きりばかま）である。

何を言ってるか解らない人は「直綴」で画像検索しよう。きっと部位名とかが入った画像が出てくる。

いやボクだって最初からこんなコアな知識あった訳じゃないのよ？

法衣の名前はちゃんと先生が知っていたので、そこから服飾担当のレッド経由でボクにも届きました。

ンでこの衣装、布がものっそ使われているので、あったかそうだけどそれ以上に動き難そうなのである。

そんな状態で波のある海の中ってあーた……

「問題はない。我々は肉の者との国交を築きに行くのだから、極力正装で赴かねば。……それに、動作にもそれほど支障はない」

すっと右手を前に伸ばし、おなじみの「破ァッ！」の動作をゆるりと行う金剛先生。

頼もし過ぎるわ。

王サマなんか、その姿を見て『キャーっ！素敵っ！抱いて!!』とハートマークを撒き散らしておられる。

抱いてっておめえ、もしそう言う機能がボクらにあったとして、このサイズ差じゃおめえなんてオナホだぞオナホ。

「――フォス、王が何か仰っているようだが、なんと？」

「……凛々しく荘厳なそのお姿、一国の王として感服いたします、と」
「はは、それは照れますな。誠に恐縮です」
――なんでボクが気い使ってこんなフィルターかましてあげなきゃならんのよ!?
いっそそのまま通訳して色んなもんをブレイクさせたろか!?
『やっぱええのぉーイイ男って。目の保養じゃのぉー』
ヤロウ……ボクしか言葉が分からないからってまるで実家のように寛いでいやがる。
「……ねえ、王サマ。ボクらの住む砂浜の近海って言ってたけどさ。具体的にどれぐらいかかるの?」
意訳すると、ボクはこのある筈がないのにキリキリしてる気がする胃痛をどんだけ抱えていれば良いんですか、となる訳だけど。
『ふむ。言ったとおり、それほどかからん。距離としては……目の良い物なら、あの砂浜から見る事が出来る程度の距離じゃな』
「――へえ?」
反射的に後ろを向く。
ボクらの住んで居る砂浜が、まだくっきりと見える。
「ボクらの国から見える距離に住んでるんだって」
「ほう。それはそれは……今まで気づかなかったのが不覚です」

『海の中じゃからの、致し方ない。……しかしわしらは、骨の者の存在には気づいておった』

やっとそのまま訳せる言葉が来た。

今度はフィルタを掛けずにそのまま先生たちに伝える。

『魂・肉・骨……その伝説は古くから、わしらの中で語り継がれておった。……一度コンタクトを取ろうとした代もあったようだが、言葉の壁があった為、特に何も起きずに終わった事もあったと聞く』

「――だ、そうですが……変わった事ありました？」

しばし先生が拳を口元に当てて考え込んでいた。

何も思い出せなかったようで、軽く首を振っている。

「……いや、申し訳ない。私たちは完全に認識していない事柄だったようです」

『無理もないの。わしらとお前たちでは住む場所もサイズも違う……此度のような事がまず、奇跡に等しい事なのじゃろう』

たまたま王サマが学校に来て、たまたま言葉が通じる事態になって、たまたまそれをみんなが信じて、たまたま伝説が合致し、国交を結ぼうと思えるようになって……

なるほど、この状況はまさに奇跡だ。

「――改めて、この巡り会わせに感謝します」

『わしもじゃ。――特に……』
「――超絶美形で頭も良いパーフェクトアイドルフォスフォフィライトちゃんと出会えた事はまさに史上の喜びである、と」
『ヘイ、ちゃんと訳せアフォス』
「おい、ちゃんと訳せアフォス」
「こら、ちゃんと訳しなさいア……ん〝ん〝っ、フォス」
「先生ッツ!?」
ちょっと待って今とんでもない暴挙が顔をもたげた気がしたんですが!?
オイこっち向けよロンズデーライト、目を逸らすんじゃあねえ。
「――おっと?」
まるで話を逸らすタイミングでジェードが立ち止まった。
訝しげに視線を移す。――なるほど、その理由は分かった。
少し険しい崖がある。海の中でも崖って言うのかは知らないけれど。
「……少し怖いな。ゆっくり降りれるか?」
「あー……まあ、やってみましょ。王サマちゃんと捕まっててね」
「フォス、不安であれば変わろうか?」
「大丈夫、いざとなったら泳ぐよ。比重の高い身だけども減速ぐらいは出来るでしょ」

『これを機に金剛様に変わると言うのはどうじゃろ？』
「コラちゃんと捕まっててって言ったでしょ」
先生ただでさえ動き難い格好してるんだから、ワガママ言うんじゃありませんっ！
海底の崖は、まるで砂で出来た山の斜面のようだった。
グラススキーでもやるような気分で、斜面をずるずる滑って行く。
――ホント、「生身」とは違うよね。抵抗も浮力もあんまり感じないんだもの。海の中って言うより月の上って感じなんじゃないだろうか。重力１／６ちっく。
「と、とっとっと、とと……ッ!?」
バランスを保つのはむつかしい。
そのうち、滑るような恰好から連続して躓くような形になってしまう。
ジェードと先生も似たようなものだった。
斜面の終わりに辿り着いたときには、こける事こそ無かったものの、着陸の衝撃で盛大に砂を巻き上げてしまう。
「わっぷ……みんな大丈夫？」
視界がホワイトアウトして思わず目の前を払った。
その行為は無意味に等しく、モワモワは元気に漂っている。
「こっちは問題ない。先生は大丈夫ですか？」

「うむ……多少、砂が入った程度だ」
そりゃあの重装備じゃあそうなるよね。
モワモワが落ち着くのを待つついでに、服についた目立つ砂も払っておく。
「王サマは大丈夫？――あれ、王サマ？」
頭の上に待避させておいた容器から重さが消えている事に気づいた。
……ヤバい、どっかに落としたか？
慌てて来た道に視線を向けるが、まだ砂煙で視界が開けない。
『こちらも子細無いぞ、フォス』
前から王サマの返答があった。
声の方向から、どうやら来た道に落としたのではなく斜面の先にぶっ飛ばしてしまったらしい。
「いやあ良かった、ごめんねえ。なんか落としちゃったみたいで――」
「――待てフォス！今のは誰だ!?誰と話している!?」
「……ふぁ？」
モワモワの中でジェードが叫ぶ。
「……もしや、ウェントリコスス王ですか？今のは私にも、聞き取れました」
先生の声が続いた。

――何、声が聞き取れたって？
なんだいきなり？
もしかしてこの砂、言語野を広げるインクルージョンでも潜んでたか……？
『おお、それは嬉しや！この姿であれば、あなた方にもこの声は届くのじゃな』
……この姿？？
モワモワしていた煙が落ち着いてくる。
――王サマの声がした場所に、それはふわふわと漂っていた。
薄紅色をベースとした、半透明の体。
ドレスを纏ったような姿をした女の人だ。
腰から下は何本かの太い触手が流れている。
「……王、サマ？」
『おう。どうじゃ、度肝を抜いたじゃろう？』
これ以上ないドヤ顔で、その女の人は胸を張った。
中身のなくなった容器が、むなしく海底に転がった。
『――距離としては、あと半分ほどじゃ。故郷に近づけばこの姿になれる……さしずめ、真の本当の姿と言う事じゃな。ぬしらと良く似ておろう？』
ボクだけじゃない。先生もジェードも固まっていた。

「私たちと……似た、姿……」
『うむ』
「と言う事は……王サマが、肉の者……と言う事ですか？」
『うむ』
コホンと咳払いをして、王サマがボクらに向き直る。
『改めて名乗ろう。肉の者……アドミラビリス族の王、ウェントリコススじゃ。紹介がかような形となって申し訳なかった。
流石に、故郷に近づいたらこの形になる、と言うのは信憑性が薄すぎると感じてな。ここに至るまで伏せさせて頂いた……まあ、多少のイタズラ心も無い訳でもなかったがの。
――出来るなら、この姿で話したかったのじゃ』
そう言って王サマは、淑女のようにスカートっぽいヒラヒラを摘まんで微笑みかけた。
……主に先生に。
このウミウシ、事ここに至って先生への印象をやり直すつもりでいやがる。
「すごい……こんな生物がいるんだな。ぽよぽよしてて、飾りも多くて……上半分は私たちそっくりだけど、胸の所に水袋があるのですね」

『ふっふっふ。これは特に有り難い貴重な部位じゃ。讃えるが良いぞ』
そう言ってジェードにドヤ顔の王サマである。
そのドヤ顔っぷりがちょっとピキッときた。
「……」
ぐわっし！
ぐにゅっ！ぐにゅっ！ぐにゅっ！
「フォ、フォス!?フォス!?」
『ちょっ、コラ何をする!?青きリビドーでも呼び覚ましたか!?』
「いや、結構大きいからシリコンかなと思って」
『言うに事欠いてなんちゅー暴言吐きやがるこの宝石!?』
「発言がことごとくオヤジそのものだったし、王サマって言うからてっきりカマくさいオスだと思ってた。メスだったんだね王サマ。この胸は注射？」
『自前じゃい戯けぇっ!?さては貴様今までの意趣返しだな!?ゴメンナサイ謝るから許して!!』
しょーがねぇ、今回だけだぞ。
「フォス、この馬鹿者!!――申し訳ありません、ウェントリコスス王。後でよく言って聞かせますので!!」

『あ、うん……いや、大丈夫です。わしもチョットちょーしノリ過ぎた所はあったなぁと思うんで、はい』

頭掴まれて強制お辞儀である。

子供と一緒に謝る親の図だった。

@　@　@

『ああ、懐かしいかおりだ……愛しき故郷のかおりだ。何もかもを奪われても、これだけは変わらぬ……これだけは』

王サマが感嘆の声を上げる景色は、ボクにとってはここに来るまでに見た景色と何ら変わりはなかった。

むしろ、サンゴや海藻が少なくなっている気さえする。

「奪われた……そうか、アドミラビリス族は確か、みんな月人に……」

『そうじゃジェード。みんな、みんな連れ去られた。そして月の砂と水を与えられ、思考能力を奪われて……養殖されておる。奇麗な貝殻をつけた者から、その衣を剥がされるのじゃ』

「……酷い」

ジェードが絞り出すように言った。
明日は我が身だ。攫われた宝石たちも、きっとロクな扱いを受けてはいないだろう。
「王よ。それでは、この地には……」
『……うむ。今少し歩くが……恐らく、何も残っていないだろう。何名か逃れてくれていれば、もしかしたらひっそりと命を繋いでくれているかもしれないが……少し、見るのが怖くもある』
自嘲気味に王サマが笑う。その手は固く握りしめられていた。
恐怖から震えているのか、怒りを抑えているのか……それとも。
『……すまないのう、宝石の王よ。国交を結びたいと足を運んで貰った事を解っていながら……おそらくわしには、結べるだけの国も残っていないのだ。厚意に甘える形で連れてきてしまった』
「いいえ」
先生がはっきりと即答した。
「もとより、歓迎しますと伝えたはず。確かに意図した旅ではなかったとは言え、故郷に帰りたいと嘆く『仲間』の頼みを、どうして無碍にできるでしょうか。
――特に、王の様子は日が経つ度に衰えていたように見受けます。口に出来るものが少なく、弱られていたのではありませんか」

先生は、「仲間」と言う言葉を使った。
貝もまた宝石のひとつ、と王サマを歓迎した事はつまり、王サマは先生の中ではもう「仲間」なのだと。
王サマが、その顔をくしゃくしゃにしている。
……きっとその表情の名前を、「罪悪感」と呼んだりもするのだろう。
『――本当に、いい男じゃ。生きる『刻』が同じであれば、1も2もなく求愛しまくっているほどに』
「まるで1度も求愛してないみたいに言うのやめてくれませんかね王サマ。っつーか、人の父親口説くなし」
「ち……父親？」
先生がキョトンと呟いた。ニカッと笑ってあげるのだ。
「そりゃあもう。先生はボクたちの父親も同然じゃない。ねえ？ジェード」
「へ、あ!?……あ、いや、その……そりゃあ、恐れ多くは、ありますけども……その……」
どう返すか混乱して、人差し指をつんつん合わせるジェード。
既に答えを言っているようなものだと思う。
固まる先生と一緒にけたけた笑ってあげた。
「……ま、もちっと肩の力抜きなよ王サマ。その泣きそうなツラも必要ないさ。王サマ

に悪意があるとは考えていないし、許せないとも思えないんだもの。
　――それにね。ボクはまだ総取りを全然諦めていないのよ？」
『フォス……』
「それでもその顔したければ……まあ、失敗した後辺りでお願いします。幸先悪いでしょ？」
『……。お前には、ホント敵わんの……』
「ありゃりゃ、伝わってたんだと思ってたんだけどなぁ。それともう一回同じ言葉が欲しい？
『いいさ。ボクと王サマの仲じゃない』」
　――ああ、王サマ。
　今あんた、不意打ち食らった先生みたいな顔してる。
　目を見開いて口をだらしなく開けた、脇がガバガバの顔だよ。
『……許して、くれるの？』
「そもそも怒ってないからね」
『頼って、良いの？』
「おうともさ。そんだけの準備をしてきたつもりだよ？動くの先生とジェードだけど！」

力こぶを作っておきながら、最後は結局丸投げですけどね。
——先生の手の平が、ボクの頭の上に乗る。
「……ご家族の、方ですか？」
『……。アクレアツス……弟じゃ。戦いと食う事しか能のないバカだが……何故か、憎めなくての』
「あらら、ボルツの同族かぁ。どこにでもいるものなのね」
「フォス」
「はァーい」
窘められてしまいました。
「え……あれ？あっと、すまないフォス。その、恥ずかしながら……途中から話に置いて行かれている気がして」
ジェードが混乱している。
無理もないよね、途中から明らかに前提が変わっちゃったもの。
ボクとしては、先生がスルッと入ってきた事に少しビックリしてしまいました。ゴメンね先生。
人差し指立てながら教えてあげる。
「カードの話だよ、ジェード。良くみんなで寝る前にやるでしょ？

先生がＫ（キング）、ジェードがＡ（エース）、ボクが道化（ジョーカー）、そして王サマが今Ｑ（クイーン）になった。残念ながらＪ（ジャック）として用意したボクの剣はボルツに潰されちゃったけども」

「アレは諦めなさい。Ｊ（ジャック）にするには不安が過ぎる」

「あらら」

先生が右腕を袖の中に入れた。

前に合わせている襟から手を出して、ガバっと開く。

時代劇なんかでよくある、着物着ている主人公が片腕だけ脱ぐアレだ。

先生体格が良いしイケメンだからすっげえ絵になってる。

……おい、王サマ、自重しろ。目がハートマークになってんぞ。

「まあ、つまりはそう言う事。絵柄（スート）はもちろん全部宝石（ダイヤ）だ」

「フォス、お前の言う『総取り』を確認しておきたい」

「ええ、それはもう。王サマと国交を繋いで、弟さんも助けて、人攫いから情報も引っ張って、大団円で帰還ですよ？」

「……よろしい」

あ、先生の口角が上がった。

珍しいな、こういう笑い方をする先生って結構レアだよ？

――水面の向こうに黒点が揺れる。
きっとアイツ等、ボクらのメンツ見て戸惑っているのだ。
王サマの手を引きながら、先生とジェードの後ろに下がる。
きっとボクの表情も、今の先生と同じような顔になっているだろう。
「ボクらがネギしょってきた哀れなカモだと思うなよぉ？
――勝負（コール）だ!!」
その声を合図にしたように――槍の雨が降り注いだ。

第０８話「帰還」

降り注ぐ槍の雨の内、ボクらに当たるコースの物だけが唐突に砕け散った。
先生の「破アッ！」だ。ホント、何度見ても何やってるか解らない。
渦巻く海流にかき回されながら見えたのは、袈裟から解放された先生の右腕が槍の雨に突き出された瞬間だけだ。
顔をかばった腕の内側で王サマが叫ぶ。
『見るの２回目じゃがまったく訳が分からん！ありゃ一体何をしてるんじゃ!?』
「ボクもよく分かんない！寺生まれらしく法力かなんかなんじゃないの!?」
『マジか!?寺生まれ凄いな！』
「軽口叩かないと死ぬのかお前は!?」
剣を抜き放ってジェードがツッコむ。
ちゃんとボケを全部拾ってくれる辺りが流石議長だと思う。
心の内を聞かれたらきっと泣かれる。
「ジェード、撃ち漏らしがあった時だけ頼む」

ボクらに背を向けたまま先生がそう言った。
――第2射。
今度は更に密度の濃い弾幕だ。さしずめ槍の集中豪雨。
先生の行動は変わらなかった。
再びその右腕を振り抜くと、槍がその周りの槍も巻き込んで勢いよく弾け飛んで行く。
……撃ち漏らしは、欠片も無かった。
槍が巻き上げる砂煙の中で、害成すものは欠片も通さぬとばかりに仁王立ちした先生の静かな背中が、凄まじく頼もしく映る。
『……何あれ、カッコ良すぎる。もう宝石で良いからガチで結婚してくんないかしら』
「先生だって、選ぶ権利はあるんだよ?」
『お前色々ヒドいな!?』
ヒドいのはこの状況で求愛できるお前の脳みそだっつーのこのウミウシ。
確かにめちゃクソかっこ良いけども。
……第3射は、こない。
その代わり、金属管で出来たドームにあたこち響かせたような、澄んだ声が聞こえて来た。

〈――動くな〉
〈アドミラビリスの王弟の命が惜しいのならば〉
――掛かった！食いついたぞ!!
こうまで簡単に馬脚を現してくれるとは思わなかった。
一歩前に出て声を張り上げる。
「ああ？全然聞き取れねーぞ月人!!人様にモノを伝えたいならきちっとツラ出してはっきり喋れ!!」
――もちろん会話の主導権を握る為のハッタリだ。が、海が荒れてるせいもあって字面そのまま受け取ってるかもしれない。
（――王サマ。月人が王サマに提示した条件は何？）
（!?……宝石を誰か連れて来い、だけじゃ）
（Ｇｏｏｄ！）
小声で王サマに確認を取りながら、海が収まるのを待つ。
ジェードはボクが手で制している。
先生は迎撃態勢を取りながら、とりあえずボクに成り行きを任せてくれるようだ。今ちらっと小さく目配せされた。
はっはっは、責任重大だね。

……大丈夫、解かってるよシンシャ。行って戻ればもう大成功だ。だから、軽くジャンケンするつもりで立ち回ってやるさ。

〈……動くなと言ったのだ。アドミラビリスの王弟の命を、我々が握っているのを忘れたか〉

律儀に、波がある程度収まるのを待ってからの2声目である。

先ほどよりも声は大きかった。

――知能あり。人質を取るところから社会性を理解できる価値観を持っている。ボクらを素材ではなく知恵と社会性のある生物だと認めている。

使用する言語が一致。もしくは月人側が意図してボクらの言語を使用している。つまり意思疎通可能で、今後口八丁で交渉や揺さぶりができる可能性が大いにあり。

今までは月人側にコンタクトの意思が無かったと言う事か。

並列で月人の情報を分析しながら対応する。

「オウテイ?王サマの弟、アクレアツスさんの事かあ?命っつーのを握ってるって言ってもさぁ!どこにいるかも見えないんだけど!?」

この辺りは不老不死であるボクたちの口から言う事こそに意味がある。死を恐れていないからこそ「命を握っている」と言われても実感がないと思わせる為に。

そして月人側は、会話をしてしまったからこそアクレアツスを殺す訳にはいかなく

なった。
　うまく行けばボク達をだまくらかしてリターンを増やせる可能性がある、と言う事になるからだ。
　……ここからは、宝石側が蒙昧なフリして論点をずらし、向こうの情報を芋ヅルして行く作業だ。
　しばしの時を置いて、水面の向こうから縄梯子がスルスルと降りて来た。
〈上がってくるが良い……望み通り、顔を合わせてくれよう〉
　……ふむ。罠の可能性もある……が。
〈――ただし、フォスフォフィライト。登ってくるのはお前だけだ〉
　おいおい舐めてんな。
　そっすか。そう言う事ならこっちも無視だな。
（先生、お願いします。登って、話が出来そうになければ雲を壊して全部海に突き落としてください）
（いいのか？）
（王サマは学校の上から落とされても無事だったし、海に落ちれば縮んで正気に戻りました）
（……なるほど）

つまり、月人がアクレアツスを同伴しているなら、暴れるだけで全解決する目があると言う事だ。

先生が縄梯子に手をかける。

焦ったような返答が来た。

〈――聞こえなかったか!?登ってくるのはフォスフォフィライトだけだ!!〉

「聞こえたよ。だからフォスフォフィライトが登って行こうとしてるんじゃないか」

〈見えていないとでも思っているのか!?今縄に手をかけているのは金剛だ!!〉

「そうだよ?あー君たちは知らなかったよネ無理もない。教えてあげよう。

――先生のフルネームはね。『フォスフォフィライト＝テラウマレ＝金剛』ってんだよ」

『「「ぶっふぉ!?」」』

――あら、パンチが効きすぎた。

先生もジェードも王サマもうつむいて肩震わせてら。

横文字部分をちょっと巻舌気味にしたのは不味かっただろか。

(先生、無視してズンズン登っちゃってください)

(わ……わか、った……っ!)

肩を震わせながらもズンズン先生が登って行く。

月人にしてみれば、利益を諦めていないなら取れる手段は一つしかない。
〈――良いだろう！全員登ってくるが良い！〉
追加で縄梯子が３つ落とされた。
最初っからそうしときゃ良かったんだよダアホめ。
心の中で悪態をつきながら、縄梯子にしっかり手を掛けた。

＠　＠　＠

月人の黒い雲を踏みしめる。
やわらかい土を踏んだ感触、と言う報告を見た事がある。
なるほど、そんな感じだと思う。うまい表現だ。
――しかしこんなんで宇宙に出れるのか？それとも、月人は宇宙空間でも生存できるのだろうか。
ボクらは……光さえあれば、生身で宇宙も行けそうだな。
視線を前に映す。
中々の大歓迎だった。火の付いた長い松明のような棒を遠巻きに突き付けた無数の雑（ぞう：月人の周りにいる天女もどきの事）にズラリと囲まれている。

距離が腰引ける程度に離れているのは、やはり先生を警戒しているからだろうか。
そして月人の後ろには、サザエをシャープかつスタイリッシュにトゲトゲさせたような長くて大きな巻貝が転がされていた。
クジラを固定するように何本かロープが掛けられているが、その巨体を鑑みるとずいぶんと頼りない固定だ。
「……王サマ？」
『アクレアツスじゃ。間違いない』
弟さんって言うから王サマみたいなカタツムリを想像したんだけど、ずいぶんシャープな感じなのね。
そう言えばボルツみたいな攻撃特化って言ってたか。アドミラビリスは貝殻の形も個人差になるようだ。
「――ようやく、まともにお話が出来る状態になった訳か」
あの長い松明は、アクレアツスにも突き付けられている。
〈――状況は理解できたな？〉
「ああ、アクレアツス本人だって確認も出来たよ。ならばボクらも、自衛以外の武力行使をしない事を約束しよう」
余裕を見せながら口にした。

もとよりそのつもりだったのだ。あたりまえの事をもったいぶって話してだけだったりする。

〈――金剛は不要だ。フォスフォフィライトとジェードの二名。その身柄とアクレアツスを交換だ。拒否するならばアクレアツスを殺す〉

「違うだろ？まずはあんたらが約束を守るのが筋だ」

まずは舐めた要求をばっさりカット。筋を通す事から始めようか？

〈……約束とは？〉

「王サマとの約束だよ。『ボクらを連れてくればアクレアツスを開放する』――王サマはその約束を完璧に果たした。次はあんたらが約束を果たせ」

月人が声を荒らげた。

〈お前たちがおとなしく我らに下れば返すと言っている！〉

……ふうん。どいつもこいつも口が動いていないな。もしかしたら、どこかに籠って喋ってるのかな？

とりあえず、切り口は変えずに対応する。

「わっかんないかなぁ？おたくらが約束を守らない内は信用が無いんだよ。言う通りにして約束を反故にされたらたまらないだろう？そういう相手なのであれば、ボクらも馬鹿正直におとなしく交渉のテーブルに乗る必要なんて無いじゃないか」

〈王は約束を果たしていない！お前たちがおとなしく捕まった時点でそれは完了する！〉

「そりゃあ違うな月人さんよ。王サマに課せられたのは『誰か宝石を連れてこい』だけだ。実際3人も連れて来てるんだぞ？完璧すぎる仕事だ。

その後の攻撃も捕獲もアンタら自身の仕事だろ。確かにアンタらの攻撃を凌げるメンツが来たのは想定外だったかもしれないけれど、それは単純にアンタらの仕事が無能だっただけで王サマは関係ない。

テメェの失敗を理由に約束を反故にするんじゃないよ」

〈屁理屈を！仮にアクレアツスを返せば、お前たちが要求する物はなくなるではないか！〉

――ずいぶん感情豊かだな。

しかも馬鹿正直だ。

コッチの誘導に馬鹿正直に乗ってくれるぞ。こいつもしかして、舐めプしすぎて頭脳が間抜けか？

「おいおいおいおいおいおいおい、バカ言ってんじゃあないよ。例えアクレアツスを返してもアンタらには交渉カードがわんさかとある筈じゃないか」

〈――なんだと？〉

「……ヘリオドール」
　ボクは静かに突きつける。
「――ラピスラズリにグリーンダイヤ。ルビー、サファイヤ、ピンクトパーズ。枚挙に暇がないほどに、あんたらは交渉カードを持ってる筈だろ。
　今までアンタらが攫ってきた、ボクの仲間たちの事だよ」
〈……っ！〉
　――まるで、息の詰まる声を聴いたような沈黙だった。
　ボクとしては少し意外な反応だ。宝石で宝石を交渉する……と言うのは、字面だけ見れば意味のない事に思えるけれど、アイツ等が薄荷色の奇麗な宝石が好みなように、攫われた宝石にも優先順位がある筈だ。
　先日鏃にして大量に返されたヘリオドールなどその筆頭だと思ったんだけど、この反応は取引材料としての価値すら認めていないように思える。
　……立場が違うから故の認識だからか？ヘリオ返すからフォスをくれ、なんて取引は普通に考えつくと思うのだけど。――ボクらがそれに乗るかは別として。
〈……金剛が……ッ〉
　――あん？
〈そこの壊れかけた機械が王子の言う事を最初から聞いていれば、このような悠久に等

しい時を無為に過ごすことも無かったのだ!!〉

――核心来たあああああああああぁぁぁぁぁぁぁッッッ!!!

月人の口から出た主張に思わず脳内であのＡＡが流れた気がした。

つくっそ、こいつらおいし過ぎる!先生以上にガバガバだぞ!

ヤバイ、お口歪んでないかしら?ニヤけるのを歯をくいしばって耐えてるんだけどコレ表に出ていないかしらっ!?

「なら、攫った宝石と引き換えに、それも交渉のテーブルに乗せれば良いじゃないか」

〈そんな事はとうにやった!〉

「それは今と同じ環境だったとでも?このフォスフォフィライトはテーブルに居たのかな?」

〈ッ、金剛の庇護にある宝石に何が出来ると言うのだ!〉

「出来ると思って無ければ攫った宝石を取引材料にはしないだろ。何焦ってんだよ?」

揺さぶれば揺さぶるだけポロポロキーワードが飛び出てくる。

まるでパチンコのフィーバータイムだ。

向こうの揺さぶりワードも即リフレクしてるから、月人だけが面白いように狼狽えてる。

「……フォス……」

話に自分が出てきた為か、少しおびえたように先生がボクを振り返る。
ボクはそれに軽くウインクを返した。
ご安心ください、先生。そもそもまともにテーブルに着くつもりゼロですから、先生が交渉材料として何かする事はありません。
……まあ、先生の視線にはもうちょっと別の意味があるんだろーけどね。ジェードなんか震えながら先生見てるし。
〈お前たち宝石は取引材料とはならない！もしそうであったなら、この状況は作られなかった！〉
「それを判断するのはこっちかなぁ。何度も言うけど君らにゃ信用が無い。額面通り受け取る訳にはいかないね。
――人攫いを生業としている正体不明君と、今までボク達を傍で支え続けてくれた先生。どっちを信じてどっちを助けたいと思うかくらい、君等の頭でも出来る勘定だろ？」
月人だけじゃない。皆が目を見開いてボクを見ていた。
その視線に込められた意味の名前を何と呼ぶべきか、ボクは形容できなかったけれど。
……言葉を詰まらせた月人が、最後の手段に出る。

燃え盛る松明の炎を、アクレアツスに押し付けた。
ジュウッ、と肉の焦げる匂いが立ち込める。
アクレアツス！と悲痛な叫びを上げて王サマが身を乗り出した。
〈――アクレアツスを殺す〉
……ふむ。
ちょっと煽りすぎたかな。
〈最後の警告だ。抵抗せずにおとなしく下れ。さもなくばアクレアツスの命はない〉
――そして、そろそろ頃合いか。
強引に主張を通す事にしたようだ。
なら、ボクらも強引に行く事にする。
「――わかったわかった。従うよ。そちらに行こう」
「フォスっ!?」
ジェードの悲鳴が聞こえる。
……その反応で正しいけどさ。議長チョッとまじめすぎやしないかい。
ガチで行く訳ないじゃんか。
両手を上げてゆっくり前に進む。先生とすれ違う過程で、小声で伝えておく。
（――隙を見て、攻撃を）

こんなの、アクレアツスから意識を逸らすためのブラフに決まってる。
……決まっているのだけれど。
どうやら、そう言った小細工を弄す必要はどこにもなかったようで。
『い、たい……。……ごは、んの……におい？』
……殻の中から何か聞こえた。
アクレアツスの殻が揺れ動く。
ブチブチと固定されていたロープが千切れてゆく。
『――ごはん！』
「……マジすか」
――それはウミウシと言うにはあまりにも大き過ぎた。
大きく、浅黒く、重く、そして大雑把過ぎた。
……って、ベルセルクしてる場合じゃないな。
いや、顔は可愛いかったねん。
つぶらな瞳にちょこんとした口。ファンシーワールドのキャラクターで通じると思う。
しかしデカかった。
あのデカい貝殻の同質量はあるんじゃなかろうか。

これ、アレですか？
自分が焦がされた時の肉の匂いで覚醒しちゃった感じですか？
月人が慌てて火を押し付けているけど、このサイズ差だとまったく意味をなしてない。
――お前らどの口で〈アクレアツスを殺す！〉なんてドヤ顔キメてたんですが。アホなの？ボク以上にアフォスなの？
『アクレアツス……』
王サマの呆然とした呟きを背景に、アクレアツスの巨体が唸る。
「まずい！フォス、ジェード!!」
先生がボクたちに覆いかぶさった。
月人の黒い雲に押し付けられながら見たのは、デカい貝殻による広範囲ラリアットである。半径８５ｃｍってレベルじゃないぞこれ、誰か巡音ルカに抗議して来い。
火で制しようと無駄な努力をしていた雑達が、紙クズのように跳ね飛ばされて行く。
脳裏に高笑いするムスカ大佐がよぎった気がする。
――雲が崩れた。
先生に庇われたまま、アクレアツスの巨大な体と一緒にボクたちは海に落下して行く。

もう何がなんだか分からない。
目まぐるしく流れている視界の中で、荒れる海の水面を見た。
……そこから先は、ちょっとよく覚えていない。

@　@　@

「……オス！……フォス!!」
「――んあ？」
ジェードの叫びを聞いて、意識を飛ばしていた事を自覚した。
とは言っても、ボクたち宝石に『気絶』なんてステータスは存在しない。
つまり。
「……ボク、また割れてた？」
「ああ、良かった……目を覚ましたんだな！首が取れていたんだよお前」
「マジか」
ジェードが首を探してくっ付けてくれたらしい。
視線を動かす。どうやらまだ海の中だ。そこまで時間は経っていないと見える。
体を見下ろしてみる。

「……Ｏｈ」

防護服の中がベコベコになっておられる。

こりゃあ色々割れてやがるな。防護服が無かったら文字通りバラバラに散って海の藻屑になってたぞ。

ありがとうレッド。そしておめでとうボクの体。今日も元気にノルマ達成だちくせう。

「――フォス」

先生の手の平がそっとボクの頭に置かれた。

「――良くやってくれた。王弟殿は救出され、月人は全て霧散し、みんな無事だ」

「ふっふっふー。後は国交繋いで帰れば総取り完了ですね。情報もわんさか絞れました」

ジェードも先生も特に損傷はないようだった。

王サマも無事だ。

……王サマの隣に、なんか黒い人がいる。

そう言えば、『故郷の近くでは人の姿になる』んだったっけ？

「――やあ。君がアクレアツス？」

『やあ、フォスフォフィライト。アクレアツスだ。……そしてすまないな。危なかった。

姉上の制止が無ければその頭、食べてしまう所だった。あんまり美味しそうだったから』

「え、やめてくれないそういう怖いこと言うの。あんたら姉弟揃ってボクの事飴玉か何かだと思ってない？」

よ、っと体を起こす――ではなく、起こそうとして失敗した。

右腕は動くけど左腕が動かない。胸から下も無理だ。

「無理はするな。頭も、糊無しでくっ付けたばかりだ……あまり動かさない方が良い」

先生にそっと横抱きにされる。

御姫様抱っこリターンズである。

今日はどうやら、帰るまではこのままらしい。

『――君が月人と交渉してくれたと聞いた。礼を言うよ』

「最後はアクレアツスに全部持ってかれちゃったけどね。火を押し付けられてたけど、火傷は大丈夫？」

『肥大化していた時に受けた傷だ。もう無いような物さ、問題ない』

アクレアツスが手の甲を見せるように向けた。

……火傷の痕も見当たらない。

『フォス……本当にありがとう。アクレアツスを取り戻した上で誰も失わずに済んだな

ど、このような奇跡が本当に起こるとは思っていなかった……』

いや、現状を見るに先生呼んだ時点で大分ヌルゲーだったと思うけどね。

雲堕とせば勝ち確だったみたいだし。

『そして、すまなかった……っ！わしは、アクレアツスの為とは言えお前たちを――』

「はいストップ」

――右腕が動く状態でよかった。

王サマの唇に、人差し指を当てられたから。

「――元々、怒ってないって言ったじゃない。その顔は失敗した時に、って言ったんだからさ。大団円のこの場では引っ込めておきなさいよ」

『……しかし、お前の体が砕けてしまった』

「はっは、ジェードみたいな事言ってら。良いんだよどうせパキパキ割れまくってんだから、最終的に治ればよし。今回も特に体の喪失はなかったしね。

……んー、そうだな。悪いと思ってるなら借りに付け込むみたいで申し訳ないけどさ。国交の方よろしくお願いしますよ王サマ？」

どうせその話もしなきゃいけなかったしね。

手をプラプラさせながら軽くそんな要求を出して見る。

……王サマは、困ったように眉尻を落とした。

『――フォス。周りを見てみてくれ』
　王サマ様の声は、弱弱しかった。
　言われた通り周りに視線を投げてみる。
　サンゴのない砂の海底を見回した。
『……なにもないだろう？この地は、月人に根こそぎ奪われてしまった……もう、何も残っておらんのだ。お前たちの国と交友できる国すら、ここには残っていない』
　……ああ、王サマ。
　残念だけど、それは諦める理由にはならないかな。
「なんだったかな……ああそうだ。
『山は樹を以って茂り、国は人を以って盛んなり』――だったかな。
　知ってる？吉田松陰。日本国出身、幕末の長州藩の人で塾の先生だった人の言葉だよ。
　人がいるからこそ、国なんだ。
　ここに二人いる。このままアドミラビリスが終わるのはボクたちとしても許容できないな」
『……フォス』
　ボクらだって２８名。国と言える規模じゃない。

だけど、国として何とかやってるんだもの。
「王サマだって、終わるつもりはないでしょう？ボクらもあんまり手が足りてる訳じゃないけれど、出来る範囲で手伝うからさ。
……借りを作りっぱなしと嘆くのであれば、次の次の代あたりでボチボチ返してくれれば良いさ。ねえ、先生？」
「――ええ。私たちには寿命がないからか、気も長い方なのです。それに、私たち以外に知恵あるものがいると言う事実は、私たちにとっても心強い事だ。共に、未来を目指しましょう」
王サマが口元を押さえて震えていた。
『金剛さん……ありがとうございます……っ！』
アドミラビリスの国は、これより宝石の国と共に繁栄して行くのだ。
そんな歴史をボクたちの教科書にも載せて行けるようにしたいと思う。
――国交が繋がる。
これでめでたく総取り、大勝利だ！

@　@　@

中々苦労した道程も、帰りは坂道を下るように楽ちんだった。
砂浜に向かう海流があるため、それに乗って行けば良いと教えて貰ったのだ。
そっかー、緒の浜に流れ着くボクらの同族はこの海流で少しずつ流されて来たんだなとちょっと納得。
「あの……伺って良いですか？」
帰路をたどりながらジェードが口を開く。
「今回の件……王が月人に強要され、我々をおびき寄せていたと言う事実ですが……先生たちは何時気づかれてたんですか？」
事が起こるまで気づけなかった事を恥じているらしい。
ホント、ジェードは真面目さんだなぁ、と思う。
「ふむ……王とは関係ないが、月人の襲来を想定したのはフォスが私を今回のメンバーとして提案した時からだ。その時は監視を警戒しているのだろう、と解釈していた。
王が月人に強要されていると気づいたのは、アドミラビリスが肉の者であると解った時からだ。とはいえ事実として確定はしていなかった為、見に回っていた」
――なるほどね。
アドミラビリスが『肉の者』であるならば、今回の話が出た会議室で国交の話が出来た筈なのに王サマがそれをしていなかった。

王サマはあの時、「故郷が近づけば人型になれると言うのは信憑性が低い為」と説明していたけれど、先生としては違和感を覚えていたって事か。

「じゃあ……フォスは？」

「ボクは王サマを月人が落としたって聞いた時からずっと想定してたかな。だから、海に罠がある前提でこのメンバーを提案したよ。

ちなみに、王サマもボクが気付いていた事に気付いてたと思う。それを想定してメンバーを選んだことも含めてね。

――だから、前日に凄い辛そうに謝られたよ。苦労を掛けてゴメンって」

王サマをエスコートする役目についてから、王サマの目的を暴く事がボクの役目であると理解していたけど――話す内に絆されてた。

月人みたいに嫌な奴じゃないと、そう思ってしまった瞬間にボクの方針は決まってたんだよね。

「――私は、まったくダメですね。この事態を欠片も想定していませんでした」

「それが良いんじゃない」

「……え？」

ヘコむジェードが顔を上げる。

「信じる人。疑う人。見極める人。様々な思惑を持つ人が集まってこそ、色んな事態に

対処できるってモンだよ。ジェードがもし疑う方に思考が行ってたら、もしかしたら王サマの反感を買って色々失敗してたかもしれないよ？」

「……そうだろうか」

「そうだとも」

後を引き継いだのは先生だった。

「それに、私も気づくのが遅すぎた。本来ならば、この事態を想定したメンバーの選出や対策と言った事はフォスではなく私が行うべきだった。――反省するのであれば、私もだ。互いに精進せねばならないな」

……ああ……まあ、うん。

そうね……それは、ホントそうよね。言わないけど。

「――しかしフォス。今回、王と随分打ち解けていたように見えたな。接する時間が長かったと言うのもあるが、自分を食べた相手にしては王そのものへの警戒をしていなかったように思う。何か根拠があったのか？」

「……あれ。そこ疑問に思っちゃいます？フォスさん結構そのあたりサバサバした性格だと思ってるんだけどな」

「ああ、それは私も思った。確かにサバサバしている方だが、害らしい害を受けたら結構根に持つかそれをネタに弄り回してるぞお前」

ええー……？

そうかなー、フォスさんスーパーアイドルだからそう言う火サスチックな性格してないと思うんだけどなー。

「まあ……ボクの性格はともかく。確かに仲良くなる理由みたいな物はありましたね。ボクしか王サマの声が聞こえなかった、って言う状況も一つの理由でしたけども。もっと大きい理由としては――

――王サマも、ボクと同じ『記憶持ち』なんだろうなぁ、って。そう気づいたからですね」

親近感沸いてたんだよなぁ、結局は。

王サマの事を思い出しながらそんな風にひとりごちてみる。

……先生とジェードは、なんか時間が止まったように固まっていた。

第０９話「議事録」

〇〇〇〇年〇〇月〇〇日

◆参加者

・金剛
・ジェード
・ボルツ
・ルチル
・ペリドット
・アレキサンドライト（略：アレキ）
・フォスフォフィライト（略：フォス）
・シンシャ

記：ユークレース（略：ユーク）

◆議題

・遠征時の学校の状況について

・遠征の結果について
・アドミラビリスとの国交について
・月人について
・その他報告など

◆遠征時の学校の状況について

金剛「今回、フォス提案ユーク監修の特殊シフトだったな。全員無事なのは事前に確認できたが、改めて発生した要項の報告を頼む」

ボルツ「はい。まず、月人3器の襲来がありました。新型1器、旧型2器の編成で、方角としては中の平原と白の浜から挟み込むような形で同時襲来しました」

ジェード「っ、3器同時だと!?……と言うことは、戦術もか?」

※注：3器同時襲来は過去にもあり、その際月人は1器霧散されると速やかに退避する戦術を取っていた。それを敗走と見て深追いした宝石は、ことごとく帰ってきていない。

ボルツ「戦術が同じかまでは判断できなかった。シンシャが月人の攻撃が始まる前に、遠距離から3器を同時撃墜する事で終わらせたからだ。戦闘はほぼ数秒で終わった。1器新型と判断したのは、サファイアで作られた複数の牙のような武器が残された

からによる」
フォス「わぁお、さすがシンシャ」
ジェード「……え。あれ、今3器同時撃墜って言ったか？新型も含めて？」
ボルツ「ああ、僕のする事はほぼ無かったよ。精々、新型が落としたサファイアの回収ぐらいだ」
金剛「――素晴らしい。フォスが今のシンシャに任せれば問題ないと強く推していたからあまり心配はしていなかったが……良くやってくれたな、シンシャ」
シンシャ「い、いえ……それでも、多少の汚染を出してしまいました」
金剛「――はて？私達は緒の浜から中の平原を通って戻ってきたが、毒液に満たされた様子は見受けられなかったと思うが」
ボルツ「シンシャの言う汚染とは、合わせて５００ｍｌ程の毒液の飛沫を指します。この程度であれば、被害無しと判断してよろしいかと」
ジェード「想像を大きく上回る制御力だな。……シンシャ、昼の見回り出来るんじゃないか？」
シンシャ「だ、ダメだっ!!……最近は月人の動きも活発だ。まだ汚染を出してしまう俺が見回りについたとして……何か起こってからじゃ、遅いだろ」
金剛「……ふむ。私もジェードと同じ意見だったが……シンシャがそう言うのなら、

尊重しよう。しかし、気が代わったらいつでも言って欲しい。この戦果はそう判断するに足る物だ」

シンシャ「……ありがとう、ございます」

フォス「シンシャ、ちなみにオーバードライブは使った？新型が混じってたらしいけど」

シンシャ「その名称を流布させようとするなよ……使ってない。普通に撃破できた」

ボルツ「何か奥の手があるのか？」

シンシャ「理論上の話だ、まだ使ったことがない。俺の攻撃は基本的に全ての毒液を制御内に置く事を前提としているが、それを手放せば遥かに高い威力と射程を持った攻撃が可能な筈なんだ。撃った毒液球が目標を貫き、遥か彼方に飛んでいく」

ジェード「……もうシンシャ一人で良いんじゃないか？」

ユーク「だよねぇー。遠距離攻撃があれば防衛計画にもスゴい幅が出てくるんだけどな」

シンシャ「……ダメだ。そう言ってくれるのは、嬉しいけど」

ユーク「うーん、残念」

フォス「時にユーク、その月人襲来があったのって何時ぐらいかわかる？もしかして夕方近かった？」

ユーク「え?……うん、そのぐらいよ。何かあったの?」
フォス「ちょうどボクらがエンカウントしてた時かな。これ分析も合わせて後の議題に回すわ」
ユーク「はーい」

◆遠征の結果について
ジェード「では遠征について報告する。
結果として、肉の者――アドミラビリスとの国交を結ぶのに成功し、月人とコンタクトする事にも成功した。分析に足る情報もかなり抜き出している」
アレキ「――月人と、コンタクトできたの!?」
フォス「うん。普通にボクらの言葉喋ってたよ。この件も後の月人の議題に回すわ。横に逸れやすいから」
アレキ「……普通に喋るとか嘗めてるわね……了解」
ユーク「時に、ちょっと良いかな?さっきのジェードの言い方だと、アドミラビリスが肉の者って聞こえるんだけれど」
ジェード「ああ、間違ってない。アドミラビリスの住んでいる海域に近づくと、私達と同じ様な形に変態したんだ。ポヨポヨした柔らかい体で、ヒラヒラした服のような膜

を纏っていた。腰から下は、いくつかの触手で出来てたな。あと胸の位置にふたつ水袋がついてた」

ペリドット「ヒラヒラした服……レッドが騒ぎそうだなぁ」

ユーク「あれ？ならなんでここで国交結ばなかったの？国を視察させたかったから？」

フォス「うん、その辺りの経緯はボクから説明するよ。

――王サマね。弟にアクレアツスって人がいるんだけど、その人と引き換えにボクたちを誰か海に連れてこいって月人に強要されていたんだ」

シンシャ「……やっぱり罠だったんだな」

フォス「案の定でございました」

ジェード「え……ちょっと待て、シンシャ気付いてたのか!?」

シンシャ「事前にフォスに相談受けてたんだ。月人が故意に送り込んだやつの言葉にしたがって未知の場所に行くって、もう罠にしか取れないなと……どうした？」

フォス「ああ、うん。直前まで罠だった事に気付けなかったのがダメージになってるみたいなんだ。そっとしといてあげて。

――話戻すけど、あらかじめ罠を踏み潰す前提でメンバーを組んでたからね、特に被害は無かったよ。

向こうもまさか先生が来るとは考えて無かったみたいだしね。アクレアツスを人質にボクとジェードを寄越せって脅してきた。

で、それを逆手に取って色々情報ぶっこ抜いて来ました。アフォスさんでも手玉に取れるガバっぷりには流石のボクも苦笑い。思った以上にチョロかったわ」

ジェード「……真に受けるなよ。私がやってたら絶対連れ去られたと思う場面が幾つもあった。なんであんな鮮やかな切り返しが出来るんだ……」

ユーク「えー？気になるなぁ。具体的にはどんな会話だったの？」

ルチル「あ、私も気になります。差支えなければ、是非」

ジェード「議題からブレるので、後でやり取りを書き出してみる。と言うか、私はアレを直で聞いて衝撃を受けたので、どっちにしろ記録するつもりだったんだ」

フォス「どんだけぇー……切り口から考えれば、王サマの反感買う内容だったのになぁ。

――まあ、いいや。話を戻すね。

情報ぶっこ抜いた後あたりで月人が自爆してね。アクレアツスが目を覚ます切っ掛けを作ってしまい、最終的にアクレアツスになぎ倒されて全滅と相成りました。このアクレアツス、ボルツみたいな戦闘特化の人だったのね。

喩えるなら、ボルツの手足を麻紐で縛って眠らせた状態だった所に、自分で光を当て

た感じ」

ボルツ「……麻紐なんて、起きてさえいれば髪で切れるぞ」

フォス「そうよねぇー？……今回は月人のガバっぷりにかなり助けられましたわマジで。

後はまあ、アドミラビリスと国交を結んで、今後の事を少し話して帰って来たわけね」

ルチル「――戻ってきたとき、フォスがバラバラだった事については？」

フォス「アクレアツス大暴れの折に。月人の雲から海に落ちてああなりました。砕けてたのはボクだけだった所とか泣ける」

ルチル「……騙されて、体をバラバラにされて……その原因の一端を担ったアドミラビリス相手に国交って、あなた思う所は無いのですか？食べられてすらいるのですよ？」

フォス「無いよ。ぜんぜん。まったく」

金剛「――今回、一番被害の大きかったフォスが真っ先に許した。だからこそ、私もその件は考えない事にしたのだ。

……曰く、『いいさ。ボクと王サマの仲じゃない』だそうだ。――こんなにあっさり言われてしまえば、な」

シンシャ「……ずいぶん、仲良くなったんだな」

フォス「うん?……おやぁ?」
ルチル「おやおやぁ?」
ユーク「おやおやおやぁ?」
シンシャ「な、なんだよ!?べべ、別に普通の事言っただけだろ!?なんだよその反応っ!
って言うかユーク、なんでこんな所記録してるんだよ!?やめろ!!」
ユーク「きまりですのでー」

―追記―
ユーク：この議事録は教科書書き換えレベルの経緯、情報が記録されている為、機密レベルを最低に下げ、全員が容易に閲覧できるように設定する事を申請。
金剛：――承認。

◆アドミラビリスとの国交について
フォス「現状、アドミラビリスは王サマとアクレアツスの二人だけだから、ここから頑張って繁栄させて行く事になる。
月人を揺さぶれた事から、今後月人と交渉出来る機会があればアドミラビリス奪還を

考えてみようかって聞いてみたけど明確に拒否されたよ。それで得られるものはボク達の利益とするべきで、これ以上甘える訳にはいかないってさ」

ペリドット「って言うか、私達と一緒に暮らせば良いのにな」

フォス「問題が二つあるんだ。まず、ボク達の国の砂には栄養があまりない為、食べられる物が少ないんだよ」

ボルツ「……そうか。動物は食べなければ動くことが出来なくなるんだったな。……面倒な」

フォス「二つ目。海域から出るとそのうちウミウシの状態に戻っちゃうのよ。人型の時は普通に会話出来るんだけど、ウミウシだとボクしか声が聞こえなくなっちゃうんだ」

ルチル「医師から補足です。フォスのみ会話できる現象ですが、仮説としてアドミラビリスにもある程度のインクルージョンが棲息しており、フォス補食の際にそのインクルージョンが一部フォスに取り込まれた事による物と考えられます。

実際、フォスの身体検査をした折に数グラムの体重増加が見られました。……と言ってもインクルージョンだけの数値としては少々多いので、整形の際に王の貝殻の組成がコンマ数パーセント混じったものと思われます。

この仮説が正しければ、アドミラビリスに一度取り込まれて再整形するか、もしくは

王の貝殻を粉末にして飲むなどの方法で取り込むかすれば、フォスと同じ能力を得られる可能性は否定出来ません。

――ただし、医師としてはこれらは絶対に推奨出来ない行為です。前者は特に」

金剛「ああ。この件については、例え申請が来ても承認するつもりはない事を明言しておく」

フォス「ルチル、先生、補足ありがとうございます。

――そんな訳で、ウチとしてはまず二つの事をやろうと思うの。

ひとつ、アドミラビリスの大使館を用意する。

……と言っても何か建てるとかじゃなくて、アドミラビリス用の客室や食料を用意するって程度だけどね。

ふたつ、これが重要なんだけど……アドミラビリスとホットラインを繋ごうかと」

ペリドット「ほっとらいん？」

ジェード「２国間で直接対話する為の通信ラインの事を言うそうだ。それがあれば離れていても会話ができる。本来高度な技術を用いて準備するが、今回は光を使って原始的な方法で行うのだとか」

フォス「おふこぉーす！詳しい手法については一度技術面とかを含めて練ってから王サマと相談だけど、具体的には光を点けたり消したりの組み合わせで会話するのさ。

モールス信号って言うんだけどね。

アドミラビリスの海域は緒の浜から見える距離にあるから、このやり方が使える」

ペリドット「光をつけたり消したり……」

フォス「そう。例えば木箱を用意して、クラゲに被せたり出したりとかね。……でもこれは極端な方法だから、できれば専用の道具を作りたいのよ」

ペリドット「……なるほど。なら、技師組の出番と言う訳だな。」

フォス「そう言う事。詳しい仕組みについては別途相談させてね。――んで、このホットラインの肝になるのはシンシャなのです」

シンシャ「……え？」

金剛「うむ、この構想を聞いた時点で許可した。……シンシャ、お前には通信使の仕事を新しく頼みたい」

シンシャ「……つうしん、し」

金剛「そうだ。この通信は光を使って行うため、視認性を上げる意図で夜に行われる。ならば夜でも行動が可能な者が適任だ。さらに点灯信号を解読、構築できる賢さも必要になる。夜の見張りと協合する事ができ、さらにシンシャは普段緒の浜近くの崖の洞窟にいると聞いている。

――これ以上の人選はない」

フォス「アマルガム計画は時間が掛かり過ぎるしね。夜から出る事は出来ないけれど、君しかできない、意義のある仕事だと思う。……きっと、楽しいと思うんだ」
シンシャ「フォス……俺の、為に……？」
金剛「モールス信号の対応表が無い為、仕事の内容には信号表の作成も含んでいる。……シンシャ、頼まれてくれるか？」
フォス「もちろん、ボクも手伝うよ」
シンシャ「……。
――はい、わかりました。尽力いたします」
金剛「よろしく頼むぞ」

◆月人について
アレキ「うっし本題ね。待ちわびたわ」
ボルツ「一口に月人についてと言っても、今回考える事が少し多いな。細分化するべきだと思うが」
フォス「そうだね。まずは月人の目的から行こうか」

①月人の目的について

フォス「これまで月人は装飾品や道具に攫った宝石の一部を使ってたことから、装飾品その他に加工する為にボクらの体を狙ってると思われてました。

しかし、希少性が高い筈の宝石の取り扱いは杜撰の一言。ボクらの誘拐と言う低成功率のミッションにわざわざ装飾品つけてきたり、なんか矢の鏃だの今回は牙だっけ？だの見せびらかす度に取り返されています。これもうワザと返してるんじゃないの？と分析していましたが、その理由が分かりませんでした。

しかし今回、月人のあっぱっぱーからそのヒントになるかもしれないセリフを頂きました。はいドン！」

〈そこの壊れかけた機械が王子の言う事を最初から聞いていれば、このような悠久に等しい時を無為に過ごすことも無かったのだ!!〉

フォス「金剛先生への罵倒にすら情報を噛ませてくる驚異のあっぱっぱーセンス、なんかもう色々草生えるわ。シリアスシーンなのにあんまり収穫デカ過ぎるもんだからフォスさん笑いを噛み殺すのに必死でしたよガチで。

これ聞く限りだと、3つの事が分かります。

1．　月人はボクらが知らない先生の出生を知っており、おそらくその情報ソースは先生以外である。

2．　月人は先生にしか出来ない何かを実行させようとしているが、現在それが停滞

し続けている。
　3．　月人は『王子』と呼ばれる命令系統を上に置いて活動している
で、ワザと返してきてる理由だけど……2をさせる為に先生煽ってんじゃねぇの？と言うのがボクの意見。ボクらの誘拐も含めてね」
　アレキ「待って待って、ちょっと聞き慣れない単語出てるからまずはそれの確認させて。まず『キカイ』って何なの？先生が『キカイ』ってどう言う意味？悪口？」
　フォス「あ、そっか。ええっとね……人間が作った、目的を達成するための動く道具、と言えるかな。例えばペリドットと一緒にガリ版印刷作ったけど、あのコピーの過程を全自動でやってくれる物があったりする」
　ペリドット「へぇ、便利」
　アレキ「フォスが昔言ってた『記憶』ってヤツか……人間って実在したのね。先生がその人間に作られたって言うのは何と言うか……少し、複雑だわ」
　ボルツ「ふむ。……先生。先生が人間に作られた道具と言うのは、本当ですか？」
　金剛「……本当だ」
　フォス「……。……そこは、答えちゃうんですね」
　ユーク「ルチルの推理、大当たりだったねぇ」
　金剛「……え？」

ルチル「元はフォスの推理ですけどね」
金剛「……え？」
ペリドット「なんだよお前達、気づいていたのか？」
フォス「まあうすうすは。確定したのは、この間先生の組成がロンズデーライトだって解った時だよ。純粋なロンズデーライトは合成する事でしか得られないと考えられてるからさ」
ボルツ「聞いた事のない名前だ」
フォス「六方晶系のダイヤモンドの事だよ。ボルツのお仲間だけどモース硬度は１０を上回ると言われてる」
ボルツ「ほう……１０が最硬度ではなかったのか」
金剛「……あの」
フォス「うん？――ああ、すみません。議題からズレてましたね。ええとなんだっけ……そう、単語の話だった」
金剛「いや、そう言う事ではなく……」
フォス「え？」
金剛「……。すまない、何でもない。続けなさい」
フォス「はい。で、アレキ。次は『王子』で良いのかな？」

アレキ「そうそう」
フォス「簡単に言うと、王サマの子供の事だね。ウェントリコスス王にオスの子供が出来たらそれが王子。メスだったら王女になる。国の代表者のオスの子供、が定義としては適切かな。だからもしかしたら、月の王がいるかもしれないね」
アレキ「なるほど……この国で言うなら、先生が子供作ったカンジ？」
フォス「そうそう、先生が誰か孕ませたカンジ」
金剛「……悪意のかおる言い回しはやめて欲しいのだが」
フォス「時に、月人が先生に何をさせようとしているか、お話しいただく事は出来ますか？」
金剛「……すまないが、答える事は出来ない」
フォス「言葉を確認します。『答えたくない』『知らない』ではなく、『答える事は出来ない』なんですね？」
金剛「その通りだ」
フォス「了解です。――ではもう一つ。月人の要求に応えないのは、『応えたくない』『応える事が出来ない』のどちらか教えて頂く事は出来ますか？『回答できない』『回答したくない』でも結構です」
金剛「……。……すまない」

フォス「――それは『回答したくない』で受け取って良いですか？」
金剛「……」
ジェード「……フォス」
フォス「うん、ごめんなさい。ボクも無理に聞き出そうとは思って無いです。とりあえず、月人の目的を単語化するなら『先生に何かをさせる事』と言う所で止めておきましょう」
ジェード「教科書書き換えは据え置きだな。この会話の記録も――」
金剛「いや。記録は残しておきなさい。閲覧権限を高める事も不要だ」
ジェード「……先生」
金剛「――すまない」
フォス「じゃ、次に行きましょう」

②月人の行動と対策について
フォス「ユーク、今回の月人襲来だけどさ。間の原方面から来た奴が新型だったりする？」
ユーク「え？……ゴメン、それは把握してなかった。シンシャ？」
シンシャ「それで合っていたと思う。……王の貝殻の件か？」

フォス「さっすがシンシャ！――多分、今回月人は3段構えの作戦だったと思うんです。

1段目は王サマを送り込む為に学校に襲来した月人。可能であればそのままボクらを誘拐する。

2段目は王サマの罠。海に誘い出してそのまま捕獲。

そして3段目は……学校に襲来して、王サマの貝殻を回収。王サマが1段目の折に誰か食べていたら、この段階で誘拐が成立する。先生を煽る目的なら、ついでにここで王サマを殺害できればベストだね。

貝殻の回収は確実性を上げたいから、向かわせるなら新型かなと思ったんだ」

ジェード「ッ、そうか！あの時の月人は間の原の方面から来ていた!!」

フォス「最初の出現位置が切の湿原で、そこからすいーっと移動したってのは月人の限界を感じさせるね。黒点を出せる場所は決まってんのかもしれない」

金剛「切の平原から間の原を通って学校に、とかなりの距離を移動しているからな。最初から学校上空に出ていれば足りる話だ」

ボルツ「あるいは王を乗せていた事、先行して1器出現していた事も何かを限定する要素に絡んでいる可能性はありますね」

ユーク「……怖いね。シンシャがフォスに気付かなかったら、2段目と3段目は成功

していたかもしれないよ」

フォス「2段目成立は会話が前提条件だからそうはならないんじゃ――いや、もしかしたら王サマなら何らかの方法でやり遂げちゃうかもしれないな。

ちなみに、3段目を行うには複数器同時襲来が効果的だ。もしかしたら最近の頻繁な月人襲来は、この同時襲来を疑問に思わせない為の布石だったのかな？」

シンシャ「――もしくは先生が出張る機会を増やし、『瞑想』させる確率を上げる為……とも取れるな」

アレキ「ちょっと、それ……かなりガチで捕りに来てるわね。今回はフォスが全部読み切ったから良かった物の、今後もこのレベルの読み合いしないといけないワケ？」

ユーク「そ、そんな!?僕の立てる作戦計画はほとんど統計を根拠にしているのに、こんな搦手を連発されたら……フォ、フォス助けて！」

フォス「ボクかて毎回読み切る事を期待されるのは困るんですが……まあ、最大限協力はするけどさ。

しかしこのやり口――王サマがぼやいてたけど確かに『人間』のやり口その物だと思うわ。それも、目標達成の為なら外道行為もコラテラルダメージの一言で済ますタイプの！

使った手駒があっぱっぱーだったのが救いだわ。

……さっきまで、もしかしたら今後は月人の行動は交渉にシフトするかもって思ってたんだけど、搦手で押し込まれる事も考えた方が良いかも」

ユーク「ううぅ……そう言えばフォス。話ズレるかもしれないけど、月人襲来の時間気にしていた件は？」

フォス「そう、それ。忘れるとこだった。

ボクらが月人とエンカウントしたのが、どうも学校の月人襲来と同じ時間くさいんだ。月人は待ち伏せ策を取ってたから、その時間はボクらの速度にどうしても依存する。

――って事はだよ？月人は離れた場所と会話できる技術を持ってる可能性がある」

金剛「……私が参加していた為に大急ぎで3段目を実行したか」

フォス「そんな感じです。……対抗する為には、こちらも離れた状態で通信できる手段が欲しいな。無線通信は無理として……例えば狼煙？」

金剛「個人による火の使用は簡単には許可できない。火の取り扱いについては細心の注意が必要だ」

シンシャ「俺が担当する光信号を汎用化するのは？……いや、間に障害物が入る状況が考えられるか」

フォス「あちこちに通信拠点としての塔を建てて、それぞれに通信使置ければまた話

は別なんだろうけどね」

ペリドット「フォスが持ってるホイッスルを皆に回すのはどうだ？音色が違う奴を何種類か作って、状況によって吹き分けるとか」

フォス「いやあれ、同じような音色を作るの大変だって言ってたじゃない。――あ！そう言えばホイッスル王サマに溶かされてそのまんまだ、あっぶね！」

ペリドット「ああ、後で作ってあげるよ。音色の件も……本気で取り掛かった訳じゃないからさ。研究期間くれれば、意地でも何か考えて見せるさ」

シンシャ「――議題からズレてる。遠距離通信方法を模索する事、で結論は止め置いた方が良いんじゃないか？俺も、光信号の研究を進める上で何か思いつくかもしれない」

ジェード「そうだな。掘り下げると技術面の話が大きくなる筈だ。ひとまずはその結論で良いだろう」

◆その他報告など

ジェード「重要案件は大体出揃ったな。濃い話題の後になったが、細かい報告などはあるか？」

ユーク「あ、はい。来月以降の見張り計画、池に落としてしまったのでお時間頂いて

いましたが……今回の内容も含めて、一度練り直させて頂けないでしょうか」
　金剛「もちろん構わない。しかしあまりムリはするな。方針が不透明な中で計画を立てる事は難しい。事ここに至っては、ユーク一人に任せる気はない」
　ユーク「ありがとうございます」
　フォス「あ、ならまだアイデア段階ですが、ダイヤを技術補佐として兼任頂く事は出来るでしょうか？ダイヤの器用さは目を見張る物があります。要領も良いので、仕事に適応するのも早いんじゃないかと」
　金剛「ふむ。ペリドットとスフェンでは足りないか？」
　フォス「望遠鏡を開発出来ないかと思ってるんです。ガラスレンズは火を使う為難しいですが、屈折率と透明度が高いダイヤモンドをレンズに使用する事が出来れば、ガラスよりも効果の高いレンズが作成できるんじゃないかと。
　通信系で手が足りなそうと言うのもあるんですが、ダイヤの加工を扱うのであればダイヤの方が適性が高いと思うんです」
　金剛「――ッ！成功すれば見張り計画に幅を持たせる事が出来るかもしれないな。許可しよう。ただしダイヤの意思は尊重しなさい」
　ボルツ「ぼうえんきょう、と言うのは？」
　フォス「遠くを見る為の道具だよ。より遠くを見る事が出来れば、月人の早期発見や

見張りの負担軽減に繋がるかもしれない。
……あと、同様の技術を使えば顕微鏡が作れる。コッチは近くの、とても小さなものを見る為の道具だ。インクルージョンの観察が可能になれば、医療技術の研究も進むと思う」
ルチル「!?それはとても素晴らしいですね！材料の確保ぐらいは私にもできると思いますし、ぜひ協力させてください！」
ペリドット「ダイヤが無理そうでも、私たちで頑張ってみるよ。それはとても役に立ちそうだ」
フォス「みんなで頑張ろうっ！」
ジェード「うん、希望が見えて来たな。……他にないなら、最後に私から。議題の中にあったフォスの交渉記録だが、この後書き起こそうと思う。興味のあるものとフォスはこの後会議室に残って欲しい」
フォス「え……あれ？ボクも？なんで？」
ジェード「意図が分からない所を解説して欲しいんだ」
フォス「そんな大層なもんじゃないと思うんだけどなぁ……とりあえず、りょーかい」
ユーク「結局全員残ったりして。……残る人、お手上げー？」
フォス「ちょっ、マジで全員っスか!?ナンデ!?ボルツと先生もナンデ!?」

ボルツ「月人が喋った内容も出てくるだろう。心理戦のたたき台に使える」
金剛「今回は私としても学ぶ所が多かったからな」
ユーク「じゃあ、このまま交渉記録に突入だね。――では、この会議としての記録はこれで切りますね」
ジェード「ああ。お疲れさまでした」
一同「お疲れさまでした」

第10話「こんごう」

――明るい空に月が浮かんでいる。
下半分だけ見える月だ。その周りに小さな月がぽつぽつ浮かんでいる。
時々、昼の空に月を見る事が出来る日がある。
そんな日は不思議と、今日のように雲が極端に少ない快晴に近い空が多い気がする。
……絶好の、月人日和と言う奴だ。忌々しいけれど。
「――フォス」
水銀球を浮かべながら、シンシャが廊下の向こうから歩いてきた。
手には先日渡した計画書のコピーを持っている。
「ああ、シンシャ……お疲れ」
「ああ、お疲れ。……何かあったのか？」
「いやいや、昼に出てる月を見てただけだよ。……月人が出そうな日だなと、思ってさ」
ボクの言葉に釣られて、シンシャも窓の外に視線を向けた。
「……不安か。今日は、見張りも少し少なくなるからな」

「参加自由とは言ったけど、ずいぶん興味を惹いたもんだよ」
晴れた日は、好きだ。太陽の光もすごい好きだ。
草原で大の字に転がってウトウトするのも好きだ。
――だからこそ、嫌いだ。
そういう日はいつも月人に邪魔されてきてるから。
「……行こうか。もうじき時間だ」
「……そうだね」
シンシャと肩を並べて会議室へ向かう。
――この晴れた空が、純粋に好きになれるときが来れば良いなといつも思う。

@　@　@

集まったメンバーを見回してみる。
かなりの数だ。中々壮観な絵面だと思う。
「――しっかしまあ、集まったね。確かに興味あれば参加自由とは言ってあったけれど、オブシー（オブシディアン）とアレキ、ゴーストも入って非戦闘系はコンプリートかぁ」
ひのふのみ……と１３名。ボクを入れれば半数来たか。

会議室にこんだけ人が集まる事ってそうそうない気がする。
「本当はベニトも来たそうにしていたのだが、ダイヤがこっちに来たから遠慮したようだ」
「ベニト……そういや、シンシャの部屋の隣だったっけ。ずっともやもやしてたんだろうね」
水銀を制御出来なかったシンシャの隣の部屋を使っているのがベニトだ。
シンシャの水銀は安易に触れればその部位を削り落とすしかなくなる。その為、「毒液はしょうがない事だけど、それでも近くにいるとなんだか落ち着かない」とばつが悪そうに言っていた事があったっけ。
「よっしゃ、じゃあ始めます。計画書のコピーは先生と計画に参加するメンバーにしか配ってないから、近くの持ってる人に見せて貰って。ただ、この会は計画の説明会なので、大部分は計画書に沿って説明する事になる。つまり、あまり計画書見る必要ないです。参加組は解っている事を説明する事になるけどご容赦をば。
――んじゃ、アマルガム計画の説明をはじめるよ」

アマルガム計画。
シンシャの毒液、つまりは水銀を有効活用するために計画された。

その目標は――メッキ技術の開発と、それに伴って必要になる様々な余剰技術の開拓だ。

計画名のタイトルであるアマルガムとは、水銀を用いた合金の事を指している。

例えば金を水銀に接触させると、金が溶けるように水銀に吸い込まれる。

金アマルガムの完成だ。用いる水銀の量が多ければ常温で液体に、少なければ常温で固体になる。

金アマルガムを紙などで水銀を絞り出してあげれば、硬度の調節が出来るだろう。

程よい硬さにした金アマルガムを、薄い酸で洗浄した宝石に厚めにかつ均一に塗布し火にかざすと、水銀が蒸発して金だけが残る。後はヘラなどで残った金を磨いてあげれば、金メッキの完成だ。

つまり、宝石の表面を薄い金属でコーティング出来るようになる。

硬度はあるけど劈開があって脆い、なんて鉱石の場合、この表面コーティングを施すことである程度の衝撃の分散や割れの防止を期待する事が出来るかもしれない。

つまり、靭性克服の可能性があるのだ。

……もちろん、課題はいくつも存在している。

靭性克服の為に理想的な金属の選定。そもそも水銀を扱うため、安全性を保ったまま施術を施せる技術。インクルージョンへ届く光を塞ぐことになるため、マスキングの研

究も行う必要がある。

重要なのは、このアマルガム計画は最終的にはこのメッキによって靭性克服を目指してはいるものの、その過程で生まれるだろう様々な余剰技術を開拓する事も主眼に入っていると言う事だ。

水銀の為の防護服、火の扱い方、水銀の保持技術――色んな壁にぶち当たる筈だ。

これらの壁を突破した時、メッキ技術のみならず、様々な分野で応用の利く技術を手にする事が期待できる。

だからこそ目標の「メッキ計画」ではなく、応用を期待して「アマルガム計画」と名付けた。

危険が伴う長期計画になる。計画を進めて行く内に明らかになって行く細かい課題を確実にひとつづつクリアして行く作業になるだろう。

「――っと、以上が計画の目的と目標、および大雑把な概要になります。技術職についてたり分析にたけてる人は、すでに靭性克服以外の使い道がうっすら想像できているかもしれないね。

そいじゃ、質問タイムに移ろうか」

ババババッと色んな所で右手があがる。

……最初に指す人は決まってた。なんてったって予約されちゃってたしね。
「――うん。それじゃあユーク、どうぞ」
「はーい」
ニコニコしながらユークが立ち上がった。
「これ、概要を聞くだけでもかなりの危険や無茶が思い浮かぶのね。そこで聞きたいんだけど……靭性克服の為のメッキ技術が計画の過程で技術的に不可能と言う事が分かってしまった場合、計画は頓挫してしまうの？」
「うん、真っ先にそこ気になる所だよね。――答えはＮｏ、目標をシフトする事で対応する事を考えてる。名前の通り、アマルガムを用いた技術を開拓したい」
「……なるほどね。目的はあくまでシンシャの為に、か」
シンシャが気まずそうに顔をそむけた。
若干頬が赤くなっている。
ダイヤがそれを見て、口元に手を当てたまま目を爛々と輝かせていたりする。
「次の質問。何回も実験と失敗を繰り返す事になると思うのだけれど、その検体はどうするつもり？……まさか希望者を募るなんて無茶はしないとは思うのだけど」
「それは技術が進んで、計画のホント最終段階になるね。その時はボクが最初に受けてみたいなーなんて思ってるけど、きっと選定方法などは議論する事になると思う。この

計画立案、白状するとボクの靭性をどうにかしたいって思いも多分にあったんだ実は。

……それより前の技術研究段階では、緒の浜に流れ着いた所謂『なりそこない』の結晶を使う事になるね」

「そっか。――聞き捨てならない発言があったけど、とりあえず今は納得しておくね」

「安心しろよユーク。もう首ポロリ事件は俺が絶対に起こさせねーから」

「……その節については大変深く反省しておりますです、ハイ……先生にも念を押されてますんで、勝手に動く事は致しません……」

ボクが最初に受けたい、が地雷だったようだ。

ユークとスフェンが笑顔と言う名の圧力を掛けるのである。

不器用な身を押して無理に工作しようとしたらうっかり首をポロリしてしまった苦い記憶が蘇る。色々被害も出しちゃったかんなぁあの時。

意識を取り戻した時の皆のあのプレッシャーはもう思い出したくない。

「じゃあ最後の質問。技術開発って言うけれど、差し当たって何から手を付けるイメージでいるの？」

「うん。まずは水銀を扱うための環境の確保だね。つまりは防護服の作成、研究場所の確保、汚染のない水銀の長期保存方法の確立かな。……ああ、後は水銀の安全な廃棄方法の確立も」

「思った以上に土台を考えてるのね……解ったわ、ありがとう」
「はい、じゃあ次の人？」
　ユークの質問は本当に根幹的な事だったため、みんなが真っ先に聞きたい事だったんだと思う。
　さっきよりかはいくつか手が下がっていた。
「んじゃあ、ペリドットどーぞ」
「ああ、ありがとう。……ちょっと技術的な疑問になる。
　アマルガムを一度肌に接触させるのが前提になる訳だが、これはそのまま毒液と直に触れなきゃいけないと言う事を意味している。……そんな状態で、私たちの体はちゃんと機能するのかな？」
　もっともな質問だ。
　アマルガム計画その物は良いけれど、医療に向けた設定目標自体が不適切なんじゃないのと暗にペリドットは言いたい訳だね。
「――具体的な所はやってみなければ解らない、と言うしかないけれど、ボクとルチルは高い確率で問題ないだろうと言う意見で一致した」
「ワオ！……って事は、ちゃんとした根拠があるのか」
「ある。――ルチル、頼んで良い？」

「はい、もちろんです」

医療系の説明はルチルの方が説得力あるしね。

バトンタッチだ。

「まず、シンシャの毒液――水銀を浴びる事による作用についておさらいしましょう。我々宝石の肌は、水銀が接触してしまうと透明度が濁り、光が体内に届かなくなってしまいます。その為、接触面を削り除去するしかありませんでした。

一方で、この計画のメッキはコーティングする場所を選択する事で光が入るように調節する事を想定しています。……つまり、考えるべきは『インクルージョンを水銀が侵食するか否か』と言う点のみになります」

「――ふむ」

「そこでインクルージョンの耐性について考えますが……幾つかの実例を挙げましょう。

まずシンシャ自身です。水銀はシンシャの体から滲み出てくるわけですから、インクルージョンは常に水銀に触れている事になります。しかしシンシャに影響はありません」

「いや、それは……」

「まあ、言いたいことは判りますがお待ちを。

次にフォスです。アドミラビリスに食べられ貝殻の一部にされてもインクルージョンは耐え切っていました」

「――ああ、そっちは納得できるな」

「あとは今見張りに出ているウォーターメロン・トルマリンですね。ストレスがたまると電気がたまる特異体質を攻撃に転用していますが、普通、攻撃に転用出来るほど強い電気を通されたら生物は死にます。微生物なら特に」

ちなみに例としては弱いけど、冬担当のアンタークチサイトも挙げて良いと思う。

アンタークチサイトは融解する鉱物で、結晶化する温度が常温以下と言う特異体質だ。

何でもその元素には3割ほど塩素が含まれていると聞く。

微生物にとってはさぞ住みにくい環境だと思う。

「個々人の特異な部分を挙げましたが、それにしても『インクルージョンの耐性の高い者が多い』と言う事に気付いて頂けたでしょうか。特異体質と言うものはもっと奇跡的な確率の上でこそ起こる物ですが、わずか２８名の中にこれほど入っていれば、いっそ別の仮説が立てられます」

「……もともと、インクルージョンはそう言う物だった――と言う事か？」

「その通り。

――しかし海の底で進化し続けていた生物としては、不要な耐性が多過ぎる。酸素を不要とし、かと言って酸素を受ける事で死ぬ事もない。水銀に耐え、酸にも耐え、電撃にすら耐える。電撃に耐えるなら、おそらく熱にも耐性を示すでしょう。

クマムシと言う過酷な環境でも耐えられる微生物がいるそうですが、それすら乾眠する事で耐え凌いでいるだけで活動できる訳ではないんです。しかしインクルージョンは能力を落とさずに活動して見せました。おまけに光さえあればエネルギーも生み出せると言うオマケつき。

完璧な微生物です……まるで、そう『設計された』かのように」

ペリドットが一つの仮説に気付いたようだ。

大きく目を見開いている。

「――話は変わりますが、なぜインクルージョンが共生に選んだのが『鉱物』だったんでしょうね？

フォス曰く、他の動物に寄生してその行動を操作する生命体は人類史においていくつも確認されていたそうです。いくつも実例があると言う事はより進化しやすいと言う事だった筈ですが、インクルージョンは結合方法がバラバラな幾種もの鉱物をその宿主として選びました。

――鉱物で殻を作る生物はいても、鉱物がそのまま生物を成すのは我々だけです。」

ルチルが口の端を持ち上げながらボクに視線を合わせてくる。
――完全にノッて来たらしい。
ボクも苦笑して後を引き継いだ。
「……話をしよう。ボクらのルーツの話だ。……アマルガム計画からは完全に脱線するけど、ちょっと付き合ってほしい」

――これは、まだ実証されていないひとつの『仮説』の話だ。
かつて、この大地には『人間』と呼ばれる生物が繁栄を極めていた。
彼らはボクらと同じ姿をしているが、鉱物ではなく肉を纏って動いていた。
彼らは鳥のように空を飛ぶ事も、クラゲのように発光する事も、海の底で暮らす事も出来なかったが、高い知能と色々な物を作る力に長けていた。
その力で以て空を飛ぶものを作り、発光する物を作り、海の底や空の向こうにさえ住める場所を作れるほどに。
この星に6度目の隕石が落ちる頃……あるいはそれよりもっと前に、人間はとても小さな道具を作った。
目に見えないほど小さい道具。
自分と同じ組成の物を複製し、記録し、与えられた命令を群体で遂行する小さな道具。

まるで微生物のような動きをするそれは、あらゆる分野に適したものが作られたが、総称して『ナノマシン』と名付けられた。

……時期的には6度目の隕石が落ちる直前、もしくは数十年以内の近い年代だったと予想される。

人間はそのナノマシンの技術を使って、一つの命を作り出した。

設計思想の中には『長い時の中でも壊れない事』が少なくとも入っていたと思われる。

人間の男性に似せて作られたひとつの命……彼らはそれに、『金剛』と言う名前を付けた。

「――え!?」

誰の声だったかは定かではなかった。

みんな一斉に金剛先生に視線を集めた。

――当の金剛先生は、声を出す事も出来ずに固まっていた。

「……金剛って言うのは、元は硬度10のダイヤモンドに付けられた名前だった。『壊れない』って言う意味だ。

だから使用されたナノマシンには『自己複製』『行動最適化による保存』『自己修復』と言った保守を行うための機能が多く盛り込まれていたと考えられる。もちろん、その中

には記録や知性と言う要素も含まれていた。
　――あるいは、もはや自分たちにはどうにもならない隕石の衝突を知った人間が、はるか未来に向けて送り出した『生きた証』ってヤツだったのかもしれない」

　――アドミラビリスの伝説においては『月人は人間の魂が月にたどり着いたもの』として描かれている。
　これは、人間たちの一部が隕石衝突前に月へのがれ、その残照が今に至るまで生き続けているのではと解釈する。
　ダメージを受けると霧散するようなフザけた性質がある以上、少なくともそのまま人間という訳ではない筈だ。
　時期的には定かではない。恐らく順番の前後はあるだろうと思う。
　人類が隕石により死滅し、最後に一人残された先生は、唯一の陸として残った貧しい砂浜に居を構える。
　その中で恐らく、体の欠片が海に放出される……とは言わないまでも、少なくとも長時間海に身を浸すような出来事があったんじゃないかと考えている。
　先生を構成していたナノマシンは、それによりわずかに海に放出され、それが幾年の時を掛けて身近にあった鉱物を使い再構成を試み、波に揉まれて分離されを繰り返し、

次第に少しずつ少しずつ増殖していった。
資材に乏しかった海の中だ。細菌みたいに一挙増殖とは行かなかったと思う。
そんな中で、巻貝の一種がナノマシンの含まれた鉱物を食べて自身に組み込みそのまま進化する、なんてエピソードがあった。
食べたら意識や記憶を継承する、なんてことはあり得ないが、長い時間の中で貝殻として構成される事を選んだナノマシンが、自己補完の一環としてその巻貝の脳に干渉し、最適化させるような事があったかもしれない。
人間が居て、その魂が月に行ったと言う伝説が残っていることから、ある程度の記録がそのナノマシンに保持されていた可能性がある。
もしくは、海の底に沈んでいたわずかな記憶素子や人間の記憶電位を、自分自身と勘違いしたナノマシンが自己保存の為に模倣するような珍事もあったかもしれない。
そうやって互いに共生し、そのうち一つの個として確立した巻貝は、その後の進化の中で安定して行く自らの種を『アドミラビリス』と呼称した。
鉱物とは違い肉体で構成された事から不老不死となる事は叶わなかったが、代を重ねる事で命を後世に繋いでいく道を選んだ。
……一方で、そんな劇的な進化を遂げた種族の事はつゆ知らず、素直に鉱物を引き寄せ合成し、せっせせっせと自身を構築していたナノマシンはついに人の形の構成を終え

てようやく砂浜に流れ着く。
　――そこには、孤独に一人残された金剛と言う名の宝石が住んでいた。

「……末端のナノマシンの挙動なんて先生には知る由もなかっただろう。知ってたら逆にボクが驚く。更に先生自身、ナノマシンの詳細仕様や挙動を知らなかった可能性がすこぶる高い。人間が自身を構成する細胞の詳細を知らなかったように。
　――最初に流れ着いたのが誰だったのかは知らない。少なくとも、最年長のイエローでは無かった筈だ。最初はメチャクチャ混乱したと思う。観測機材も何もない陸地だ。ボクらがインクルージョンと呼ぶ微小生物が光を受ける事で生きている、なんて情報を確信するにも長い時間を費やしたと思う。
　先生は、得体のしれない目に見えない要素を、人間をベースに進化した微小生物であると判断し、それを教科書に書き残した」
　――どうですか?と、視線で先生に問いかけてみた。
　先生は、相変わらず声も出せずに固まっていた。
　余裕そうな表情をしているのはこの話をあらかじめ知っていたルチルとユークだけで、他の皆の表情も先生と似たり寄ったりだ。
「――まとめよう」

ボクはこの国全部を示すように両腕を広げた。
「かつてこの地にいた人間が先生を作った。そしてその先生が、アドミラビリスやボク達を作った。
——ボクたちは、先生の子供で、兄弟だったんだ」
ボクたちは、国と言っているけれど、その実家族のように暮らしてる。
だから年長組の事をお兄ちゃんと呼んだりもしている。
王サマと海で駄弁ってた時、「人の父親口説くなよ」と口にした事もある。
先生は父親同然じゃないかとボクは言った。
——ボクは、比喩で語ったつもりはなかった。
この国にいるのはみんな兄弟で。
先生は、ボクたちを愛で包んでくれるお父さんだ。
「……惜しむらくは」
苦笑しながら広げた手を下す。
「この仮説はまだ実証されていないって事だ。すべての事に辻褄がつくけど、辻褄がつくだけで物証が出ていない。
——だからボクは、物証が見つかるまで黙っとく予定だったんだよ?ルチルがこれ見よがしに振るからさぁー」

「おや心外。あなたもノリノリだったではありませんか。こういう仮説はみんなに披露したくてウズウズするものです」

まぁーそうだよね。

この仮説を構築したのが今年の初め。

これまで発見されていた事象がすべて説明出来ちゃったもんだからマジだったらすごくね？ってテンション高かったのを覚えてる。

その後、先生が人間に作られていた事が発覚したりボクのインクルージョンが酸にも耐えたりと学説を肯定する事象がポコポコ出てきたものだからなおさらだった。

物証が出て大発見とあいなったら、学者先生張りに伊達メガネ作って白衣来て盛大にお披露目するつもりが１年持ちませんでしたね。

こんなみんな（ではないけど）集まった機会の上に話を振られたらそりゃ持ちませんわ。

ガマンできへんかったわー。

「――私には……」

先生の声が震えている。

「私には、人間のように泣く機能はない。――しかし、時々無性に目を覆いたくなる時がある。

幾ぶりだろうか……目を覆いたくなるほどに、嬉しいと感じた事は……っ」

震えた手で目を覆っている先生に向けて、ニコニコした声で「ぱぱーっ！」「お父さーんっ！」と言う合いの手が入った。

「ああ……本当だったら、嬉しいものだな……」

恐らくは『記録』を持つ先生がこの反応であるならば、それを否定する材料はないのだと思うのだ。

他は知らないけれど、ボクの中ではもうこの説で確定してたりする。

先生に近づいて背中に手を当てた。

「……ちなみに。この学説を証明する超重要な役割を担うのは――そこにおわす女神ダイヤにございます！」

「ぱぱーっ……って、ええ？僕？」

ノリノリで合いの手入れてたところにいきなり振られたダイヤが、無茶ぶりされた芸人のように慌てている。

「その通り！こないだ技師兼業をお願いしたじゃない？開発して貰いたいレンズの技術は、うまく応用するととても小さい物を見る事が出来る顕微鏡と言う道具を作る事が出来る。お願いした時に説明したね？」

「え、う、うん」

「顕微鏡作製に成功したら、インクルージョンを直接観察する事が出来るかもしれない。そうすれば――その外覧や振る舞いから、さっきの学説を証明する事が出来るかもしれないのだ!!」
「「おおおおっっ!!」」
「医学も飛躍的に発展しますよ。何せ接合の過程を直に見る事が出来るんですから」
「「おおおおっっ!!」」
「ボクたちの希望に続く技術を担う――そう、まさしくダイヤは女神！」
「女神ダイヤ！」
「女神ダイヤだ!!」
「なにとぞー、なにとぞー」
「え、ちょっ、なによこれぇーーっ!?」
「……女神ダイヤ」
「先生までっ!?お願い勘弁してぇーーっ!!あーんもうフォス、覚えてなさいよ！」
「フォーーッツスフォスフォスフォス!!」
「おまえなんだその笑い方キモイ。『アフォスぎ』になってるぞ」
「かっはぁっ!?」
シンシャに心臓抉られた。

覚えてろと言った直後にファンネルで堕としに来るとは、さすが女神ダイヤ尊い。

「――我儘になってしまうかもしれない。ゆっくりで構わない……頼んでも良いか、ダイヤ」

先生がダイヤの肩に手を置いた。

「あう、うぅ……はい。ガンバってみます。僕も仮説通りなら嬉しいですから。……でも女神はやめてくださいぃ」

「女神ダイヤ！」

「女神ダイヤっ!!」

「へーんっ、みんながイジメるのーっ！」

そりゃ、指つつき合わせながら『ガンバる』とか尊い真似したらこうなりますよダイヤさん。

ダイヤは女神。ハッキリわかんだね。

「……うーっしゃ、収集付かなくなるのでこの辺りでペリドットの質問は回答したって事で良いよね。話ぶっ飛ばした元凶が言うのもアレだけど、頭を元に戻そっか。

アマルガム計画について次の質問は――」

ゴーン……ゴーン……ゴーン……ゴーン……

――おいおい。
「……月人か」
「月人だな」
「ホンッと、水差すように来てくれるわぁ……」
襲来を叫ぶ鐘の音に、いっそボクが目を覆いたくなった。
「――報告！青の森に月人１器！エイティーフォーが対応中！」
アメシストが飛び込んで来る。
アメシストは双晶だ。対応しているのがエイティーフォーなら、報告に来たのはサーティースリーか。
「わかった、すぐ行こう。――速攻で終わらせる」
「ご一緒します」
「うむ」
先生が切り替えるように袈裟の位置を直した。
……なんか、気合がもりもりだ。
「あはぁー、パパ張り切ってますねぇー！」
「……パパ？」

「あとで教えてあげるねぇー！行ってらっしゃい！」
オブシーの声に首をかしげながら、アメシスト・サーティースリーが駆けて行く。
あわただしく戦闘組が居なくなると、会議室は少しばかり沈黙に包まれた。

「……月人が来た日は、いつも嫌な不安に襲われるんだけどさ。なんか今日は、それが浮かんでこないや」
「頼もしいよねぇー」
――窓から空を眺めてみる。
下半分だけ見えた月が浮かぶ、快晴の空だ。
こんな日は好きだ。好きだからこそ、嫌いだったけど……
――今日は、『いい気味だ』って感じがした。

第11話「冬」

――ミリオンダウトッッ!!
それは大富豪とダウトを融合させたトランプゲーム！
戦略が絡むものの結局運の要素が強い大富豪ではあるが、これにダウトのルールを付け加える事で一転、心理戦のゲームに変わる。
基本は大富豪と同じだが、プレイヤーはカードを場に出す際、カードの番号を宣告し、裏返しにして出す事が許される。
そのカードが宣告と違うと思ったならば、ダウトの宣言を行うのだ。
ダウト成功ならば場に出ているカードがすべて嘘をついたプレイヤーの手札に加わり、ダウト失敗ならダウト宣言したプレイヤーの手札に加わる。
この駆け引きに高度な心理戦が求められるのだ!!
――そして今！
最終戦ボクの手札ッッ!!
絵札無し！8無し！2も無し！

ブタ!!圧倒的ブタッッ!!
しかも後攻ッッ!!
なんで……!この局面でこの手札事故……!
最終戦初手……故意にダウト失敗して手札を回収しても強いカードは見込めない……!
手が進めばダウト失敗はバースト必至……!
ぐにゃあ……!
圧倒的ぐにゃあ……!
「わぁ、この局面でこれって僕ツイてるかも。いいカードいっぱい来ちゃったよフォス」
しかもダイヤ……!のんきな声でなんか言ってるっ……!!
ポーカーフェイスなど不必要!裏出しはほぼダウト誘引のためのブラフ!!
この女神、素で運が強すぎるっ……!!
「じゃあ最初はねぇ……はい」
初手、『4』の三枚出し……1枚裏は誘引の罠!
3枚は流石に多い……3枚は嘘だろう……初手ならダウトされても被害は最小限……と、思わせながら実は真実……!
この毒牙にかかって討たれた者多数……!

「――スルー……！」

――フォスフォフィライト、罠に嵌らず。

華麗にもこれをスルー……！

しかし3枚に対抗できる手札はない。

止むなくパス。苦渋のパス……！

順番がダイヤに戻る。

手札に手を掛けるダイヤ。

「良かったあ……じゃあこれ、ドン！」

しかし次に出された圧倒的暴挙っ……！

――『7』っっ!!『7』の3枚出し2枚裏っ……!!

「なん……だと……っ!?」

現在ルール……初期手札7枚……11枚バースト終了……！

ダイヤの手札は残り1枚……つまり、ボクがスルーした瞬間ダイヤが上がりボクの敗北確定……！

しかしダウト失敗してもバーストで敗北確定……！

初手の3枚出しを見逃した事から、ボクに対応出来るカードが無いと見切られた上での戦略っ……！

しかし、いくらダイヤでも3枚出し2連……そんなことがあるのかっ……!?

沸き上がる疑問……暗闇の中で探す蜘蛛の糸っ……!

「――ッ!?」

そして……見つけた光明っ……!

ボクの手札には――2枚の『7』ッ!!

「く……く、くくくく……」

トランプの同じ数字は4枚まで……!

あり得ない……!あの3枚出しはあり得ない『7』……!

嘘にまみれた虚栄の『7』っ……!

「驕り……油断……!しかし敬意を表そう……この局面で豪気な3枚出し2連続っ……!

屈しないっ……!ツキはボクに味方したっ……!」

ダウト宣告ではすべての場のカードが裏返される……!

場のカードはダイヤのカード100%……!このダウトでダイヤがバーストする事はないが、故にダイヤの手札が丸裸になる!

それであるなら、目がある……ボクに勝ちの目が出てくる……!

そう、ダイヤは女神……堕とす事は許されぬ……!

しかしこの場は堕とす……この場だけは君臨を許さぬっ……！
ダイヤの虚栄の衣を剥ぐ……！コレは反逆の刃っ……！
「ダウト……！ダウトだっ……!!」
ダウト……！
圧倒的ダウト……！これは正義のダウト……！反逆のダウトっ……！
「はーい残念。ジョーカーと『7』2枚でしたー」
「うそだあああああああああああああ!!?」
フォスフォフィライト、カードを一枚も出せずバースト。
――再起不能（リタイヤ）
おごごごごごごごごご……
「うわあ、最初の3枚も本物だぁ……最後の一枚なんだったの?」
「ジョーカーだよ、ほら」
「こわぁっ!?」
「何もさせずにしゅんころか……」
ダイヤには勝てなかったよ……
「はい、そんな訳で結果発表ー。最初の担当はフォスとシンシャでぇーす!」
冬担当決定ミリオンダウト総当たり戦。

非戦闘員最下位でござる。
同じく戦闘員最下位のシンシャとペアか。
まあ、安心感は半端ないけどさ。
「なんやねん……あのバカヅキなんやねん……」
「それも凄かったけど、それ以上にお前は始終運が無かった気がするな」
「そんな中、革命起こしたりダウト誘引したりで必死に勝ちを拾ってたのよ。ブービー賞として崇め奉られるべき」
「ああ、うん……後ろで見てて戦略は純粋に凄いと思った。……特に盤外戦術とか」
しかし如何せん、立ち回りが賢し過ぎた。
このミリオンダウトは勝つと残った相手の手札がそのままプラス点になる訳だけど、ボクの勝ち方だと1枚勝ちとか2枚勝ちぐらいにしかなんなかったしね。
翻って、負けると自分の手札がそのままマイナス点になるから大負けすると負債がヤバイ事になる。
何も出せずに6枚追加バーストしたこの一戦は致命的だったわ。
シンシャもダイヤに同じような負け方して転落しちゃったのよね。ダイヤチート過ぎませんか。
「ただまあ、シンシャも初めてにしてはベテラン相手に凄い旨く立ち回ってたよね。凄

いと思うわ」
　いつもは水銀体質を忌諱して引っ込んでしまうシンシャも、この冬のメンツとしては非常に有用だったので無理やり引っ張り込んだ訳で。
　ボクとしてはシンシャと一緒に遊べたのでその辺りは結構満足。
「おほほほほ――ごらんダイヤ。あれが傷を舐め合う敗者の姿よ」
「ちょっと、可哀そうよ」
「クソがっ！アレキめ覚えてろよ！」
　非戦闘員2位だからって上から見下ろしやがるコイツ。
　この冬お休み確定だからなぁ。
　戦闘員1位のダイヤもお休み確定。
　この立場の差よ。まるで芸能人格付けチェックのような気分になるわ。
「でも組み合わせとしては理想的じゃない。凄く安心して任せられるわ」
「……そういう意味では、こんな決め方で良いの？って感じはするわね」
「ランキングに関係無くテコは入るから問題なし。非戦闘員＆総合1位のユークも出勤決まってるしね」
　ユークＶＳダイヤは見ものだったな。
　大抵すぐに決着がつくミリオンダウトで大接戦してくれてたし。

ダイヤが目を輝かせながらシンシャに言う。
「シンシャ、頑張ってね。僕応援してるから！」
「うん？……ああ、大丈夫だ。俺はもともと夜でも動けるから、光の少ない冬でもそこまで支障はない筈だ」
「んもう、そうじゃなくてフォスとの事よ。せっかくペアになったんだからガンガン行かなきゃ。――押し倒しちゃえっ！」
「お前は一体何を言ってるんだっ!!?」
「え？ボクシンシャに押し倒されちゃうの？……うん、ちょっと体洗ってくるね……待ってて？」
「タチの悪すぎる悪ノリをやめろ!! いい加減にしないと砕くぞお前っ!?」
今日も正常運転です。良きかな良きかな。
『――シンシャがフォスを押し倒すと聞いて』
「うあああああああっっっ!!?」
不意に窓からハイひょっこりしたピンク色が出てきた。
「――え!?王サマ!?なんで!!?」
『やっほー』
しかも人型バージョンである。

脇に特殊な形状をした器を抱えながら暢気に手を振っていた。
あの器は、帰る時にウミウシモードで収まりつつ、海域付近まで先生に投げて貰う時に必要とされる。
「え!?王サマって……あのウミウシか!?」
「人型になれるとは聞いてたけど……！」
『うむ！アドミラビリス族の王、ウェントリコススである!!この姿だと言葉もちゃんと解るであろう?
――まあ、わしらの海域から出てしまうとこの姿も長く持たんのだがの。せいぜい数十分でぷりちーサイズに戻ってしまうのじゃ』
「すごーい、ぽよぽよしてる！クラゲみたい!!」
「その胸の水袋なに?こわいねー」
「何!?その服みたいな膜なに!?僕のイメージが凄い掻き立てられるッ!!」
『わっはっは、苦しゅうない苦しゅうない』
大人気ですね王サマ。
まあ、みんなの気持ちもわかる。
「――しっかし、どうしたのさいきなり?ホットラインの打合せは春だった気がしたけど、もしかしてボク間違えてた?」

『いやいや違う違う。もうそろそろ本格的に冬になるからの、こっちに来れなくなるんで挨拶に来た』
「ほへぇ……アドミラビリスも冬眠するんだ」
『いや、冬眠はせんよ？ただ流氷がわんさか来る時期になるから、単純に海上に出るのは危なくてな』
……あー、なるほど。
基本的に海中で完結する種族だものね。
流氷相手にするのは厳しいよね。
『『も』って事は、宝石は冬眠するのか？不老不死って言うから意外じゃな』
「ボクら、光を受けて動いてるからね。光の質が低下する冬はあまり動けなくなるから、いつもは冬眠して春を待ってるんだよ。……ただ、今年は月人の動きがちょっと異常だったから、特殊シフトを組んで警戒する予定なのね」
『はーん。……月人か……。すまんな。今の有様では力になれぬ……』
「焦んない焦んない。まあボチボチ頑張りましょうや」
冬場はほとんど晴れないから月人襲来が極端に減る。
晴れてない日は『来れない』とボクたちは解釈している。
……だからこそ、なんか本気を出してきてた今年は冬突入前に襲来ラッシュが来ると

思っていたんだけど……むしろ例年より少なくなった頻度で気味が悪い。
『――時にフォスよ』
「うん？」
『シンシャに押し倒されちゃうらしいが、お前たちやっぱえちぃ事は出来るのかのぅ？ｗｗｗ』
「えー、そこ聞いちゃう？困っちゃうなぁーｗｗｗ」
「おまえらホントいい加減にしろよ!!?」
王サマもそろって平常運転です。

＠　＠　＠

「――と、言う訳だ。今年は警戒要員として戦闘員と非戦闘員を一人ずつ、ローテーションで参加させる事になった。最初の二人はシンシャとフォスフォフィライトになる。アンタークチサイトには、これまで通り冬の作業を継続し続けて貰う。一人負担を掛けるがよろしく頼むぞ」
「そう言う事でしたか。――はい、わかりました。お任せください」
ピシリと『気を付け』の姿勢でアンタークが応答する。

アンタークチサイト。
硬度はボクより半分低い3。パーソナルカラーは銀白色のハンサムさん。
性格も見た目も宝塚に出て来そうな気がしています。
特筆するべきはその体質。
水と塩素とカルシウムで出来た彼の体は25度以上だと融解するが、それ以下だと人の形を取り寒くなればなるほど強固になる。
冬の仕事のエキスパートだ。
「そんなわけで、アンタークちんよろしくねー！冬の仕事も頑張って手伝うよ！」
……なんか微妙な顔をされてます。
「お前、私より硬度が半分高いのに、私以上にパキポキ砕けていると聞いてるぞ。そんな脆さできつい冬の仕事が出来るのか？」
「――大丈夫だ、問題ない」
ドヤァァ……
「……その根拠のない自信はどこから来るんだ。不安だ……」
「アフォスの時はそもそも人の話を聞かないからな。一つも当てにしない方が良い」
「ああ、なんかそんな感じがするなアフォス。とりあえずそのムカつくツラやめないか？」

「……さすが冬、風当たりがキビシーっすわぁ……」
渡る世間の冷たさがデリケートな身に堪えるぜ。
――でもフォス負けないっ！こんなことでクヨクヨしてたらお天道様に笑われちゃうモンっ！
「そのお天道様は今、雲の向こうで休暇取ってるんだが」
「先生、こいつだけうっかり海に沈めませんか？」
「フォスは頼りになる時はホント頼りになるので止めてあげなさい」
おまえらおぼえてろよちくせう。

@　@　@

光が薄い。
雪はかろうじて止んでるけど、白いブ厚い雲が空を覆ってる。
前は普通に見えるけど体が重い。
――これが冬か。
「……大丈夫か？」
「へっへっへ……まだまだフォスさんは空だって飛べるぜいえあぁぁ……」

「……。まあ、こうなるよな」

アンタークちんとシンシャたんはケロッとしていらっしゃいます。

ちょっと納得いきませんよ。フォスさん納得いきません。

「シンシャは水銀で光を集める体質だから解るけどさぁー……アンタークちんは何故に平然と出来るのよ……」

「慣れとしか言えないな。私だって夜ほど光が薄くなれば眠くなる」

「少ない光でも動けるように、インクルージョンが最適化されてんのかねー……」

なんだっけ……量子ドット太陽電池、だったっけ?

理論上、太陽の光をもっとも効率的に受けれる配置ってやつがあるんだよね確か。

あんまり光が少ないとインクルージョンがそういう形に配列しようとするのかも。

ボクらの順番が満了するまでに対応してくれるもんですかねぇ……

春になって冬眠から覚めた時、溶け残った雪を結構見た事がある。

それを見て、なんとなく「ふーん、雪降るんだな」ぐらいにしか思って無かったけど、こりゃあとんでもない。

銀世界だ。5～60cmは積もってやがる。しかも、これでまだ序の口なんだとか。

ひと冬で晴れ間が覗くのは平均10日ほど。

まったくアンタークちんには頭が下がるよ。

「――ここだ」
　雪に足を取られながらえっちらおっちら歩くと、今度は雪の平原ではなく氷の岩場が並んでいた。
　板状に凍らせた氷に両側から圧力を掛けてへし折ったような様相がずっと向こうまで続いている。
「え……これもしかして流氷？全部？」
「そうだ」
「っつーとコレ、海ですかぁ？」
「そうだ」
「うっはぁ、こんななっちゃうの冬って……」
　シンシャが飛び出した。
　ボクらを手で庇いながら盾になるように立ちはだかると、水銀球を半分前方に配置して臨戦態勢を取る。
「――大丈夫だシンシャ。あれは月人じゃない」
　アンタークが制した時点で、やっとボクはシンシャが見ていた物が何なのかに気付いた。
　皿のように広い氷の中央に、まるで座すように配置された氷のオブジェ。

「え……なに、あれ……月人……？」

「――のように見える、ただの流氷だ」

まるで月人の黒点のように頭の位置から八方へ伸びる放射状のツララ。

月人が海に叩きこまれてうっかり凍り付いた、と言われれば信じてしまいそうな形をしている。

……って言うか、え……？本当にただの流氷？

王サマ騒動の時にアクレアツスにラリアットぶち込まれた時の月人のなれの果てとかじゃないの？？

「ただの流氷が、あんな形になるのか……？」

水銀球を定位置に戻しつつ、訝しげにシンシャが眉をひそめてる。

「海が凍る時、海底の微小生物を含んでいるとあのような形状になるそうだ」

マジかよ。インクルージョンがハッスルして作ったオブジェか。センスねぇな。

「ただの流氷だが……一度だけ先生が『罪深き者』と呼んだのが……何故だか忘れられない」

「……罪深き、者……」

思わしげなキーワードを口の中で反芻する。

……なんだろう。先生の月人に対しての解釈的なものか？それともインクルージョ

ンに対してだろうか……？
意味深な言葉だと思う。
ギィ……ギギィ……ゴォォンンン……ギシギシギシ……
流氷同士が波に揉まれてぶつかり砕け、擦れ合わさって不快な音を立てる。
黒板を引っ掻くような生易しい物じゃない。まるで体の中に侵入して来そうな嫌な音だ。
「……っ、凄い音だな……」
まったくだ。流氷って言うのは、こんなデカくてヒドい音を出す物なのか。
「まだだ」
「……え？」
アンタークが、睨みつけるように流氷の岩場を見つめている。
「これからだ――来るぞ」
アンタークからの警告。
その警告から、たっぷり3秒ぐらいの間があった。
――それが、来た。

――ギャアアア

耳をつんざく様なとか、まるで雷鳴の様なとか、そういう形容詞すら生ぬるい轟音だ。
大音量のハンマーが、空気を貫きボクの体を突き抜けて行く。
辛い。苦しい。助けて――そんな負の感情を圧縮したようなそれに晒されたボクの体は、ビリビリと恐怖するように震えて小さな亀裂を刻み込んだ。
（あ……あ、あ、あああ……っ!!?）
振動する空気の中で、耳を押さえて屈み込むシンシャが見える。
向かい風に立ちはばかるように、微動だにせず流氷を睨みつけるアンタークが見える。
その轟音が収まってきた辺りで、初めてボクは音の暴力に負けてヘタり込んでいた事に気付いた。
「な……ん、だよ、今の……？」
……流氷が出した音……？
本当に……？
震える腕を見てみれば、肘から上に小さなヒビが入っているのが分かる。
「フォス！……今のでダメージ受けたのか!?」
「む……？」

さ……ＳＡＮチェック入るレベルだったぞ、今の。
心臓が耳元でバクバクしているような気さえする。心臓ないけど。
へたり込み固まったまま、なんとかシンシャとアンタークに視線を投げた。
二人の体には、ボクのように亀裂が入ったような様子は見受けられなかった。
「あ……あは、は……この中じゃ一番硬度が高いボクだけ、ダメージ入るなんて、ね……」
軽口が、いつもの様に出てこない。
「……。音は空気の振動、波の伝達だ。流氷からの距離や角度によっては、体が共鳴してダメージを負う事もある。……私も数えるぐらいしかないが。
――待っていろ」
脇に抱える剣をすらりと抜く。
アンタークが持つそれは、月人を斬る普通の剣とは違い、のこぎりのようにギザギザした刃を携えていた。
「仕事は、これだ。この、大きな流氷同士が擦れ合うときに発生する不快な轟音が皆の眠りを妨げるので――砕く」
アンタークが流氷に向かって走り出す。
雪の粉を舞い上げて飛び上がり、流氷の頂点に着地すると――アイスピックのように尖った鋭いヒールを使って流氷に次々と穴を空けて行った。

――カッ、カッ、カッ、カッ、カッ、カッ、カッ!!

氷の頂点から根本まで直線状に空けた穴に向かって振り返り、のこぎり剣を大きく大きく振りかぶって叩き下ろす。

その剣の衝撃はヒールであけた穴を一直線に走り抜け、流氷を砕き崩した。

「――っと、まあ……こんな感じだ」

「う、はぁ……」

以上終了、とばかりにぼくに振り返るアンタークの後ろで、砕け崩れた流氷が海面を叩き、いくつもの水柱を上げていた。

あんまりあっさりこなしてくれるものだから、開いた口が塞がんない。

「――さて、やってみろ……と、言いたいが……流石にその腕のままだと危険か。よほど直撃を受けたようだ……運が無いな」

「運……また運っすかぁ……」

「……?」

とりあえずアンタークの疑問に苦笑いで答えておく。

ミリオンダウトでボコボコにされたことは言わない。

……そう言えば、アンタークちんとも遊んだことないなぁ。今日あたり誘ってボクがボコボコにしてやろうか。

クックック……初心者相手なら勝てるっ……！
「――シンシャ、お前もやってみるか？」
「ああ……このぐらいなら大丈夫だと思う。ここまで至近距離で、かつ止まった的が相手なら……二つぐらいで十分か」
ボクの邪な企みを他所に、シンシャが流氷割りを試す事にしたようだ。
アンタークが剣と靴を差し出してみるが、シンシャがそれを手で制して断った。
近くにあった大きな流氷に無造作に近づく。
――水銀球が二つ、シンシャの前に移動する。
少しの間の後、ぱすっ、ぱすんっ！と軽い音と共に流氷に小さな穴が開いた。
そして更に間を置いて……
――ビシッ……バキャアアアアッッッ!!!
「――おおっ！」
流氷の内側から幾つもの銀色のトゲが突き出たかと思うと、そのまま破裂するような様相で流氷が崩れ落ちた。
崩れた流氷の中から、二つの水銀球がゆっくりとシンシャの傍に戻って行く。
――どうやら水銀球を中に潜り込ませ、放射状のトゲで中から穴をあけた後、そのまま内側から膨張させて割り崩したようだ。

ボチャボチャと海の中に沈んでいく氷を見て、シンシャが安心したように溜息をつく。

「――良かった……どうやら汚さずに終わったな」

至近距離で集中する時間をくれるならば、汚染は出さず完全に制御しきれるらしかった。

「すごいなシンシャ！これなら即戦力じゃないか……冬の仕事がずいぶん楽になりそうだ。その……毒液の球か？凄い制御力だな」

「あれこそシンシャの至った水銀奥義――月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）！相手は死ぬ」

「え？……ヴぉ？」

「――だから！変な名前で呼ぶのやめろって言ってるだろっ!!」

汚染さえ無ければ何でもソツなくこなしてみせるシンシャは、どうやら冬の仕事とも相性は良いらしかった。

うんうん、やっぱ硬度よりも応用力と機転だよね。

……ところで、ボクはこの冬、彼らにちゃんとついて行く事は出来るのでしょうか……？

第12話「流氷」

――リベンジでごっ。

流氷の大将首ば、こん手で取りもす。

先日は流氷によるまさかのジャイアンリサイタルでＳＡＮ値直葬不可避の敗北を喫したが、不退転の覚悟で持って相対すれば、あんな物はただの断末魔よ。

カツカツ丁寧に穴をあけてブタのようにバラしてくれるわ。

チェスト流氷。チェスト流氷にごつ。

シンシャとアンタークは「あ、これダメなやつだ」とか言ってたけどアレはただの負け惜しみだ。

昨日の夜に二人揃ってミリオンダウトでボコボコにしてやった事をさもしく恨んでやがるのだ。

初心者相手に盤外戦術フル活用は大人げなさ過ぎにも程があるだろお前と甘えた事を抜かす奴らに、勝負の世界とは何かを教えてやった事を逆恨みするとはなんと器の小さい奴らだ。

最後はカチキレたシンシャとのイカサマ合戦に発展して逆にボコボコにされたけど、アレはイカサマだからノーカン。器用さ最低値のフォスさんにイカサマ合戦しかけるなんて大人げなさ過ぎるにも程がある。しかも二人がかりだぞ。泣くぞ。

ピック仕様のヒールとノコギリ剣は装備済み。

ノコギリ剣はちょいと重いがなんとか降り回せないほどじゃない。あのフザけたジャイアン叩き割るにはむしろこのぐらいが丁度良いってなもんだ。

さあ流氷君。先日の借りを返しに来たぞ。

小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はＯＫ？

「――セット！」

見よ！これこそがフォスフォフィライト必勝の御構え。クラウチングスタートのお姿である！

「……ダメだなこれは。ヘルプ準備入っとく」

「ああ、頼むぞシンシャ」

くっそ、アイツ等もう完全に失敗ムードだ。

見てろよド肝抜いたらぁ！コッチには秘策ってヤツがあるんだよ！

ド肝抜いたらぁっ!!（二回目）

「――ゴーッッ!!」
流氷に向かってダッシュ！――そしてジャンプ！
頂点に着地していざ行かんっ！
「ほあたたたたたたたたたたぁっっっ!!」
――秘策そのいちっ！いつもより余計に穴を空けております作戦っ!!
アンタークが事前にやって見せたよりも当社比3倍ぐらいの気持ちでヒールピックを落としまくる！
気分は腿上げトレーニングが如し!!
「おお――結構バランス良いじゃないか。穴もしっかり空けてってる」
「……」
カカカカカカッッ！と魂の１６連打が流氷の表面に突き刺さる。
ついでにシンシャの怪訝な目線もボクに突き刺さってる。
振り返る。
視界に入る楔の穴は我ながら上手く行ったようで、ビッチリ間隔の詰まった点線が流氷に刻まれている。
――行ける！間髪入れずに秘策そのにっ！
穴の末端で砕くのではなく、ボクはそこからさらに１０歩程助走の距離を取った。

アンターク程パワーの無いボクは、この助走距離を破砕パワーに変えるのでごつ!!

八相の構えをさらに大きく振りかぶった独特の構え。薩摩示現流、初太刀決殺の蜻蛉を取る。

――やってたのかって?ただの見様見真似だいっ!

ちなみに示現流は超攻撃脳筋だから、敵の攻撃に備える、つまり防御を意味する『構え』と言う言葉が大嫌いなんだ!だからこれも『蜻蛉に構える』じゃなくて『蜻蛉を取る』って呼ぶんだぜっ!これ豆なっ!

そして流氷に向かって猛ダッシュ!

さあ覚悟は良かか流氷め、こんフォスフォフィライト渾身のチェストばしっかと思い知らせてやう!

受けてみい!新選組局長・近藤勇をして「初太刀は何としてでも外せ」と言わしめた、戦闘民族薩摩の剣!(気分だけ)

「チィィェエエエエエストオオオオオオア゛ア゛ア゛ア゛ア゛アアアァァッッッ!!」

裂ぱくの気合を込めた猿叫と共にノコギリ剣を振り下ろす。

助走とついでに跳躍も載せた渾身の一撃は、細かく開けた穴を通してビシビシッと稲妻のような亀裂を入れた。

「――おおっ!?」

「これは……っ!?」

バキィィィンッッッ!!

そしてついに負荷に耐え切れず、乾いた音を立てて砕け割れる。
全身全霊を込めて撃ち放ったボクはそれゆえに動く事が出来ず、チェストを放った体勢のまま、砕けたそれを視界に映していた。
――流氷は、西の浅瀬を映したような、とても美しい薄荷色だった。
……。
……。
「……ご、誤チェストにごわす……」
こや目当ての流氷じゃなか。
砕けたのはおいどんの腕にごつ。
またにごわすか。
――またにごわすかっ！（二回目）
「……。うん。
……まあ、惜しくはあった、うん。惜しくはあったと思うぞ……うん。

もう一発打ち込めば流氷も割れてたとは思う」
「アンターク。流氷ひとつ割るのに体が2回砕けるのはダメだろう」
「き、厳しいなシンシャ……」
「こいつは褒めると際限なくつけあがるんだから、うかつな事は言わない方が良いぞ」
そんな事無いですよー。
フォスさん褒めれば伸びる子なんですよー。
シンシャはもうちょっと愛をくれても良いと思うんですよー。
刺さってんの。ツンデレのツンがすっげえ刺さってんの。
「お、おのれ流氷め……今はその勝利を噛み締めておくが良い。たとえボクが倒れても、第2第3のフォスが必ずや貴様を……」
「おまえが2人も3人もいたら悪夢その物だろうがバカ。お前は今後一切、流氷割り禁止だ」
(・ω・)そんなー
「幸い、そこまで盛大に砕けている訳じゃ無いのが救いだな……ああ、欠片を拾って医務室に戻らなくては……」
「来たばかりなのにトンボ返りか」
「――あ、フォスさん砕けやすいので外出時は糊を常備してます、ハイ」

「……。悲しい周到さだな……」
「なら、処置だけはこの場で出来るな。シンシャ、私が処置するから流氷割りの方は頼む」
「ああ、分かった」
フォスフォフィライト、校内勤務確定の一幕でございました。

@　@　@

体育座りして二人の流氷割りをボケッと眺めている。
それしかする事がないのである。
もはや何もするなとのお達しでございます。
くそう、フォスさんは寂しいと死んでしまう事を知らないらしい。
くそう。くそう。
……。
……？
なんか、シンシャの水銀球がスゴいゆっくりしている気がする。
汚染を出さないように気を使ってんだろか？

「シンシャー、シンシャー」
気になったので呼び掛けてみた。
「……うん？」
「シンシャさ、もしかして調子悪い？」
「調子？……ああ、この球の事か」
近くで良く見ると、表面が絶えずぐにぐにと動いている。
ただ、そうなっているのは流氷割りに使っている2つのみで、他の球体はピクリともしていない。
「……どうもな。毒液が凍ってしまうみたいなんだ。作業に使うこの二つだけは絶えず対流させて凍らないようにしてるけど……コッチの6つはもうダメだな」
「へ!?凍る!?」
シンシャが待機中の水銀球に手を伸ばして、表面をコンコンと叩いて見せる。
……そう。コンコンと、叩いている。
「か、完全に固まっておられる……」
「冬に使った事は無かったからな。俺もこうなるのは初めて知った」
――完全に固まっても、一応操作、変形自体はちゃんと出来るそうだ。
しかし、月霊髄液の肝となる『水銀自体の密度を生かし、圧力を利用する』と言う運

用方法は出来なくなるらしい。
　シンシャの水銀の槍はこの圧力を利用した『流動』によるものだから、固まる事でそれを扱えないとなると凄いハンデを背負う事になる。
「それは……マズいっすね」
　っつーか、水銀の融点ってマイナス何十度レベルじゃなかったっけ？詳しい数字は覚えてないけど、ご家庭の冷凍庫程度じゃ全然凍らす事なんて出来ない領域だと思ったんだけど。
　……え？じゃあ今、気温はマイナス何十度クラスだって事ぉ!?
　冬ってそんなに寒さ厳しくなるの!?ボクの服装、いつもと同じ半袖ブラウスと半ズボンなんですが!?
　――意識したら、なんか寒くなってきたような気も……？
「対流し続けるのも、限界はありそうだ。気温がもっと下がったら、圧力を使った運用は全く出来そうにない。……この状態では、どうなるか分からないから、あまり月人とは戦いたくないトコだな」
「ご、ゴメンっ!!この事態は……まったく想定していなかった……っ！」
　どうすんだこれ。
　シンシャを冬に引き込んだのは、月霊髄液の運用が前提だったのに……っ！

「俺も初めて知った事だから、無理もないと思う。あまり気にしなくて良いよ。
それに……防御力は瞬間的に膜が張れないから随分下がったかもしれないけど、攻撃力はもしかしたら上がったかもしれない」
「……え？」
シンシャが何かを操作するように手を翻した。
完全に凍っていた6つの水銀球がシンシャの背後から解き放たれ、ひゅんっと隊列を作って上空に舞い上がる。
――そして。

ドゴドガドゴドゴドゴガッツッツッ!!!

6つの水銀の隕石がもの凄い勢いで流氷に叩きつけられ、恐ろしい高さまで水柱を上げながら跡形もなく砕け散って行った。
「……へあ？」
空いた口が塞がらなかった。
流氷と共に海の中に沈んで行った水銀が、ゆっくりと海から顔を出して一仕事終えたとでも言いたげに悠々とシンシャの後ろに戻って行く。

……ガンダムハンマーのファンネル版ですか？

「――ここまでカチコチに固まっていれば、散らして汚染するのを防ぐ事に使っていたリソースが大分少なくて済むんだ。むしろ飛散させる方が難しい。水銀の重さはそのままハンマーとして使う事にすれば、汎用性は格段に落ちるけど運用出来ない事もない」

だけど今は、普段のやり方をどこまで維持できるか試す意味で圧力運用を続けるようにしてるんだ――と続けるシンシャがちょっと怖い。

……今の、ボルツや先生ですらヘタすりゃ粉々になるんじゃねぇの？

「実は、冬場は毒液が滲み出てこない事は前々から知ってはいたんだ。大歓迎の事象だったから、そのまま飲み込んで理由を考えてなどはいなかったんだが……こう言う事だったんだな。

――凍ってしまったら、滲み出る事なんて出来る筈が無い」

納得がいったようにシンシャが笑っている。

――結論。

シンシャは宝石の国にて最強。……覚えておくわ。

とりあえず言っとく。

「冬場に水銀が漏れ出る心配がないなら、皆と一緒に冬眠すれば良いのに」

「……ダメだ。冬の入りと出は毒液融けちゃうだろ」
シンシャが皆の輪の中に混じるのは、まだまだ遠いようだ。

@　@　@

大体10日も過ぎると、役割分担がハッキリしてきた。
ボクが学校入り口の雪かきと雪下ろし、校内の掃除。
アンタークとシンシャが流氷割りと外回りだ。
どれもこれも結構な重労働だと思う。
今までこれをアンターク一人でやってたって言うんだから頭が下がる。
月人が来ないのは良いけど、とにかく雪と流氷がウザいのだ。
アンタークの業務内容ブラック過ぎるだろ。来年以降もシフト見直しした方が良いんじゃないの？
「確かに……私も気になってはいた。しかし、アンタークが不要だと言い続けていたのもあってな」
「……先生を独り占めしときたかったんだろうなぁ……」
じゃあ、アンターク外回り中に校内で先生とお喋りしてるボクとか物凄い嫉妬案件な

んだろうな。

　砕かれちゃうかしらボク。そのうち「死ぬのよ」とか言われてどこかの絶壁から突き落とされて火サス死しちゃうのかしらボク。

「ボクとしては……冬の仕事は思いの外シンシャと相性良いみたいですから、サポートとしてどうでしょうって言いたい所ですけどねぇ」

「そうなるとシンシャの休む時間が無くなるのも気がかりだな。冬場はアドミラビリスも海上に出る事は難しいと聞くのでホットラインが使えない。しかしアマルガム計画はともかく、通信使はシンシャほどの適任が居ない」

「夏も冬もシンシャの適性が高い仕事が待ってる訳ですねぇ……」

　シンシャに似合う仕事を探して頭を悩ませていたのが嘘みたいだ。

「――まさかこんな日が来る事になるとは、思ってもいなかったよ」

「ＧＯサインは出せませんやねぇ。今まで無為に過ごしていたんだもの。休む時間が無くなるくらい屁でもないとか思っちゃいそうです」

「フォスのおかげだな」

「いやぁ……事ここに及べば、果たして良い事なのか悪い事なのか――」

　ボクはあくまで、シンシャに生きがいを持って欲しかっただけで。

　別にシンシャを馬車馬のごとく働かせようとはこれっぽっちも考えていなかった。

「良い事に決まっている」

先生がそう言い切った。

「……特にここ１００年は、色んなものが目まぐるしく感じるよ。

――白状しよう。私は、シンシャを救う手を探す事を半ば諦めていた。不老不死の身であるなら、いつか仕事の方から訪れてくれるだろうと……そんな逃げ方をしてしまっていた」

「そんなものでしょう。何せ不老不死だ。１００年目を閉じていても許されます」

「私は許せない。その１００年の負債を……私には、許せないのだ」

人の世は、１００年あれば空も飛べるようになる。

ただ空を飛ぶんじゃない。苦しみから抜け出すために空を飛ぶのだ。希望を知るために空を飛ぶのだ。

……先生は、１００年の苦しみを抜け出せなかった事が許せないのだと思う。

なまじ、人の世を知っているからこそ。

「……最近、つくづく思い知った事がある。私に『変化』を促す事は出来ないと言う事だ。

――『人間』が持つ変化の力。築く力。……いつも羨ましいと思っていた」

「……それさえあれば１００年目を閉じる事はなかったと考えるのは、ただの被害妄想だと思いますけどね」

「そうだろうか……？」
「そうですよ」
先生の主張を黙殺する。
「隣の芝の方が青いとは良く言ったもんです。先生は、手出しも出来ない所からやってくるフザけた誘拐魔相手に、何千年以上もこの国を持たせ続けて来たじゃあないですか。その耐える力、守る力が無ければボクらはとっくに月人どものペンダントですよ。アドミラビリスみたいに養殖すらされてたかもしれない。
人間たちがその変化の力、築く力を持っていたが為に、何べん国単位で滅びまくったかご存じない訳ではないでしょう？変化を求めて滅んでしまえば本末転倒ですよ」
「……」
――そう言った意味では。
変化を齎し続けてきたボクは、この国を滅ぼす悪性因子なのかもしれないと考えてしまう事もある。
今回のシンシャの件はいい例だ。良かれと思った事が、見方を変えればマイナスに向くことだってある。
極端な解釈ではあるけどね。
――でも。

「特に気の遠くなるほど生きていれば、それだけ後悔も積み重ねたと思います。でもね、先生。後悔と自虐で今まで先生が歩いてきた歴史を塗りつぶすのだけは勘弁してくださいよ。

ボクらも、月に行った子も、みんな先生が大好きなんですから」

結局、そこに帰結する。

変化か停滞かの選択が、後にどう響くかなんて誰にも分かりっこない。

そしてボクは、結果だけを見て過程で得たものを切り捨てるような事は好みじゃない。

それでも、先生の表情は晴れる事はなかった。

「……。それが……私のせいだったとしてもか……？」

……。

ふむ……？

「月人の目的が、先生に何かさせる事だって言うアレですか？」

「……」

「個人的には、判断基準にはなりませんね。

具体的には知らんですけど、『それ』をやると取り返しの付かない何かを失う事ぐらいは察せます。そうでなかったらとっくに『それ』をやってるんでしょうし」

あとは出来ないだけって言うのもあり得るか？もしくは『やる』『やらない』で判断できるほど単純な事でもないのかもしれない。

――なんにしたってだ。

誘拐犯の方が悪いに決まってるじゃないの常識的に考えて。

良く『騙される方が悪い』って論調あるけど、それをほざく事が許されるのは、騙されないように管理すべき立場の人がたまに吐きたくなる愚痴だけだ。

騙した側でそれをほざく様な奴は合法的に倍返しされて良いと思う。

……押し黙った先生に対して、思わず怪訝な目を向けた。

「……先生、まさかとは思いますけど……

先生と月人の間に何かあるって事に、皆残らず感づいている上で先生を許容しているって事、まさか気付いていないとか言いませんよね？」

「……え？」

……。

おいロンズデーライト、なんだ今の「え」は？

焦ったように先生が後を続ける。

「あ、いや……確かに、年長組はそう思ってくれている事は気づいていた。……だが、皆残らず……だったのか？」

「そーですよ」
「モルガや……ジルコンもか？」
「モルガやジルコンもですよ」
「オブシディアンも？」
「オブしーもですよ。……え、あそこまでガバってたのに今更ショック受けちゃってるんすか？」
――いや、確かにみんな『知った上で許容』って言うのは言い過ぎな部分あったよ？　シンシャなんかはどうするべきか見極め中だし、ベニト辺りは『先生が味方である』って事実だけ解っていれば後は妥協で良いやって諦めてる感じだし。
手に入れられる範囲の情報で『なぜ』『どうして』『何を』と言った部分を捏ね回してんのは、多分ユークとペリドットとボクぐらいだ……ってーか、ボクが巻き込んでいるとも言うけど。
いや、スフェンもペリドット経由でそう言う所色々考えてそうではあるなぁ。
ルチルは、医療技術に手いっぱいで判断を後回しにしてる感じかな。あまり興味を示してないとも言う。
「そ……そうか……せめて負担は掛けるまいと思っていたのだが……とうに気付かれていた上に、許容までされてしまっていたのか……」

……うへぁ。
ガチで気付いてなかったっスか。
確かに、皆そう言う相談は先生じゃなく仲の良い子に対してやるから、先生が感づく要素が少なかったのは解るけどさぁ……
「……フォス。私は少し本堂に居る。何かあったら直ぐに知らせなさい」
「――アッ、ハイ。ごゆっくりどうぞ」
まるでいつかの焼き増しのように、項垂れながら本堂へ歩いて行く先生でした。
……。
……やっちゃったＺＥ☆
ちなみにこの後、先生の様子に気付いたアンタークに無茶苦茶絞られました。

@　@　@

さらに１０日ほど経つと、ボクとシンシャの担当も折り返しを超え、残り１／３程度と言うあたりになる。
発生した仕事と効率的な割り振りを練り、引継ぎの為に資料に起こす作業が増えた。
次の担当はユークとメロン（ウォーターメロン・トルマリン）だ。

引継ぎ先はユーク。ボクの悪筆を何とか解読出来てくれる一人である。
きっとこの引継ぎ資料を見た上で、手直しして清書してくれる事だろう。
ちなみに、メロンの順位は本当はシンシャよりも下だったんだけどね。
ストレスを感じると帯電する特異体質なものだから、負け続けて頬を膨らませた事にビビったベニトが思わず接待ダウトした事による今の順位である。
ベニトェ……いや、それでもアイツ免除組だしな。
運もあったんだろうけど、ネプちーに圧勝できた事をめっちゃ喜んでいた事による揺り返しだったんだろーな。
「――アンタークとしてはさ。どうだった？他の人と仕事するのは」
「うん？……そうだな、このあと何名かコロコロ変わるらしいし、今の印象をそのまま引きずって良いかは分からないが……ずいぶん楽になったよ。お陰でこうやって娯楽にも興じる事が出来る」
「――ダウト」
「おっと残念、スペードのエースだ」
「うーん……」
正攻法（盤外戦術も正攻法に決まってる）でボクに勝てなかった事がよほど悔しかったと見えて、今はシンシャと二人で対戦しながら戦略を研究中。

「……ただ、シンシャが即戦力過ぎたからな。他の者ではおそらく、冬の光の薄さで動くのも相当辛いだろう。交代した最初の内は、恐らく作業量が増えるだろうなと覚悟はしている。

　言っておくがフォス、私の評価ではお前も結構動けてる方だ」

「そーお？そりゃあ良かった。ボクとしても二人が凄すぎるから、足手纏いだろーなーと思いながら仕事してたからさ」

「……安心しろ。お前が動けないのは普段からだ」

「いけずぅ」

　今日も今日とてシンシャが刺さるわぁ。

「俺としては……ここまで、一度も晴れる日が無かったのが不安ではあるかな。月人と構えたいと言う訳ではないが、俺とフォスがいる段階で一度向こうの出方を見て置きたくはある」

「……アレキのレポートにあった、新型と言う奴か」

「そうだ。今年から、奴らの動きは高度になり始めた」

　その辺はボクも同意見。

　特に宝石の国にて最強なシンシャはこのまま常駐して貰いたいぐらいなんだよね。

　２０日付き合って思ったのは、アンタークは搦手への対応には向いてないって事だ。

厳格で、勇敢で、まっすぐで、親切。
だからこそ、目の前の物には素直に対処しようとするだろう。
――彼一人では、王サマ騒動の時のようなアタックをされたら多分出し抜かれると思う。
「……新型を相手にする時、何か気を付ける事はあるか？」
アレキのレポートを見て、アンターク自身も危機感を覚えているのだと思う。
ボクが提示した「月人の3段構えの策」は、今までになかった高度な罠だ。
「いや……俺はすぐに、倒してしまったからな。新型旧型問わず。その視点ではあまり役に立てない」
この中で唯一戦った事のあるシンシャはしゅんころしちゃったしねぇ……
「最初に確認された新型は、霧散クラスの損傷を受けても存続し、モルガとゴーシェを追い詰めて見せた。ヘリオドールの鏃を用いた攻撃による動揺を誘った結果かもしれない。最終的に先生に一撃で倒される事になる。
……二回目に確認された新型は、シンシャが相手にしたものだ。レポート見たと思うけど、3器同時に襲来し、3器とも間を置かずに倒された。後にはサファイアで作られた牙が残った。――シンシャ、具体的にはどう言った攻撃を？」
「ああ……月人のど真ん中に毒液の槍を突き入れて、そのあと正中線に沿って両断した」

「なるほど、流氷割りと同じような感じか」
　なんつーか、一撃クリーンヒットすれば霧散する月人に対して殺意の高すぎる攻撃だなぁ……
「……倒す条件は、『大きな損傷』かもしれないな」
　アンタークが考察を口にする。
「そうだね。逆に、横に両断するのは危険かもしれない。後、攻撃力の高い武器を持つのも特徴に入れて良い……のかな？」
「そうなると、新型に対して取るべき指針は限られてくるな」
　シンシャが人差し指を立てる。
「――基本は速攻。横に裂くのではなく、縦に裂いて一挙動で終わらせる。見た事のない武器を取り出したら、見切って回避に専念するか、逃げる」
「情報が少なすぎる現在ではそれが一番無難か……」
「幸い、シンシャと先生の遠距離一撃必殺であれば結構相性が良い事は判った訳だし。膠着したらこの二人を引っ張り出すのが良さそうだよ」
「……先生は解るが、俺も入るのか……」
　冬の見回りどころじゃない。
　なんかもう、シンシャが使え過ぎて辛いんですけど。

「しかし、冬ではシンシャも防御力が下がってしまうと聞いたぞ？」
「そうなんだよなぁ……」
「しかも、状況によっては『逃げる』も被害拡大の種になりかねん」
「そぉーなんだよなぁー……」
……基本は速攻。
……ふむ。
「その場しのぎだけどさ。冬場だけなら……いや、布が足りないか……」
「何を思いついた？」
「ギリースーツ」
かの有名なチートスナイパー、シモ＝ヘイヘも愛用した寒地仕様のギリースーツ――つっても、白いフード付きマントで良いんだけどね。
それを纏って、月人に発見される確率を減らし……月人に見つかる前に強襲する形ならどうかなって。
その場しのぎの白いフード付きマントなら、不器用仕様のボクだって大きい白い布があれば簡単に作れる。
名付けて、『防御力が弱い？なら、攻撃される前に終わらせれば良いじゃない』作戦。
殺られる前に殺る脳筋プランと言い換えても可。

「大きな布……寝具流用するか？」
「レッドベリルが最大の壁だな。そのギリースーツも凝って作らせないとカチキレられるぞ」
「ボク、説得はヤダ」
「俺だって嫌だ」
「私だって嫌だぞ!?」
後、他の問題もあるんだよね。
体を覆う造りになるから、ただでさえ少ない冬の光がさらに少なくなってしまう訳で。
そんな中でまともに動けるかどうかも要検証。
「ああ、そうか……だからボルツは……」
「へ？」
「あ、いや、すまない、なんでもない。こっちの話だ」
アンターク、なんか心当たりが有ったらしい。
「しかしそれを聞くと、アンタークの冬服はともかく……俺たちのこの夏服は目立って仕方がない気がしてきたな」
「黒だもんね。髪も白や銀じゃないから、きっと雪の中だとスッゴイ目立つよ」

「……なるほど。私は服も髪も雪に溶ける色だ。今まで意識した事が無かったが、こんな効果もあったんだな」

しかしどっちにしろ、対策はレッド通さないと怒られます。

「……先生に許可貰って、レッドだけ叩き起こすか？」

「最適解だと思うけど、なんか情けなくもあるなぁ……」

……ちなみに。

この話を先生に通した所、どちらにしろ今からギリースーツや制服作成は間に合わない為、予備の寝具の急場改造によるフード付きマントを作って対策する事に決定。

――決定した先生の顔は覚悟に満ちておられた。冬眠明けにレッドベリルにしこたま怒られるのである。

心配された遮光問題も、腕と足と顔が出せればボクでもなんとか動けたから、次の担当に回っても何とかなるだろうと思う。

外回りは常にアンタークが付いて2名で行う形とすれば、1着あれば対応できる。

――そして。

冬眠に入って22日目――担当変更まで、あと8日の時。

……空に、晴れ間が覗く日が来た。

第13話「排撃」

雪が降り続けている。
今日も冬の空は晴れ間が見えそうにない。
一体どっからこの水分が来てるんだ、って疑いたくなる量の雪が視界を白に染め上げている。
ほんとパネェな、冬場。
先日やったばかりの雪降ろしに思いを馳せる。
――ごっつ苦労したんすけど。ほんともう、ごっつ苦労したんすけど。
学校の入り口も超必死こいて雪掻きしたんすけど。
「また雪降ろししなきゃ……明日までもつかなぁ……？」
苦労の結晶がみるみる水の泡になって行くのが悲しいのです。
しかもだぜ？この国、火の使用は超厳重に管理されてるから、ガラス精錬とかも出来ないんだぜ？つまり、学校の窓は全て格子だけだって事。外気スカスカ入りまくるんだぜ？

別に良いんだよ寒いのはさぁー！ボクってば宝石の体ですから！寒さなんてへっちゃらですから！

でも格子の隙間から雪がバカスカ入るせいで掃除が大変なんだよチクショオォォ！

「――今日は晴れそうか？フォス」

押し寄せる切なさと悲しみに遠い目をしていると、後ろから先生の声がかかるのだ。

「……相変わらず、雲の切れ目も見当たりませんね。こりゃあ今日も無理そうかと。先生の見立てはどうでしょう？」

「ふむ……」

ゆったりとボクの隣に並んだ先生が、同じく空を見上げて目を細める。

「……そうだな。私の見立ても同感だ。……敢えて気になる所があるとすれば、上空の雲の流れが今日はかなり早そうだと言う事ぐらいか」

「雲の流れ……」

ボクも目を細めてみるけれど、どこもかしこも真っ白で、全然判別がつかなかった。

この雪の中で良く見えるなぁと思う。

そう言えば、ダイヤも目が良かった気がするなぁ。王サマ騒動の時にそんな一幕があったっけ。

もしかして、屈折率と視力の良さが関係している可能性が……？

「もうちょっとで1か月経ちますけど……本当に平均１０日も晴れるんですか?」
「1月まるまる雪だった事はざらにあるな。もちろん、冬場の晴れ間が5日に満たない時もあったよ」
「うへぁ……」
思わず目が遠くなっちゃうよ。
いやあもう、ほんとパネェわ冬場。
「逆に、そもそも冬に入るのが大幅に遅れた事もあったな。……確か、１０００年ほど前だったと記憶している」
「あら、雪が降らなかったって事ですか?それじゃあ冬眠できませんね」
「あの時は、若い物から順に冬眠に入って年長の者が雪が降るまで粘ってくれていたよ。みんな眠そうな中で、よく頑張ってくれていた」
懐かしさに浸るように先生が口角を上げているのを見る。
最近の先生は、心なしかよく微笑んでいる所を見せてくれている気がするんだよね。
やっぱりナノマシン説が効いてるのかな?あの説が流行ってから、たまに先生の事を「ぱぱー」って呼ぶのも流行ってるし。
「……そういや、例年はアンタークと先生で冬を回していたんですよね?」
「そうだ」

「ホワイトアウトとか遭遇しなかったんですか？」
「する。かなりザラだ。……そうなったら、視界が戻るまで外出禁止。もし外出中にホワイトアウトしたらその場待機の取り決めだ。２晩アンタークが戻って来なかった事もあった」
「うわ……凍死の恐れがあったら気が気じゃありませんね」
「凍死の恐れがなくとも心配で堪らなかったよ。……それでも、アンタークは無事に戻って来てくれた」
　極寒の中であればそれだけ硬度が高くなる体質を持つアンターク。
　視界がすべて白く染まるホワイトアウトにあっても、これまでずっと仕事をこなし帰り続けて来たんだと思う。
　彼に対する先生の信頼の厚さが伺えるセリフだ。
「ちなみに、スーパーセルやダウンバーストは？」
「幸いこの地方では観測された事はないな。思えば全期通して、災害級のトルネードや台風が出た記憶もない。６度目の隕石到来で地形が大幅に変化したからだと考えられる」
「月人じゃなくて暴風に石が攫われる事態はなかった訳ですね。そりゃあ良かった」
　山とかが無いから、空気の流れが一か所にまとまるような現象が起き難いって事なの

かな？

でも、遮るものが無ければ逆に空気の勢いは凄い事になりそうだけど……ううん、流石に気象学の基礎知識なんてここで習ったレベルしか知らないしなぁ。

実際に今まで被害が無かったんだから、旨い具合に噛み合ってるんだろうな。

――さて、今日も晴れ間が無いならいつも通りのシフトだ。

アンタークとシンシャは外回りと流氷割り、ボクと先生は学校内の仕事。

いつも通りだ。

間に合わせギリースーツの評判は意外にも良いらしい。

シンシャが水銀球を前に回して先導すると、粉雪が吹雪く時とか一瞬見失いそうになると言うのはアンタークの言。

それなら、雪の中に伏せればさらに迷彩効果を期待できるだろう。

シンシャは水銀球がどうしても目立つので、それならばと体から少し離して運用する事を試しているそうな。

今まで夜の仕事ばっかりだった反動からか、創意工夫に余念がないシンシャだ。楽しそうで何よりだよ。

ちなみに、今日は迷彩効果を高める為に口布を当てて行ったみたい。水銀球もついに全弾凍っちゃったもんだから、雪をまぶしてこちらも迷彩していると聞いた。

最近、アンタークも何かギリースーツを欲しそうにしている。
ゴメンねアンタークちん、今年は我慢しよう。
これで2着目を作ろうものなら、たとえロンズデーライトを生贄に捧げたとしても、大邪神レッドベリルのお怒りを鎮める事はきっと出来なくなる気がするの。

@　@　@

「――あん？」
窓から差し込んだ光が急に濃くなったのが気になった。
資料を纏めていた手を止めて窓に近寄る。
「……おいおいおいおい」
朝、あんなに自己主張激しかった雪と雲が彼方に散り、久方ぶりの太陽が青い空に浮かんでいる。
……アンタークとシンシャは、外回りに出たままだ。
マズい。こりゃマズい。
資料を机に放りだし、先生のとこまでダッシュする。
「先生……先生っ!!」

辿り着いてみると、先生は外出用の黒い外套を引っ張り出して纏っている所だった。
「――ああフォス、用件は判っている。急に晴れた事についてだろう」
「はい、そうです。……そうなんですが、先生はどうするおつもりで?」
「アンタークとシンシャを迎えに行ってくる。恐らく流氷割りの現地にいるだろう。なかなか遠い……急がねば」
「いやいやいやいや、学校の守りどうするんですか!?みんな冬眠中ですよ!?」
「――ム……」
焦りすぎていたのか、今気づいたと言うような顔で固まる先生だ。
「……今まで、途中で晴れた事は?」
「ある。だが、いつも朝の時点で察知出来る天候だったため、近場の見張りシフトに切り替えていた。そうでなくとも晴れる兆候があれば、アンタークはその時点で引き返してくれていたが……」
「……例の、『雲の流れがかなり早い』ってやつですか。今回は本当にいきなり晴れたから――」
「ああ……覚えている限りでは、今回のパターンは前例がない」
――クソっ、最初のシフトが戦闘出来ないボクでなければ、先生が出れたのに……っ!

「……鐘を鳴らしますか？」
　手を握りしめながら解決案を出した。
　それはシンシャとアンタークへの警鐘であると同時に、その大音量で冬眠中の皆を叩き起こす事を意味している。
　あまり取りたくない最後の手段だ。
　先生が数巡して決断する。
「……やむを得ないか。アンタークはこの天候になった時点で引き返してくれているだろう。フォス、２種配置の警鐘を鳴らしなさい。その後、次の担当であるユークとメロンに校内を任せよう。私も出る」
「わかりました」
　戦えないものを守りとする訳にはいかない。この選択肢はベター案だ。
　――しかし、状況はそんな悠長な事を許してはくれないらしかった。
　急いで部屋から出た所で、矛のようなものが降り下ろされた。
「おおおあぁぁっ!?!?」
「フォスっ!!?」
　反射的に打点の内側に飛び込んで、振り下ろされた勢いそのままに矛を奪い取り、矛先を回転させて斬り上げる。

反射的過ぎて下手人も見ずに挙動を終えてしまった。
なんか妙な手ごたえを感じたなと思考が追い付いてきた辺りで、斬り上げた下手人がなんか霧散している事に気付く。
そして、その後ろにはさらに4人ほど――月人の雑がさらに矛を振り上げて迫ってきている。
「どえぇぇえぇぇぇっっ!?」
あまりの事態に口から何か変な声が出た。
とっさに踏み込んで一番近かった雑の喉元に矛先を瞬間的に突き入れ、体さばきで回り込んで2人目、3人目の首を背後から横薙ぎに撥ね飛ばす。
4人目の袈裟斬りを受け流し、同時に逆袈裟を叩き込んで霧散させた。
負荷のかかった右膝と腰のあたりからピシリと嫌な音が走ったのを自覚する。
「侵入されているだと!?いや、それ以前に――大丈夫かフォスっ!!?」
先生が泡食って飛び出してきた。
「あ……だ、大丈夫です。最初の1撃はちょっとヤバかったですが、その後は『起こり』が見え見えだったんで、普通に対応出来ました」
「そ、そうか……」
――あれ?

何か返事をした先生の表情、『安堵した』って言うより『ドン引きしてる』って感じのような……？

「――って、こうしちゃいられない!!もう警鐘がどうのって騒ぎじゃない!!冬眠してる皆を見てきます!!」

「っ、ああ、私は遊撃する。――それと、今回ばかりは武器の使用を許可する。オブシディアンの武器工房が近い。必要であれば寄りなさい」

先生の視線が矛に向いている。

鹵獲品で良いじゃんと思っていたボクは、先生の視線に引かれて同じく矛を見てみると……

「……うわ、何これ!?」

何か、矛先がドロドロに崩れている。生理的な嫌悪感に駆られて、思わず矛を投げ捨ててしまった。

……月人の使ったものは、基本的に消えてなくなる。

知ってはいたけど、まじまじ体験した事はなかった。……こういう事だったのかと溶けて行く矛を見て思う。

先生の右手が閃いた。

反射的にその向こうに視線を向けると、既に霧散している雑が見える。

苦虫を噛み潰したように眉間に皺を寄せて、先生が口を開いた。
「――時間がない。頼んだぞ、フォス。……無理だけは……しないでくれ」
『頼む』を指す意味が、複数を指している。
冬眠に入っている皆を頼むと。
校内の雑の討伐を頼むと。
そして――ボク自身が、連れて行かれないように頼む、と。
膝と腰に入ったヒビに、一瞬だけ気を向けた。
先生だってわかってる。……戦いに耐えられないボクに、戦いを任せると言う事がどう言う事なのか。
「――I，ll　be　Back，Boss.」
アーノルド＝シュワルツネッガーを引用してサムズアップと一緒にそう返す。
そしてボクは、そのまま冬眠の大部屋に駆け出した。

@　@　@

ピュイイイイイイィィィィィィィッッッ!!
ホイッスルを鳴らしながら校内を走る。

月人をおびき寄せる意図と、冬眠中の誰かがこのホイッスルを聞き取って起きてくれる事を期待している。

もっとも、後者はあまり期待できない。ボクたちは光が無いと基本的に起きれないから、みんなを起こすには大部屋に光を入れないと難しいと思う。

校内に入り込んだ月人の数は結構まばらなようだ。

恐らく大部分は今、先生が相手してくれている。さっきチラリと窓から昇降口を見てみたら、ものすごい数の雑がひしめいているのが見えた。

今までの傾向から、月人のリソースはそこまで多くないと考えられていたけれど……これを見ると、そうでもないのかもしれないと思えてしまう。

――とはいえ、数があるのは所詮雑だけだ。

相対してみたけれども、ほぼ有象無象と言って差支えがないように思える。

助かった事がある。

アイツらのあっぱっぱーが技量にまで及んでいた事だ。

インドチックな格好してるから、てっきりカラリパヤットでもやってんのかと思ったけど、攻撃前は隙だらけだわ、隊列は組めないわ、連携はバラバラだわ、ボクの姿を見たら『まっすぐ行ってぶっ飛ばす』しか選択肢にないわ、もう何から何までド素人だコイツら。

お陰で脆さ際立つボクでさえダメージ最小限であしらえる。近距離戦は完全にボクの土俵だった。

一斉に中・遠距離攻撃されたら器用さ極低のボクじゃあ対応しきれないのにバカだよねー、ホントバカだよねー。

「――っしょおおぁっっ!!」

気合一発、オブシディアンの黒剣で雑2人の胴をまとめて斬り飛ばした。

いくらあっぱっぱーが相手でも、懸念点はさすがにある。何につけても我が身の脆さだ。

……今の一撃で右手のヒビが広がった。まだ振れるけど、同じような2体斬りやるんだったら、剣の重さを支えずに済む袈裟斬りか逆袈裟じゃないと次は割れそうだな、これは……

ボクが選んだ剣は、海へ遠征する前に振る機会のあった一番小さなあの剣だ。あの時に帯剣禁止令が出たから、ボクに合う剣は特に作って貰っていない。

この剣、出来はかなり良いんだけど、ボクに合っているかどうかと言う点で言えば『合っていない』。

何とかごまかしごまかし振っているけど、攻撃の度にどっかしら負荷が掛かって悲鳴を上げてるのが自分で分かってしまう。

乱戦対応の際に有効な『斬り返し』を行うと、剣の重さに負けて体にヒビが入るのが特に痛い。そのせいで、斬った月人の体内で衝撃や慣性を全て消費するように気を使って動かなくてはならない。

他にもある。足にもそろそろ深刻なレベルのヒビが入ってきている。

剣――って言うか近距離戦と言うのはなべて間合いと呼吸の取り合いだ。急制動が多いから、個人的には上半身よりも下半身の方が負荷の高い使い方をすると思う。――って言うか、ボクの剣質だとそうなってしまう。

膝がヤバイ。

ずいぶん前に月人戦の報告忘れて朝礼を脱兎した時と同じヒビの入り方してるわ。ボク砕けそう。

――左。槍持ち２名。

今度は少し工夫してみる。

左手の鞘を１人の顔面に叩きつけ、もう一人の方に蹴り飛ばす。

もんどりうって二人とも転んだので、そこを剣で刺し仕留めた。

今回は、負担は無し。

……でもダメだ。挙動が多すぎる。これじゃあ足止め受けたのと変わらない。

大部屋――早く、みんなが冬眠している大部屋に――っ！

浮かぶ焦りを押さえつける。

……大丈夫、アイツ等は大部屋の位置を知っている訳じゃない。

こうやってホイッスルを吹いて自己主張しつつ向かっている限り、ボクより早く辿り着く筈がないのだ。

――ドオオオンッッ!!

「……ッ!?」

昇降口方面から破砕音。……なんだ？月人の新兵器か？

いや、立ち止まっている暇はない。再び走り出す。

――今の音、下手人が月人であるならその相手は先生以外にあり得ない。

先生の身に何かあった……？いや、たとえ新型を引っ張って来ても先生をどうにかするのは難しい筈だ。

ボクがヘルプに入るのはあり得ないし……なにより、冬眠中の皆の方が優先度が高い。

……家族を天秤にかけるような計算をするしかない自分が嫌になる。

入り込んでいる月人は如何ほどだろうか。

長期療養所は大丈夫か？医務室に安置されているパパラチアは……？
一度不安がよぎればそこから後は芋づるだ。
粘りつくような泥に足を絡め取られる気分になる。
――正面、３人。
「っ、邪魔を、するなぁっっ!!」
怒声と共に加速。
タイミングをずらされた雑が慌てて矛を突き出すのに合わせてさらに踏み込み、喉を突き抉った。
剣から手を離し、霧散する雑の矛を奪って一閃。
――っ、３人目が浅い……っ！
さらに矛から手を離し、降り下ろされる矛の内側に飛び込んで一本背負い気味に投げ飛ばす。
意図して脳天から落とすと、ぐしゃりと嫌な音を立てて３人目も霧散した。
左膝に、深刻なヒビ。
……もつか？
「関係ない……っ！」
剣を回収して更に走る。

ビシビシと足が悲鳴を上げる。
——あと少し！
細かい破片が床に落ちる音がする。
無視して前へひた走る。
そして廊下を曲がれば大部屋の扉が——
——雑が2人、薄く開いた扉に手を掛けていた。
それを見た瞬間——体を砕かないようにセーブしていた理性が、プチリと切れた音を聞いた気がした。

「っ、っざけんんあああああああああぁぁぁぁぁっっっっ!!!」

その踏み込みでついに左膝から下が砕け割れた。しかし引き換えに、扉に手を掛けていた方の袈裟を丹田まで持っていく。
崩れた体制を無理やり立て直し、力任せに斬り返し。もう一人の首を跳ね飛ばし……
その負荷に耐え切れなかった右腕が、肘の辺りから剣と共に吹っ飛んで行った。
「みんな……は……？」
薄く開いた扉の隙間。

レッド謹製のゴテゴテした寝にくそうな寝間着を着た誰かが、暗がりの中で寝こけているのが見える。
……扉が開いていたのは、なんでだ？
わらわらと更に雑が姿を見せ始める。
まったく有り難くないおかわりだ。
舌打ちと共に鈍り始めた思考を回す。
――みんなを起こすとしても、この状況はヤバい。
冬場の薄い光の中で、徒手のまま戦える石がどれだけいる？
ボルツとジェードは行けるかもしれない。でも他の皆は？
それに少なくとも、たとえボルツやジェードであっても、起こして戦えるようになるまでには時間が要る筈だ。冬場と言うのはそう言う事だ。
月人のおかわりが来ている。
起こすなら、視界に入ってる奴を皆霧散させてからでないと危険すぎる。
だけど、出来るのか？そもそも――ここにみんなが冬眠していると悟られたら、月人のやって来る勢いも増えてしまうんじゃないのか？
……選択肢はない。
心は、決まった。

「――この場を、死守する」

少なくとも、先生やシンシャが来るまで持たせられればボクの勝ちだ。

指一本とて……触れさせるものかよ！

@　@　@

片足が無くなっているから、膝立ちのままで対応した。

踏み込みが思うように行かなくなった事ぐらいは雑にも理解が出来るようで、忌々しい事に降り下ろしよりも薙ぎ払いの攻撃の方が多くなった。

常に見上げ続ける形になるのでやり難い事この上ない。

どうしても被弾が多くなる。

左耳から後頭部にかけて、雑の一撃に削り飛ばされる。

――被弾だけでは終わらせない。

そのまま足裏に飛びつくと、重力に引かれて転倒したそいつの喉に、砕けて鋭く尖った右腕を深々と突き入れた。

幸いにも硬度のある体ではないようで、硬度3半のボクの右腕でも鋭利な凶器として機能するようだ。

霧散する雑が持っていた矛を左手で確保。――思いっきり薙ぎ払う。
狙うのは足。
全員ボクの視線まで引きずり込む。
バランスを崩した雑たちのほとんどが地面に手をついて武器を手を離し、お粗末な事にさらに何割かが自分の、あるいは味方の矛によって霧散して行く。
お粗末と言う単語すらまだ生ぬるいトンチキさだ。
「おあああああぁぁぁッッッ!!」
――２人目。３人目……４人目！
喉を、あるいは眼球を、人間の急所に当たる部分に鋭利な右腕を叩き込み、次々に霧散させていく。
遺体が残らないのは面倒が無くて良い。わずかな時間ではあるが武器も鹵獲できる。上等だ。
飛来する振り下ろしによる一撃。
残った右足を横から叩きつけて逸らす。接触した足首から先が砕けて割れた。
――好都合。
矛を思い切り引き寄せて接近。
割れて鋭利になった右足で首を掻き切る。

パクパクと喉を押さえて後ずさっていたそいつは、数秒すると力無く仰向けに倒れこみ霧と化した。

おかわりが来る。

矛を投げる。当たらない。――構わない。どうせ狙いも付けていない。ただの牽制だ。

牽制と同時に突っ込む。竦んで立ち尽くしていたその心臓を狙って一撃。――みしり、と右腕がさらにきしむ。

2人目。矛を持っている手に飛びついて引きずり落とす。着地の衝撃で左の腰骨に位置する部分が砕け割れた感触がした。――構わない。まだ動ける。

頸に膝を叩き込んでへし折り矛を確保、左手のみで3人目を追撃。

袈裟に斬り下ろした代わりに左手が砕けた。――構わない。まだ動ける。

4人目をつぶし、5人目を掻き切り、6人目を崩して7人目と共に霧散させる。

残っていた右足が短くなり、左手も肩から先が無くなった。

――構わない。まだ動ける。

おかわりが来る。

おかわりが来る。

弓が2人。

他の雑を盾にして接近するが、右の腰に被弾を許した。砕け割れる体を尻目に足元に取り付き、転倒させる。
短くなった左足を心臓に突き入れ、もう一方の喉笛を噛み千切る。
顎へのダメージはない。――なんだ、結構いけるじゃないか。
矛が頭部をかすめる。次はお前か？
心臓を抉る。残った矛は最早掴む手が無いので、腕の付け根に引っ掛けてすっぽ抜け前提で振り回してみる。
運の良い事に３人それで持って行けた。
腕の付け根にもヒビが入る。
おかわりが来る。
おかわりが来る。
最早四肢がまともに残っていないが、それでも関係ない。――動ける。戦える！
開いた断面は鋭利な凶器だ。
飛びつき、崩し、正中線のどこかに差し込めばそれで終いだ。
霧散した奴らの先に、さらに奴らの姿がある。
最早何人目かすらも解らなくなる。
――考えない。

扉を死守する。それだけあれば良い。
おかわりが来る。
おかわりが来る。
体が砕けて行く。
思考が鈍化して行く。
それでもやる事は忘れない。止まる理由にはならない。
ボクはまだ動ける。地を転がり、奴らを引きずり落とし、虚を突いて飛び掛かり、持っている矛先に倒れこませ、飛来する矢からは盾にして。
片目が欠け、顎がちぎれ、胴から下が無くなっても、なお……

――おかわりが、来る。

「……ぁ、ぁぁぁあっ、ぁぁぁ――っ!!」
最早声も声にならない。
――構わない。叫ぶ時間があれば潰す。怯む時間があれば刺す。
固い感触。攻撃に使った左肩の断面が砕けて割れた。
「――～～～っっっ!!～～～～～～っっっ!!」

奴らが何かを叫んでいる。――関係ない。
わずかに残った関節を使って引きずり倒し……倒せない。代わりに体にヒビが入り、欠けた。
「～～～～っ」
戦法を変える。
ヤツの武器は数条の黒い帯。薙ぎ払うように飛来する。
体全部を使って受け流し、その左腕に叩きつけてやった。
バキンと音を立ててヤツの左腕が飛んだ。
ボクの頭にもビシリとヒビが入る感触。
もう一人が後ずさる。
その挙動は扉に向かっていた。……どこに行くつもりだ？
噛り付く。
やらせはしない。
お前らの相手はボクだ。
まだ終わっちゃいない。
どこにも行かせない。
こっちを見ろ。

――こっちを、見ろ！
こっちを、見ろっ!!!
「あぁぁぁぁぁぁ――っっっっ!!」
後ろから攻撃が飛来。
惜しい事にこっちの奴には交差しない軌道。
受け流して、こっちの奴にぶち当ててやる。
体をよじる。
攻撃が、引き戻された。
致命的なスキが出来る。
ヤツが右手を振りかぶり――

――ボクの意識は、そこで途切れた。

@　@　@

――この光景を、形容する言葉が思い浮かばない。
戦慄。驚愕。畏怖。尊敬――

きっとどれも正しくて、そのいずれも足りなくて。
「――っ、やっと、やっと止まったか、コイツは……っ!!」
ボルツが悪態をついた。
振り下ろしたその拳が、心なしか震えている。
武器工房から持ってきていた剣に手が触れた。
私は、ここに来てやっと自分がへたり込んでいた事に気が付いた。
辺りを見回す。
ドロドロに溶けかかった大量の矛、弓、槍。
そしてそれに負けないほどに散らばった薄荷色の破片。
この広い廊下に、激闘が残した爪跡が広がっていた。
「ルチル……大丈夫か？」
「え……ええ……」
ボルツの問いに、何とか返せた。
それでも立ち直れているとは言い難い。
ボルツの左腕は砕け散っていた。
その左腕を複雑そうな目で見おろした後、彼の視線がフォスに向けられる。
最早、原形が残らないほどに砕かれたフォスの体。

私たちが駆け付けた時には既にまともに五体が残っていなかったが、最後のボルツの一撃が決定的になったようだ。

「……グズ……だった筈だ。戦うことなど、出来ない体だった筈だ」

ボルツが呟く。

「まさか僕が……戦闘と言う点に置いて……防衛と言う点に置いて……お前を、尊敬する日が来るとは思わなかったぞ……っ！」

それはまともに戦う手段すらない満身創痍の身になってなお、ボルツの左腕を持っていって見せたフォスへの最大の称賛だった。

――フォスは守り切った。

手が無くなり、足が無くなり、胴も半分無くなり、顔すら欠け、目を失い、顎すら砕かれても、なお。

記憶がどんどん無くなって行った筈だ。動く事もままならなかった筈だ。

最後は私たちが誰なのかも分からずに牙を向くような状態だった。

そんな状態でも、なお。

――どこにも行かせはしない。こっちを見ろ。

そう言って足元に取り付くフォスの姿が焼き付いている。

唯一残った右目から放たれた眼光。戦意の欠片も失っていないその覇気を受けて、私

はへたり込んだのだ。
あのままへたり込んだままだったら私は……どうなっていたのだろう？
私は硬度６。フォスは硬度３半。
――そんな差なんて、覆されたのではと思った。
扉の向こうで数名、この騒ぎで目を覚ましたのだろう。
この光景を見て絶句したままへたり込んでいる石達がいる。
冬場の眠気さえ吹き飛ぶような光景だ。
フォスは、最後まで扉を守り続けた。
フォスは、最後まで扉を守り切った。
本当に、最後の最後まで。
ああ……わかる。
きっと、彼らも私と同じような気持ちになっているのだと思う。
胸の中から途方もなく大きな何かが、浮かび上がって溢れてくるのだ。
私はこの感情と何と呼ぶのか解らなかった。
「――フォス！」
先生が駆け込んできた。
纏っている僧衣がボロボロになっている。

一拍遅れて、シンシャとアンタークも飛び込んでくる。
アンタークは左手と顔が右半分、欠けた状態だった。
どこもかしこも激戦だったのだろう。
「これは……嘘だろ……フォスっ！連れてかれてしまったのか!?」
「いいえ!!」
シンシャの震えた言葉に、気づけば私は叫んでいた。
「フォスは……フォスは、守り切りました。誰一人失っていません。自らの体が砕け散っても、なお……っ！」
1／4ほどに割れた顔の欠片を手に取った。そこに残った眼は、未だに閉じられていなかった。
未だに、戦う意思を示していた。
――私たちを、守るために。
「……メロン」
「え……ええ?」
ボルツが扉の向こうに呼び掛ける。
ウォーターメロン・トルマリン。彼もこの騒ぎで起きたらしい。
「次の戦闘員担当はお前だったな。――代われ」

「え？で、でも……」
「代　わ　れ」
　ボルツに睨まれて、メロンがこくこくこくと首を縦に振る。
「――先生。フォスは役目を果たしました。完全に、完璧に、役目を果たしました。この冬はもう寝かせてやりたいのですが構いませんね？……抜けた穴は、僕が」
「あ、ああ……いや、しかしボルツ、冬眠は……」
「ご心配なく。……寝る気が、失せました。逆に今は、暴れたくて堪らない気分なんです」
　思わず息を飲んだ。
　ボルツの目がギラギラと虚空を睨んでいる。溢れだしそうなほどに、戦意が高まっているのを感じる。
「ルチル。眠いかもしれないが、フォスを治してやってくれないか」
「……ええ。ご心配なく。私も寝る気が失せましたよ。あなたの左手も、」
「これは一番最後で良い。アンタークも負傷しているようだ。フォスとアンタークの後で良い。なんなら数週間後でも構わない、無理せずゆっくり治してくれ。
　……その間に月人が出ても、支障は出ない。何ら支障は、ない。」
　――着替えてくる。

そう言って、ボルツがその場を後にする。
本当にきっと、手が使えなくても支障はないのだろう。
それを言い切るだけの迫力が今のボルツにはあった。
「あ、あの……！今が何日目か分からないけど、僕も冬の担当入るよ！どっちにしろ次の非戦闘員担当だったし……フォスの体も集めてあげなくちゃ」
ユークの声を皮切りに、目を覚ましていた石が「俺も！」「僕も手伝わせて！」と声をあげ始める。
誰も彼も、眠る気が根こそぎ吹き飛んでいた。
そっと、手の中にあるフォスの欠片を撫でた。
――フォス……フォス。
あなたに引っ張られて、この冬は何事もなく終わりそうですよ。
たとえ月人がどのような手を使っても、今の我々を出し抜く事は出来ないでしょう。
この場にいると、そんな確信が持てて来ます。
あなたは自分の仕事を果たしました。
次は、私の番です。
待っててください。完全に、完璧に。あなたの体を治しましょう。
ええ、ご心配なく――あなたのおかげで、私も寝る気が失せましたよ。

だから今は、ゆっくりお休みください。
春にまた会いましょう。
――フォスフォフィライト。
お疲れ様でした。
そっと瞼を閉じさせ、立ち上がる。
――まずは、フォスの欠片集めだ。大部屋からわらわら出てくる石達を見て思う。
きっとそれすら、さして時間もかからずに終わるだろう。

第14話「春」

春の暖かい光だ。
掛けられた布を透過して、体を駆け抜けていくのが解る。
インクルージョンが喜んでいる。
ポカポカとした良い天気だ。
――ポカポカとした良い天気？
瞼を開く。
頭まですっぽりと掛けられていた布を取り払うと、着ていた制服ではなく手術衣になっていた。
「……はい？」
慌てて窓から外を見上げる。
なんか、渡り鳥の群れが隊列組んで青い空を横切っていくのが見えた。
雪とかもまばらに溶けかかり、大地には草原が顔を出してすらいる。
――どう見ても春です。

ありがとうございました。
待ってえええっっっ!!?
ちょっ、ちょっ……待ってえええっっっ!!?
どうなってんのこれ!?
え、ちょっ、ガチどうなってんのこれ!!?
あ、ありのまま、今起こった事を話すぜ!!?
『ボクは月人相手に大立ち回りしたと思ったら、いつの間にか冬が終わっていた』
な……何を言っているのかわからねーと思うが、ボクも何が起こったのかわからなかった……
頭がどうにかなりそうだった……シーンのカットだとか超展開だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ!
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……!?
頭の中でポルポルしながら、必死こいて最後の記憶を反芻する。
えーっと……えーっと……
……そう、そうだよ。
人攫いどもがカチコミに来たんだよ。
１匹見たら３０匹いるんじゃないの?って言うGを彷彿とさせる量がわらわらとカ

チコミに来たんだよ。まあ、ジツリキは『じょうじ』なんて足元にも及ばないような雑魚ばっかだったけど。

んでもって、みんな冬眠してたから、ボクはその大部屋の前に陣取って月人を撃退してたんだよ。

そう、そうだ。

で、その最中に手とか足とか砕けまくって……

……やっべえええええ!?

応援に来てくれたルチルとボルツに攻撃しちゃったぞボク!?

体失いまくって記憶がすっ飛びまくったもんだから、相手にしているのが誰なのか判らなくなっちゃってたぞ!?ボルツに至っては勢い余って左手破壊しちゃったぞ!?

ど、土下座したら許してくれるかしら……？いざとなったら女神ダイヤに仲裁を頼んで……

いやいやいやいや、ちがうちがう。

それよりも、それよりもだ。

とにかくあの局面――月人掃討後にボルツとルチルが来てくれてたって事は、ボクはバーサーカー化したとは言え死守に成功したって事だよな。

体は治ってる。完璧に治ってる。

多分、あの後ルチルが治してくれたんだと思う。
そんで……そのまま、冬眠扱いされた??
「え……えと……って事は、冬どうなったんだ……?」
ボクまだ引き継ぎしてないぞ!?そりゃ、資料ある程度纏めてたけど!
ちょっと、起きたら誰もいなくなったとか勘弁して欲しいんですが!?
情報っ!じょうほぉーうっ!!?

@　@　@

「いたあぁーっ!皆いたあぁーっっっ!!」
ボクの声にみんなが一斉に振り返る。
どうやら朝礼の最中らしかった。医務室にも先生の部屋にも誰もいないものだからメチャクチャ焦ったボクの心配を返せっ!
朝礼のメンツの中にシンシャもいた。冬場と違い、背後に立方体形に展開している八つの水銀球は液状の様相を取り戻している。
春になっても、朝礼は参加してくれているらしい。
「フォス!」

「お、目を覚ましたんだな！」
「待ってたよーっ！」
……あれ？
何か、みんなの反応が妙に暖かいような……？
春だからかしら？
「――え!?ボ、ボルツ、その左腕……っ!?」
皆に混ざってボクを見るボルツの左腕が、記憶にある通りの割れ方をしたままになっているのを見て背筋が寒くなった。
まさか……破片を喪失したの!?
「うん？ああ……安心しろ。破片は医務室に保管してある。これはただ、治してないだけだ」
え……え？
まさかのマゾプレイ……？
春だからかしら？
「ふむ。丁度いい……冬の状況を説明しておこう」
大混乱の中で、先生が状況をまとめてくれた。

@　@　@

――あの時。

カチコミ受けてボクがバーサーカーやってたあの時、僅かに扉が開いていた。

あれは月人が開けた物ではなく、ボクのホイッスルと大きな破裂音――正体は先生の攻撃によるものだったらしいけど、それによって外の騒がしさに気付いたルチルとボルツが開けたものだったらしい。

この二人は冬でもけっこう起きやすい。

ルチルはパパラチアの事が脳裏によぎると、冬眠中でも目覚めてパパラチアの修復を試していると言うし、ボルツは良く寝ぼけて室内を徘徊している。

今回もその関係だったんだと思う。

二人は轟音がした昇降口側に飛び出していき、遊撃する先生と合流して状況を知ったらしい。

そして月人を掃討しつつ武器を確保し、ボクのヘルプに駆け付けてくれた所、欠損しまくってバーサーカー化したボクと交戦した……と。

――その節は大変申し訳ございませんでしたぁっ!!

土下座ッ！それは謝罪のベストオブベストッ!!

しかしそれよりも上があるッ!!
五体を全て大地に投げ打つ謝罪のキングオブキングッ!!
――土下寝ッッ!!
「……なんか、アフォスを見て安心する日が来るとは思いませんでしたねぇ」
……あれ？反応が思ってたのと違うんですが。
もしかして焼き土下座の方が良かった？
……え、別に怒ってない？……そお？
ボルツも？その治ってない左腕とか、ボクに対する当て付けだったりとか……え？違う？
……聞けば、なんかボクの奮闘でみんなの戦意が天元突破してしまったらしい。
あの時、開いた扉の隙間からボクの戦いの一端を見た石もポツポツいたのだそうな。
まず、ボクと相対したボルツが冬の戦闘員担当を強引にもぎ取り、溢れ出る戦意を余す事無く以降の月人にぶつけていたとか。
ルチルや他の石も何名か覚醒状態になって、例年になく騒がしい冬場になったのだとか。
ユークを始めとした非戦闘員も、ボクが途中まで纏めていた引継ぎ資料を元に冬の改善案やローテその他を試行錯誤して資料を完成させてくれたと聞く。

結果、この冬は誰一人欠ける事なく乗り切れたらしい。
むしろ、現れた途端に狂化したボルツに数分で霧散させられる始末だったとか。
この場にアンタークがいないのは、気温の上昇によって体が液化を始める時期になった為、既に夏眠に入ったのだそうな。
ボクによろしく言っておいてくれとの事。
お……おう、そっすか……
なんか、みんなの面構えが『言葉でなく心で理解したペッシ』を彷彿とさせるんですが……
『ドドドドド』とか『ゴゴゴゴゴゴ』とか背景に描き込まれたりしてんじゃないのコレェ？
……一方で、当時アンタークとシンシャを襲った月人のガチっぷりも脅威だったらしい。
新旧2器による挟撃だったそうだ。しかも、旧式の方も今までに無い型だったとか。
戦法はこうだ。
最初にピンクフローライトを乗せた新式が現れて、一斉掃射を掛けてくる。
それに対応している隙に、背後から旧式が現れて隠密のまま奇襲挟撃。
アンタークはこれに対応できず負傷を許した。

……例年の通り、アンターク一人で仕事をしていたら確実に連れて行かれただろう。
月人にとっての誤算は二つ。
一つはその場にはシンシャが同行していた事。
そしてもう一つは、そのシンシャがギリースーツを纏い、雪にカモフラージュしていた事だ。
この2器については、カモフラージュを続けたままのシンシャによって水銀球ハンマーの直撃を受けしゅんころされたそうだ。
……ギリースーツを着ていなかったなら、挟撃の対象は脅威度の高いシンシャだった筈。
防御力が激減している冬場のシンシャだとこの対応は難しかっただろう。
ギリースーツ作戦が大当たりした訳だ。……あの時、これを提案出来ていなかったらと思うとゾッとする。
1器が新式だと解ったのは撃破後。
ピンクフローライトで作られた武器を残した事から発覚した。
――今度の武器は、爆弾だったそうだ。
針と糸がついていて、おそらく石に引っ掛け巻き付けて、身動き出来なくなった所でボン！……と言う用途だったのだろうと分析する。

撃破後に地に落ちた衝撃で爆発していなければ、回収の時に手傷を負った可能性が高かったと。

……もっとも、学校の方から大きな音がしたため、その場では回収を断念して帰還を優先したらしいけれど。

……これ、おそらく挟撃の形になったのは、アンタークがうかつに新式の器に乗らなかったからだろうな。

多分向こうとしては新式の器の上におびき寄せ、その爆弾を使って手傷を負わせた上で、もう一方の旧式で奇襲し止めを刺すって言う展開にしたかったんだと思う。

アンタークはすぐ近くにカモフラージュしたシンシャがいたから地上での対応に専念したんだろう。

それを逆に好機と捉えた旧式が、シンシャより先に奇襲をかけた為に位置がバレて勝敗が決した訳か。

旧式の奇襲がシンシャの攻撃後であったならば、おそらく詰みとはいかないまでもかなり危ない状況になっていた可能性がある。

「――新式の方は、まるでおびき寄せるように低く飛んでいたからな。少し警戒して出方を見ていたのが幸を成した。まさか背後から2器目の挟撃が来るとまでは読めなかったけどな。

アンタークもアレキのレポートを見ていたから、月人の動きを警戒していたのが大きかった」

シンシャが補足してくれる。

……結局、シンシャとアンタークの作戦勝ちだった訳か。

「……ちなみに、ボルツのその腕は、なんで今も治していない訳……？」

「ああ。……四肢が捥げて胴体すらも欠けた状態のお前相手に、左手を持っていかれた事にとても感銘を受けてな。僕も左手を封じて仕事をしてみれば、何か見えるものがあるかもしれないと思ってこのままにしてみたんだ」

……。

……。

……こいつバカだ!?

「ち、ちなみに成果は……？」

「ムカつくほどに何も無かった！僕が相手をする事になった月人は如何ほどだったと思う？旧式が4器、しかもお前の時のような策は何一つ無い馬鹿の一つ覚えだ！――最早、今となっては嫌がらせしているのだと解釈しているが！」

砕けている左手を前に出してプルプルしているボルツ。

……ボクが火をつけてしまったらしい戦意はどうやら、不完全燃焼になりまくってい

るらしいです。
　怖えよ。ボルツさん怖えよ。
「でも、フォスが起きたらちゃんと左手治すって約束したんだからね！ちゃんと治しなさいよボルツ！」
「ぐっ……」
　珍しくダイヤの言葉にタジってるボルツだ。
　っつーかやめてボルツさん、そんな目でボク見るのやめて。
　ボクが悪いってか。目が覚めたボクが悪いってか。
　深々と溜息をついて、ボルツが口を開く。
「……治すさ、治すとも。たとえダイヤとの約束が無くともな。フォスが目を覚ますなら……フォスから学べばいい事なのだから」
「……はい？」
　そのままボルツは、ボクに人差し指を突き付けてこう言った。
「フォスフォフィライト――僕と戦え！」
　……。
　……。
「……硬度3半相手に、おまえは何を言っているんだ？」

思わずミルコ＝クロコップで返したボクは間違っていないと思うんですけども。
え、何？左腕の事やっぱり怒ってるんじゃないのコレ？
公開処刑しようとしてるんですけどこのバトルマニア。
「――フォスが目を覚ましたら、話してみようと皆で相談していた事でもあるんだ」
意外にもフォローを入れたのは、我らが議長ジェードだった。
「フォスの技量はこの冬に証明された。体が最下級に脆くても、戦い方次第では硬度10も相手できると。……その技を、みんなに教えて貰う事は出来ないかなって」
「……雑相手にボロボロにされたボクだよ？ボルツの腕だって、ただのマグレだと思わない？」
「思わん」
ボルツが力強く言い切った。
「あの時、フォスは僕が誰か分からずに、1合目は雑と同じように対応したな。それで効果がないと見るや、即座に戦い方を切り替えて見せた。2合目で僕の武器と挙動を見切り、髪による斬撃を左手にぶつけたのは間違いなくお前の実力だ」
「……3合目で対応されただろ？攻撃を引かれた事で、逆に隙を作らされた」
「関係ない。そもそもあの3合目、お前のターゲットはルチルに向いていただろうが」
「ええー」

「なにより。――お前の技は、有用だ。ここにいる誰も以上に僕がそう思っている」

……。

真剣な言葉だ。

あのボルツがここまで言い放っている。しかも他の皆でさえ、その言葉に同意見なようだ。

……。

……あー、クソ。

無下に出来る筈ないだろ、こんなの……

「……ジェード。ボクは、何をすれば良い？」

「稽古をつけて欲しいんだ。剣術と体術。あと……出来れば、兵法も」

両手を上げて観念する。

「……オーケー、分かった。どれだけ出来るか分からないけど……やれるだけ、やってみるよ」

――ありえない事に。

その場の全員から歓声が上がりやがるのだ。

あー、この全員相手する事になるのかぁ……非戦闘員も多分に混じってんぞこれ。

前途多難な行く先に、思わず口元が引きつってしまうボクだった。

@　@　@

ヒュッ！と練習用の木刀を振ってみる。
既に何度も確認した過程だけれど、何度振っても手になじむ。それに、この程度の重さだったら振る度に砕けなくても済みそうだ。
オブしーの仕事は完璧だ。いつもと素材が違う筈なのに、この分なら木工も行けるんじゃないの？
「そんな事ないよぉー。もぉー、じょーずなんだから！忘れてるみたいだけどフォス、武器の柄や鞘も全部僕が作ってるんだよ？このぐらいなら、いつもの作業の延長だよ」
「いやいやご謙遜を。この重心と強度はちょっと自慢してイイよ。多分スフェンがやっても、この状態まで仕上げてくれるとは思うけれど、それでもかなり時間を要すると思うわ」
「あはは、同感！一応言っとくけど、今回俺、手伝ってないぜ？オブしーは結構、全部自分でやりたい派みたいでさ」
「職人だよねー」
「職人だよなー」

「んモー、照れちゃうじゃーん！」

練習用木刀人数分。

一度に全員参加と言うのは見張りが居なくなるからアウトなわけで、このためのシフトが組まれた訳だけどさ。

それでもオブしーはキッチリ全員分の木刀を作って見せたんだよね。

ガチでもう頭が下がります。

「――さて、と」

木刀を左腰に差すように持ち替えて、ボクは『生徒』の顔を見回した。

最年少のボクに皆が教えを乞おうとしている――改めて考えてみると、とても奇妙な光景だ。

木刀を作って貰う間、どんなことを教えるべきか、ボクはアマルガム計画も博物誌も放り出してうんうん考えてた。

「――まず最初に言っとく。出鼻をくじくように聞こえるかもしれないけど聞いて欲しい。

ＬＥＳＳＯＮ１は――『妙な期待はするな』だ」

「……え？」

あまりに意外な切り口だったのか、どこからか声が漏れた。

それに苦笑して後を続ける。

「ボクの剣はほぼ我流だから、剣の基本とかは聞き齧った程度しか教える事が出来ない。そしてそれ以前、この剣は……基本、『対人』を旨としたものだ。『人間』が『人間』をブッた斬る為に研鑽された技が主だけど、ボクらが切っ先を向ける相手は違う筈じゃない？

そりゃあ、雑相手なら有効だったよ？でも、器に乗った月人相手の経験はボクには無い。つまり、最終的にボクの教えた技を対月人用に昇華するのは、他でもない皆自身になるんだ。

ボクだって、自分の技にはそれなり程度の自信はある。でもそれ以上に、これまでこの国を守り続けてきた実績のある皆の力を信仰している。

ボクの技を教えた事でそれに囚われて、皆が積み上げてきた実績と力を軽く見るのは許さない。ボクが提供できるのは、あくまで戦いの側面だ。それを飲み込んで対月人に昇華するのは皆なんだ。それを忘れないで欲しい。

――ＬＥＳＳＯＮ１、『妙な期待はするな』だ。良いね？」

「「はいっ!!」」

「――うしっ！それじゃあ、剣の握り方と振り方から始めて行くよ！」

@　@　@

――概ね、ボクの指導方針は皆と噛み合っていたように思う。
剣術の基本や体捌きと言った部分は、それまで独学でこの国を守り続けてきた戦闘班が独自に工夫していた内容を見つめなおす部分も多々あったようだ。
「――インパクトの瞬間に、手の内を締める……？」
「そう、力を入れるのは斬る瞬間が良い。ああ勿論、すっぽ抜けるほど脱力するのはＮＧだからね？胸から振った力が伝わっていくイメージかな。
固い物を斬る事を意識して力んじゃダメだ。刃筋がしっかり立っていれば、剣の重みと刃の鋭さで自然に斬れる。刃の入りと出に集中して」
時には、それぞれの工夫を披露する機会も得られたりする。
「――ふむ、こうか」
「そうそう、しっかり胸で振ってるじゃん！手の内もイイ感じ」
「僕の剣は、入りは軽く薄く、中は自然に、出は慎重に早く引く――そう意識していた。この『手の内』と言うのは面白いな、その辺りが全部盛り込まれている」
「入りは軽く薄く、出は慎重に……か。なるほど、効果はまさにそれだね。特にボルツの得物は結構長かったもんね。出の意識は今までのボルツの感覚をそのまま適用するべ

きだと思う」

人間と宝石では体の構造が違う。

その体の運用方法の食い違いは大きな齟齬を生むのではないかと危惧していた部分も多々あったけれど、思ったほどその齟齬が表に出てくるような感覚は無かった。

「はーいこの位置です！焦点はフォスさんじゃなくてペリドットおにーさまに当てよう！」

「っくそ、変顔止めろ！気になって後ろのペリドットに焦点合わせられねぇ！」

「フォーッスフォスフォス！修行が足りんぜモルガ君ッ！月人が変顔戦法してきたら連れてかれちまうぜ？」

「するかバカ！」

「フォス、でもこれだと相対する相手に焦点を合わせないと言う事にならないか？」

「まさしくその通り。『観の目強く、見の目弱く』と言いまして。相手の一点に集中するよりも、こうやって焦点をずらして相手の全体をぼうっと見た方が、かえって反応し易かったりするんだよ」

「……なるほど、覚えあるなそれ」

「さぁー良いかねモルガ君！打ち込むぞ？打ち込むぞ？」

「その笑いを誘う妙な動きをやめろクッソッッ！」

最初の訓示が効いたのか、みんな結構素直に、そして囚われ過ぎずに飲み込んで行ってくれる。
何が大切なのか、何を意識すべきかは教えられるまでもなく分かっている。
伊達に若輩でも数百年間、この国を守ってきた訳じゃないと言う事が良く分かる。
「――以上が基本の『五行の構え』だね。多分月人戦ではあまり使わないけど、対人戦……剣ｖｓ剣だと意味が変わってくる」
「正眼ってなんか、フォスがやるとスッゴイ奇麗だよねぇー」
「お、そお？嬉しい事言ってくれるじゃない。……そうだね、ボクは上段みたいな攻撃的な構えはあまり取った事無いなそう言えば。
それに正眼ってスゴいのよ？ほら、こうやって踏み込んで小手を返すだけで、右にも左にも対応できちゃうのよ。突き付けてそのまま進めばプレッシャー凄いんだぜ？」
「へぇ……全然ブレずに歩くなぁ……」
「――ッ！」
「っとぉッツ!?――ちょっとやめようぜボルツさんっ！それこないだ先生に止められたでしょっ！」
「なるほど、隙も無いしどのタイミングで行っても対応できる訳か……！」
「いやぁ、構えだけの問題なのかなぁー、今の？」

ただ約一名、意欲が強すぎて暴走しちゃうのがちょっと困った。いや、ちょっとじゃないな、すげえ困った。

今日は握り方、構え型、振り方、受け方と言う本当に基本的な所で止めておこうと思ったのに、それ以上を教えろと虎視眈々と狙ってくるのだ。

そりゃあ、キミはほとんど覚えのある内容だったんだろうけどさ！

「――それだ！その『力を流す剣』を僕は知りたい！」

「当面先だボケェッ！教えて一日目でいきなり奥義行けるかぁっ！」

「ああ、その辺りは理解しよう。――だが無視する！別に教えてくれなくとも構わん、勝手に盗むっ！」

「ちょっ!?おまっ！やめっ!!?――誰かへるぷ！へるーぷっっ!!」

「――観戦」

「かんせーんっ」

「ご、ごめんねぇ、フォス……ボルツずっとソワソワしてたから……」

「結構良い勝負してるよなぁ既に。技量だけならやっぱフォスなのかな？」

「……何と言うか、仕事の予感がしますねぇ……」

「お前ら覚えてろよちくしょぉぉーーッッ!?」

なし崩しに戦闘バカとタイマンしなきゃいけなくなるとかノーサンキューにもほど

があるんですが!?
『受け流し』をご所望のようだけどさあ！あれは本来思い通りの場所に流すってものじゃないんだぞコラ!?
　しかもお前クラスの奴が警戒しながら打ち込んで来てたら出来る筈ないだろドアホ！
　もうこれで我慢しとけと軽く踏み込んで袈裟斬りを掛ける。
　それを牽制と取ったボルツが逸らすように弾き、ものっスゴイ笑顔で無防備になったボクの逆袈裟に斬り込んで来て――
　ボクはそれを体捌きでかわしつつ、斬り込まれた小手を鋭く斬り上げて、ボルツの木刀を弾き飛ばした。
「おおっ!?」
「凄い！フォスが勝った！」
　ボルツが目を見開いている。
　真剣であれば……いや、ボルツは硬度１０靭性特級のカーボナードだから切断は無理かもしれないけど、それでも完全に小手が入っていた事は受けて理解できたらしい。
「――最初の袈裟斬りが、誘いか」
「そう言う事。それを呼び水にした相手の逆袈裟に合わせて、体を捌きつつ小手を斬り

上げる。型は今ので解っただろ?『逆風の太刀』って言う有名な技だよ。くれてやらぁ」
「おおぉーっ!」と上がる感嘆の声にちょっぴり優越感するのぐらいは許してね。
本当は今の段階で『誘いの剣』なんて高等なもんを見せたくなかったんだけど、そもそもみんな百戦錬磨だしね。大丈夫、きっと大丈夫。
よっしゃ、んじゃあ続きに戻るぞぉと向き直ってみれば、いつの間にか木刀を拾いなおしたボルツが凄いキラッキラした顔で正眼に構えてたりする。
ヘイ……ヘイッ!?満足しておこうよ今ので!?
「やはり月人と戦うよりもフォスと戦う方が、僕はより新しく高い場所に行く事が出来る……っ!
もっと!もっとだフォスフォフィライト!お前の技を見せてみろ!!」
「あり得ないんだぜこのくそバカ!?大譲歩したんだからそれで満足しておきなさいよ!?誰かへるぷ!へるーぷ!!」
「――観戦」
「かんせーんっ」
「ご、ごめんねぇ、フォス……ボルツさらに火がついちゃったみたいで……」
「新しい技見れるかな?ボルツには同じ戦法は通じないだろうし……」
「何回目ぐらいで割れますかねぇ」

「お前らほんと覚えてろよちくしょぉぉーーッッ!?」

――あっ（バキャッ！）

@　@　@

――あの野郎、『誘いの剣』を学んだと思ったら、次の瞬間『誘い』の先に斬撃ねじり込んできやがったぞ……

あの連撃技法、音に聞く『燕返し』なんじゃねぇの？ロマサガじゃないんだぞ。何高等技法閃いてくれてんだよあのアホ。

せめてドラゴンとかもっと強そうな奴にやれ。物語序盤のわんわんお相手に乱れ雪月花閃く様な暴挙じゃないのコレ？

医務室でルチルに修復を受けながら、思わずボヤいてしまうのだ。

「みんな勘違いしてるけどさぁー、身体能力も技量もボルツの方が上ですからね？ボクは付け入る隙に付け入ってるだけだっつーの。フォスフォフィライトはみんなに愛でられるべき非戦闘員だと言う事実を早く思い出して欲しいわ」

「『逆風の太刀』でしたっけ？あんな鮮やかにボルツの剣を弾き飛ばしておいてそのセリ

フは通りませんねぇ」
ちくしょうルチル、止めなかったお前も同罪だぞこのやろー。
ボヤいたら「私にボルツを止められるわけ無いじゃないですか」と返された。
この世の理不尽さに泣けてくる。
ピコーンされた燕返しの対応に間に合わず、そこから続く袈裟斬りを流し損ねて直撃を受けてしまったフォスさんです。
フォスフォフィライトって木刀でも割れるのな。初めて知ったわ。
なんなのアイツ。絶対斬鉄とか出来そうなんですケド。
「――うん、こんな所でしょう。まあ、今日のお稽古はコレでドクターストップですね」
「たりめーだ！これ以上はイジメだっつーのイジメ！」
すっかり不貞腐れたフォスさんですよ。
ダメだボルツは。最初の内は皆と足並み揃えようとした所は評価できるけど、次第に本性出して来やがったし。
「ふふ……でも、私は結構楽しかったですよ。今まで無意識に行っていた所を見つめ直すキッカケにもなりました」
「って言うか、ルチルも戦っていた時期あるんだ？」
「ええ、昔はね。……パパラチアとコンビを組んで、戦争に出ていたんですよ」

「……そっかぁ。パパラチアが治ったら、また戦争でるの？」
「いやぁ、考えた事もありませんでしたが……他に医療を任せられる者が居ませんからね。そういう日が来たら、まずは後任の育成でしょうね」
「ぶっちゃけ、ルチルかユーク取られたらこの国詰むもんなぁ……」
「言っときますけど、あなたも結構な位置にいますからね。去年の一連の騒動の中にフォスが居なかったらと思うと……ゾッとします」
あー……ユークにも同じ事言われたな。
個人的には結構みんなバイタリティ凄いから、何だかんだで帳尻合わせちゃうような気はしているんだけども。
「――所でフォス。今日あなたが言ってたセンテンスですけども」
「うん？」
「ＬＥＳＳＯＮ１『妙な期待はするな』ってやつですよ。アレを発展していったらＬＥＳＳＯＮ５『遠回りこそが一番の近道』になるんですか？」
「あぁー……まあ、うん。その通りです……」
まーだ覚えてたかこいつは。
何か、「他のＬＥＳＳＯＮも楽しみになって来ました」と凄くやる気出していらっしゃる。

いや、確かにね。あの一連のＬＥＳＳＯＮは武を修める上で通用する部分がかなりあるから、流用させて貰おうとは思いましたけどもね。

でもたぶん「お前はこれから『できるわけがない』という台詞を４回だけ言っていい！」はやらんだろーなぁ。

立ち上がって軽く腕を回してみる。いつも通り、ルチルの仕事は完璧だ。

お稽古以外にもやるべき仕事は山ほどある。

アマルガム計画、博物誌、そしてシンシャの光通信。

春になったから光通信は結構優先度が高かったりする。

この後はシンシャの塒かなぁ、っと。

ルチルが口を開く。

「――正直、」

「うん？」

「今回の件で……あなたの『記憶』の元になっている人物への興味がどんどん湧いて来ました」

「……。前も聞いたなぁ、それぇ……」

あと、先生とユークにも同じ事を聞かれた事がある。

……ボクの回答はいつも同じだ。

「ええ、分かってます。『秘密』なんでしょ？……今の『フォスフォフィライト』としての生き方に、『記憶』のそれを引き摺らせるつもりは全くないから」
「うん。――『記憶』のボクが語るのも辛いほど悲惨だった、って訳じゃあないよ。ただ、ボクは今がとても好きなんだ。ムカつく人攫いはいるけどね」
「今回の武術指南……最初に渋ったのは、『記憶』に依存する部分が多くを占めていたからですか？」
「……。
……ああ、痛い所を突かれちゃうなぁ。
努めて明るく振舞いながら、言葉を返す。
「……そうだね。もっとも、言った通りボクの技が対月人に有効かどうか責任を持てなかったという部分も勿論あるけどね。
――ボクは、この通り脆弱だからさぁ。ゆくゆく『記憶』の部分しか求められる所が無くなってしまうと……多分、立ち直れなくなっちゃうかも……なんて、ね」
――『宝石に生まれる前の方がよほど良かったんじゃないか？』
……そう言われてしまう状況になるのが、一番堪える。
「――ああ、どことなく影があるかなと思ってたら、そんな事ですか」
ルチルの手がボクの頭に置かれた。

まるで、先生がそうしてくれているかのように。

「あなたは、自分の性格と実績を軽視していますよ。……私が、私たちが、どれほどあなたに救われた事か。

確かにあなたは『記憶』を利用して立ち回っていたに過ぎないのかもしれませんけどね。でも、私たちにとってそんな物は関係ないんです。

私たちを支え続けてくれたのも。脆い身でありながらあの大部屋を死守してくれたのも。全部ここにいるフォスフォフィライトでしょう？

――私たちがフォスに教えを乞おうとしたのはね、フォス。そんなあなたに、憧れたからですよ」

……目を閉じる。

一番欲しかった言葉だった。

『記憶』の事を認めた上でそう言ってくれる事が、一番嬉しい言葉だった。

「……うん。ありがとう、ルチル兄さん」

「ええ。『記憶』云々は純粋に私の好奇心です。微妙な話題振ってすみませんでした。

――行ってらっしゃい、フォス。シンシャが待っています」

「うん――行ってきます」

@　@　@

――結果として。

『フォスフォフィライトの武術指南』はなかなかの好評をもって第1回を終了した。

その為、戦闘のできない体の脆い石が皆に武術を教えると言うこの奇妙な仕事は、今後も続いて行く事になる。

第15話「獣」

先生が限界を迎えた。
皆の戦意がＭＡＸになっていた時、先生も同じく戦意が上がったようではあったけれど。
それでも持って生まれた（？）性質と言うのはどうもならないらしい。
ついに意識を飛ばして学校の柱に頭をぶち当てる状態に至った。
「先生には悪い事をしてしまったわ。ボクたちが起きてるのに結構付き合ってくださったから……」
ユークが頬に手を当てながら嘆息した。
さすがに夜は寝ていたそうだけど、この冬は結構夜更かしも多かったそうで。
あー……元はと言えばボクのせいでもあるかぁ。
ジェードが引き継ぐ。
「……で、先生お昼寝シフトに切り替える事にした。手隙の者は全員出る」
「ああ……たまにある長期シフトの方ね」

基本的にボクらの対月人ロジックは『各石が月人を見つけ、先生がこれを撃破する』と言うスタンスだけど、先生の長期お昼寝シフトの場合は『各石が月人を見つけ、増援を呼んだ上でこれを撃破する』と言うスタンスに変わる。
増援に出やすいように見回り組も増える。
だから校内の雑務が根こそぎお休みになるんだよね。
ユークとジェードも学校周辺と言う限定的な範囲だけど見回りに参加する。
例外は戦えないボクとアレキ、そして万が一でもケガをしちゃいけないルチルの３名のみだ。
……このシフトだと、ボクは完全に要らない子状態になるんだよなぁ。
「技量が高いとはいえ、流石にフォスを外回りに出すのはマズいからな……」
「脆い上に足も遅いからね。大丈夫、その辺は弁えてるよ」
自嘲気味に苦笑する。
この分野においてボクは完全に役立たずだ。
迂闊に割れて連れて行かれたら目も当てられなくなるしね。
「状況了解。しばらくはおとなしくニートしてるよ」
「ああ、すまない……シンシャについては例によって見回りから外れているから、もし光通信の件でシンシャの所に行く場合は声をかけてくれ。私が護衛する」

「うん、ありがとう」
二人に手を振って別れた。
――さてどうしよう。
このシフトだと本当にやる事がない。……博物誌ぐらいか？でも外出は出来ないから、校内にあるものを適当に羅列するような形になるのよね。
窓から入る日差しを浴びてぐーすか寝こけてやろうかとも思ったけど、冬眠させて貰っちゃった手前、ちょいとばっかり気が引ける。
ルチルのとこは……お昼寝シフトだと急患が出た時に邪魔しそうで悪いしな。
――アレキのとこでも行こうかな。
最近の月人情報も纏めてるだろうし、目を通させて貰えないかお願いしてみよう。

@　@　@

「アーレッキちゃん、あっそびっましょー？」
お約束のセリフを吐きつつアレキの部屋をのぞいてみる。
当の本人は月人の資料の束と睨めっこしていた顔を上げ、なんか可哀相なものを見るような目でボクに視線を向けた。解せぬ。

――アレキサンドライト。
硬度８半、碧色の輝く長髪を腰まで靡かせた年長組お姉さん。
いつも月人の研究をしているから月人マニアとあだ名されてる。
大きな声では言えないけれど、「年長組のやべーやつ」と言えば大抵アレキの事を指す。
「フォス、あんた……長期お昼寝シフトでやる事無いからってアタシんとこまで遊びに来たぁ？」
「なんだよぉー、塩対応すんなよぉー。ルチルんとこは邪魔したら悪いなぁーって思ったんだよ……
これを機に、最近の月人の資料にも目を通せればって思ってさ。……新式、纏まってる？良かったら見せてくれない？」
「良いけど……あまり情報集まってないわよ？」
何せめぼしい新式はいずれもシンシャにしゅんころされてる。そのシンシャでさえ、月人のいでたちをしっかり見ていた訳じゃない。
そう言ってアレキは今まで見ていた紙の束を差し出してくれた。
「わぁい、ありがとぉー……」
……。

一番最初に確認された新式。ヘリオドールの鏃を持った月人。
モルガとゴーシェに上半身を両断されるもそのまま残存。先生に霧散させられる。
二番目は王サマ騒動の月人。三器同時に出現し、サファイヤの牙を携える。
他の2器と合わせ、シンシャにほぼ同時に霧散させられる。
三番目は冬の月人。大量の雑が学校を襲っているさなか、二器同時に出現。
ピンクフローライトの爆弾を使いアンタークを挟み撃ちにしたが、アンブッシュしていたシンシャに霧散させられる。
この紙の束には出現した時期、場所、シチュエーションと言った部分が多く書き込まれていたが、月人の様相についてはほぼ記載がなかった。
情報不足による為だ。
「……うん？4器目？」
「あ、ごめん。それは私が考えたオリジナル月人だわ。新式を作るならこんなんかなー、ってさ」
返してー、と伸ばされたアレキの手を押し留めて中身を熟読。
「5閃型――器は歪円形小型。……思い切ったな、雑なしの単騎か」
ボクが真面目に目を通してるのを見て、アレキが伸ばしていた手を降ろす。
「……あんたはこう言うオリジナル描いても変な事言わないでくれるから好きよ。ちな

みにそれは、今まで危なかったパターンから考えてるの」
「雑は別運用？……うん、描いてあるね」
「私は冬の大立ち回りの時は普通に眠っていたわ。……でも、後から話に聞いて背筋が寒くなった。その時のエピソードが元よ」
「……確かに、これやられるとウチはチョッと弱いな。皆雑なんてほとんど意に介さないほどの実力はあるけど、その展開力をフルに使われて器の上からじゃなく包囲攻撃されたとしたら……かなり厳しい」
　前々から警告してはいた事柄だけど、月人が雑の使い方を工夫し始めたらこっちも対応を考えないといけなくなる。
　月人一器に対して平均した雑の出現数は大体３０～４０体ほどか。
　例えばこれを３チームに分けて、２チームをあらかじめ地上に隠密のまま展開して挟撃、もう１チームで食い破るみたいな運用されたりしたら正直防ぐ方法が思いつかない。
　黒点と言う前兆が必ず発生するから、それを頼りに出会いがしらを抑えるやり方でなんとかするしかなさそうだ。
「攻撃方法は……爆弾をつけた矢、か」
　さすがに誰の体を使うかなんて所は書いていないけど、攻撃手段だけとってみれば凶

悪の一言だ。

爆破する矢、つまり『記憶』風に言えばＲＰＧ―７あたりか。器が歪円形小型なのはこの矢の射角を取る為だろう。

アレキの頭の中にある月人の『効果的な運用方法』が随分ミリタリーじみて来たと思う。

コレはちゅうがくにねんせいが書いた『ぼくのかんがえたかっこういいつきじん』ではなく、アナリストがガチで書いた『宝石の国を落とすための月人』だ。

今までの月人の攻撃オプションが元になっているから、技術的にも実現性がある。

「怖いなぁ、アレキちゃんすっげぇ怖いなぁ。こんなのどうやって防げば良いんだよ。既に見た技術だけで構成してコレだよ」

「よー言うわよ。この構想にはね、アンタがたまに口にしていた『やられたら危ない運用』ってヤツも多分に入ってんだからね。

たとえばアンタが裏切ったら、３日経たないうちにこの国から半分の石が消えるわ絶対」

「ひっでー言われよう」

「んでもって、私たちは多分その３日が過ぎてもアンタが裏切った事が分からなかったりすんのよ」

「ひっでー言われよう」
　硬度3半の超虚弱宝石相手にあんまりな評価だと思うの。
　ボクが皆に勝ってる点なんて、このぱっちりカワイ美し過ぎる見た目ぐらいしかないと言うのに。
　――え?逆風の太刀?知らない単語ですね。
　ホラ、ボクってば箸より重いものとか持ったコト無いですしおすし。
　――え?なに?
　オブしーにボクの専用刀を作って貰った上で、その事をボルツにチクる?
　やめろよ――やめろよ（迫真）
　世知辛いこの世の中であってもやって良い事と悪い事があるだろうがごめんなさい許してください何でもしますから。
　……えぇ?じゃあ、この月人の対応方法を3パターン考案せよ、だってぇ……っ!?
　鬼や……アンタ鬼やでぇ……っ!年端も行かないか弱い石をイジメて何が面白いって言うんや――あ、やめようねボルツはやめよう、あいつホント頭おかしいねん。正直武術指南からボルツだけ外したいと思うくらい。
　ええと?そうだなぁ……爆発物相手だしなぁ。やっぱ基本方針は『殺られる前に殺れ』は鉄板だと思うの。

冬のシンシャと同じ感じでさ。戦闘員を迷彩する方法は結構有効だと思うんだけど、それ以上に遠距離攻撃欲しくなるな。

ダイヤに相談した事あったけど、投石紐を進言してみるかなぁ？

それと――精神衛生上大変よろしくないけど、爆弾の矢を掴んで投げ返す……ってのも有効っちゃあ有効か。

接触信管、時限信管、両方考えられるけど……ボルツやダイヤの身体能力なら両方とも対応出来そうな気がするなぁ。

多分相手をする時には雑も攻撃をしてくるだろうから、投げ返しを含めたオフェンス1、ディフェンス2のスリーマンセルを組んでおきたい所だね。

負傷が発生した時も、それが1人であれば残りの2人でリカバリーが出来るかもしれない。

後は……やっぱり地の利っスかねぇ。せっかく待ち受ける側なんだしうまく活用したいよねぇ。

爆発を防御できる塹壕とか武器置き場とか、後は雑の展開を狙ったトラップとか。

その辺りは結構工夫の余地あるんじゃないかと思うのよボクは。

「あぁー……ごめんフォス、さっきの言葉訂正するわ」

「うん？」

「あんたが裏切ったら、１日でこの国滅ぶと思うわ」
「心外過ぎるんだぜ!?」
　だいたい、戦争と言う奴は始まるまでの下準備で勝敗が決まるって言われてんねんぞ。たった１日でそんな準備が出来てたまるか。
　っつーか、人徳皆無の月人に与するとかどう考えても脅しによる脅迫でしかありえないから、ボクだったら王サマ騒動の時みたいに従ったフリして手駒を揃えた上で、横合いからブン殴って総取り狙うけどね？
　え……なんですかアレキちゃんそのおめめ。
　ぷるぷる、ボクはわるいフォスフォフィライトじゃないよ？
「……アンタさぁー、そんだけ戦略眼あるくせに何でユークと一緒に戦略計画担当に納まって無いワケ？……いや、確かに総合顧問って言う今の立ち位置は、これ以上ないと思うぐらい様々な分野でうまく回ってるとは思うけどさ」
「そりゃ、ボクは良くも悪くも『みんなの手伝い』しか出来ない石だからに決まってる。
――アレキの言う戦略眼なんてのも買い被りの幻想でしかないよ。専門じゃない事に対して、ちょっぴり『記憶』にある事柄から引用しているに過ぎない」
　こんなもん、例えばミリタリー系のゲームのひとつふたつやってる奴がいたなら簡単に席を譲る程度の知識しかない。

ボクの『記憶』の専門分野系知識のほとんどは、専門職の人がそれに携わる際に歩んで来ただろう『基盤』と言う奴が含まれていない、所謂虫食いの知識でしかない。

適正すら仮初のモノでしかないのだ。

――そんな奴が専門職に携わったらどうなる？

周りを巻き込んで盛大な、たいそう盛大な自爆をするに決まってる。

『総合顧問』なんて聞こえは良いけどさ……肝心な所の決定を人任せにしている、究極の無責任者と解釈出来るんだぜ？ボクは。

――スパァーンッ、と紙束でドタマを叩かれました。

「……な、なんだよぉー……」

「いや……私が尊敬してる奴をズタボロに悪く言われたんで、ちょっとムカついた」

アレキの表情が目に見えて不機嫌になっている。

思わずボクは息を詰まらせた。

「――そりゃあ？いちおー本人の言うコトですし？一定の『理』ってヤツがきっとその言い分には含まれてるんでしょーよ。

でもアンタ、全力だったじゃない。無責任に口出すだけじゃなくて、虫食いの部分に対しても全力だったじゃない。無知のまま放りだすんじゃなく、一緒に並ぼうとしてたじゃない。

『ボクも手伝うよ』『一緒に頑張ろう』……それ系のセリフをどんだけ言って来たかアンタ覚えてる？私も覚えてないけど、少なくとも両手両足じゃあ数えるのに全く足りない事ぐらいは解るわ。

――私はね。頑張ってる子が好きなのよ。だから頑張ってる事を卑下するような奴は許せないの。おわかり？」

ボクの頭をスパスパ叩き続けながら、アレキが言う。

「――ハイ。ごめんなさい」

「よろしい」

ボクは、本当に愛されているなぁと思う。

３００年経っても、そしてこの後何百年経ったとしても、そこは変わらないんだろうなと言う奇妙な確信と嬉しさがある。

だからボクは、そんなこの国が、皆の事が好きだから、もっと皆の役に立ちたいなと思うんだ。

――叩かれた頭が何だか嬉しかった。

もしボクが月人に与する日が来るとしたら、それはきっと月人の為ではなく、この国の皆の為なんだろうなと思う。

――ゴーン……ゴーン……ゴーン……

ふと、重く荘厳な鐘の音が響いてきた。

「――月人!?……でも、あれ?」

アレキが紙束を置いて窓に近寄る。

どうも様子がおかしい。

「……今、鐘の音6回鳴った?」

「うん……ボクもそう聞こえた」

鐘の音6回。

二種警戒態勢――あんまり聞いたことの無い、所謂『警戒待機』の合図だ。

冬に鳴らそうとしていたように、月人襲来が高い確率で出現することが予想される状況で、それを緊急的に皆に知らせるケースを想定した合図な訳だけど……

先生お昼寝シフトって言う今の状況が、つまりそれのコトなんだよね。

この場合、どう噛み合うんだ?――『待機しろ』と緊急で伝えたかったって事か……?

「鳴らし間違えじゃなければ――誰かの策と見て良いかも」

「先生お昼寝シフトだと、殆どのメンバーは校外よ。その状況で『待機』させる意味って

何かしらね？
――校内に、誰も入れさせたく無いって事……？」
……アレキと目線を重ねる。
思い出すのは冬の一騒動だ。
「――先生の許可出てないけど、武器工房に行こうと思う」
「異議無し」
早々にボクたちは廊下に飛び出した。

@　@　@

オブシーはボク専用の剣を作りたがっていた。
ありがたい事だと思うけど、ボルツが怖かったのでそれは遠慮させてもらった。
それに、ボクが積極的に剣を持たなくてはならない状況は本来避けられるべきだ。たとえ専用剣が出来たとしても、先生はボクを戦争に出す事を良しとしないだろう。
しかし冬と言い今回と言い、どうしても護身用として持っておきたい状況は出てくる物なんだなと痛感する。
ボクは冬にも使った一番小さい剣を。

アレキは、適当に余っていた直剣を掴んだ。
ボクたちが武器工房に来たのは、月人を索敵する為じゃあない。
校内で月人とエンカウントしても、逃げられるように手数を増やすためだ。
「一応確認しておきたいんだけどさ。アレキが非戦闘員なのは、ボクと同じく戦えないからだよね？」
「……そうよ。本当は、月人見るのもダメだって先生に言われてる」
――『見るのもダメ』ときたか。月人マニアらしからぬ評価だね。
アレキサンドライトは明瞭劈開があるものの硬度8半。ボクみたいな脆さからの理由じゃなく、戦闘能力はあれど何らかのトラウマを刻まれたからと考えるのが自然だろうか。……うーん、しかしそれなら月人マニアなのはおかしいか？
……ともかく、護身用として武器は持てても使う事を期待してはいけない類なのだと見切るべきだろう。
「了解。ボクが前に出るよ。――そうだな、医務室に籠るのが良いかな？あそこならルチルもいるし」
「そうね。……一応、ルチルの分の剣も持って行ってあげようかしら？――大丈夫か。医務室には剣の代わりになるものがわんさかとあるし」
ノミとかハンマーとかヤットコとかね。

大工道具もかくやと言うほど医療道具はそのまま危険物だと思う。
そういや王サマがルチルの事を『千の解体具を持つ白い狂気』とか言ってたけど、ボクが食べられちゃってた時になんかあったんですかねぇ？
――医務室へ続く廊下で、ふと足を止めた。
自然と右手でアレキを制する形をとる。
「――フォス？」
「聞こえた？」
「……？」
アレキの返答は疑問の沈黙で終わる。
微かに感じ取ったのは、何か戦闘の様な反響だ。
全身を脱力させながら剣の鯉口を切り、柄を正中線まで持ってくる。
意識して重心を整えると、右手をそっと柄に当てた。
抜刀の構えだ。
首筋を這いまわるように感じる暴虐の意。
獲物を狙う野生の空気。
――『記憶』の中にあった感覚から経験を引き出す。
「この殺気……獣の類か……？」

「は、え……獣？」

この国ではありえない相手だろう。中型以上の動物は生まれてついぞ見た事がない。

だから『獣』なんて言うのもみんな単語しか知らないと思う。

これで獣でなかったらフォスさん、ただの赤っ恥だわね。

――が、本当に獣であれば脅威だ。

高耐久、高攻撃力、そして素早さと何よりも鋭い感覚。全身上質な筋肉で出来ている獣と言う奴は得てして人間より強い。

飛び道具を以て一方的に攻撃できる状況を作って初めて有利になるのだ。

接近戦で戦う場合、武芸者であっても後れを取る事が多々ある。

今のボクの剣と体で対応できるか――？

「――ッ、窓っ!!」

気配を追って窓に視線を向けると、何かをガードしたような恰好のまま校内に吹き飛んで行くダイヤと、それを追ってのそりと表れた巨大な姿があった。

七つの目。口外に突き出す４つの牙。毛皮で覆われた筋肉質の体と腕輪で装飾された六臂。

黒く輝く手足の爪は、学校の床材と触れる度に硬質な音を奏でている。

背中には後光にも見える輪っか状の毛を携えていた。

「グオォォオ」と漏れる唸りが響く。
「つき……じ、ん？」
驚愕と疑問が混ざって口から洩れた。
カラーリングは月人その物。しかしその様相が既知のモノとはまるで違う。
あれはまるで――阿修羅のような。
「――フォスっ！逃げてえぇぇっっ!!」
ダイヤの悲鳴に近い叫びが上がる。
阿修羅のようなその何かは、７つの目をボクに向けると、次のターゲットを決めたとでも言うようにその瞳孔がきゅっと狭まった。
「っつぉおおおおおおあああぁぁっっっ!!」
――ボルツの奇襲。
裂ぱくの気合と共に振り下ろされた黒刀はしかし、反応した奴の爪によって容易に弾かれた。
続けてヤツがボルツの体を掴もうと手を伸ばすが、ボルツはその手に斬撃を叩きつけてその反作用で離脱する。
５条の黒髪を靡かせ、ボクの近くに着地した。
――情報を要求する。

「一応聞くけど――アレは月人!?」
「ああ、2重の黒点から出て来た。見ての通り難敵だ。
ダイヤと挟撃して一度は何とか2つに割ったんだが、霧散するどころか分裂してそれぞれが襲い掛かってきた。戦ってるうちに融合して元の姿に戻ったがな」
「分裂に再生!?何だよそのインチキッ!!」
ここにきて鐘6つの意図を悟る。
アレキの新型月人なんて可愛いモンだ。今までの月人とは格が違い過ぎる。
まともにやって勝てそうにないから、皆が居ない校内におびき寄せつつ先生を起こす策だったんだろう。
武器工房はルチルのいる医務室からもアレキやボクの部屋からも遠い。
……エンカウントしないように誘導していたみたいだけど、ボクたちが武器を確保しに来たのが裏目に出た。
ボルツが舌打ちする。
その視線の先には、先ほど吹っ飛んできた衝撃によってか、目のあたりが抉れて欠けたダイヤの姿があった。腕にもヒビが入っている。
剣を構えて戦意を示しているけど、このクラスの難敵に目の負傷はマズい。
「一応聞くが顧問殿。アレへの対策あるか?」

「マトモにやってられるかよ――先生召喚一択だ」
「だろうな」
バトンタッチだ。
言われなくともボクたちの役目を悟る。
ボルツに変わって先生を起こしに行くのだ。
「アレキ、本堂に向かうよ！――アレキ？」
「あ……ああ、あああ……っ」
アレキは、恐怖とも興奮ともつかないような声をあげながら、膝を折って体を震わせていた。
『見るのもダメ』と言うのは、こう言う事か！
「来るぞっ!!」
６つの腕を存分に使って、獣の月人が突っ込んでくる。
チラリと横目でアレキを見た。
――見捨てるなんて、ありえないっ！
「こっちだ化け物っ!!」
そもそも言葉が通じているかどうかも怪しいけど、ヘイトを少しでも稼ぐ為にヘタクソな挑発を行いながら駆け出した。

ともかく射線をアレキから外さないといけない。
——ボルツが並ぶ。
ボクの襟首をとっつかみ、羨ましくなる俊足で月人の攻撃範囲から離脱する。
空振った月人の腕が床を抉った。
「……グズめ。意図は買うが、蛮勇は愚か者のやる事だ！」
「蛮勇しか手段がないなら喜んでやってやるさ！」
「——ふん」
アイツの目線がアレキから外れる。
ヘイトは何とか稼げたようだ。
懐から糊の容器を取り出してボルツに渡す。
「これは？……なるほど、目か」
「量は心許ないけど、あんだけ目が密集してるならあるいは、ね」
一瞬で意図を悟ってくれた。
この糊を使って目つぶしを掛ける算段だ。
「外見からの分析だけど……もしかしたら、素早い動きを捉えるのは苦手かもしれない」
「ほう、根拠は？」
「7つの目だ。数学の問題だよ。——2本の直線は平面上であれば必ず1点で交わるけ

れど、７本の直線となるとそうは行かない。焦点を合わせる事自体は苦手と見た」
　人に限らず、多くの動物の目が平行に２つ付いている理由だ。
　昆虫のような不動の複眼ならともかく、眼球タイプは『焦点を合わせる』と言うアクションがどうしても必要になる。
　１つでは遠近感が無くなり、３つ以上であれば焦点が合わせ難く、上下に２つであれば左右の見通しが悪くなる。
「なるほどな。逆に言えば、先天的に『観の目』で見ているとも言えるな……よし、ダイヤ！」
「ほえ？――うわっととっ!?」
　ボルツが糊の容器をダイヤに投げ渡した。
　片目が使えない為か、若干取り落としそうになりながらもダイヤがそれをキャッチする。
「援護する！死角から目をつぶせ！」
「――ッ、うんっ！分かったっ!!」
　ボルツが左手でボクの剣を奪い、鞘を払った。
　大小の二刀流。奇しくもボルツの構えが宮本武蔵をなぞる。
「本堂は反対側か――隙を見て駆け抜けろ」

「……アレキを確保したい」
「それは最早蛮勇ではなく無謀の極みだ。……僕とダイヤがどうとでもしてやる！」
――正論だった。ボク一人ではアレキを担ぐ事すらできないだろう。
チクショウ、と口の中で忌々しく吐き捨てる。
我が身の脆さに嘆く時間すら、今はない。
「――行くぞっ!!」
ボルツの号令と共に場が動いた。

第１６話「しろ」

飛来する爪撃を紙一重の見切りでボルツが躱して行く。
恐らく初めてであろう二刀流を自前のセンスで巧みに操っている様は流石としか言えない。
左手の小剣で突き、払い、注意を引いて、右手の大剣で一撃を狙う。
そのトリッキーな動きを何とか凌いでいるものの、月人側の危なげさがじわりじわりと滲んできている。
ボルツは『獣の月人は先天的に観の目でいる』と表現していた。宮本武蔵の五輪書には『観の目強く、見の目弱く』と記されてるし、ボクもそう教えた。
あくまで『見の目弱く』だ。『見の目なし』じゃない。
『観の目』が視界拡大による反射の向上なら、『見の目』はある種の戦術眼に繋がる。これを完全に捨ててしまうと細かい部分で何をしているかが解り難くなるから、トリッキーな行動に弱くなる。
距離を誤魔化す様なフェイントを入れた斬撃や月人の腕の影から繰り出す突きなど

は、攻撃力を犠牲にしてもかなりの効果を上げているように見える。
ボルツはボクからアドバイスを受け取った一瞬で、ここまで戦い方を組み立てていた。
月人の死角からダイヤが迫る。月人の体を踏み台にして頭部を狙う。
自らの体を駆け上ってくる故に、その死角であってもダイヤの存在と位置に気付いているが、6本ある腕のいくつかを回してもダイヤを捉える事は出来なかった。ボルツの攻撃がそれだけ嫌らし過ぎたからだ。
ボルツは目潰し役のダイヤの援護で終わらせるつもりは全くない。隙あれば容赦なくぶった斬る。叶うなら先生を呼ばれる前に終わらせようとすら考えているだろう。
道が見えた。ヤツの脇、反対側への逃走路。
ヤツはボルツとダイヤに掛かりきり。しかも押されている。
これならいける。月人の脇をすり抜け、反対側へ猛ダッシュだ。
身を小さくしながら走りだす。
――ボクは気づいていなかった。
月人の7つの目。そのうち額についている1つの目だけが、ずっとボクの動きを追っていた事に。
「――っ!?フォスっっ!!」

首筋に指すような殺気とボルツの怒声。
その二つに反応してとっさに床に伏せた瞬間、月人の薙ぎ払うような蹴りがボクの後頭部を削ぐように振り抜かれていった。
「……あ……？」
髪の毛と頭蓋の一部が吹っ飛び、壁に叩きつけられて薄荷色の雹を降らせる。
眩暈のような感覚を覚えた。変な風にひびが入ったようで、視界が若干ズレている。
くっつけば元に戻るボクらの体でも、頭部への喪失ダメージはマズい。
人間のように死ぬ事はないけれど、『頭の役目をしているインクルージョン』が削り飛ばされる事で、動いたり思考したりと言う行為に制限が掛かるのだ。
……膝をつきながら震える手で後頭部に触れる。
どうやら結構な量を、今の一撃で失ったらしかった。
今の一合で空いたリソースに踏み込んだボルツが、月人の腕を1本丸ごと切り飛ばしていた。
——逆に言えば。
ボクへの攻撃と腕1本を1——1交換されたのだ。
「こいつまさか——最初からフォスを狙っているのか!!?」
ボルツが最悪の予想を口にする。

とっさに身を投げ出して前転。
しかし間に合わず、右足の一部が追撃で振り下ろされた拳に叩き割られる。
床に打ち付けられた拳の衝撃がボクの全身を伝わり、さらにどこかでピキリとヒビが入る音を聞いた。
続くボルツの追撃は間に合っていなかった。
ボルツが更に最悪なものを見たからだ。
斬り飛ばした月人の腕が犬のような形状に変化して、足を割られたボクに向かって突っ込んで来ていた。
「なんだとおおぉーーッツ!?」
突如、月人がボルツに突っ込みヘルプに来るリソースを潰しに行く。
完全に狙った挙動だ。
明らかに、ボクが狙われている。
この足では逃げ切れる筈も無い。
「――フォスッツ!」
ダイヤの対応も間に合わない。
唸りをあげながら犬型の月人がボクに飛び掛かり――
「そぉいっっ!!」

――カウンターに、その口内に右手を突っ込んだ。
「……え？」
ダイヤの動きが固まった。
ボクはそのまま舌を掴み、床に叩きつけて左腕で首を押さえ、体重を乗せに掛かる。
一丁上がりだ。
組み敷いた腕の中から苦しそうな鳴き声がキャンキャン聞こえる。
「おいおいおいおい、暴れんなよ……君の方からラブコールして来たんだろ？」
有名な話だ。
1．　犬は舌を掴まれると体の構造上、何も出来なくなる。
2．　犬が獲物に飛び掛かる際は、まず喉笛を狙いに来る。
ふはははは、分離した際の形状が仇になったな！鉱物で出来たフォスさんだぞ！痛みなんて気にしないし、喉笛に来ると判ればカウンターのひとつも取れらあっ！
「――こっちは大丈夫！そっちのデカい奴の対処を！」
「さっすがフォスっ！」
ダイヤがUターン。
そしてボルツの怒声も続く。
「いつまでも――調子に乗るなっ!!」

強烈な蹴りが額の目に炸裂した。
グシャッと嫌な音と共に獣の月人が大きくのけぞる。
その隙に合わせ、ボルツがダイヤの隣に向かって大きく跳躍、着地した。
――額の目から霧のようなものが噴き出している。
獣の月人は体勢を立て直して頭を振ると、仕切り直しとばかりにこちらを向いて唸った。
額に手を当てたり、痛がる様子は見受けられない。
「完全に切断しなければ分離する事は無いようだな。――フォス、そっちは大丈夫なのか？」
「正直言うと、頭取られたのが地味に痛い。喪失した記憶は今のところ浮かばないけど、運動に必要なインクルージョンがすっ飛んだのか足がうまく動かないや。
……コイツについては、この形を取ってる限り問題ない」
「フォス……手、食い千切られちゃったりしない？」
「大丈夫だよダイヤ。この形状の獣はね。口に手ぇ突っ込んで舌を掴むと動きが極端に制限されるんだ」
「そ、そうなの？」
「しかし、先生を呼びに行く事はコレで出来なくなったな。

アレキ！――っくそ、こんな時に限ってダメな方が出てるか」
――『ダメな方』……？ボルツの言い方が少し気になる。
アレキは、廊下の片隅で気絶していた。
「あの月人は明らかにフォスを狙ってる……迂闊に斬って分裂させてしまったら、動けないフォスを連れ去られちゃうよぉ……」
「相手に出来るのは僕とダイヤで2体まで、か。……すまないダイヤ。僕の判断ミスだ。2種待機が仇となってしまった。早期の援軍が望めない以上、僕たちだけでやるしかない」
ダイヤが目を見開いてボルツを見る。
「ふふ。ボルツも間違う事、あるのね。少し……ボルツが近くなった気がするよ。
――うん、平気！なんだってやってやるっ！冬のフォスには負けないんだからっ！」
「そうだな。――目潰し作戦、引き続き試してみよう。あるいは、ここで時間を稼げばルチルが気付いてくれるかもしれない」
ダイヤ族の兄弟が同時に地を蹴った。

@　@　@

人間以外の動物は、だいたい鼻のみで呼吸するそうだ。こいつに呼吸と言う概念があるのかは解らないけれど、気道を塞いで窒息させるにしても両腕が塞がっているこの態勢では難しいと思う。

この状態で鼻を押さえるのは無理がある。

首の骨をへし折ってみるか、とテコの要領で力を込めてみるのだけれど、この犬より先にボクの腕の方からみしみし音がした辺りで止めた。

ボクはどうやら、完全に動きを封じられたらしい。

ボルツとダイヤの連携は獣の月人を押していたけれど、決定打を入れる事が出来ないのが大きなハンデになっていた。

切断すれば分裂される。分裂されたらボクが襲われる。だから斬れない。

人質を取られたまま戦っているようなものだ。

こんな事態、全く想定していなかった。

確かにボクは月人好みの薄荷色の石だ。だが、ここまで露骨に狙われた事はない。

――心当たりはある。多分、王さま騒動の交渉の時だ。ボクがターゲットになったとするなら、あの時以外に考えられない。

冬の大立ち回り……アレはもしかしたら、冬眠している皆を狙ったんじゃなくて。

狙われていたのは――ボク、か？

「……チクショウ」

確かに、あの時は想定していたよ。ボクのヘイトが高まるだろうなと想定していた。でも、ボクは非戦闘員だ。先生、シンシャ、ボルツの3強が揃っていて押される事なんてありえない。今後の影響も大した物ではないだろうと楽観的に考えてたんだ。

――そのツケが、これか。そのツケが、あの冬か。

判断ミスしたのはボルツじゃない――この、ボクだ。

つくづくこの脆い体が恨めしい。

せめてダイヤの半分も硬度があれば。せめてボルツの半分も靭性があれば。きっと、何も出来ずに抑え込まれる事も無かっただろうに……っ！

「――くっ!?」

ボクの焦燥を隙と見たのか、犬の月人が拘束を振りほどこうと瞬間的に体を揺すった。

何とかそれに反応して、重心を動かし押さえつける。

数秒それを続けると、脱出は無理と悟ったのか喉の奥から「キューン」と声をあげて動きを止めた。

……そうだ、逃避しているような余裕はない。

前から解っていた筈だ。ボクは一人じゃ何も出来ない。何も成せない。誰かの手を

借りなければまともに仕事も出来ないような脆弱な石だ。
だからこそ、せめてボクのできる範囲で誰かの力になれるようにと努力してきた。
今もそうだ。
たとえ発端がボクであろうとも、あの交渉が無駄だったとは思わない。
これがあの時のツケであるならば、それはそのまま月人の『焦り』と直結しているとも取れる。今確かに、『変化』が訪れているんだ。
そんな中でこの手を離せば、ボクは身勝手な悲観からボルツとダイヤの足を引っ張るだけの石になってしまう。
それだけは許せない。それだけは認めない。
ボクは、今のボクの役目を果たし続けるべきだ。
握った舌に力を込める。
「靭性最下級にも矜持ってヤツがある……逃がしはしない……お前だけは……っ！」
――恐怖か何かでも感じたのだろうか。
犬の月人の体が、強張ったような気がした。

@　@　@

状況が動いたのは、ボルツが『与えて良いダメージ』を見切ってからだった。
逆側まで貫通しない浅い斬撃であれば、分裂せずに傷口から霧を噴くようだ。
突きや殴打もセーフ。
そして、そうやって作った傷口は再生するが、完治までに多少の時間が掛かると見えた。
おまけに、筋肉の配置や挙動については哺乳類のそれにほぼ当てはまる――
「――見切ったぞ、化け物め!!」
ボルツの次の行動は必然だった。
腱斬り。中型動物を見た事がないボルツでも、散々月人を相手にしてきた経験が、筋肉の役目をある程度教えてくれたようだ。
腕の内側、腿の裏。およそ『稼働』に必要な筋肉を見切り、正確に切断するボルツの天稟が冴える。
瞬く間に右足と腕２本を停止に追い込んだその技は流石だった。
ダイヤも負けていない。脇の下を斬り裂き、ガードを誘って腱斬りに繋げるその術理は、型は違えど『逆風の太刀』と同じもの。
「ほりゃあああぁぁぁぁーーーっっっ!!」
気合一閃。

ダイヤが頭部へのガードを潜り抜け、蓋の開いた糊の容器を月人の眉間に叩きつける。

クリーンヒットした容器はバキッっと音を立てひしゃげ、中に入っていた液体を瞬間的に溢れさせた。

糊が顔の形に沿って流れ、うまい具合に目を覆って行く。

「おまけよっ！」

ダイヤの2連撃。

Vの字を逆にしたようなその斬り筋は、7つの目を全て通した上で糊の流れやすい溝を掘り込んだ。

霧が噴き出し再生が始まる。

――だが、再生しようとする部分に『異物』が入り込んでいたとしたら、その部分はどうなる？

「――よしっ！完全に『食い込んだ』っ!!」

アレは鉱物を接着する為に使ってる樹脂由来の糊だ。

月人に『痛み』があるかどうかは分からないので、『沁みる』事による視界封鎖が期待できるかは分からない。

しかしあやれば――糊の粘性と接着力、そして再生による『食い込み』が、確実に

視界を奪ってくれるだろう。
　一発逆転の大快挙だった。
　月人の腕が空を掻く。糊を落とそうと目をこするが、その行為は粘性のある液体をさらに塗り広げるだけだった。
　月人のまともな腕は残り3本、右足も封じた。視界も封じた。
　この条件なら――退却も、目が出る！
「――ダイヤ、フォスを頼む！僕はアレキを連れて行く！先生を起こしに行くぞっ!!」
「うん、わかっ――」
　――あるいは。
　ボクたちはまだ、月人を侮っていた部分があったのかもしれない。
　勿論、まだ耳や鼻が残っている。それによる警戒は十分にしていた。
　だが、『知能』と『機転』に対しては、十分では無かったのかもしれない。
　もしくは――目的を遂げようとするその『覚悟』か？
　――ブチブチブチィッッッ!!!
　獣の月人が、霧を噴き出して動かなくなった3本の腕を、残っていた3本の上で引き千切った。
「なん……だと……？」

切り離された3つの腕は、それぞれ犬のような形に姿を変える。
個性でもあるのか、それぞれ違う形をしている。
1体はボルツ、1体はダイヤ――そして、もう1体はボクに向かって駆け出した。
声高々に吠えながら。
「バウバウッッ!!バウバウバウバウッッッ!!!」
「――っ!?斬って!!こいつら、吠えてボクらの位置を教え――っ！」
――ガシリと。
ボクの口を塞ぐように大きな手がボクの頭を掴む。
「……っ!?」
気付けば、組み伏せていた犬の背中辺りから太い腕が伸びていた。
その犬は変態の途中のようにボコボコと体が蠢いている。
足の方には――ボクに向かって来ていた犬が、先ほどまで押さえつけていた犬に1／3ほど埋まっていた。
こいつら……融合して、体の形を変えやがったのか!?
掴んでいる舌が舌では無くなる。
組み伏せていたアドバンテージが消え去る。
そして、ボクが次のアクションを起こすよりも腕の動きの方が早かった。

――ガキャッツ!!
「――が、アッ……っ!?」
後頭部を、叩きつけられた。
変形の途中だからかはたまた別の理由か、脆いボクの体であっても頭が粉々に砕け割れるような威力はなかった。
しかし、既に運動機能の一部にマヒを起こしていたボクの頭をさらに砕き削るには十分過ぎる威力だ。
戦慄する。
――首から下が、動かない。
「フォスっ!!」
「ダメだ、避け――」
ドギャアアッツツ!!!
自分に向かって吠え立てていた犬を3つに斬り飛ばしたボルツの警告はしかし、間に合わなかった。
獣の月人が繰り出した掬い上げるような渾身のスマッシュアッパーが、正確にダイヤを撃ち貫いた。
ダイヤはものすごい勢いで壁に叩きつけられ、その衝撃で四肢はもちろん胴や首まで

割れて力無く床に崩れ落ちる。
「に――兄ちゃぁあああんッッッ!!?」
――ボルツの慟哭。それが致命的なミスであった事を、一体誰が責められるだろうか。
自分の位置を、自分で知らせてしまったのだ。
その隙をついて月人の尾がボルツの足に絡みつくと、そのまま窓の外に向かって思い切り投げ飛ばした。
「――き、さまあああァァッッッ!!」
もはや呪詛に近いその声は、ドップラー効果を響かせて校外へ消えて行く。
ボクは、ピクリともしない体でそれを見ているしか出来なかった。
――チェックメイトだ。
ダイヤは行動不能、ボクも行動不能、ボルツは強制離脱させられた。
ボルツは戻ってくるだろう。
しかし、それより先にコイツは行動を起こせる。
「フォ……ス……？」
ボルツの殺気を纏った怒声が、気絶していたアレキを叩き起こしていた。
しかし、目に映るのは絶望の光景。

「……ゴメン、アレキ……どうか、逃げて……」
そんな言葉を、絞り出す。
最早それしか出来なかった。
――アレキの瞳孔が、散大したように見えた。
「……また、奪うの……？」
ぞわり、と強烈な悪寒が体を駆け巡ったような気がした。
「アタシから……また、奪うと言うの……？」
アレキの髪が、血で染めたような鮮烈な紅に染まって行く。
――アレキサンドライト。
浴びる光によって、緑に見えたり赤に見えたりする不思議な性質を持つ石。
じゃあ、それで構成されているアレキは……？
「――ふっざけんなあああああぁぁぁぁぁっっっ!!!!!!」
空気を震わせる雄たけびだった。
それはたまに受ける先生の一喝にも似て、ボクの体にヒビすら入れてみせる。
――刹那、ボクに圧し掛かっていた方の月人が細切れになって飛び散った。
アレキの右腕には、いつの間にか鞘を払った剣が握られていた。
「アアアあああアアあああァァァッッ!!!!」

咆哮が続く。
次は獣の月人に向かって振り抜かれる黒剣。
一太刀にも見えたそれはしかし、次の瞬間には月人をバラバラに斬り裂いている。
防御すらも間に合わない、まさに必殺の太刀筋。
ハンデ付きだったとは言えボルツとダイヤがあれだけ苦労した獣の月人を、アレキは一瞬で葬り去った。
太刀筋が、全く見えなかった。
『起こり』は見えた。でもそれは最初の一太刀分だけだ。モーションも、一太刀分にしか見えなかった。
一体、何回斬ったんだ？
……多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）と言われたら真剣に信じてしまいそうだ。佐々木小次郎でも敵わないんじゃないのかコレ。
「――赤い方のアレキが出た、か。今回は運に救われたな」
ボルツが戻って来ていた。
複雑そうな顔をしている。
２種待機の判断。そして離脱させられた時の一幕。ボルツの中では許されないレベルのミスに思えたのだろう。

「……知ってるの？アレキちゃん、どうなっちゃったの？」
「月人を見ると、確率で倒れるか『ああ』なる。……相変わらずイカれているな」
お前が言うな、と言うセリフは何とか喉の奥で止まってくれた。
「あ……あ、あ……」
今のので爆発した何かを使い切ったのか、再びアレキは体をガクガク振るわせてバタンと倒れ込む。
そして、アレキが細切れにした月人の破片が再びグネグネと動き出した。
「まだ動くのか……こいつは……っ！」
ボルツが忌々しく剣を構える。
マズい状況だ。
ボクはもう動けない。月人の破片はいくつに分断されたのか、もはや数えられない。
そして戦えるのはボルツ１人しかいない。
月人の欠片が形をとる。
……それは、なんかもこもこふわふわした小型犬にも似た容姿だった。
戦闘能力の欠片も見受けられない、愛玩動物そのものになっていた。
「……は？」
声をあげたのは、果たしてボクとボルツどちらだったのか。

へっへっへと舌を出してボク達を見上げている。
そのうちの一匹が、「よくもやったなこんにゃろー」とでも言いたげにボルツに飛びつくと、そのままぽいーんと弾かれて仰向けに落ちた。
「おきれないよー」とばかりに、小さな四肢が空を必死になって掻いている。
それに続いて別の個体が『ボルツ登り』を試みた。垂直に立つボルツを登り切るのは難しかったのか、胸のあたりまで登る事に成功するも、そのままズルズルと落下する。
2匹目、3匹目とボルツに飛びつき、しがみつき、時には弾かれて床に落ちる。
その様相はまるで大量の子犬に「あそんでー！」と纏わり付かれているようだった。
ってえか、ボクにも被害来てるんですが。
何匹か僕の上に乗っかって飛び跳ねてるんですが。
「……なんなんだ、これ」
と言うか……ここまで密集しても再融合しないのはなんでだ？
あ、ボルツが剣を振り上げたままプルプルしてる。
さすがの戦闘狂ボルツも、この可愛くてちまいのは斬れないらしい。
「……お？」
ボクの上に乗ってた子犬が、一斉に降りる。
そして――子犬たちは、ダーッと一目散にどこかへ走って行った。

……。
……。
「……逃げた？」
「しまった!!そういう作戦か!!」
ええー……
あざと可愛くなって逃走とか、さっきまでの戦闘は何だったんだ。
「つくそ、追ってくる！」
「ああー、待て待てボルツ」
更に判断をミスしてしまったと嘆いているのか、すぐさま追おうとするボルツを引き留める。
「とりま、あれは放っとこうぜ」
「なんだと？」
ボルツがボクに視線を向ける。
「あの状態のままでいてくれる限りは、攻撃能力はなさそうだ。それよりもまずやる事がある。２種待機の解除と先生を起こす事だよ」
「……そうだな、すまない。確かにその方が良いだろう。負傷者が２名も出てしまったし、まだ解決に至っていない。――さらに、皆を校内に呼び戻した方が良いと思うか？」

「良いねそれ。鐘を鳴らせばシンシャも気づく。――ここに至るまで、雑が出てなかったのが気にかかる。どっかでジェードとユークとっ捕まえて、意見具申して欲しい。

2チーム1組のフォーマンセルで事に当たる事。あのちまいの探すにしても、まだ見ぬ伏兵や再結合したデカいのと戦うにしても、多分校内の話になると思うんだ。なら、防御を固めた方が良い」

「そうだな。月人の動きも今回は露骨にお前を狙っていた……不測の事態が起きても対応出来るようにするには、フォーマンセルがベターな所か」

「うん、よろしく。……あと、先生を起こすのはコツがいる。ボクの胸ポケットにホイッスルが入ってるから持ってって。先生の耳元で思いっきり吹き鳴らせば何とか起きてくれる。おもくそ揺すって『月人だぁーっ！』って叫ぶのも割と効果がある」

「ジェードが絶賛していた奴か。わかった、借りて行くぞ。ついでにルチルも呼んでこよう」

「よろしくー」

ボルツが弾かれた矢のように駆け抜けて行く。

ほどなくして、校内集合を指示する鐘が鳴り響いた。

……やれやれ。とりあえず、前半戦は凌いだってとこか？

首も動かせない状態で、何とか周りを見回してみる。

大破したダイヤ。意識は残っていないだろう。
アレキも意識を飛ばしてしまっている。
ボクはと言えば、右足破損、体中いたるところにヒビ、後頭部が削り取られて視界が微妙にズレている始末。お陰で首から下がピクリとも動かない。
仮に、この状態でさっきのちまいのが何匹か戻ってきた上で融合されたら、かなり痛い事になるんだけど、どうやらその様子もなかった。
腕を千切り取って逆転するような機転があれば、当然思いつきそうな事だと思うのだけど……良く分からない相手だ。
「……満身創痍だなぁ……」
ポツリとつぶやいた台詞が、むなしく廊下に溶けて行った。

@　@　@

はじめに、ボクの頭だけ治してくれないか。
そうすれば、ダイヤの欠片集めも手伝えるから。
駆けつけてくれたルチルにそんな事を言ってみた。
「ドクターストップに決まっているでしょう。アホですか。……そう言えばアホでした

ねあなた」

ルチルさんよぅ……フォスさんだって心無い一言に傷ついちゃったりするんだぜ？

ケガ人にはもうちょっと愛のある言葉を掛けるべきだと思うんです。

「ならケガ人らしく大人しくしていてください。欠片集めはゴーストが請け負ってくれています」

「はァーい」

釘を刺されてしまいました。

それでも施術はボクの方から先にやってくれる模様。早く終わる方を先に回したいらしい。

ボクの方がダイヤと比較したら軽傷だったと言うのもあるけど、年がら年中お世話になっちゃってるからボクの施術は慣れてしまったそうで。

「本当は、全方位完全劈開の石の方が、技術的にはるかに難しい筈なんですけどねぇ……」

ルチルは、何か悟ったように遠い目をなされておりました。

――施術中、ボルツが見舞いに来てくれた。

事態がかなり派手に動いたらしい。

見舞いと言うより、その連絡と分析の方が主な用事のようだった。
うつ伏せになりながら後頭部をカチャカチャされているこの図は、なんとなく「あっ、あっ、」な感じのポックルさんを思い浮かべてしまいちょっと落ち着かなかったりする。
さて、事態の推移だけども。
ボルツは先生を起こすのに成功し、事の推移と現状を報告したそうだ。
で先生が状況を見に行ったところ、もこふわと化した月人が一斉に先生に懐いて来たらしい。
最初は近くにいる数体だったのが、遠吠えとおぼしき声を上げると何処からかワラワラ出てきて先生にじゃれつく始末。
そしてついには――1体に、再結合したのだそうな。
「……戦闘は？」
「無かった。1体に結合した後でもなお先生にじゃれついていたな。『お手』とか『おすわり』とか……先生の言う事は良く聞いていたぞ」
「……あの図体で？」
「あの図体で」
なにそのカオス。
と言うか先生も先生だよ。

なぜアレに向かって『お手』とか『おすわり』なんて暴挙を試そうと思ったのか。百歩譲って「いけっ、月人！メガトンパンチだっ！」的な方だと思うぞアレは。

「……で、今はどうなってる？」

「他の石も混じって遊んでる」

「マジか」

「マジだ。会敵した時の暴れっぷりがどこに行ったんだと思うような様相だ。微笑ましく遊んでる」

「……ボルツはどう思う？罠だと思う？」

「それは僕がお前に聞きたかった意見だ。なんと言うか、もう訳がわからん。まあ、仮に暴れたとしても先生が居るから大事にはならないだろうとは思うが……」

……。

……デスノート破棄時、夜神月の人が変わったような態度を目の当たりにしたLの気持ちがよーわかるわ。

何が何だかわからない……

「――その、大人しくなっているって言う月人の今のツラ、拝んでみたくなるなぁ」

「あなた狙われてたんでしょう？治した矢先に開かれたら私も流石にキレますよ？」

「ルチルには悪いが……僕個人の好奇心としては、そのアプローチは見てみたくはある

な。今のアイツがフォスを見た時の反応はかなり気になる。
敵対するのか……それとも大人しくしているのか」
敵意を測る、と言う点ではボルツの言う通りなんだよな。
最悪の想定をするのであれば、現在の大人しい態度は全部ブラフで、例えば皆が寝静まったころに襲ってくるとかか。
もしくは……ボクを目標としていた事自体がブラフで、既に目的を完了しているとか？
「――ボルツ、一応聞くけど点呼は取った？」
「取った。シンシャも含めて全員無事だ。ダイヤとお前以外はな」
「雑は？」
「影も形も無いな。ただし、石は全て校内に入れたからその後の外については知る限りじゃない」
「シンシャは？」
「緊急措置と言う事で、元々宛がわれている自分の部屋で待機してもらってる。訳を話したら納得したな」
「物的被害は？」
「作戦によって破壊したおまえの携帯糊ケースと、戦闘のあった廊下の壁や床ぐらいだ

な。資料については、少なくともユークとゴーストに聞いても異常は見当たらなかったと言っていた。アレキについてはまだ気絶したままだ」

……。

「……なんか、ホントもう訳分かんねぇな」

「まったくだ」

何しに来たんだよアイツは。

ボクを狙いに来たなら来たで初志貫徹しなさいよ。

罠が仕掛けられてる様子も今のところないし。

対応に困るんですけど。

「こっちから仕掛けるのも、何かやり難い空気を作られてしまったからな。アレを狙ってやっているなら大したものだ」

「よねぇ。……しゃあなし、やっぱり後でツラ拝んどこう。護衛頼みます」

「ああ、助かる」

「……開いても、当面直しませんからね」

「うん、大丈夫。その時は、ダイヤを治してゆっくり休みを取った後で良いよ。いつも苦労掛けてゴメンね」

「――まったくもう！」

怒りつつも、何だかんだで受け入れてくれるルチルさんが好きです。

施術が終わり糊の定着を待つ頃には、お天道様はすっかり暮れていた。

月人の夜の活動記録はない。危惧されていた増援や罠の確率はこの時点で激減した訳だ。

気を揉んだ事を嘲笑うかのように、あっさりと警戒待機が終了した。

見舞いに来てくれたシンシャと少し話した。

内容は、おおむねボルツと話した事の焼き増しだ。シンシャなら何か見逃した部分に気付くかもと言う思いもあったけど、やはりそううまく行かないものだ。

シンシャはそのまま夜の見張りに出て行った。

今日一日は留まってくれるかもと思っていたけれど、未だ抵抗があるらしかった。

目が覚めたアレキも見舞いに来てくれた。

アレキが居なかったら間違いなく連れてかれていたと思う。

お礼を言うと、複雑そうな顔をしつつもアレキは笑ってくれた。

――話してくれたのは、クリソベリルの事だ。

ボクが生まれる少し前に、アレキのパートナーだったクリソベリルが連れて行かれた。

アレキが『ああ』なったのはその時から。
月人を見ると髪が赤く染まってバーサーカーになるか、そのまま気絶してしまうと言う体質になったらしい。
アレキが月人マニアになったのは、その体質をどうにか改善しようと月人の絵を描いた事がキッカケだったのだそうだ。
そしてその行為は、クリソベリルを奪って行った月人への憎しみを忘れない為の重要な儀式でもあった。
――アタシから……また、奪うと言うの……？
あの時のアレキの台詞を反芻する。
きっとあの赤いアレキは、月人に対する怒りと憎しみに染まった姿でもあるんだと思う。
――獣の月人の事をどう思うかと、聞いてみた。
害意の有無は関係なく、調べてみたいとアレキは言った。
そしてその後は――全て奪って粉々にしてやりたいと、アレキは言った。
――どちらも体質が邪魔するから無理だけどね、と取り繕うようにおどけた姿が凄く悲しかった。

@　@　@

ボルツを伴って獣の月人と顔を合わせてみた。
奴は先生にベッタリで、尻尾を振りながら先生に撫でられていた。
ボクの姿を見つけると、襲ってくるでもなく「キューン、キューン」と弱弱しい声をあげて先生の後ろに隠れてしまった。図体がデカいから全然隠れられていないけど。
……え、何その反応。予想外以前に心外なんですけど。
「フォス、治ったのだな」
「ええ、先生。まだ絶対安静と言われてますけどね」
軽く笑って月人に目線を向ける。
「んで……なんでボク、怖がられているんですかね？」
「わからん。他の子にはこう言う態度は取らなかったのだが……」
「ボルツにも？」
「ああ、戦闘した訳だから警戒されるかとも思ったが、特にそんな様子はないな、そう言えば」
んむー、とちょっと悩んでから、スッと右腕を差し出してみた。
月人がビクンと肩を上げてズリズリ後退りする。

「これはもしかして、アレかな？舌掴んで押さえつけた事が意識されちゃってんのかね？」

「……なるほど」

「？」

現場にいなかった先生がキョトンとしている。

でもそれなら、ボルツやアレキも怖がりそうなモンだけどね。

身動き出来ないように封じてから「逃がさん……お前だけは……」って感じに七英雄みたいな事を囁いたのがよほど怖かった？

「もしそうなら、戦闘していた記憶がありませんでしたー、なんて事はない訳か。

……先生は、ずいぶん仲が良さそうですけれど……ご存じなんですか？その月人の事」

「いや。知らん」

……ふむ。

「でも、似たようなものは良く知っている……？」

「……そうだな」

何か、複雑な話になりそうな事を察知したボルツが口を開く。

「敵意は無いようだし、外そうか？——それに、腹の探り合いに付き合うのは趣味じゃな

い」
「いやいや、そんなつもりはないよ。むしろ盾になってボクの体を遮って欲しい。どうやら彼とボクは相性が悪いみたいだ」
苦笑して、五条に流れるボルツの髪の陰に隠れた。
ボルツ越しに見えたデカい図体が身じろぎしている。
「いない？もうこわいのいない？」とこちらを伺っているのだろうか。
「彼……とても強かったですよ。赤いアレキが出てこなければ完敗していたでしょう。ボクと言う枷がありましたが、それでもダイヤとボルツを出し抜いて見せた機転は素直に称賛しています。
……しかしそれを境に、どうやら彼は目的を変更したように思えます。先生と、遊びたかったんでしょうか？」
「わからない。ただ――私に会いに来てくれたのだと、感じているよ」
先生の声は、旧知に対するようにやさしげだった。
月人は、ふすふすと鼻を鳴らしながら先生に顔を擦り付けているようだ。
「懐いてますね」
「ああ。昔――はるか昔に逝ってしまったが……私の事を、覚えていてくれたらしい」
「あー……もしかして、飼ってました？」

「ああ。とても賢い自慢の犬だった」
……。
……。
「待って、ちょっと待って。今なんて言いました?……『犬』って言いました?」
「ああ」
「どんな進化促進ウイルスぶち込まれたらこんなファンキーな犬になっちゃうの!?しかも分裂・再結合機能付き——アンブレラが涎垂らして欲しがるレベル。もしかして軍事施設の実験動物的な何かで?」
「いやいやいやいや、違う違う!ちゃんとした犬だ。白くて、中型の。ただ、目が……あの子と似ていたのでな」
「目……七つの目がある中型犬……っ!?」
「いやいやいやいや」
実はそれ犬じゃなくて妖怪の類なんじゃないのと本気で口にしそうになった。
ボルツが後ろにいるボクに問いかける。
「フォス、犬ってなんだ?」
「ああ。ボクが組み敷いたやつがいたろ?あんな感じの動物だよ」
「ほぉー……」

分裂して初めて本物に近づくとは、不思議な体の構造をしてやがる。
「ちなみに、お名前は？」
「『しろ』だ」
『しろ』ですか。
ワンちゃんに付けるオードソックスなネーミングだぁね。
「そうっスか――では、しろ君」
ボルツの背中越しにひょっこり顔を出すと、目に見えてビクッとしろの肩が跳ねた。
うーん……ガチに怖がられておるのう。
「――今回は、キミの勝ちだ。その実力、策謀、そして覚悟。ボクは顧問の位置に居ながら君の前進を止められなかった。アレキが動いてくれたのは本当に運の要素が強かった。
……キミの存在は、今後ボクたちの対月人戦略に大きな変更を強いるだろう。途中で目的を変更したとは言え、それを完遂して見せたキミの奮闘には素直に敬意を表そう。
――キミと戦えた事に感謝する」
しろも含めて、ボルツと先生まで目を丸くしていた。
――わふ。
数秒の後、しろが返事をするように小さく吠えた。

ボクはそれに少しだけ笑みを返した。
ボルツに声を掛ける。
「――以上。ボクも脅威なしと判断したよ。対応の必要もなさそうだ。翻意を腹に秘めていたとしても、ボルツの言う通り先生が何とか出来るだろう。ルチルにドヤされる前に、ケガ人は大人しく戻る事にする。――ボルツはどうする？」
「あ……ああ、わかった。僕は……ここに残るつもりだ。先生のサポートを続ける」
「了解。……じゃあ、お疲れさまっした。おやすみー」
手を振りながらその場を後にした。

――後から聞いた話によれば。
しろはその後、日が変わるより前に、満足したように笑みを浮かべて金色の光に溶けて行ったそうだ。
先生の膝の上で撫でられながら。
光に溶けて行くその一瞬、元の白い犬の姿を見せる。
その姿は、ボクが押さえつけていたあの姿にとても良く似ていたそうな。

第17話「日常」

■　光通信会議

王サマは生息地周辺の海水があれば、割と長い間人型を保っていられるらしい。
やっぱりあの人型、海水の中にあるインクルージョンを利用しているみたいだね。
だから最近は生息地周辺の海水を持参して貰って、それを会議中にお茶代わりに飲んで貰うスタイルになっている。
いちいちボクが通訳するのはしんどいし、シンシャが海に入るのは汚染が怖いからね。

今日の議題は光通信に使う言語について。
そもそも、ボクたちが使っている文字とアドミラビリスが使っている文字が同一の物でなかった為、言語を片方に寄せるのは習得に時間が掛かって不便なのではと言う話から始まった。
王様んトコの文字は、どちらかと言うと楔文字に近い。生息地が海の中だから、何かに書いてもそれが波に揉まれて残らないんだよね。

だから文字に記録するには彫る方式を使ってるんだけど、それには直線的な楔文字の方が都合が良かった訳だ。

……文字が違うのに言葉が通じる理由？

こまけぇこたぁいいんだよ!!

「――そもそもなぁ。我々が超頑張ってそちらの国の文字を覚えて、通信の際にそれに翻訳して送るとしてもじゃよ？

使用している文字や単語の並びで意味が代わってくるケースが絶対あるに決まっておる。

そうするとじゃ。光通信言語を学ぼうとするとお前たちの文化を学ぶ事が必須になる訳じゃ。これはお前たちがわしらの文字に寄せても同じ問題が発生する」

「ああ、それは俺も思っていた。しかも既存言語に置き換える場合、使用文字数が多いと1文字分の通信負担がどうしても多くなるからな。……いっそ、光通信用の新言語を創設するべきかとずっと悩んでた。

しかしそれをすると、設定していない単語を送る必要が出た場合はどうしても通信が止まってしまうんだよな……」

「単語の作り方にある程度の方向性を持たせれば、新しい単語が出てもニュアンスは伝わるんじゃないかな？動詞はトン・ツー、装飾詞はトン・トン・ツーで始めるとか」

「なるほど、意味分類で法則を作るのか。その方針は良さそうに思うが……それだと固有名詞はどうするんだ？『フォスフォフィライト』とか『ウェントリコスス』とか」
「あー、そっか！その辺考慮すると、どうしても音を表現する必要があるのか！」
「それになー。ニュアンスだけしか伝わらん言語も通信負担は楽そうではあるが、やっぱ伝えられない言葉があるのはもやっとするのう。
　やっぱ『シンシャ』と言った固有名詞はもちろんの事、『ツンデレ』とか『萌え』とか『俺の嫁』みたいな微妙なニュアンスのある単語も正しく信号に乗せたい所だな」
「ああーわかるわかる。『大好き』とか『かわいい』とか『結婚する』とか絶対あった方が良いよねシンシャ！」
　にやにやにや。
「……。……そうだな……『砕く』とか『串刺しにする』とか『殺す』とかも必要だな……？後は、悲鳴の表現とかか……？」
「――あ、わし急に用事を思い出したんで今日の所は解散でよろしく！」
「そう言えばボクもダイヤにレンズの事相談されているんだった！」
　――ドスドスドスッ!!
「……で？」
「「もうしわけございませんでした!!」」

※　光通信の開発はなかなか滞っています。

■　百物語

ボクたち宝石の娯楽は少ない。

ここ数年はボクが『記憶』にあるものを引きずり出して少し増やしているんだけど、そもそもボクの器用さが極低なので、なにか道具が必要なものはペリドットかスフェンに相談しないといけない。

最近、やっと将棋が出来たぐらいだ。

ただまあ、何千年の時を過ごすのにあたり石達も何らかの工夫はするようで、ボクが広める前からメジャーなものも結構ある。

『怖い話』なんてのは、もしかしたら最古の娯楽（？）かもしれない。

暗い部屋の四隅にクラゲをポツンと置いて、皆で顔を付き合わせて一人ずつ怖い話を披露していくわけだ。

暗いとマトモに起きてられない筈のボクらが、この時だけは皆目が冴えてしまうのが不思議だ。

ちなみに、この手の話はゴースト・クォーツの独壇場でもあったりする。

「――それでね。だったら「俺が試してやる」って言って、その子が実行しちゃったの。

赤い月が出た夜に、その部屋で一夜を過ごして見せたんだって。
……次の日に他の石が見に行ったら……その子の目だけがベッドに置かれてたんだって。
皆総出で探したけれど、体は何処にも見つからなかったの。
――だからその部屋は封鎖されたんだ。誰も入らないように、むしろ誰もその部屋があった事を意識しないように、その部屋の入り口は埋められちゃったんだよ。
……それでね。話はコレで終わらないんだ。
この間長期療養所の片隅に、小さな木箱を見つけたんだよ――コレね」
ことり、とゴーストがまさかの小道具を取り出す。
古びて、くすんだ色をしていた。
「この木箱を見つけた時……先生にさ、聞いてみたんだ。忘れられた部屋について。
しばらく沈黙したあと、僕の頭に手を置いてこう言うんだよ――『ひみつだ』って」
そうしてゴーストが蓋を開けると……そこには瞳孔の開いた目玉が二つ、空虚を見つめていた。
「ひっ……」
やめろよ！やめろよ!?
現物持ってくるなんて卑怯だぞ!?

こんなんチートや！チーターや！

「所で……これは僕が長期療養所の入出履歴と図書館に保持されていた日誌を見て気づいちゃった事なんだけど……

この目、一度持ち出された形跡があったんだ。

しかもその次の日に、石が一人行方不明になってるんだよね。

この目の色、わかる？赤色でしょ？……でも、もともとベッドに残ってた目は緑色だったんだ。

そして、持ち出された次の日に行方不明になった石の目は赤色。

――入れ替わってるんだよ。持ち出した次の日に消えた石の目と」

ちょっ……おま、それ……っ!?

ゴーストが顔をあげて微笑むのだ。

「明日は――何色になるかなぁ……？」

うあああああぁっっっ!?

い、いや!?

別に怖くねーし！ぜんっぜん怖くねーし！泣いてねーし！チビってねーし！そもそもそんな機能ついてねーし！

――ダ、ダイヤ、手を握ってあげるね！別にボクが怖いからじゃなくてダイヤが怖そ

うだから手を握ってあげるね！
「ちなみに、行方不明になった石は、持ち出した石とは別の石だったよ」
なんでだよおおおお!?
そこは持ち出した奴だけ行方不明にしとけよおおおお!!
明日消えるかもしれない石候補にボクもノミネートしてるって事だろそれぇ!?
所でダイヤ様今日は一緒に寝ませんかお願いします何でもしますからうあああんっ！
「ゴ、ゴースト……ほら、フォスが過剰反応してるからその辺にしてあげて……？」
ん？今何でもするって言ったよね？
しゃぶれるよ……！ボク、ダイヤのだったら喜んでしゃぶれるよ……！
入れられるのだって構わないＹＯ！
「うーん、フォスは毎回とてもおいしい反応してくれるなぁ……話す側としては冥利に尽きるよね」
「ほらー、フォスー。戻って来てー」
――んで。
「さて、次は僕かぁ……ゴーストの後だとインパクトが心配だよね」
「いらないです。こんな破壊力いらないです」

「あははは。それじゃあ話すね。
——皆はさ。僕たちが見ているものが、実は全く別の物なんじゃないかって思った事はない……？
僕たちは本当に『真実』を見ているのか、不安に思った事はない……？
僕はね。見つけちゃったんだ。本当の『真実』と皆の見ている『虚構』に、気づいちゃったんだよ……」
ダイヤの真剣な導入に、と思わずゴクリと無い筈の唾を飲んでしまう。
「——ねえ、皆。去年のこと覚えてるよね？新しい月人が来始めてから、色んな事が激動した年だったよね……？」
「きよ、去年の事なのぉ……っ？」
「そうだよ。しかもね、思い返してみると……両方ともフォスが関わってる事だったんだよ……」
「え、なになに？」
ええええええまってまってまってまって、ピンポイント止めて！ボクにピンポイントするのやめて！
「冬が来る前に、皆でトランプしたよね？冬の担当をどうするか決める為に、総当たりミリオンダウト三番勝負。覚えてる？あの時にね……『真実』が『虚構』になっている瞬

間を見つけちゃったの……」

　覚えてるよおおお、ダイヤが無双してたやつだろおおおお!?

　なんだよ、見えない石とお喋りでもしちゃったのかよおお!?

「あの時の最終戦……ボクとフォスの３試合目……」

「ヤダあああああ！止めて止めて止めて止めてボク絡めるの止めて!!」

「あの時、フォスが何も出来ずにバーストしちゃったじゃない？……でも、おかしいの。よくよく考えるとその事実がおかしいの……」

　なに……なに……っ!?

「あの時、僕は最初に３枚出してフォスがそれをパスしたでしょう？で、僕がさらに３枚出して、フォスがダウト失敗して６枚回収でバーストしたんだけど……よくよく考えたら、フォスのパスによって最初の３枚が流れている筈だから、３枚回収で手持ち１０枚、つまりギリギリ１枚でバーストを逃れられる筈だったの。

　でも不思議な事に、僕も皆もフォスでさえも、１３枚バーストで認識してたんだよ……っ！」

　……。

　……。

　……お、おう。

「あとね？フォスが海に行く前に、剣を見繕った時があったでしょう？あの時、先生がオブシーに「片刃で三日月状に反っている剣はあるか？」って聞いたの。
オブシーは「そんなヘンテコな剣は作ってない」って言ったんだけど……よく考えたら、ボルツとかパパラチアが使ってる剣が、そんな感じの剣だったの！
でも皆、作り手のオブシーや使い手のボルツでさえも、そんなヘンテコな剣はないって認識して――」
「やめて!?そっち方面に怖い話するのはホントやめて!?
大人はウソつきではないんです!!間違いをするだけなんです!!」
※　大変申し訳ございませんでした。

■　暴挙
その後。
「あーもーやめろよもーほんとやめろよクソ……ううう、ダイヤぁ……」
「うふふ、はいはい。今日は一緒に寝てあげるからねー。ふふふ、ボルツとかなんて言うかな」
「じゃ、解散ね。ゴースト、今回はガチでキレッキレだったねー……」
「ふふふ、実はこう言う場が楽しみで、普段いろいろ仕入れてるんだ」

「長期療養所と図書館管理勤務だもんね。ネタには困らなさそうだわ」
「そうだね。――じゃあ僕は、一度医務室に行ってから戻るよ」
「うん……え？どうしたの？どっか開いたの？」
「いや、違うよ？パパラチアの目を返しに行くんだ」
「「ちょっと待てぇっっ!?!!」」
※　この話が一番怖かったです。

■　もこもこしりーず
ダイヤ「ふえええぇ、ズルいよおおお！
僕は筋肉ムキムキの月人しか見て無かったのに！僕もふわふわもこもこ見たかったよおおお！」
レッド「しょーがないなぁダイヤ君は（ＣＶのぶ代）」
――みたいな経緯でレッドが『ふわもこしろ君』のぬいぐるみを作ってあげたのが全ての発端だった。
その可愛いぬいぐるみのふわもこっぷりが石達の間で流行ったワケで。
アレキが月人の姿を模したそれにビクビクする一幕がありつつ、概ねそれは好評的に受け入れられた。

そして、ボクのイタズラが心が囁いたのである。
「レッドさんレッドさん。面白い話があるんですけど乗りませんかな？」
「フォスあんた、わっるい顔してるわねぇ……なになに？お兄さんにちょっと教えてみ？」
ちなみにレッドも分類としては愉快犯タイプ。
ボクがイタズラしかける時の顔はよく知っておられます。
この場にストッパーは居なかった。
とは言っても、ボクは人を陥れる系のイタズラは大キライです。皆が楽しめるイベントじゃなきゃヤダヤダ。
草案はこんな感じ。
「まず、皆をデフォルメしたぬいぐるみを作ります」
「ふむふむ」
「次に、そのぬいぐるみをまとめて目立つ所に置いておきます」
「ほうほう」
「そしたら張り紙をおきます。内容はこんな感じ。
『ご自由にお持ち下さい。ただし、お一人様おひとつのみでお願いします。お持ちされた方は、ぬいぐるみのあった場所に名前をお書きください』

――誰がなに選ぶか興味ねえ?」
……しばしの沈黙。
「フォス……あんた天才か!」
「フォーッスフォスフォスフォス!宇宙の真理に気付いてしまったようだねレッド君ッ!」
ボクらはもう、止まれなかった。
――っつっても作業したのはレッドだけどね!
せっかく『ふわもこしろ君』の後継作なので、ぬいぐるみはふわもこさせる方針になった。
さすがに宝石のぬいぐるみとなるとその辺り難しいんじゃないのと思ったんだけど、着ている衣装をあざと可愛いふわもこパジャマにする事で見事に解決。
しかも皆の衣装を一つ一つデザインするほどの気合の入れようである。
さすがレッドベリル、欠片も妥協を許さない。
一番凄かったのは２８名分のふわもこシリーズをデザイン、生地の用意、制作まるっと含めて1週間で完璧に仕上げて見せた事だと思う。
レッド驚異の技術と生産性。
お美事!お美事にございまする!

……え？ただでさえ少なかった筈の布素材を一体どうやって工面したのかって？

こまけぇこたぁいいんだよ!!

「素晴らしい出来だ……素晴らしい出来だよ！さっすがレッド、こっち方面は後にも先にも右に出る者はいないな!!」

「あらフォス、宇宙の真理に気付いてしまったようね！」

ボクらはもう止まらなかった。

――そして、決行！

朝礼の時に通知までしたぜ！

ボクが見ても会心の出来な『ふわもこシリーズ』だ。

正味な話ボクが全部欲しいぐらいの出来だったもの。全部捌けるのに時間は要らんでしょ。

どの位置に誰が置いてあったかはこちらでメモって把握している。

しかし台の方には誰が置いてあったかと言う印はしていない。

ただ、ぬいぐるみの下に持って行った石の名前を書き込める紙が貼ってあるだけだ。

誰がどのぬいぐるみを持って行ったかは、最初の位置を正確に記憶した者でないと把握は不可能。

なんせ２８名分。きちんと記憶しようとしている奴は稀だろう。

覚えるなら、『自分のぬいぐるみが置いてあった場所』が第一になる筈だ。
――つまり。
『自分のぬいぐるみを誰が持って行ったか』だけは、名前を見る事で把握できてしまうのだ！
誰だって『自分を誰が持って行ったか』は気になるだろうからなぁ。ぬいぐるみを持って行った後も、何かと理由をつけてこの近くを通りかかるだろうなぁ。
そして自分を持って行った相手を妙に意識してしまい、甘酸っぱいもにょもにょをする事になるのだ！
くっくっくっく……このフォスフォフィライトの立てる策は、すべて隙を生じぬ二段構えよ。
……とは言えだ。
ウチの石たちは結構みんなあけすけなトコあるしね。
ボクたちが見ている前であっても、結構和気あいあいとしながらぬいぐるみを持って行かれました。
大半がコンビを組んでいる相方を選ぶかなと思ったけれど、2～3名それではつまらないと思って別のぬいぐるみを選んだりすると、ズレが発生して目的のぬいぐるみが無くなり、『なら○○にしようっと！』みたいな感じでどんどん予測不可能になって行く。

それでもまあ、ある程度予想通りにはなったけどね。
ダイヤがボルツぬいを抱きしめながら鼻歌歌ってたり、ジェードが先生ぬいを確保して小さくガッツポーズしてたり。ユークはジェードぬいを持って行ったみたいだ。
このイベントには、意外にも先生も参加した。
ボクとレッドは主催者につき一番最後に残ったものをと思っていたのでそれを伝えると、先生は少し悩んでベニトぬいを持って行った。
……余ると思っていたから、と言う理由ではない事を信じたい。
ちなみに、しろのぬいぐるみはもう無いのかと聞いてきました。
ゴメンね先生。ふわもこしろ君はもう完売でございます。
「……うーん、しかし……意外な所が残りましたなぁ。ボクのぬいぐるみなんか、人気過ぎていの一番に消えると思ったんだけどなぁ。ダイヤが残ってるのも意外。シンシャも残ってるなぁ」
「いや、その辺りは皆が気を使って取らないようにしてるだけだかんね。……ちなみにフォスは誰のが欲しかったの？」
「ボク？レッドかなぁ、一番作りが良かったし。レッドぬいの髪形、デフォルメに合わせて新調してたよね。アレ凄くかわいかった」
「そこ来たかぁ。いやーそんなつもりはなかったんだけど、やっぱ力入っちゃったトコ

あったものねぇ！残念ながらオブしーに売約済みだけどね」
「ふっふー、じゃあ皆が気を使って残してくれてるって言うなら……有り難くシンシャ貰っちゃおうかな」
「僕は余ったらルチル貰っちゃって良いのかしらね？何気に髪型はアレがいっちばん苦労したのよね。正直言って自信作よアレ」
「わかる！あの線形に流れてる所、うまく表現できてたし。……パパラチアが目覚めてないからどうしても1個余っちゃうんだけど、アレはきっとみんなパパラチアに残してるんだろうなぁ……」
「やっぱそう思う？……まあ、余ったヤツでもみんな自信作だから、ボクとしてはどれでも良いんだけどね」
そして予想以上に予想通りなのがボルツとシンシャだった。
「ふん。……僕は、別に要らない」
「……朝礼終わったから、俺は戻る」
皆の目がある昼の内には絶対に手を出さなかった。
どんどん持って行かれるぬいぐるみを目の前にして、すっごいハラハラしてたのはボルツだと思う。なまじ見回りとか理由付けができる分、結構頻繁にぬいぐるみ置き場を通りながら『持っていかれてないか』を凄いチラッチラ見てたね、アレは。

あの姿だけで大成功と言って良いと思うわ。
――そして、夜が更ける。
こっからがメインイベントとも言える。
「さて……張り込みますかレッドさん」
「応よフォスさん。この瞬間の為に作ったんですもの」
ボクらはきっと、スゴい悪い顔をしている。
――んで。
ぬいぐるみが見える物陰に隠れて、二人して張り込みである。
クラゲはぬいぐるみの方に二つ置いてある。
光は向こうにあるから、完全に暗闇になってるこっちに張り込んでいる事はバレないという寸法よ。
お陰でめっちゃ眠いけどな！
わりと、その時が来るのは早かった。
――ボルツである。
（来た！ボルツ来たっ！）
（かわいい！めっちゃキョロキョロしてる！）
フォーッスフォスフォス、分かりやすい思考回路よのうボルツ君！

誰にも見つからないようにキョロキョロしつつ、しかも「ち、違う……これは余っていたから哀れに思っていただけで、別に欲しかった訳じゃなくて仕方なく……」とか女々しい事をブツブツ呟いていたりする。

あまずっぺえええええ！良いのか数百年以上を過ごしてきた奴がこんなもじもじしたアオハルしてて！

それ余ってるんじゃなくて、皆が君の為に残しておいてくれた奴ですから！

そして、予想通りダイヤぬいをそっと手に取ると、その胸元に抱きしめるのだ。

小さな勝ち鬨が聞こえる。

「ふふ……やった！」

（ハイ『やった』頂きましたーっ！）

（ああ伝えたい！この感動を皆に伝えたい!!バラバラにされるから言えないけれど!!）

こちらも『やった』な感じだった。

ありがとうボルツ君。なんかもう、色々ありがとう。

そのままボルツはもう一度周りをキョロキョロと見まわすと、誰にもバレないように体を縮めながら元来た方向へ駆けて行った。

……そして、ボクらの視界から外れて数秒。

「――なっ、シ、シンシャ!?なぜここにっ!!!」

（（ブッキングしたあああああぁぁぁっっ!!））
大フィーバーである。
何というタイミングで登場してくれるんだシンシャ!!でかしたっ!!
今日一番のハイライトだよこれクッソ!!漏れてないよな!?声漏れてないよな!?
「い、いや、これは、ちがくて、その……ちがくて！」
（必死だ！ボルツ超必死だ！）
（戦闘狂の意外な一面！なにあの子もう可愛過ぎっ！）
大事に胸に抱えていましたからねダイヤぬい。
もー言い訳出来ませんわ。完全アウトですわ。
「～～～～～」
「そ、そうか……そうか、その。うん。だ、大丈夫だぞ！フォスはちゃんと残っていた。ぼ、僕も言わないから……お前もその、言うなよ！この事は！」
んー、シンシャの方も何か言ってるらしいけど、ちょっと聞き取れないなぁ。
テンパったボルツが音量上げてくれてるのは助かる。
どうやら、何らかの取引が成立した模様。
「約束したぞ！」
足跡が大急ぎで遠ざかって行く。

――満点です。１００点満点です。
ううん、もう１２０点あげちゃう。はなまる大満点です。
ありがとうボルツ。なんかもう、色々ありがとう。
入れ替わりに、コツコツと近づいてくる足音がある。
（……とっとと、シンシャが残ってましたな）
（いやぁ、これ以上のインパクトは難しいと思うけどねぇ）
によによしながらシンシャの行動を見守る。
シンシャは、案の定ボクのぬいぐるみを選んでそっと胸に抱きかかえた。
そして、置いてあるペンでボクのぬいぐるみがあった所に何か書き込んでいる。
（……あれ？もしかして名前書いてる？）
（あら意外。こっそり持ってくモンだと思ったのに）
そして、ぬいぐるみを抱きながら――こちらを向いた。
……え!?やべっ、見えてるの!?
いや、でもここは向こうからは真っ暗に見える物陰なわけで……
コツコツこっちに歩いてきてらっしゃるううぅぅ!?
「――俺はさ。光を集める体質だから、多少暗くても普通に見えるんだ。まあ、そうでなくても多分いるだろうなとは思ったけど……レッドまで一緒に何やってるんだ……」

バレテーラ。
「あ……はは……こ、こんばんわシンシャ」
「ぐぐ、ぐーぜんねぇー！」
「いやもう、偶然は通らないから」
ですよねー。
「……まあ、お前らの事だからこれをネタに大っぴらにからかい倒す様な事はしないと思うけど……悪趣味も程々にしておけよ」
「はァーい」
その辺りは大丈夫です。
それをやった瞬間にボルツに粉にされますゆえ。
「あと……これ」
シンシャが、胸に抱いたフォスぬいを差し出してくる。
「え……え？まさかの返品？」
「いや、預かっててくれないか？……俺だと、きっと毒液で汚してしまいそうだから。フォスが持って置いて欲しい。
良く出来ているから、汚してしまうのはイヤなんだ」
あくまで預けるだけだから……たまに、抱かせてくれよ。

シンシャはそう言って苦笑した。
……ぬいぐるみにまでこんな気を使わなきゃいけないのかと、シンシャの心境を想う。
「……条件、ひとつ」
「うん？」
ボクは受け取りそうになった手を止めて、シンシャを見上げた。
「……『毒液』と呼ぶのはやめて欲しい。『水銀』って呼んで欲しい。『毒液』って呼び方は……シンシャを蝕んでいるように聞こえて、嫌いだ」
「……」
月霊髄液のアドバイスをしたその時から、ボクは第3者に説明する時を除いて、ずっと『水銀』と言う言葉を使ってきた。
毒でしかないんだと言う呼び方をしたくなかったからだ。
でも、シンシャは自虐の為か習慣からか、ずっと『毒液』と呼んできたように思う。
他ならないシンシャ自身がそう呼び続けるのが、ボクは嫌だった。
「……わかった。ぬいぐるみを、まかせるよ」
「――うん。まかされた」
フォスぬいを受け取る。

「フォス――ありがとう。おやすみ」
「うん――おやすみ、シンシャ」
そう言って、シンシャは昇降口の方へ去って行った。

「……なんかさ。アンタたちってこう、絆みたいな物あるわよね。ボルツのアオハルより2歩ぐらい進んだヤツ」
「わっはっは、大人だろ?……それでも不意打ちしたらシンシャはアオハルしてくれるんだよねぇ」
「アレ、今回の仕掛人とか経緯とか、完全に読み切った上での行動よね絶対」
「そうだと思うよ」
最後も最後で、いいモン見れたわとレッドが笑った。
「――僕も、シンシャの水銀の事、『毒液』って呼ぶのやめるわ」
「うん……ありがとう、レッド」
物陰から出て、シンシャぬいを抱き抱える。
シンシャぬいの座っていた場所にボクの名前を書いた。
「じゃ、今日はこれで終わりね。――ありがとうレッド、ボクのイタズラに付き合ってくれて」

「あっはっは。僕もやりがいのある仕事だったし新しいイメージも浮かんできたもの、こっちこそお礼を言うわ。――おやすみ、フォス」
「おやすみ、レッド」

――その後。
レッドは残っていたゴーストぬいを確保して名前を書き、もう一つ余っていたルチルぬいをパパラチアの入っている箱の中に収めた。
フォスぬいとシンシャぬいは、今はボクの部屋で仲良く肩を並べて枕元に座っている。
――なお、ボルツがダイヤぬいを持って行った事は、ボクらが言いふらすまでもなく皆にバレていた。

第18話「進歩」

宝石の国の技術元年と言って良いと思う。
アマルガム計画、光信号通信、レンズ作成と色んな分野の技術開発が着手された。
お陰でペリドット&スフェンの技術系おにーさまはてんやわんやの大忙しだ。
ダイヤもクリスタルクォーツを使った大きめの試作レンズを作ってみてから、本格的に乗り出してみたいと言い出してシフトの見直しも行われた。
統計や計算が得意なユークも、レンズによってできる像の仕組みを分析できるかもとレンズ作成に加わり、この国に『レンズ学』と言う新たな学問が立ち上がった。
レッドも水銀をシャットアウトできる生地の研究を始め、ペリドットと頻繁に意見交換をしている。
シンシャは光通信用言語の作成に方向を定めて王サマと顔を突き合わせ、優先度の高い単語の洗い出しを進めていた。
総合顧問についているボクは、それらの全てに関わるので大忙しだ。
誰かが『今まさに激動している』って感じがする、と零したのを聞いた。

――ボクが立ち上げた計画以外にも技術が進んでいる分野がある。
ニコニコしているオブしーが差し出して来たそれもそのひとつだ。
「……ついにこの日が来てしまったのか……」
おぞましい物を見る目で見てしまっているのを自覚する。
自信作に対してそんな態度を取るのは職人としては許せないと思うけど、今回ばかりは許して欲しい。
ボクの、専用刀だった。ボルツ誘引刀とも言う。
武術指南でボクの動きを把握したオブしーが持てる技術を駆使して作った脇差サイズの黒刀だ。
……いや、これは小太刀と言うべきか。
「元々はねー、ボルツに注文を受けてから作り始めたのよね」
「は?ボルツが?」
何か、とんでもない切り口を入れ始めるオブしーである。
アレか。ボルツの野郎、まさかこんな手を使ってまでボクと真剣勝負したいって言うのか。疫病神か。
「僕もフォス用だと思ったんだけど……何か、自分で使いたいみたいよ?」
「……は?ボルツが??」

そして妙な切り方をするオブしーである。
なぜに?アイツはもう野太刀クラスの大刀あるじゃん。
武術指南の中で、自分の間合いに疑問でも感じ始めたのか?
基本遠距離から始まる月人戦において威力と間合いのある大太刀は、取り回せる実力があるなら最適解だと思うんだけどな。
小太刀だとご自慢の髪の毛ブレードよりも間合いが短いぞ?
「この間の月人戦で、ボルツが大剣と小剣を使ったんだって?それがキッカケになったらしいよ。防御特化の小剣と攻撃特化の大剣を組み合わせれば新しく隙のない戦いが出来そうだって」
……マジか。アイツ二天一流目指すつもりかよ。
ますますバーサーカーに磨きが掛かったらどうするつもりだよ。ボクはもう処理しきれねーぞ。
ってか、ボクも既に処理しきれねーぞ。
「フォスは、2本を使った戦い方は出来る?」
「ムリムリムリ!アレ相当な器用さ要求されるからね実際。手先の器用さっつーより、状況判断力とか切り分けって言う意味の器用さだけどさ。ボクがやったら、増えた選択肢が逆に足かせになっちゃうよ」

ボルツは……アイツ、実は状況判断力とか洞察力とかずば抜けてるからなぁ。
結構噛み合うかもしれんね。
「まあ、それはともかく……持ってみて？きっと合うと思うんだぁ」
「うぐぐ……まあ、オブしーと刀に罪はないもんなぁ……アイツがキレてるだけで」
観念してその小太刀を持ってみた。
ボルツ用と銘打っていても、実はボク用に作ってくれたって事みたい。
まあ、ボクが剣を持つ機会はそうそうない筈だしね。緊急時に手に取る必要が出た時の為に……って事か。
中々いいバランスだ。木刀の作成と武術指南による動きだけで、ボクの欲しいバランスを完全に把握したらしい。ウチの技術屋様方は大抵人間やめてると思う。まあ、人間じゃないけど。
抜き放って刀身を検める。
尺は大体５０ｃｍ強と言った所か。件の小剣よりもやや短い。
反りは浅く、刃紋はないが弊害になりそうな曲がりは見当たらず、刃先は透き通るほど美しい。
柄は、両手で持てるようにする為か多少長く作られている。片手打ちも両手打ちもこの剣なら自在だろう。

「これは良いね――ちょっと振ってみるね」
「うん、どうぞどうぞ。多分、これならイケると思うんだ」
オブしーからちょっと離れて、納刀。
間合いに障害物がないかどうかを確認してから、拍子を置かずに抜刀した。
「――しッ!!」
抜き打ちからの斬り返し。
計算された反りから閃く刀身が、空を裂く感触を教えてくれる。
下がり軸を外しながらの上下斬り上げ、斬り下ろし。
前の剣ならこんなストップ&ゴーをやったらヒビが入っていたけれど、この刀なら特に問題は無いようだ。
オブしーが満足したように頷いた。
「――うん、やっぱりそうだ。フォスはなんて言うか、体全体で剣を振るから、前の剣のバランスだと遠心力が変な風に掛かって振り回されちゃってたんだね。で、それを押さえつける為に体に負荷が掛かってたんだよ。
だから、重心を少し刀身の方に寄せてみたんだ。少なくとも、コレで振り回される事はないと思うの。
……ただ、剣を振り切らずに、遠心力を使い切ったあたりでピタッと止まるのは変な

クセだね。空振った時の斬り返しを想定してるんだろうけど、その動きが一番負担が大きいから、あまり使われるとその剣でも無理が出ちゃうと思うの」
「オブシディアンさん、ちょっと分析力怖すぎませんかねぇ?ボクの技が丸裸にされて行く……いや、別に良いんだけどさ」
　優れた武器を作るには、優れた武器を使う技が必要だと言う事かい。ボルツ以外にこういう指摘をされるとは思わなかったわ。
「ホントはねぇー、鞘の方も丈夫に作ってあげたかったんだけど、それだと荷重オーバーしそうだったのでオミットしたんだよねぇー。フォスの剣って、アレでしょ?きっと鞘も使うんでしょ?」
「……ボク、鞘打ち見せたっけ?」
　確かに牽制や崩しやフェイクとして、時には不殺の方法として、鞘で攻撃する事もあったケドも。
　本来、鞘はそこまで強度が無いから、兵法としてはかなり邪道な戦い方なんだよね。だから意識して見せなかったし教えても無かった筈なんですが。
「鞘打ちって言うんだ?特に見た訳じゃなかったけど、立ち回り見てたらなんとなく、そう言う手もあるんだろうなぁって」
　怖えよ。

オブシディアンさん超怖ぇよ。

「……ボク、オブしーの戦ってる所は見たこと無いんだけどさ。……もしかして、オブしーって結構強い……？」

「えー？うーん……えへへ、ないしょー」

赤アレキの時もそうだったけど、ウチはどうも隠れ強キャラが潜んでいるような気がするんだわね。

昔の刀鍛冶はそのまま剣の達人だったって創作物はよく見るし。

赤アレキの割り増し燕返しの次は、オブしーがニコニコしながら無明三段突きでもブッぱなすのではと疑ってみたり。

「やだもー。そんなに睨まなくとも、少なくともボルツよりは弱いに決まってるってば。……だからこそのこの剣なワケだし」

「はい？」

ポン、とボクの肩に手が置かれた。

振り向くとそこには、それはもう素晴らしい笑顔を浮かべたボルツさんの姿が。

「――良い剣だな、フォス」

「ぎゃあああああ!?でたあああああ!!?」

しかもなんか、大小二本の剣を既に携えていらっしゃるううう!!?

え、なに!?ボクの持ってるこの剣がボルツのって訳じゃなかったの!?しれっと2本作っちゃってたの!?

オブシーがニコニコ笑っている。

「うふふ、ごめんねぇフォス。ボルツの依頼は、ボルツとフォスの剣を一本ずつ作る事だったんだ」

「オブシディアンッ!!謀ったなオブシディアンッッッ!!?」

「君は良い石だったけど、僕の創作意欲を掻き立てる君の技がイケなかったんだよ……うふふふ」

「さて、じゃあ行くぞ。『お前の』新しい剣を試すために、この僕、ボルツが相手をしてやろうと言うのだ、フォス」

「エゴだよそれはあッ!!?」

「さーてっと、かんせーんっ！」

「いやあああああああ!!?」

――【悲報】本日のノルマ達成。

@　@　@

「おかしいねん……アイツもう、頭おかしいねん……なんで割れるまでやろうとするの？フォスさんが脆くも美しいベリーか弱い宝石だと言う事をそろそろ素粒子レベルで刻み込むべきだと思うの」

そしてお約束の医務室である。

ルチル先生はなんだかんだ言って、ボクのグチ聞きながら治してくれるので好きです。諦めてるとも言うけど。

「ボルツ相手に3本取って見せる石を指して『か弱い』は適切じゃありませんねぇ。あなたがやってた構え、教えて頂いた五行の構えの『正眼』とは微妙に違ったように思いますが、なんですかアレ？アレでボルツの手数を抑え込んでいるように見えました」

「『平正眼』つってね、二刀流相手にする時の定石みたいなモンよ。相手の左小手に刃先を突き付けつつ自分は刀身の陰に身を置く構えで、相対的に相手の利き手の射程から最も遠い位置に陣取れるのね。上段や二刀流を相手にする場合、攻撃が来る位置に刀身を置きやすくなるから相性が良いワケよ。

この上で、相手の軸を外しつつ一刀でしか対応できない状況に持ち込むのが、二刀流と戦う時のコツかな」

「普通に対応できる引き出しがあるんですから、やはり『か弱い』とは無縁ですね」

「解せぬ」
　そりゃあ二刀流を模索、研究し始めた奴相手なら、いくらボルツでも付け入る隙はあったケドさぁ。
　こっちは目に見える形で課題を３つも提示してあげたんだから、それで満足して自己鍛錬していなさいよ。
　髪の毛まで使って執拗に割りに来るのどうなの？こちとら硬度３半だぞ３半！
「あなたの引き出し、全部吐き出させたいんでしょうねぇ」
「吐き出しとるわ！懇切丁寧に武術指南の席で!!」
「新しい事がどんどん増えて行くから、次が待ち遠しいんですよ。かくいう私もそう言う気持ちが結構あります。先日やっと立ち回りの段でＬＥＳＳＯＮ２『筋肉に悟られるな』が出てきたぐらいですし。次は何なんだろうってワクワクしますね」
「言っとくけど、あの『無拍子』の概念はある種の奥義なんだからな!?まさか３週間であのレベルまで吐き出す羽目になるとはこっちも思わなかったわ！」
　もしかして今回のオブしーの一幕もそれが原因か？
　最近はアメシスト両名も目を輝かせて次をおねだりする様になったし。あのね、ボクが教えなくても君たちは十分強いからね？っつーかつい先日まで剣の技量はボルツに次ぐってのが定評だったと思うんですがねアメシストさんや。

なんでいつの間にかボクが剣術の達人で、技量のみであれば宝石の国最強って事になってんの？おかしくねえ??

あの武術指南も頭痛の種だよ。予想していた事ではあったけど、みんなパカパカ吸収してくんだもんさ。そのおかげで、予定していなかったペースで次を教えて行く羽目になってる。

コレ、仮にボクがどっかの流派に入ってたら、なんつー教え方してんだって御師匠さん的な人からグーパンチ貰ってる案件なんじゃないの？

しかも高度な事を教えれば教えるほど、その内容は『対月人』じゃなくて『対人』に偏って行くんだぜ？みんなそれで良いって言うけどさ、変な事教えてそれがキッカケで月に連れて行かれましたなんて事にならないように、必死こいて頭捻ってんだぞこっちは。

っつーか、いくら技術元年って言ってもこっち方面の技術も旺盛ってどうなの？

治療の時間が唯一の癒しタイムって現状は絶対おかしい……おかしくない？

「――はい、終わりましたよ。やはり剣だと開き方が簡単で楽ですね」

「お、ルチル先生ありがとう！」

まあ、練習用の木刀で石にダメージ与えるアホだからな。真剣使えばこうもなる。

「ついでに、割れるまでやるのは医師の視点から許容出来ませんとかボルツに一言言っ

といてくんない?そろそろフォスさんちゅらい」
「って言うかそれ以前に、あなた帯剣許可出てたんですか?今回の件は普通に規則違反だと思うんですが」
……。
「……あ゛!!?」
「やっぱ許可取った訳じゃなかったんですね」
何やってんだボクは!?ボルツが強引に挑んでくるのが日常になり過ぎて普通にスルーしてたぞ!?
今回の件は先生の許可を盾にすれば普通にかわせたじゃん!!うっがあああああああ!?
「言ってよそれ……ルチルもしれっと観戦に回ってるぐらいなら、始まる前に言ってよそれ……」
「いやー、私もボルツｖｓフォスは結構見るの楽しくてですね。一度使った技はボルツには通じないから、新しい技法が次々出て来ますし。きっと他の皆も同じ考え方してますよ」
「ま、周りが全部敵に回っている……なぜだ……後方支援担当の月下美人フォスフォフィライトさんはどこに行ったんだ……せめて心の中には居させなさいよ……」

っつーか、一度使った技が通じなくなる聖闘士ボルツを相手するボクの身にもなってくれませんかね切実に。

ボクの身体能力、言っとくけど青銅聖闘士以下ですからね？青銅聖闘士がアヌビス神握った黄金聖闘士とタイマンやってるんですからね？この異常っぷりに誰か気付いてぷりーず。

経験と駆け引きでどうにかするにも限度があるんだぜ？

「ま、どうにか出来ちゃう内は当面このままでしょうね。別に私は構いませんよ？最早あなたを治すのは日常になってますし、アレが見れるなら安いものです」

ちくせう、神は死んだ。

ブッダ、アンタはまだ寝てるんですか。え、キリストと一緒に立川ごと隕石で吹っ飛んだ？

「あなたも、適当に相手してとっととダウンすれば良いじゃないですか。そうすればボルツの興味から外れますよきっと」

「……対処できる引き出しが残ってる内は出来ないよそんなの。ボルツのみならず、みんなも期待してくれてるんだから」

「――ふふふ。なんと言うか、フォスですよねぇ」

見取り稽古の効果までは否定出来ないからな。皆割かし貪欲だから、これだけでも

色々吸収してってくれる。
　悔しいけどスキルアップの機会としては都合が良かったりしてるから、指南役としては手抜きも出来んわ。
　しんどいっス。
　……ちぇっ。誰かの手伝いって方向じゃなく『ボク自身が必要とされてる』仕事なんだぜ？
　テキトーなんか出来るかよ、バカ。
「――時にフォス、私もちょっとあなたに用があったんですよ」
「ほえ？」
　コトリ、とルチルが赤い宝石を置いて見せた。
　微かにオレンジの入った赤色。しかしそれだけじゃない。ピンク色の宝石が組み込まれている。
「……これ……」
「ええ――完全に『食い込みました』」
　嬉しそうに口の端を持ち上げるルチルである。
　つられて、ボクも同じ表情を浮かべた。
「――ナノマシン説の肯定例がさらに出ちゃったかな」

「『原因』の方も信憑性が出て来ましたよ。本当に……本当に、長い回り道でした。
――ありがとう、フォス。それしか言葉が見つかりません」
「そのセリフはちょっと早いぜ、ルチル。それはパパラチアの完治に成功した後だ」
「……はい！」

@　@　@

――パパラチア。
硬度は9、劈開はなく靭性は準1級。
赤と橙を混ぜたような鮮色を放つ年長組の一人だ。最年長のイエローと同年代になる。
その鉱物特性による身体能力からボルツに次ぐ実力を持ち、ルチルと組んで……と言うか、ルチルが『支えて』戦っていた。
長い髪の毛がキラキラ輝いてた。カッコ良くて、何でも知ってて、そしてとても優しかった。
ボクの『記憶』について、一番最初に打ち明けたのもパパラチアだった。
当時『記憶』と言う形ですら認識していなかったボクの拙い話を真摯に聞いてくれた

石だった。
　……彼にはボク同様、先天的な不全があった。
　生まれつき、体に幾つかの穴が開いていた。そのせいでずっと眠り続けてしまうのだ。
　ルチルがその穴を塞ぐ施術を繰り返して支えていたけれど、起きたと思ってもそのうち必ず眠りについてしまう。
　最近は、ずっと動く気配すら見せなかった。
　医務室には彼が入った箱が安置されている。
　等身大の木の箱に入れられて眠り続けるその様はまるで棺桶のようで。
　昔はそれを見るととても不安になって、医務室に近寄りたくないとわがまま言ってしまった事もあったっけ。
　今はレッドの作った『ふわもこシリーズ』のルチルぬいを抱いて眠っている。
　それがまるで手向けのようで、ますます棺桶だな、と今では苦笑できるようになった。
　――ルチルが木箱の蓋を開けた。
　久しぶりに見たパパラチアの姿は、昔から全く変わっていない。
「……最後にパパラチアと話したのは……確か、ボクが７０ぐらいの頃だったっけ」
「２３１年前ですね。あの時から、３０万回近く彼のパズルに挑み続けて来ました」

赤とピンクの宝石が組み合わされた歪な円柱状のオブジェを幾つか、テーブルの上に乗せて行く。

「テスト用の1個だけだと思ったけど、パズルピース全部の分を用意していたとは恐れ入ったよ」

「これ1つ作るのに3年掛かりましたからね。1個だけ様子を見てもし成功したら、そこからさらに3年待つ事になる訳ですから……絶対待てないなと思って全てのパーツを用意していたんです」

「お美事にございます」

このオブジェは全て、パパラチアの体に空いた穴にぴったりと当て嵌まる形をしている。

ルチルはもはや、何も見ずに無造作にノミを振るうだけでこの形を作り上げる域に達している。

何十万、何百万と繰り返してきた試行がそれを可能な領域に押し上げた。

ルチルの医術はパパラチアの為に上達したんだ。

そしてそのオブジェが今、パパラチアの体に差し込まれて行く。

「……理論が正しければ、今回の起動確率はかなり高い筈ですが……」

……。

……。

固唾を飲んで見守っていると、変化が現れた。

パパラチアの瞳がゆっくりと開いたのだ。

「おお……っ！」

「やったっ……！」

パパラチアはパチパチと瞬きをすると、上半身を起こして「ふあ」と大きな伸びをした。

その胸に乗っていたふわもこルチルぬいがコロンと転がる。

「――お、可愛いルチルだな！レッドの作か？……俺へのプレゼントと受け取っても良いんだよな？」

ルチルぬいを抱き上げてパパラチアが笑う。

何一つ変わっていなかった。

ボクの知っている、パパラチアだ。

ルチルが顔をほころばせる。

「――はい。あなたへのプレゼントですよ。今、そのぬいぐるみが流行ってるんです。私もパパラチアのぬいぐるみを持っています」

「ははは、良いなぁ。是非見せてくれよ」

「はい、後ほど」
一目見て気に入ったようだ。
ルチルぬいをムギュウと抱きしめて顔を寄せるその姿が絵になっている。
「体調はどうですか？」
「いいね！」
「目もちゃんと見えてる？」
「うん？ああ、ちゃんと見えてるぞ？」
「目？何か理論に不安な点が？」
「い、いや……別に何でもないんだよ、うん。聞いてみただけ。あはははは」
問題が何も無いならお口チャックしておこう。
ゴーストの奴、ルチル相手に最後までステルスしきったのか……さすがだわ。
「……今回は、大分寝てしまっていたようだなあ。１０年ぐらい苦労掛けてしまったか？」
「２３１年だってさ」
「に……っ!?大幅な記録更新だ」
「すべて私が無能なせいです」
「俺の運が悪いせいさ」

「いいえ！私の医術は、あなたの不運を克服する為に磨き続けているのです！未だそれが成らないのは、私が未熟だからに他なりません」
　ルチルのそのセリフを聞いてパパラチアが困ったように笑った。
　……そうだよね。
　自分のせいで誰かが苦悩しているのを見るのは、つらいんだよね。
「……今回のパズルピースは、なんか寄せ木みたいになってるんだな」
　つらい話題を変えるように、パパラチアが話をずらす。
「ええ。見覚えありますか？かつてあなたのパズルピースに使われていた、あなた自身の髪とピンクサファイアを組み合わせた物です」
「なんと。同じパーツは使えなかった筈じゃなかったか……？」
「あなたが眠ってしまう原因に、目途がついたんですよ」
　パパラチアが大きく目を見開いた。
「とんでもない大快挙じゃないか！３０００年以上、原因の糸口さえ全く掴めなかったのに!!」
「パパラチア……私は、無能です。今回の施術もテスト的なもので、おそらくそれほどの時間を置かずに再び眠りについてしまう可能性が高いでしょう。
　――ですが、あと３回待って貰えますか？

現在、その原因を観察するための技術を開発中です。
次にあなたが目覚める時、その技術を使ってより精度の高いパズルピースが作成されます。その次が課題改良版、その次が本番です。恐らく3回目の手術まで１００年掛からないでしょう。
その後はおそらく何回か開く事になるとは思いますが、あなたが眠りにつく様な事は無くなる筈です。
――１００年後、あなたを皆と同じ体にして見せます」
パパラチアの顔を真っすぐ見て言い切るルチルの声には、自信が灯っている。
「……２３１年、か。悔しいなぁ……焦燥するばかりだったルチルが、こんな顔をするようになる時期を寝て過ごしてしまったんだものな」
ルチルの頬に手を当てて笑う。
今度は困った笑みじゃない。安心の笑みだ。
ルチルにあったのは焦燥だけじゃなかった。確実に『進んでいる』と言う実感を、この２３１年の中で掴んで見せたのだ。
「待つさ、１００年でも１０００年でも。優秀な俺の専属医さん。無能だなんてとんでもない。俺が安心して体を全部任せられるのは、ルチルだけだ」
完治までのルートが、見えた。

絶望の１００年は身を焼くほどの苦痛だろう。
でも希望の１００年であるなら……それはきっと、無限の力になるのだ。

@　@　@

パパラチアの希望で外に出る。
春の太陽は光がおいしい。草原を撫でる風が花のにおいを運んでくれる。
――こんな日は月人が良くやって来る訳だけど、ここ1週間は珍しくずっと来ていない。
「はあ～あ……良い季節だ！」
「そうですね。以前は、確か夏でしたか」
体いっぱいに光を浴びて、パパラチアが大きく伸びをする。
手には長い刀が握られていた。
パパラチアの得物は反りの深い長大な刀だ。身長よりも長い太刀を、パパラチアは巧みに振り回す。
昼の護身用としては少々ごつ過ぎる獲物だ。
「フォスは戦争出てるのか？」

持って来てしまった小太刀を見て、そんな事を聞かれる。
「出てないよ。これは護身用。……今の所、護身どころか危険を誘引しているけど」
「……？」
おいルチル、顔を背けて笑ってるんじゃあない。
ぷくくって声漏れてんぞ。
「ちなみに帯剣許可出てないんですよ」
「ははは、悪い子だ」
「ぐぬぬ」
パパラチアの稼働限界が突然来た時に備えて一応帯剣してみたけど裏目に出たか。
ルチルが一緒だし、必要なかったかもしれんね。
「――直近、伝えておきたい事はもう伝えました。なので、次は少し難しい話をします」
「うん？」
「あなたの体についてです」
「――おお、確かにそれは興味がある。原因に目処が立ったんだよな。俺はもう、『そういうもんなんだ』って割り切ってたのに」
「ふふふ……きっかけはフォスがやったうっかりミスだったんですよ」
おおう、そう言う切り口ではじめますか。

両手をあげながら苦笑する。
「――モルガのね。治療を手伝った事があったんだけど、間違えてボク、右足と左足を逆にくっ付けちゃったんだ」
「ははは、災難だったなモルガも。……左右逆にしても、くっ付くモンなんだなぁ」
「まさにそこでした。モルガ曰く、右足の部分についた左足は、左足を動かす感覚で動いたそうなんです。これが大いなるヒントになりました」
「ほう」
ボクらの体は鉱物の中にいるインクルージョンが動かしている。
思考するのも、記憶するのも、稼働するのも、全部インクルージョンがやってる。
じゃあインクルージョンを一つだけ鉱物に埋め込んだら、その鉱物は思考し、記憶し、稼働するのかと言うとそういう訳じゃない。
「左足は右足にくっつけても左足として動いた……これは、左足に内包しているインクルージョンが『左足の役目』をして居たからに他ならない訳だよ。きっと右手を切り取って左足の付け根にくっつけたら、右手を動かすのと同じ感覚で左足に付けた右手を動かす事が出来ると思う」
「ふむふむ」
「なお、この『役目』はインクルージョンそれぞれに個性があるという訳ではなく、イン

クルージョン自身がその役割を果たせる機能を持つように自身を配列しているものと推察しています。

イメージし難ければ積み木を思い浮かべてみてください。

全て小さな立方体で規格を統一した積み木でも、複数集めて左足の形に並べれば左足に見えますし、右手の形に並べれば右手に見えます。

インクルージョンは、自分自身を使って鉱物の中で積み木をやってるんです」

「なるほどな」

思考も稼働も全部その積み木によってなされている。

……これは、細胞と言う積み木を使い、ＤＮＡと言う設計図に沿って自己配列を繰り返している人間を始めとした有機動物と同じ構造と考えて良い。

「――さて、ここでクエスチョン。……左足を持ってる人に左足をくっつけようとしたら、何が起こると思う?」

パパラチアがキョトンという顔をした。

「……あー……言わんとしている事はなんとなく解るが。でもその設問だと結局、別の奴の左足をくっつけるって事になるよな? 一人につき左足は一本しかないんだから。

さすがに別の奴の左足は、くっ付かないんじゃないのか」

ボクらは体を欠損した時、インクルージョンの含まれていない鉱物を接合する事で回

復する。インクルージョンが含まれていると、まともに動かない。
　これはずっと昔から言われていた事だった。
　だから誰かの体のパーツは流用出来ず、緒の浜で採取した鉱物を使って欠損部位を補うのだ。
「非常に素晴らしい着眼点です。
　答えとしてはまさにその通りで、そもそも接合しないか、仮に接合しても機能不全を起こしてその部位がマヒ状態になるか、体ごと停止したりする訳です。いわゆる拒絶反応ですね。
　――そしてこれが、あなたの体に起こっている現象と言えます。
　あなたの体は生まれつき穴が開いています。あまり適切な言葉ではありませんが、ある意味であなたは『穴が開いた状態で完成している』と言う状態なんですよ。だから他のパーツを取り込むと、インクルージョンが完全に馴染むまでの間は騙し騙しで動きはしますが、そのうち既に内包している『役割』の一部と競合し、拒絶反応を起こして眠ってしまう。
　同じパーツが使えなかったのは、そのパーツにはインクルージョンが馴染んでしまい、拒絶反応を起こすパーツである事があなたの体にバレてしまっていたからですね。
　砕けた言い方をすると、例えば接合したパーツが左足であるとバレるまでの間だけ、

あなたは動く事が出来る訳です」

普通はインクルージョンが馴染む、イコール接合すると言う事だからこの説明でも誤解は生まれやすい。

でも、重要点だけ摘まんで理解させようとするとこう言う言い方しかないんだよな。

「待って欲しい。それはあくまで、他の奴のパーツを使おうとした場合だろう？緒の浜から持ってきた鉱物にはインクルージョンが含まれていない筈だ」

「その学説が、今では否定されています。ナノマシン説と呼んでますが、こちらについても詳しく話すと脱線が著しい為に割愛します。論文に纏まっているので時間があれば読んでみてください。アレだけでも衝撃を受けますよ。

――さて、肝心の治療アプローチですが。

要は『役割』を持っているインクルージョンが含まれた鉱物を使わなければ良いんです。

ただ、緒の浜に打ち上げられた鉱物は、既に微量の『役割』が内包されている物が殆どです」

「――ストップ。言いたい事が呑み込めて来たぞ……つまり、その『役割』は上書きされたり消去されたりする現象が起こってる訳だな？で、それを人為的に再現させたのがこの寄せ木パズルピースか」

「大正解!!」

良かった。

矛盾した説明を先に挙げたから混乱すると思ってたんだけど、ちゃんと汲み取ってくれてたみたいだ。

そう……今の説明は矛盾していた。

緒の浜の鉱物にもインクルージョンが含まれているなら、そもそもボクらのパーツとして使える筈がないのだ。

『左足を持つ石に左足はくっ付かない』

ならパーツとして使えているのは何故かと言うと、緒の浜側のパーツに含まれる『役割』を、ボクらの体側にある『役割』が侵食、再整形しているからだ。

人間で言う所の『代償機能』ってやつと性質が似ている。あっちは元からあるパーツを使って別の役割をさせる訳だけど、ボクらの場合は外から取り込んだパーツを使ってこの機能を実行する事が出来る訳だ。

そしてこの再整形に失敗すると、機能不全を起こしてエラー停止する。

パパラチアはその体の構造の複雑さ故に、この機能の自由度が著しく低いのだ。

そこでこの寄せ木パズルピース。

異なる『役割』を持つ宝石同士を接合・互いに侵食させる事で、そのパーツの中に内

包されていた『役割』の初期化を誘発したのだ。
さっきの例に照らすなら、左足と右足をそれぞれバラバラにしてごちゃ混ぜに固める事で、何だったのかも良く分からないただの肉塊を作った訳だね。
……なんか例えが猟奇的で嫌だケドも……
ただの肉塊に『役割』なんてある訳ない。
だからパパラチアの体にある『役割』と競合しなくなる為、拒絶反応エラーも起こらなくなる……と言う理屈だ。
「寄せ木パズルピースを作ってインクルージョンが馴染むまで……つまり、『役割』の初期化を促すまでに3年ほどを要しました。
ただ、それはインクルージョンが馴染んだ事による推定の判断のみであり、おそらく完全に初期化されてはいないでしょう。そのパズルピースの中には恐らく微量の『役割』を担う部分が含まれている筈です。
その為に、あなたは再び眠りにつく事になるでしょう。
初期化された部分が多くあるが故に、パズルピースが侵食される速度も速い筈。医師としての経験から判断するに……遅くとも今夜には、稼働限界を迎えるかと」
申し訳なさそうな顔をしているルチルとは対照的に、パパラチアの表情は衝撃と感動で固まっていた。

「……十分だ。十分過ぎるよ。
　凄いな――いや、本当に凄い。今の論説聞けただけで２３１年眠っていた元が取れた気分だ。１０００年眠ってても同じ気持ちになったと思う。
　だって実際――その理論のおかげで、使えなかった筈のパーツを使って動けているんだもんな、俺は。
　いや、むしろ既に完全初期化に成功してる可能性すらあるんじゃないのか？」
「希望的観測ですけどね。今のところ目に見えない領域の話なので、私は楽観視できません」
「しかもなんだ、楽観視出来るようにする技術を今開発中で、それは１００年でケリがつく見込みがあるんだろう？
　――なんと言うか、色んなものが激動しているなあ」
　ついさっき起きたばかりのパパラチアをして、そのセリフが出てくるんだなぁと今のこの国を想う。
「ふふふ……みんなが今まさに感じてる物なんですよ、それは。そしてだいたいフォスが火付け役だったりします。この理論だって、フォスが居なければ構築する事は出来なかったでしょう」
「……フォスが？」

パパラチアの視線に、アイドルピースで応えてみる。
ええんやで？ええんやで？
もっとフォスさんを褒めてくれてもええんやで？
むしろ甘やかすべし。
――よすよすされました。
「２３１年だもんな。お前ももう、先生にひっついてるだけじゃないもんな。……『自分』は見つけられたか？」
「ふっふー。パパラチアの言う通りだったよ。ボクは、最初から『フォスフォフィライト』だ。最近、特にそう思う」
ボクの答えに満足したのか、パパラチアは嬉しそうに目を細めてくれた。
「そっかあー……じゃあ俺も『パパにぃ』は卒業かな？ちょっと寂しくもあるなあ」
「ちょっ!?ルチルの前でそれ言っちゃう!!?」
「おやおや、フォスはそんな呼び方してたんですか？興味深いですねぇ、実に興味深いですねぇ？く、くくく」
やめて!?
自分の子供の頃を知っている仲の良いお姉さんに、おねしょの思い出を暴露されるが如きこっ恥ずい展開やめてっ!?

「父親の『パパ』とパパラチアの『パパ』が掛かってたんだろうけどさあ、誰もいない時を目ざとく狙って服のすそ掴んで『パパにぃ』って呼んで来るんだよ。すっっっごい可愛くてさあ！」
「ほうほう？」
「ほぎゃあああああああ!?やめ、やめてえええええええッッ!!?」
　コブシ握って力説やめてえええ!?
　フォスフォフィライトのライフはもうゼロよ!?
　おい月人ッ！いつも空気読まずに来襲してんだろ!!出番ですよ!!今まさに出番ですよっ!!?
「これ、俺の一押しエピソードなんだけどさ――」
「ほうほう？」
「うわあああああん!?やめろよう!!いたいけな末っ子イジメて何が楽しいんだよう!!」
　本人、悪気が無いのがさらにタチが悪い。
　結局、月人も来ない平和な青空の下、ボクは精神ライフをゼロどころかマイナスにされるまでオーバーキルされる羽目になった。
　……年長組って怖い。弱みを見せまくってた石相手だと特に。

ゴメンね先生、最近ガバ過ぎてロンズデーライト呼ばわりして。
あなたの寡黙さが物凄く有り難い事だったんだと３００年経ってようやく気付きました。
だからお願い、助けてぷりーず……

その後、パパラチアが起きたと言う事で学校の中が明るくなり、皆で思い出話しながらその日を過ごした。
年長組は年少組の恥ずかしい過去を暴露すると言う暴挙を続け、ライフゼロになったボクに対する死体蹴りの後、イエローが『ブイブイ言わせていたころのルチル』を暴露。
そこから次々と話が飛び火し、過去のアルバムをひっくり返すような話がドバドバ出てボクを含めた何名かが恥ずか死んだ。
途中、信じていた筈の先生までもがまさかの参戦。鉄壁の防御を誇った年長組までもが大ダメージを受ける事態に発展する。
年少組同士で暴露話をネタにからかい合戦に移行。その席でボクがボルツのダイヤぬいゲキ可愛エピソードを滑らせてしまい、報復から逃れる為にレッドを売って物理的に脱兎しようとした所、激昂したレッドに確保されると言う一幕があったりなかったりした。

パパラチアは、始終笑顔だったように思う。
その日、パパラチアは夜まで起きて……皆で床に就いたのを最後に、稼働限界を迎えたようだった。
ルチルぬいを抱きしめながら眠り続けるパパラチアの顔は、とても嬉しそうな笑みを浮かべていた。
――今、パパラチアはいつも通り医務室の木箱の中で、ルチルぬいとパパラチアぬいと一緒に、再び目が覚める時を待っている。

第19話「編成」

「――フォス」

自室でアマルガム計画の方針を練っていると、不意にユークから声が掛かった。

右手には、少し前にボクがスフェンに話して流行らせた将棋盤が握られている。

遊具の乏しいこの国にあって、じわりじわりと頭角を現し始めているボードゲームだ。

ちなみにチェスや囲碁は無い。そもそもマスの縦横がいくつかだったか覚えてない。

将棋だって、ハチワンダイバーと言うフレーズを覚えていなければ怪しい物だった。

なお、別に王サマのおっぱいを揉みたくはない。

「少し、付き合ってくれないかな？」

将棋盤をヒラヒラしながらユークが言った。

ボクはしなっと親指を噛んで、

「ユークの気持ちは嬉しいんだけど……ゴメンなさいっ。ボク、シンシャの事を裏切れないノッ！」

「んもう。何の事言ってるか分かってるクセに、そーゆー小芝居やらないの」
「サーセンｗｗｗ」
軽く流されてしまいました。
「……でもユーク。自分で広めておいて何なんですが……ボク、将棋はクソ弱いよ？」
「うん、ありがとう。じゃあ休憩室に行こっか」
「あれれー、強制連行じゃないっスかユークさん。……いや、行くけどさ」
ユークがこう言う手段で攻めてくる事はひっじょーに珍しい。
何か理由があるんだろうなと察して、ペンを置いてホイホイついて行く事にした。
これがボルツ相手だったら速効追い駆けっこ案件である。日頃の行いって大事。超大事。
まあ、追い駆けっこに発展しても勝てた試しがないんですけどね！
先生お昼寝シフトだと逃げ込む先すらないのがツラい。
「――相手の考えを読み、戦略を構築する……このゲームを知ってから、その意味を良く考えるようになったよ」
歩を進めてユークがしみじみ口にした。
対するボクは、形だけしか知らない四間飛車と穴熊の形を目指して駒を動かす。
本当に形しか知らないものを何となくで動かしているだけである。きっと本業の人

がボクを見てたら、イライラのあまりぶん殴られること請け合いだ。
「現実が、将棋ほど形がピッチリ決まってれば良かったのにねえ」
「ふふふ。将棋がうまい人ほど、人生の読みは浅そうだものね」
深い台詞を吐くなぁオイ。
「……ジェードとね。最近将棋を良くやるの。
いろいろ遊んでいると、攻めとか守りとかどのぐらいその効力を発揮してるか、『形』で大体解るようになって来る。でも不思議なもので、ジェードで負けない形をアレキに試してみると、思いもよらなかった所から崩されちゃったりするの。相手ごとに攻め方、守り方がガラッと変わる。
――奥が深いね、将棋って」
もう完璧に有段者の台詞吐いてますがなユークさん……
「フォスの形は、防御寄りなのかな?……でも、なんて言うか……あまり形を活かせてないみたい」
……角で桂馬を取られた。
同角で取り返す事も出来るけど、それをやるとユークの飛車に射線を渡す事になる。
頭の中がこんがらがって、思わず変な笑みがこぼれてしまう。
「その『形』に気付いた人間が、将棋の世界には結構いた。……ボクは形だけは聞きか

じってたから、マネっこしてるだけでさ。運用方法はからっきしなんだ」
「ああ、なるほど……なんか、いろいろ納得」
持ち駒にちらりと視線を向ける。
――悩んだ末に、同角。一手間に合うか微妙だけど、飛車の蹂躙を歩で止める算段を付けた。金銀だけは守れる、と思う。
ユークの返し。
「――げ、」
飛車の射線ばっかり目が行って、角の死活が甘かった。
さっき取られた香車を指されて角がヤバイ。しかもこれ、逃げたら成られて王が詰む、かも。
すごい酸っぱい顔をしながら、五体投地して待ったをお願いしようか真剣に悩んだ。
でも、一手待って貰っても結局死ぬ気がしてくる。
顔を上げると、あまり芳しくなさげな表情で憂うユークの姿が映った。
「ほんと……将棋だったら、先の展開も読めるのにね……」
少なくとも、盤面を優勢に進めている奴が浮かべる表情ではなかった。
「……何があったの？」
ユークの本題はコレなんだなと悟る。

「……昨日、月人が三器同時に出現したわ」
「……うん、聞いたよ。三器とも撃退出来たらしいね。新型が混じっていなかったって、ボルツがぼやいてた」
又聞きの又聞きになるけど、アレキからも聞いた。
なんでも今回の月人は過去の三器出現とは戦術が異なっていたらしい。
三器出現は今まで数回確認されている。
一器倒すと残りの二器が流星の速さで飛び去り、それを敗走と見て追って行くとそのまま連れ去られてしまう。
少数に分断させてから残った二器で叩くと言う、意味不明な月人にしては比較的納得出来る戦術だ。
――これに掛かった三名の石が、戻って来ていない。
対し、今回の月人は逃げる事をしなかった。
今回、新型が混じっている事を考慮し、一度に滅する為に一ヶ所に誘導しようとしていた所、誰かが誤って一器倒してしまったと言う。
「逃げられてしまう、と思ったけれど……残りの二器は黒い雲の固まりになってその場に留まった。
今まで見てきた月人の反応とは違ったから見に回ったんだけれど……業を煮やした

モルガが黒い雲を切り開こうとして、返り討ちにされた」
「うん。……結局、連れ去られる前に先生が二器を撃滅出来たんだってね」
砕けたモルガが医務室に運ばれた時、ボクとダイヤも医務室にいた。
３人でレンズの実験をしていた最中に急患が出たと聞いて、ルチルとダイヤが「フォスはここに居るのに？」と目を丸くしたあの瞬間がショックだった。
てめえら覚えてろよちくそう。
「月人のね……考えが、解らないの」
それは、前々からボクが目茶苦茶ボヤきまくっている案件だった。
「フォスの絡んだ資料を見てるからかしら……月人のやってる事が『ただの遊び』に見えてしまうの。
本気で僕たちを連れ去りたいと言う意思が、考えれば考えるほど希薄になって行く」
「……本気、か」
今回の月人。
戦法は確かに納得できるものだが、死んだフリ（？）による待ち伏せをやるとしても後詰めが甘すぎる。
先生の射程内に入っておいて、なぜ硬直を選んだのか。
石を誘って返り討ちをするなら、１器は先生のかく乱に回すなりしてもう１器から目

を背けさせるべきだった。
先生の目の前で石を返り討ちにしてたら、そりゃ瞬殺されるに決まってる。
なにがなんでも石を攫ってやろうと言う月人の『本気』は今回も感じられなかった。
……ボクがずいぶん前に提示した『やられると不味い運用』。
アレは、分析した月人のリソースの範囲内でボクが『本気』を出して考えた代物だ。
想定される状況、作戦の方向性……そう言った物を2～3日片手間で煮詰めた物が大半を占める。
常々、思っていたコトではあった。
いくら人間の記憶を持つとはいえ、専門職でない石の考える事が、１００年１０００年専門的に考えて来た奴の思考を上回る事何て有り得るのか……？
アレキやユークは、ボクが敵に回ったらこの国が滅びるとまで言ってのける。
ボクはその評価を聞く度に懐疑的になる。
確かに、悪辣な新手と言う奴は対応が難しい。二人の評価はそれに由来するものだろう。
しかし、この国にはその新手を力押しで破壊できる人材がある。
先生、ボルツ、シンシャ、ウォーターメロン・トルマリンと言った特殊技能持ちがそれだ。

ゆえに、本気でボクらをぶっこ抜こうと思ったらそれらをどうにかする策が必要になる。

月人側は、そんな事解りきっているハズなのだ。

だからこそ本気でボク達を連れ去りたいのなら、年がら年中そう言った事を考え続けているハズなのだ。

それは例えば、過去の月人をすべて纏めて分析し、何閃型だの雑は何体だのと細かく分類しているアレキのように。

天候や大気状態を推測し、出現率を弾き出して、ともすればどこに現れるかすら分析しようと計画を煮詰めてるユークのように。

年がら年中、そう言う事を考えているハズなのだ。

片手間で2～3日で練り上げたボクの『本気』なんて、足元にも及ばないハズなのだ。

だからこそ、月人が『本気』であるならば、今頃は月人のトライアルアンドエラーが成熟し、防衛難易度がルナティックなんぞ鼻で笑えるほどに爆上がりして、ボクらは人造人間から逃れる一般市民のごとく身を潜めて生活する事態に陥ってなきゃいけないハズなのである。

だが、現状はなんだ？

一体ボクらと月人は同じ事を何千年繰り返してきたんだ……？

月人が変わらないからこそ、ボクらはいまだ防衛に成功していると言える。
……だってあいつら、技術的には完全にこの国を置いてけぼりにしてるんだぞ。
技術の差異はそのまま戦力だ。空を飛べるって事だけでどれだけのイニシアチブを取られているのか。
剣や弓で銃火器に勝てる筈がないのだ。
――あ、いや、あくまで一般的にはの話なんで。
ロングボウと剣と手榴弾とバグパイプ（!?）と言う時代錯誤装備を駆使し、銃弾吹き荒れる二次大戦で結果を出しちゃった英国のガイキチはカウントしない方向でお願いします。
つーか、アッチにジャック＝チャーチルが居たらそれこそこの国はスゴい侵略を受けてる気がするし。
「奴らが『本気』を出している部分が、ボクらの誘拐とは別にある……それは、去年浮き上がったね」
パチリ、と持ち駒の歩を打った。
角を捨てる決断だった。
本来の想定通り、飛車の射線を止めに行く。
「先生に『何か』をさせる事ね。……僕達の誘拐は、ただの手段。

月人の戦略が僕達に真意を知らさない事であったならば……なるほど、今までの行動も納得出来る――」

パチン、と角を取るでもなく飛車を進めるでもなく、良く解らない所に歩を打たれる。

「――なんて、フォスは考えていたり、する？」

しない。

――反射的にそう呟いた。

見上げれば、すがるような、試すような、そんなユークの視線。

盤面に視線を戻す。

……誠に申し訳ないけども、この盤上でユークを手こずらせるのはもう無理だと思います。

「手段が、フザけ過ぎてるよね。先生に何かさせるのが目的と言う事自体は嘘じゃないのかもしれないけれど……それだけでは無いだろうな、とも思ってる」

「そう。しかもこの目的だと戦略に意味が無さすぎる。先生に『何か』をさせたいと言う意図を隠してその『何か』の施行を期待するって、なにそれって思うもの」

飛車が動く。

想定していたルートをガン無視される。

「じゃあ本当の目的ってなに……って思ったら、スゴく、スゴく嫌な事が浮かんじゃった

の」

ユークが、震える手で香車を進めた。

角がついに向こうの手に渡る。

「……月人の目的が、読めたの？」

銀で香車を仕留める。

向こうに渡ったボクの角が投入された。

此方もさっき取った角を投入して牽制。

「……読めない。読めてなんか、無い……合ってる、筈が、無い……っ！」

叩きつけられるようにして飛車が戻る。

思わずボクは動揺してしまった。

ユークが、こんな決壊寸前まで感情をムキ出しにする所なんて初めて見た。

頼りになる年長組で、おっとりしてて、そのくせ何でも出来て、実は物凄い冷静で……

ボクが一番懐いて憧れていた年長組はパパラチアだったけど、一番頼りに……と言うか、尊敬？していたのはユークレースだったんだ。

ユークならきっとなんとかしてくれる、なんて仙道さんみたいな意識を向けていた。

っと言うか、今もそうだ。

ユークは、何が見えてしまったの？

……それを聞くのにもの凄い抵抗感を覚えて、咄嗟に声が出てこなかった。
逃げるように盤面に集中する。
……
……？
あれ？
オカシイな……
取って取り返された角行は既に盤面に投入済み。
ユークの飛車はさっきからこちらへの攻撃射線に入ってこない。
ボクの持ち駒は、歩の代わりに香車が入ってる。
ちょっと崩れかけてるけれど、僕の穴熊はまだ生きてる。
銀を戻して香車を配置すれば、左辺が弱いけどまだ持ち直せる。
「……なんぞこれ……？」
妙な気持ち悪さを覚えた。
きっとこれもユークの手の平なんだろーなーと思いながら攻撃に転じてみる。
……あ、攻撃しようとするとイヤらしい所に歩があるなコレ。
さっきの訳の分からない歩打ちはコレの為か。
将棋漫画の主人公か何かですかあなた。

角のサポートの為に歩を進めた。
攻撃態勢を整えるまで4手掛かる。
ユークの進軍。持ち駒の放出だった。
ボクの歩だった奴が牙を剥いてくる。ターゲットはボクの角だ。
さらに手を進める。裏切った歩が成って〝と金〟に化けた。
まだ大丈夫。ボクの角が相手の間合いに入ったけれど、ここで動いてもまた同角交換になるだけだ。
あと一手。金の位置をズラして……
ユークがまるで生気を消したような顔で駒を動かした。
その表情は、唇を噛み締めて泣いているようにも見える。
訳の解らない手だった。
「――え？同角？」
ボクの角が、ユークの角に討ち取られた。
……ほんと、何だこれ。
角を取るのは良いけど、そこには香車が控えてる。
ユークの角も死ぬさだめだ。
こんなの、さっきの繰り返しじゃないか。

「何やってんのさユーク？これじゃあまるで……」
角を落とす為に香車を進めようとして、ピタリとボクの手が止まった。
――そうだ。
これじゃあまるで……
「……せんにち、て……」
自分の口から洩れた台詞に、現実感が感じられない。
手から、香車の駒がポロリと落ちた。
月人の意図。
盤上の変化。
意図的に持ち込まれた千日手が意味するのは……？
――ユークが、何を言いたいのか解った。
解って、しまった。
「……まさかだろ……？」
「……そうよ。合ってる筈、無いじゃない……ただの杞憂に決まってる……っ！」
だって、意味がない。
何の意味も無い、ハズなのだ。
――でも。

それなら、月人の行動もすべて得心が行ってしまうのも事実で。
先生が、ことある度に「私のせいだ」と自分を責めてしまう事にも納得が行くのも事実で。
「否定してよ……」
ユークのかすれた声が突き刺さる。
「お願いだから……否定する材料を頂戴よ、フォス……っ!!」
月人の考えが読めないのではなく……読めてしまった事を否定して欲しかったんだ。
そんな筈無い、そんな筈無いんだと否定する材料を探してみても、それが見つからなかったから。
当たり前だ。
こんな……こんなの、認められる筈がない。
「……もし……」
一生懸命理由を捻り出してみる。
「もし、『それ』が目的だったのなら……敵対するよりも、国交を結んだ方が良い……よ、な?」
口にしてみると、穴が見つかった。
アドミラビリス属が、月で養殖されてるのだ。

そもそも、アイツらは自分等と対等な知性体を許容できるのか？
……いや、許容するよな？長い目で見れば……そっちの方を、選択する筈だよ、な……？
「――僕らの役目が、『敵役』だったら……？」
「……」
月のアドミラビリスが、『友好役』ってか……？
はは、エンターテイメントとしては周到と言うべきかオイ？
……アイツら、石を誘拐したらどんな会話してるんだろーな。
「獲ったどーー！」みたいなハシャぎ方でもしてるってか。
「フザけてる……」
取り落とした香車を拾って握りしめる。
ユークは、年長組の一人なんだぞ。
ボクなんかの何倍も生きて来たんだぞ……？
だからこそ、一人、また一人と仲間が誘拐されて行くのを奥歯噛み締めて耐えながら、ずっとずっと戦略計画を支えて来たんだ。
なのに、何だよそれ……
アイツらはずっとずっと、そんなユークの足掻きを嘲笑いながら見てたって事かよ

……っ!?

——もし、アイツらの目的が『そう』なのだとしたら。先生をダシにした交渉は望み薄だろう。

新型投入で変化を付けて来たが、この先もきっと状況は変わらない筈だ。

なら、ボクらが取れる手段は……？

メラメラとボクの中から『怒り』が沸き上がってくる。

ボクの大好きなこの国を、足掻き続けたユークを、一瞥して踏み躙った月人への怒りだ。

沸き上がって来た感情をそのままに、ボクはバシン！と勢い良く香車を玉の前に叩き付けた。

「……フォス……？」

ユークが呆然としながら顔を上げる。

「……ゴメンね、ユーク。ボクには、ユークのその説を否定できる程の材料が浮かばない。むしろ、いろいろ納得出来てしまったんだ。

——でも、でもね、ユーク。

手を先に進める方法なら……きっと、ある」

この盤面は、ボクの負けだ。

そう言ってボクは立ち上がる。
「――っ、やめてっ!?」
直後、ユークが悲鳴と共にボクの手を掴んだ。
手袋越しでは無かった為、ボクの手に小さなヒビが入った。
半狂乱になってユークが叫んだ。
「違う!違うのよ!そんなつもりで言ったんじゃない!そんなつもりで言ったんじゃなかったの!
お願いだから、『それ』はやめて……!
僕が悪かったから……お願いだから……っ!」
ユークは、正しくボクの意図を読み取っていた。
捕まれている腕が恐怖でわずかに震えている。
――でも。
「……ユークは、許せる……?」
問い掛ける。
この結論に至った時、ユークは絶望と恐怖が先立った。
――ボクは、怒りの方が先立つみたいだ。
「ボクには、無理だ」

今までユーク達が積み上げて来た物を目の前で蹴り飛ばされた気分だ。
ユークに膝を折らせた。
ずっとユークが頑張っていたのを見てきたボクの目の前で――あろう事か、ボクらに向き合う覚悟も無い月人のクズ共がだ！
「望んでない！そんなの僕は望んでないよ!!」
「イヤだね。『ボクが』許せない。――それに、一人でやるつもりも今すぐやるつもりもないよ」
「そもそもフォスがやる事じゃ無いでしょう!?」
「だったらボクがやる事にしてやるさ！――おいボルツ！居るのバレてるぞ！」
休憩室の入り口から、苦虫を噛み潰したような顔でボルツが顔を出す。
手には剣が三本――用件はいつもの奴だ。
律儀な事に、ユークとの対局が終わるのを待つつもりだったらしい。
「フォス――何の話だ、今のは」
「ちょうど良いや。ボルツ、ちょっと付き合ってよ。――いつもは君のワガママ聞いてるんだから、今日はボクのワガママ聞いてくれても良いだろ?」
問いに答えずにブッた斬る。
口にした内容にトゲがブツブツ見える程に、今のボクはカチキレていた。

「おい――？」
「なんなら、ユークも来れば良い」
　ボクにすがり付くユークに視線を落とした。
「な……何するつもりなの……？」
「短絡的に動くと思った？何度も言うけど、自分一人でやる気もすぐ行く気も無いよ。
　先ずはアイツらの棋風を見極めて、策を練って――それから最高のタイミングで、鼻っ柱にコブシを捻じ込んでやるんだ。
　その為に――先生から色々もぎ取らないといけない」
　すがり付くなら好都合。
　逆にユークの手を取って、先生の部屋に歩き出す。
「え、ちょっ……っ!?」と蹲きそうになりながら、ユークが小さな悲鳴を上げた。
「おい！結局何の話だ!?」
　ボルツの問いに振り返る。
　ボクの目を見たボルツが、小さく息を呑んだのが解った。
　言い切った。
「――逆襲と、報復の話だ」

@　@　@

――かくして、ボクは先生と対峙する。
右にボルツ、左にユークと言う滅多に無い組み合わせに先生は目を白黒させていた。
第一声を突っ込む。
「――戦争に参加させてください」
「……は？」
ボルツが間抜けた声を上げた。
これだけだと、先生の回答は決まってる。
「……許可できない」
「戦争と言っても、戦闘に参加する意図ではありません。
帯剣こそ護身用として許可頂きたい所ですが、ボクが望んでいるのは戦闘の状況判断、および指示を行う地位です。指揮官、と言う単語でイメージ出来れば良いのですが」
「……ふむ？」
もちろん、人間で言う所の指揮官とは運用方法がガラッと変わるだろう。
ボク個人は戦闘に参加することを想定していないし、そもそも戦争未経験の石が指揮を執るのも不安があるだろう。

戦況の分析および戦術方針の提示――それがボクの意図するところだ。
そもそも、現在我が国の用兵はツーマンセルによる時間稼ぎが基盤にある。
これは最大戦力である先生をぶつけ被害を押さえる意図による物だが、現実問題、先生の瞑想中や月人の出現位置と言った要素でこれに対応できないケースがある。
さらに前年からは新型の出現や月人側の新たな用兵により、防衛難易度が増加している。
退けた新型の殆どは先生、シンシャと言った特殊能力持ちによるものであり、しろ戦に置いては完全に詰みの状態まで追い詰められる事態になった。
この動きに対応できるシステムが要る。
それも、ボルツやシンシャと言った要素に頼らず、先生抜きでも安定して新型に対応できる、そんなシステムだ。
腹案はある。
見回り区域をある程度絞り、配布されているホイッスルと試験運用中の光通信言語を組み合わせて連絡のスピードを上げる事。
防衛陣地を作成し、地の利を活用する事。
そして、ある程度の訓練は必要だが、ポジションを明確にした5人小隊で運用する事。
これは分析、指揮を担当するリーダー、足の早い石を選出し遊撃・斥候・時には伝令

を受け持つコマンド、月人に対しての火力となるストライカー、ストライカーのサポートおよび護衛を担うスポッター、そして投石紐を用いる等で遠距離攻撃を行うマークスマンの5名で構成する。

可能であれば、リーダーとマークスマンは同じ技能を有するようにして、有事には指揮権を渡せるようにしたい。

――とは言いつつも、行きなりこれを運用すると言うのも無理な話だし、そもそも現時点では机上の空論だ。

そこで実験部隊を作りたい。

具体的にはボルツとコンビを組みたい。

「はあ!?」

ボルツと組んで、既存のチームに入り込む。

既存のチームはそのままストライカーとスポッターとして機能する。

マークスマンはどうにもなら無いのでオミット。

ボクはリーダーを、ボルツはコマンドを担当する。

もちろん、言葉通りには機能しないだろう。

ボクは悲しい事にボクなので、ボルツに護衛してもらう事になる筈だ。

この編成は月人の分析、および単純戦力の向上と、3名以上の編成による課題の洗い

出しを目的としたい。
ボルツはボルツなので、戦術眼なら信頼できる。
個々人の欠点等もあれば、ちゃんと指摘してくれるだろう。
しかしボルツはあまりにもボルツなので、コミュニケーション能力は絶望的だ。
怖い顔で一方的にまくし立て、反感を買ってしまうだろう。
「おい……その、理由の所はどうにかなら無いか?」
うるせえこの辺については反論できるお口なんぞ持ってねえんだから黙ってろ、だからお前はボルツなんだよ。
「待てコラ」
そこで、ボクだ。
みんなのアイドルであるフォスフォフィライトちゃん様なら、ボルツしてる所をうまく緩衝出来る。
武術指南でこの辺りの実績も出してるしね。
ボクらのコンビを全既存チームでローテーションする事で、石全体のスキル向上と共に、３名以上での行動に慣れされる。
それに、ボクは頭でっかちは否めないケド引き出しの数はけっこう定評がある。
未確認の新型に対しても効果的な分析や作戦の提示が出来る筈だ。

「む……確かに、そこは否定出来ないな。しろ戦での分析と作戦立案は僕も一目置いている。

……あの時、詰みまで追い詰められたのは、僕の失態からだと言って良い」

その認識については一言物申したいけどキリ無くなりそうだから置いとくわ。

現状、ボルツのコンビであるダイヤはレンズ作成に本腰入れてるから、ボルツの体は余りがちになってる。

たまに出ている遊撃を除けば、の話だけども。

そしてボクの方は、光通信言語が試用に乗りはじめたから、優先度の高い案件は少なくなって来ている。

都合を付ける事は比較的容易な筈だ。

「……なるほど、一考の価値があるのは認める」

先生が渋い顔をしながらそう言った。

これなら押し切れそう――かな？

「フォス……さっきの今で、これだけの構想を……？」

「いいや？草案は元々練ってた。アレキのオリ月人に対抗する為にね」

基本的な発想はあそこから変わっていないし。

考え込んでいた先生が顔を上げる。

「ふむ――結論だが、やはり許可できない」
　無情の一言だった。
「な、何でですか!?」
「理由はいくつかある。
　まず、フォスの述べる5人小隊構想とその前段階の実験部隊については大変良く練られていると思う。
　この構想は是非生かしたいが、ただ一点、リーダーをフォスが勤めるのはその防御力から不安が残る。
　――ベストを求めるなら、私とボルツが適切だろう」
　ちょっ……そこ引っ張ってくるの反則だろ!?
「第2に……こう言う言い方は子供達を差別するように感じられる為したくないのだが……現実問題として、我が国の運営に深く関わるユークレース、ルチル、そしてフォスフォフィライトの3名が連れ去られる可能性は原則認められない」
「……ファッ!?」
　思いもよらない第2射だ。
　確かに、ユークとルチルが連れ去られたらこの国は詰む、と言う話を医務室でした事がある。

あの時、ルチルはボクも重要な位置にいると指摘してくれたけど、同じような認識を先生が持ってるとは思わなかった。

思わずユークに視線を向けると、深々と頷いて肯定される。

「第3に、恐らくその実験部隊は想定通りに機能しないだろう。しろ戦でフォスが優先的に狙われたと言う報告を受けた。

――小隊の中にフォスがいると言う事は、月人に取って大きく意味が変わってくる物と考えられる」

「ぐ……そこは……まあ、確かに」

月人は薄荷色がお好き、何て言うチャチな理由じゃない。

ボクはヘイトを集めてしまっているのだ。

……実は『だからこそ』の提案でもあった訳だけど。

先生の指摘はまだ続く。

「第4に、フォスの総合顧問と言う立ち位置は方々への突発的なサポートが主な為、基本的に体が空いている状態こそが望ましい。

手隙だからとリソースを埋めるような運用をするのは好ましくない」

「……ぐぬぬ」

そんなボクの立場と噛み合っているからこその、基本優先度が低い博物誌とアマルガ

ム計画な訳で。
　ぐうの音も出ないほどのド正論だ。
「第５に」
「ま、まだありますか……」
「――私が、気にくわない」
　……。
　……えええー……？
「そう、感情的な理由だ。
　――フォス、お前はこの提案の核心……いや、本当の理由とでも言うべきだろうか。
それを、話してはいない。
　……故に、許可できない」
「……」
　先生がまっすぐボクを見つめる。
「……い、言い切りますね……」
「お前は大抵、複数の目的をひとつのプロセスに乗せる傾向があるのでな、想像はつく。
　そして、他人を煩わせる類いの行動は回避しようとする。まあ大抵は回避しようとして失敗して逆に騒動を振り撒いて終わる訳だが……」

……ほっといてけさい。

ボクだって、ルチルに迷惑かけまくってる自覚くらいあるもん。

「――今の話、ユークがいる意味は薄かったように思う。

むしろ今の話題でユークを入れるのであれば、お前は会議の場で立案する筈だ。

ユークが参加する真意があるのか……それとも、連れて来ざるを得なかったのか……？」

か、勘が良いなあ今日の先生は……

「――フォスは、月に攻め込もうとしてるんです」

今まで黙っていたユークが、ボクの真意を暴露した。

先生が目を見開いて硬直する。

「なんだと――？そうか、休憩室での会話はそう言う事か！

――待て。フォス貴様、よもや戦争に参加してワザと月人に捕まろうとしていたんじゃ無いだろうな!?」

激昂したボルツがボクの胸ぐらを掴み上げる。

「無いよ――アプローチの方法としては考えていたけどね」

「っ、貴様――ッ!?」

「現状でボクたちが月に行く事を考えるなら、手法は４つだ。

１．開いて動かなくなったフリしてワザと捕まる。

２．月人が使っている雲を鹵獲、研究する。

３．何らかの手段で月人に言う事を聞かせる。

４．人間の遺物が都合良く残っている事を期待して、海を浚って宇宙船を発掘する。

……いずれも課題が有り過ぎる。個人的には２を期待したい所だけどね。

その為に、月人の隙を見付ける事を期待して戦争に参加したかった。

――１を選ばなければならない時は、流石に何らかの策を併用するさ。

さっきの盤面のように、行きなり玉の目の前に香車を叩き付けるような真似をするつもりはないよ。

何よりそれじゃあ――この胸クソ悪い筋を書いた奴のツラをボコボコに出来ないだろ?」

ボルツを睨み付けて見せる。

ボクの目の中に、軽率以上の何かを見たのだろうか。

ボルツは眉間を歪めてその手を離した。

「……何故だフォス。何故いきなりそんな、極端な結論を……?」

頭ごなしに否定するよりも、先生は理解しようとしてくれているようだった。
それとも、ボクの『怒り』を感じ取ってくれているのだろうか。
「僕の……僕のせいなんです。僕が、フォスに変な相談をしてしまったから……」
「――ユークのせいだって？その自虐的な結論どうにかしろよ！フザけんな!!」
気が付けば、ボクは感情的に怒鳴り付けていた。
――ああ、ああそうだ。
ボクの方の理由も先生と同じ――『感情』だ。
「――休憩室で言っていた、月人の目的がどうのってやつか。お前達は一体、何に気付いたんだ……？」
ボルツの問いに二人して押し黙る。
ユークは恐怖で手を震わせた。
ボクは、怒りで手を握りしめた。
腸があれば煮えくり返りそうだった。
涙腺があれば泣いてしまいそうだった。
――ボクは、それを口にした。
あまりにもフザけた、その理由を。

――ビシリ、と机にヒビの入る音が響いた。
「……なんだ……それは……!?なんだそれはァッ!?」
ボルツのリアクションはボクと同じく『怒り』の方だった。
握りしめた右手からミシリと音が漏れている。
「……筋は……それなら……通る、の、か……」
先生の方は果たして『絶望』の方なのだろうか。
ヒビの入った机が割れ、ガランと鈍い音を立てて転がる。
「一体……イエロー兄ちゃんに、なんて言えば良いんだ……?」
これは年長であればあるほど、ダメージの大きい話だ。
イエローが、アレキがこれを知ったらどうするだろう。
パパラチアが、これを知ったら……!
――大嫌いだ。
アイツ等は、ボクらの事を何とも思っていやがらない。
ゲーム感覚でボクらの国を踏み躙っているのだ。
「先生……この件、心当たりは……?」
ボルツが声を震わせてそう聞いた。
先生は、俯いたままだった。

「……あ、る……」
「っ、そんな……それじゃあ……っ!?」
ユークの最後の希望が切断される。
「なんて事だ……それが本当なら……
この状況は……
とことん、私のせいか……っ！」
ボクの中で溢れ返りそうな激流のような何かが、その一言で限界を迎えた。
――バキャアアアアアッ!!
気付けば、先生の顔に拳を叩きつけていた。
薄荷色の脆い腕が肩の根元まで砕け割れ、結晶の雨が降り注ぐ。
――関係なかった。
一方全くダメージのない先生はしかし、後ずさって腰を落とした。
叫ぶ。
「フザけんな！フザけんなよ!!立てこの野郎!!前歯全部へし折ってやるっ!!」
「フォ、フォス!?やめてフォス!!」
「放せ!!放せよ!!ユークもだよちくしょおっ!!」
叫ぶ。

「なんだよっ!!ヘリオが連れてかれた時もそうだ!!
先生も、ユークも、イエローも、モルガも、みんな自分のせいだって言うんだ!!みんなみんな、自分のせいだって言うんだ!!
悪いのはアイツらなのに!ヘリオを砕いて笑いながら連れて行ったのはアイツらなのにっ!!」
叫ぶ。
「誰も彼もが、連れて行かれた空に向かって謝るんだ!ごめんなさいって、助けられなくてごめんなさいって、ボロボロになりながら謝るんだ!!
――連れて行ったのはアイツらなのに!!」
叫ぶ。
「なんでみんな、みんな――ボクが大好きな石たちのせいにするんだよおぉ……っ!!」
ボクを羽交い絞めするユークの腕の中で、気づけば力無く崩れ落ちていた。
腸があれば煮えくり返っていた。
涙腺があれば号泣していた。
砕け散った薄荷色の破片が、床を染め上げていた。
許せなかった。
許せなかったんだ。

先生たちが護り続けて来たこの国を、護り続けて来たその行動を、当の先生たちが否定する事が。

月人たちのせいで、先生たちの心がボロボロにされて行く事が。

たまらなく許せなかったんだ。

「――先生」

散乱したボクの欠片を拾い上げて、ボルツが言った。

「先ほどのフォスの提案――先生の挙げられた問題点の大半を、一度に解決する方法があります」

5条の黒く輝く髪が翻る。

「フォスがリーダーを。僕がコマンドを。

――そして、先生がマークスマンをやれば良い。

フォスとユークの推察が正しければ――付け入る隙は、必ずあります」

万が一なんて、起こさせない。

ボルツの背中がそう言っている。

「どうか」

先生は殴られた頬に恐る恐る触れていた。

震える手で、擦るように。
「痛い、な……
こんなに痛いのは……嗚呼……
……『二度目』、かな」
それは、遥か昔を懐かしむような。
そんな呟き。
先生が立ち上がる。
そして何時もの様に、ボクの頭に手を置くのだ。
「……フォスに泣かれるのは、堪えるよ」
「……泣いてません」
「そうだな。……泣いていたのは、私の方か」
観念したように苦笑する。
「フォス……ボルツ……そしてユークにも、別部隊でリーダーを務めて貰う事になるかもしれない。
３人とも――頼めるか」
「「はい」」
一瞬。

先生は、合掌したような仕草を見せた。
すぐさまそれをほどき、そして両手に視線を落として――
グッ、と両手を握りしめる。
その仕草に何の意味があったのかは判らない。
それでも。
「――変えるぞ」
短く太く呟かれたその宣言が、先生の中で何かが振り切られた事を教えてくれた。

第２０話「用兵」

ユークとダイヤのコンビ。
意外に、化学反応かもしれない。
レンズ技術の開発を開始してから、まさか一年経たずに望遠鏡の原型が出来るとは全く思っていなかった。
「ユークが仕組みを見切ってくれた上に、材料はそれなりにあったもの。……テスト用の大きいレンズだから実用には不向きだけど、これで技術的な道筋は見えた気がするの。
工芸って、けっこう楽しいね」
「ふふふ……見る距離によって同じレンズでも逆さまに見えたり小さく見えたり、レンズって奥が深いわ。法則を考えるの、すごく楽しかったよ」
両方とも性格がおっとり系なので仲良しキャピキャピオーラが眩しい。
二人して「ねー?」とかやってる。
尊い。

「でも素材が素材だから、あまり量産はしたくない分野ね。

フォスは屈折率の高いダイヤモンドを使えば高性能なレンズが出来るって言ってたけれど、ある程度の性能は厚さでカバー出来ることが分かったし、そちらの方が作りやすいの。

望遠鏡の小型化の必要性はそれほど高くないし、素材は比較的産出量の多く需要の少ないクリアクォーツをベースに考えた方が良さそうよ」

「ダイヤ系はイエロー、ダイヤ、ボルツと三名も居るからなぁ……有事の際に素材が切れてた、は危ないよね」

ケイ素系の石は今の所ゴーストクォーツ位だし、そのゴーストも担当は非戦闘系だしな。

ベースにクリアクォーツを使うのは納得の出来る理由だ。

ちなみに、ジルコンもダイヤモンドに匹敵するぐらい屈折率が高い事が確認出来ている。硬度7で劈開も無い為、ダイヤよりも加工がしやすい。

……けど、クォーツ系ほど産出量は多くない上にウチのジルコンは戦闘員なので、やはりメインには使えないだろう。

「でもまあこれで要領も解った事だし、ひとつぐらいはダイヤレンズで作ってみるわ」

「顕微鏡の方は、焦点と倍率の関係で、ダイヤレンズが一番適切そうだものね。ダイヤレ

ンズの経験はどちらにしろ必要だわ」
また二人で「ねー？」とかやってる。
ほんと尊い。
仲が良さそうで何よりです。
ふと、入り口の方に視線を投げる。
……ボルツ君、姿は見えないけど影は見えてますよ？
ジェラってるの？
ダイヤとユークが仲良しでジェラジェラなの？
「――そうだフォス、新体制の前身部隊として戦争に出るって聞いたよ？直接戦う訳じゃ無いみたいだけど、大丈夫？」
ダイヤがそんなことを口にする。
「大丈夫だよ。先生とボルツが付いてるからね。……不安があるとすれば、この二人の戦闘力が高過ぎて実験部隊として動かない可能性があるかもって所かな。
――会敵して速攻で二人が沈めてしまいそうで怖い。一応、先生には『破アッ！』禁止令出したけど」
アレ使われたら即座に終了しちゃうかんね。
実験部隊の意味がない。

もちろん想定外での状況では先生の判断で解禁して貰う事になってるケドも。
「え?じゃあ先生はどうやって戦うの?素手で突撃?」
まさかの選択肢だった。
……先生、格好はお坊さんだしな。
実は法典流皆伝の腕前でしたとか言われたらどうしよう。
「……えーと、先生のポジションはマークスマンと言いまして。遠距離攻撃を行う役割を持ってるんだ。
ので、素手による突撃は想定してない。……出来そうではあるけど」
「?それじゃあどうやって……
……ああ!もしかして!」
「そ!投石紐で攻撃して貰う予定だよ」
既に何回か試して貰ってます。
あのロンズデーライト、普通にしっかり的に当てて見せるんだけど、体積の小さい石ころで緒の浜の岩壁に穴穿ちやがったんだよな。
弾にした石ころが着弾の衝撃で塵になったぞ。どういう速度で投げればああなるの?音速なんてぶっちぎってるよね??
本チャンではその密度が水銀よりも重い金の礫を投げて貰う算段だったけど、むしろ

『破アッ！』より高威力叩き出されそうだったので、もうその辺の石ころで良いよね。
　ご感想はこんな感じ。
「遠心力をつける分、隙は大きいが高威力が出るな。少ない力でも中々の威力だ。これならば他の石が使っても容易に月人を割るだろう」
　ねえから。
　つーか、振り回してる時点で『ドワオッ！』って感じの風が吹き荒れる投石紐（スリング）なんて、絶対頭おかしいから。
　それ、スリングじゃなくてスリリングだから。
　マークスマンのスペックが過剰戦力過ぎてちゅらい。
「ふふふ……実践投入されていないけど、今の所ウチで投石紐の経験があるのはペリドットとダイヤだけだものね。５人小隊運用の暁には、もしかしたらダイヤもマークスマンかリーダーに配置されるかもよ？」
　マークスマンは副リーダー的な位置でもあるしねぇ。
「え、えええええ!?無理だよおそんなの!?僕はボルツみたいに、判断力とか凄くないものの……！」
　――あ、ボルツの影が跳ねたぞ。
　嬉しいの？

なんかダイヤに褒められたような流れだから、ボルツさん嬉しかったの？

「……まあボルツは、接近戦にあって戦況を把握出来るとか言う異常スペック持ってるしな。確かにリーダーの能力はあると思うよ。作戦を立てられる頭もある」

本人は判断ミスと言って憚らないしろ戦の2次待機策。

アレが裏目に出てしまった原因は、ボルツの判断ミスではないと思ってる。

真の原因はボクのヘイトが思った以上に高かったのと、そもそもボクがエンカウントしてしまった事にある。

あの時、ボクは護身のために武器を確保しに行った訳だけど、アレキとボクの部屋は武器工房からはそれなりに離れた場所にあり、ボクらが武器の確保を考えなければ問題なくしろを先生の所まで引っ張れた可能性が高かった。

ボルツはちゃんとルートを選んでいたのだ。

かと言って、冬の時のように複数の敵が校内に入り込んだ可能性もあったあの局面。武器を確保しに行ったと言うボクらの判断の方が間違っていたともちょっと思えない。

アレは結局、運が悪かっただけだと思う。

あの時のボルツの失点を無理やり挙げるとするならば、ダイヤが砕かれた時に叫んで戦局不利を招いてしまった事ぐらいだと思う。

しかし、アレは反射的かつ正常な反応だと思う。責められる筈がない。

――話が逸れたな。
「リーダーやマークスマンはその役割上、前に出る事は許されない。……いくら能力があるとは言え、ボルツが接近戦から離れなきゃいけないポジションをやりたがるかねぇ……？」
ここだよね。話の主眼は。
あのバーサーカーから接近戦取ったらどうなっちゃうのっつー話だ。
それ以前、アイツにダイヤクラスの器用さがあるとも思えない。
アイツが腰を据えられるのは、絶対コマンドかストライカーのどっちかだ。
「確かに、想像はちょっと、出来ないかなぁ……？」
「そしてダイヤの指示を受けて動き回るボルツが完成する訳ね」
――ボルツの影がうねってるぞ？
想像してるの？
ダイヤの指示で戦う絵を想像して悶えちゃってるの？
最近いちいち反応が可愛いなお前。キャラ崩れてねぇ？
「――この試作望遠鏡、今日の見回りに持ってってみる？」
「うーん、そうだなぁ……」
試作レンズは手の平程に大きく、分厚い。

それで試作的に作った望遠鏡なので、使ってないトイレットペーパー位の太さがある。

虫眼鏡のレンズで望遠鏡作ったようなものだ。

それでも持ち運べない大きさでは無いけれども。

……かさ張りそうだけど、皆のオモチャぐらいにはなるかもしれんね。

「――うん、持って行ってみる事にするよ。借りて良いかな？」

「そお？じゃあ、はい。後で感想聞かせてね。……かさ張って取り回しが悪い、以外で」

「あはははは、りょーかい！」

まあ、あくまで試作レンズで作った理論確認の為の有り合わせ品だから、多少はね？

@　@　@

「しっかし分かんないものだなぁー。まさかフォスと戦争に出る日が来るとは」

「そうだよねぇー。未だにパキポキ割れてる身なのにねぇー？」

「自分で言うかこの末っ子は……趣旨は解るが、大丈夫か？」

「大丈夫にするための布陣だよ、おにーさま？――虎穴に入らずんば、虎児は得られないモンさ」

「それでもおにーさまは心配だよ……」
最初の組はイエローダイヤモンドとジルコンコンビだ。
原則、戦闘班は相性の問題から、同族ないしは同系の石でコンビを組む。
その中にあって、唯一同族でも同系でもないのがこのコンビだ。
新体制の試金石として最適だったので指名させて頂きました。
「こ、光栄ですっ！よろしくお願いしますっ!!」
ジルコンが斜め４５度をやっていた。
先生とボルツと言う超ビックネームとチームを組むと言う事態にそりゃあもう緊張している模様。
「カッチカチやなジルコンさん……」
「だだ、だだだってまさかそんなせせ、先生とボルツとチームを組む事にななななるなんてアアああア！
どど、どうしよう!?なななななにかミスしてしまったらどうしよおおお!?」
緊張を通り越してパニックになってませんかこれ。
「どんだけぇー?……確かに戦闘力が頭おかしい域にある石だけどさぁ、所詮先生とボルツだぜ?」
「所詮!?いま所詮と言ったのか君はっ!?先生とボルツに向かってそんな態度が出来るの

は君だけだっ!!」
「……ああ、そこは全くもって同意だな」
「こいつ、図太さと硬度が逆転して生まれていれば丁度良かったのにな」
「ヘイ、末っ子イジメるのやめようぜ炭素コンビ」
　ボクは一発小突かれたら死ぬんだぜ?
「新体制の構想については聞いたけど、見回りに先生が参加するなんてどれくらいぶりだろうなぁ……３０００年以上は前じゃないか?」
　流石我が国最年長。
　すごい数字がさらっと出てくるねイエローにーさま。
「先生、昔は見回り参加してたんですか?」
「ああ。しかし非戦闘員を残して留守にしてしまった所を突かれ、校内を直接攻撃された事があってな……
　以来、現在の形に落ち着いた経緯がある」
「今は戦闘も出来る石が多く残ってくれてるから、そう言った心配は少なくなったよ」
「戦闘員からの転向組か。工芸お兄様二名もそうなんだよね」
「さらに今回はダイヤもいるし、いざとなればシンシャも動ける。――新体制を組むには丁度よいタイミングなのかもしれないな」

振り返る。
無愛想ボルツはともかくとして、ジルコンは未だにカチコチだ。
いくら宝石の体だって言ってもそこまで固くならなくて良いのにと思う。
間の原はずいぶん平和だった。
カラッと晴れた良い天気だ。つまり、絶好の月人日和な訳だけど、今の所アイツらの気配は見当たらない。
脇に抱える望遠鏡を覗いてみた。
「おお、ちゃんと使えるじゃんコレ。ここから緒の浜がクッキリだ」
「ほう。ダイヤを推薦したのは正解だったな」
「ジルコン、覗いてみる？」
「え？……ええっ？」
返答を待たずにホイッと渡した。
「ほら、こっから覗くだけだよ」
こう言うアイテムは皆の好奇心を惹くものだ。
ジルコンがおそるおそる望遠鏡を覗き込む。
「――すごい……本当に遠くが近く見える」
どう言う仕組みなんだろう、と呟くその声色からは、さっきのような緊張は見られな

かった。

ふっふっふ、そのままこどもチャレンジの付属キットで遊ぶノリで肩の力を抜くが良い……！

「……見張りの役には、立ちそうか？」

ボルツが心なしそわそわしながらそう聞いた。

ダイヤ謹製につき自分も覗いてみたいけれど、お兄ちゃんなのでガマンする図である。

ボクの意図も見抜いている様だ。

うんうん、ちゃんとガマン出来てエライぞ！

生真面目にジルコンが答える。

「うーん……面白くはありますが、視野が狭いのが気に掛かりますね。コレだけで対応するのは少々怖くはあります。

……そうだ、シンシャが進めていると言う光通信言語。アレならとても相性が良いのではないでしょうか。光の明滅を注視する分には都合が良さそうです」

そしてこの感想である。

ウチの国、有能なヤツ多くねえ？

……まあ、みんな普通に数百年生きているからってのもあるのだろうけど。

どうぞ、とボルツにバトンタッチ。
この石、空気が読め過ぎる。
あ、ああとあっさり手元に渡ってきた望遠鏡を気まずそうに受け取り、自らも中を覗いてみる。
周りを一通り眺めて感嘆した。
ボルツの表情が変わる。
「……ほう、なるほど。的を射ているな。これは確かに面白い。面白い、が……この視野の狭さは気に掛かるものだな。フォス、これは改善できるものなのか？」
「難しいね。魚眼レンズにして視野角を広げる方法はあるけど、それをやるとせっかく拡大した像が縮小してしまう筈だ」
変形もしちゃうしね。
そもそも魚眼レンズの作り方なんて解んねぇし。
ダイヤが自力開発するのを待つしかないと思う。
ユークだったら多分理論を見つけ出しちゃうぞアレ。
「ふーむ……難しいものなのだな。かさばらない程度に小型であれば、遠くを注視したい時に気軽に使えそうだが。
このサイズでは懐に入れておくのは難しいしな」

「あ、サイズについては将来的にだいぶ小型化する筈だよ。そこは大丈夫だと思う」
「ほう……」
最終的にイエローの手まで望遠鏡が回り、皆でキャイキャイやってた辺りで状況が変化した。
――南の空に、黒い兆候。
皆の空気が入れ替わった。
「フォス」
「うん」
望遠鏡を回収。
何も言わずとも皆が位置に付く。
イエローとジルコンが前へ、ボクが後方に下がり、先生がボクの側に来る。ボルツは左前方へ広がった。
変則的な魚鱗の陣だ。
ホイッスルを思いっきり吹きならす。
長音と単音で短い単語を作った。
『――間の原、会敵』
学校の方から小さく返信が聞こえる。

『――了解、一種配置』
　そして程なく、第一種戦闘配置の警鐘が響き渡った。
「!?……素晴らしい伝達速度だ」
「初回運用と言うことで、皆意識してましたしね。今回は通信士（シンシャ）を配置しているという言うのもあります」
「しかし……アレは……」
　ジルコンが、抜いた剣を下げつつ呟いた。
　南の空に浮き出た黒点は、まるで煙のように拡散しながら空の青に溶けて行く。
「――虚黒点（からこくてん）、か?」
　拍子抜けしたような声色だった。
「虚黒点……アレが……」
　希に出る、月人の出てこない黒点。
　話には聞いていたけれど、実際見るのは初めてだ。
「――チッ、ハズレか」
　ボルツが不機嫌そうに舌打ちする。
「はは……多分そうなのだろうけど、まだ油断しないでね?」
「うん?」

「だってそうでしょ?——虚黒点とは言え、あんな現象を起こせるのは月人しか居ないんだから、さ」

「っ、……まさか、何処かに『居る』って事か?」

望遠鏡で虚黒点を睨み付ける。

虚しく散って行く様は、見れば見るほど煙の様だ。

……そもそも黒点って何なんだ?

月人の出る兆候とされているけれど、その実態は誰もわかっていない。

月人が空間を渡って来る時の次元の穴なのだと見る石もいる。

——フィクションならそれも良いだろう。しかし現実的に考えるなら、その説はどうも呑み込み難い。

そもそも本当に空間に穴を開けているなら、あんな鋭角な影は出来ない。技術的にクリア出来てもする意味がない。

……そう言えば、しろは二重の黒点から出てきたと聞いたな。

その折、空に開いた孔に引っ掛かって、出て来るのに時間が掛かっていたとも。

六つの腕で強引に孔を広げていたとも聞いた。

……空間の孔に体が引っ掛かって、あまつさえそれを腕力で広げるだって?

齧った程度であったとしても、多少なりとも空間に対する知識があるのであれば、そ

んな現象が発生し得るなど到底信じられない。
合わせて、ユークの示した月人の意図と照らすのであれば、黒点の実態とは……
……。
……。
黒点の近く、周りの地面に視界を移した。
「――総員、まだ警戒体制を解かないで。
……先生、虚黒点と青の森付近を結ぶ岩の近く。薄いですが、黒い影が映っているの見えませんか？」
「うん……？」
望遠鏡を手渡した。
ボクの指の先を望遠鏡で注視する先生は、程なくしてそれを見つけたようだ。
「――妙な影が、動いているな……」
「え？ど、どう言う事ですか？」
「ちなみに太陽の位置はアソコです」
「……見えないが、何かがいると言うことか」
「本当だ……なんか、うっすら……」
どうも、ダイヤ組は裸眼でアレが見えてるくさいね。

ジルコンも目を細めつつ注視しているから、こいつも見えてるくさい。
見回り組ならではの視力ってヤツか。
「惜しむらくは、射程外なんですよね」
仕掛けるにしても遠過ぎる。
動きもボクらから遠ざかって行くものだ。
虚黒点からの戦闘記録がないなら、きっと今回もそうなのだろう。
別に深追いしてまで、とは思うが……
「――いや。『こっち』であれば、ギリギリ届くかもしれない」
そう言って先生が右手を握りこんだ。
「――マジすか?……なら、ダメ元で藪をつついて見ましょうか。この面子なら、もし蛇が出ても踏み潰せます」
「うむ。高度を変えつつ3発行くぞ」
「総員傾注、戦闘準備」
合図と共に、何かの輝く粒子が先生の手から迸った。
光の筋は間を開けずに三つ、彼方の空に吸い込まれて行く。
――その内の一発が、見えない何かを切り裂いた。
思わず変な声が出た。

「うっそだろスゲエ!?この距離で見えないターゲットに当てやがった!?」
「――フッ。ダメ元などと言われてはな」
なんか意地を通されたらしい。
「なんだアレ……空が、破れた……っ!?」
「空間に孔を開けてたなんて嘘っぱちって事さ。光学迷彩の膜に身を隠してたんだ！黒点は恐らく、光学迷彩の境を見られないようにする為の目眩まし兼演出って訳だ――種が割れたぜ三流マジシャンめ!!」
「……コーガクメーサイ?」
「ギリースーツの上位版みたいなモンだよ。
――さて、突撃するぞ！奴等は想定外の事態で混乱している！ボルツ、先行してさらに攪乱してこい！イエローとジルコンが辿り着いたら挟撃しろ！」
「鹵獲は?」
「任せる！」
「なら、終わらせても構わないな?」
「いやいや、そこは自重しようぜ?」
「――ふん。まあ、聞いてやるさ」
ボルツが笑みを残して大地を蹴った。

青の森に回る、身を隠すルートだ。ちゃんと自分のポジションを解っている。
「なるほどなー。突撃するにしても、タイミングをズラして挟撃すれば選択肢も増える訳か。
——よし、俺らも走るぞジルコン！」
「は、はいっ!!」
イエローとジルコンも走り出す。
イエローの俊足にいままで食らいついて来たジルコンだ。あの二人も、ボルツの速度に決して劣っていない。
先生も、ちゃんとスリングに持ち変えていた。
「ボクらも行きましょう。護衛よろしくお願いします」
「うむ。……ところで、私もここから狙ってみるのはやはり不味いだろうか……？」
コレ、もしかしたら行けるんじゃないかと先生が彼方を見つめている。
スリングを弄ぶ手がコワい。
「いや……確かに運用方法としては合ってますけども。せめて他の石でも当てられそうな距離でお願いしますよ」
「……無理かな？」
「無理ッス」

「……まあ、仕方ないか」

妙に残念そうな先生と一緒に、少々遅れつつ現場へ向かう。

理由は知らないが既にケツまくっていた所に不意打ちを食らってさらに挟撃と言う、いじめにも似た猛攻を食らい総崩れになった月人が何か出来る筈も無かった。

鹵獲・捕獲は普通に考えていなかったようで、ボルツはいつもより念入りに雑を切り刻んでいた。

イエロー達が合流してからは冷静に攻撃の邪魔をしつつ立ち回り、ボクらが到着する頃には状況は全て終了していた。

＠　＠　＠

実験部隊としてのデータ取りと言う点では正直芳しくはなかったけれど、それでも蓋を開ければ負傷者なし、月人の新情報入手で撃退成功と十分な結果で終わったと思う。

今しばらくはこの布陣で運用だな。

反省会で改善点と方針、ついでに望遠鏡の感想も纏めて、ボクとしては結構満足な結果に終わった。

シンシャも2週間は光通信言語の研究として昼の通信を手伝ってくれると言ってく

れたし、順調順調。

しかし、考える事が多すぎてちと疲れちゃいました。

何せ出撃1回目にして情報取れちまったしな。確かにゆくゆくは月人の捕獲とか視野に入れていたのだけれど、ここまで展開が早いとなんと言うか、困る。

まだなんも方針決めてねぇし、心の準備も体制も出来てねえっつーの。

廊下のベンチにだらしなく体を持たれかけて大きく一息付く。

「しっかし、光学迷彩と来たかぁ……」

技術の差は、空飛ぶ雲を出してきた時点で相当な開きがある事は理解していた。

大気圏内で揚力を得ている様子も無しにホバリングできる雲。そして光学迷彩。

これらの材料があれば容易に奇襲をかける事が出来る。

しかし、月人がそれをやって来た記録は今まで無い。

……あ、いや、あったか。

去年の冬にアンタークとシンシャがステルスからの奇襲を受けたんだっけ。

しかし、それが可能な技術は何世紀どころじゃ無いほど昔からあった筈なのよね。

「……やっぱり、ユークの考えは当たっているんだろうな」

――本気の時と、本気じゃない時がある。

ユーク説から考えるなら、もしかして月人のヤツらはこちらに合わせて戦術レベルを

変えて来てるのか……？

……なら、もしかしてボクのやっている事は……

逆効果……か？

「ユークの考え、ってなんのことですか？」

「ぴぎゃああいっっ!!?」

――パキィッ!!

「……あふん（泣）」

「そ、そんなに驚かなくても良いじゃないですか」

思考の海に浸りすぎて、ジルコンに全然気づいて無かったよう……

ずっこけてベンチに肘を強打しちまった。

今日は戦闘もうまく行ったしボルツとの恒例模擬戦でも珍しく割れずに済んだから、久し振りに割れない日が過ごせると思ったのに！

美人薄命の運命（さだめ）からは逃れられないとでも言うのか……!?

「運命って……今のは普通に君の自爆だったと主張しますよ僕は。と言うか、昔から君は自爆で割れまくってるじゃ無いですか」

ぐうの音もでない正論やめろくださいます？

世の中、正論だけで円滑に回ってると思ったら大間違いなんやで。

具体的に言うとフォスさんがイジけます。

「……ホント、普段は只のアホなのに……」

おうおう、そんなにフォスさんのイジけ姿が見たいってのかいニイチャンよう。

美人薄命のこの体よりもさらに脆くて美しい心を持つこのフォスさんをイジめたいたぁ、なかなかふてぇヤロウだぜ。

望みは何だ？ボクの体か？

今こそボクは言うべきだって言うのかい？

――やめて！ボクに乱暴する気でしょう！エロドウジンみたいに！エロドウジンみたいにっ！

「思えば、君は昔からそうでしたよね。根拠もない自信を振り撒きながら盛大に自爆する毎日の中で、ふとした瞬間にとても聡明な顔を見せる。

……最近、やっと気づきました。アフォスと呼ばれるそれは、君が皆を気遣って演じている偽りの顔だったのだと」

……。

……あ、あれ？

「君の事は、僕と一番年が近い弟だと思っていました。頼りになるけど、アホな時もある。可愛い子供なのだと。

――それが、甘さに繋がっていたのでしょうか。いつのまにか君は、僕のずっと先に居たのですね」

いや、あの……ジルコンさーん？

「僕は何をしていたのでしょう……今までイエローに甘えてばかりで、僕自身はなにも成長出来ていなかった……っ！」

「……え、えーと……」

なんなんですのこの展開。

やっすい勘違いモノみたいになってんぞ？

「どしたんスかジルコンさん。――え、今日の戦闘でそんなガッツリ落ち込むよーな場面あったっけ？」

結果的にオヤジ狩りの光景を幻視するぐらい一方的な勝利だったと思うんだけどな。

導入が特殊過ぎたから、戦法を試すような場面を作れなかった事が反省点だ。

「それですよ。……僕は今日のを含めて3回ほど、虚黒点を見た事がありました。なのに只の稀な現象とだけ受け止めて、その先を考える事すらしなかったのです。

……黒点は月人によって作られるもの。その認識は、僕にもあったと言うのに……！」

……何だいコイツ。

アレキ含めて、只の現象と言う共通認識だった虚黒点だぞ？
ぐぬぬ盲点だった、で終わっときゃ良いのにここまでヘコむか。
「マジメさんだなぁ……」
「やはりそう思いますかっ!?」
なぜにそんな泣きそうな顔で食いつくのん？
ジルコンが切羽詰まった表情で頭を抱えた。
「――考えが固いのではと、常々自分で思っていました。イエローは柔軟で、ボルツも視野が広い。僕より年下の君に至っては、もはやこの国の根幹を担えるほどの発想力を持っている。
僕はきっと、皆に置いてかれてしまってるんです……！」
「いやそれ、ただの過大評価と被害妄想なだけだと思うんですが」
イエローは楽観的なだけ、ボルツは戦闘狂なだけだろうに。
そりゃあ、そこに落ち着くまでの道のりってヤツには敬意を持つべきだとは思うけどさぁ。
「だからいっそ……そう、いっそ……
――僕もフォスのようにあっぱっぱーになってしまえば、もしかしたら！」
「ヘイ」

いきなりケンカ売って来るんじゃあねえぞコラ。
アフォスにも五分の魂があることを知らんのか！
「……怖いんです」
俯いたジルコンが絞り出すように口にする。
「今日、僕は、流されるままに動く事しかできませんでした。それを改善する道筋も、欠片も見つける事が出来ませんでした。
……回りはどんどん変わっていきます。イエローも、ボルツも……ダイヤだって。
いつか……取り残された僕が、それ故に取り返しのつかない失敗をしてしまったらと思うと……っ」
「……」
予想以上に深刻だったジルコンの言葉に、ボクはベンチにもたれ掛かっていた居住まいを直した。
変化出来ない事への恐怖。
対応出来ない未来への不安。
――ジルコンの苦悩は、間違いなくボクのせいだ。
『この国に変化を促す事』……月人への反撃として立ち上げたアプローチはまさにそれなのだから。

無変化、停滞、保守に舵取りを行う月人に対抗するには、それしかないと思ったから。
やめるつもりはない。
自重するつもりもない。
だから――ボクは、全力でジルコンをサポートするのだ。
「――ジルコン」
「だからフォス、お願いがあるんです」
ボクのセリフに被せて、ジルコンは顔を上げる。
決意の宿った強い目だ。
ジルコンは、現状を打開する方法が欠片も浮かばないと言っていた。
――ウソだ。
だって、ジルコンはちゃんと解っているじゃないか。
一人では出来ない事も、一人では見えない道も、二人ならきっと見つけられる。三人なら、きっと手すら届くだろう。
助けを求める事は何も悪い事じゃない。
誰かに助けを求めるからこそ、誰かを助ける事だってできるんだ。
「――うん。何でも助けるよ、ジルコン」
ボクの生き方だ。

これで、この国と一緒に歩んで行くんだ。
「ありがとうございます、フォス。
ならば、僕に……僕に……っ、

あっぱっぱーになる方法を教えてくださいっっ!!」
「なんでそこでオチをつけやがったぁっ!?」
――涙が出る事に、ジルコンはどこまでも本気だった。

@　@　@

「――ほう、ポジション交代か」
「ッス。ジルコンにはマークスマンの位置について、ボクと同じ景色を見て貰おうと思っています」
「よよ、よよよっ、よろしくお願いしますっ!!」
またカチカチになりながら斜め４５度を行うジルコンさん。
やる気はちゃんと汲み取ってくれた模様。
先生はウムと頷いている。

「――投石紐の訓練期間を見積もる意味でも、有効な配置と言えるな」
しかし、ボルツは眉を寄せていた。
「意味が大きいのは解りますが、少し時期が早過ぎはしませんか？まだこのフォーメーションのデータが取れたとは言えません」
「ボルツの指摘も最もだと思う。でも、安全ラインを保ちつつ実験すると言う意味では、この配置でも結構有効だと思うんだ」
「俺はいいと思うよ。だってボルツと先生が強過ぎるしな。正直先日の印象が強くて、フォーメーションの意味が薄く感じたのも確かだ。
それに――ジルコンが、自分から『変わりたい』って言ったんだろ？
なら、俺はそれを応援したいんだ」
暖かいお兄様の言葉に、感極まったジルコンが顔を上げる。
「イエロー……あ、ありがとうございます……っ！」
「おうっ！一緒にガンバろうなっ！」
「はいっ！」
うーん、やり取りがとってもアオハルしてますな。
それも爽やかスポーツ系なやつ。
「僕は見た事がありませんが……先生は、接近戦も出来るのでしょうか？」

「ふむ……？」
ボルツの疑問に応えるように、数歩ボクらから距離を取る先生。
いつかの海の中のように袈裟をはだけ、上半身を半分さらけ出すと、ゆっくりと足を固め構えを取った。
――刹那。

ツパアンッツツッ!!

空気が破裂するような音と共に、響く様な軽い衝撃。
気付けば、拳を繰り出した状態で先生が佇んでいた。
目を剥く一同に対して何でも無いように袈裟を戻しながら先生が言った。
「――っと、こんな感じだな。スペック的には問題は無い筈だ」
ドン引きした。
「おい……このハゲ、シレっと音の壁突破しやがったぞ……」
「設計段階からそうだったので、髪の毛の事を言うのはやめなさい」
微妙に気にしていたらしかった。
「り……理屈の上では、知っていましたけども……可能なんですか、こんな真似……!?」

「現実にやって見せたのだから、出来るんだろうな……」
「あんなん喰らったら一撃で終わるなぁ」
皆もドン引きしていた。
先生としては、この反応は非常に不服だったらしい。
「む……確かに私はスペックゴリ押しではあるが、音速を超える正拳突きと言うのは人間の放つ技として確立していたと聞くぞ?」
「いやいやいやいやいやいやいや!?」
「フォスが物凄い勢いで否定していますけど」
「うん?……いや、ちゃんとあっただろう?流派名を聞いた事は無かったが、突きの名前はちゃんと覚えているぞ?きっとフォスが知らないだけだ」
そんな人間辞めた流派あってたまるかハゲ!
よしんば人間が音速超えの突きに成功したとして、その水分とショックコーンの影響で撃ったパンチが砕け散るっつうの!
「有名な技だと聞いたのだがなぁ……」
首を捻りながら先生が言った。
「なんて言う技なんです?」
「うむ――

ぺがさすりゅうせいけん、と言うそうだ」
「アンタもオチをつけるかあっ!!?」

あり得ない事に、先生は本気で口にしていたらしかった。

＠　＠　＠

知らない所で先生に植え付けられていた知識に戦慄しつつも、フォーメーションは新しく組み直される事になった。
ボクのリーダーは据え置きにしたまま、イエローがアタッカー、ボルツがスポッター、先生がコマンド。
そしてジルコンがマークスマンを務める。
ボクの隣で、ボクと同じ景色を見ながら考え方を伝えて行くのだ。
実験部隊の中では何度か出撃する中で、武術指南とは別に稽古を行うシーンもあった。もちろん見張り中につき、割れ防止のため寸止めルールでの稽古だけど、ボルツは一応満足してくれていたようだ。

ジルコンにも手解きをする機会が多くなる。
特に、ポジションの関係で兵法や戦闘における考え方をより多く教えるようになった。
そんな状況を見て、ジルコンには誰が言い出したのか『ボクの一番弟子』とか言う良く分からない冠詞が付きまとうようになる。
あり得ない事に、ジルコンはまんざらでもなさそうだった。
……あの、あなた確かにボクと年近いけど、一応僕の年上じゃありませんでした？
良いの？こんな認識されちゃって??
――え？よりボクに近づけたように感じて嬉しい？
……ルチルー、ちょっと急患見てくんねえ？
っつーか、皆の中でボクと言う石は一体どこに向かおうとしちゃってるの??
あんまりみんながボクの事を持ち上げるように言うもんだから、ボク自身ボクの事が解らなくなり始めた今日この頃です。
皆のおかげでボクのアイデンティティがマッハでヤバイ。

その後、何度か実験の意味でフォーメーションを変えながら運用を続け、月人を両手で足りなくなるほど相手をしてデータや改善案が良い感じに溜まって来た頃……

月人の、次の一手が襲来した。

――それは、しろの時と同じく2重の黒点から現れた。

第21話「二重黒点」

そこに浮かんでいたのは、何の変哲もない部屋だった。

……いや、訂正。

何の変哲もない部屋は黒い雲に覆われてないし、しかも空中に浮いているとかもありえない。

カーテンが風に揺られてゆっくり靡いているが、そもそもあの窓の向こうが本当に空なのかも怪しい物だ。

――と言うか、何故に部屋？

「罠だな」

「罠ですね」

「罠だよな」

「罠以外何物でもないな」

ボクを含め、全員お顔がチベットスナギツネでござる。

何というかこう、紐を結びつけた棒でカゴを支える超簡易罠の端っこで、含み笑いを

しながら紐を手に持っている仕掛人を堂々と目撃してしまったような「なにやってんのコイツ」的な心境でございます。

なんですかね？

堂々と二重黒点と言う訳のワカらん演出の上で満を持して登場して置いて、出て来たのがタダの部屋とか何考えてるんですかね？

ボクらが何も考えずアレに飛び込むとかガチで思ってるんですかね？

「一応二重黒点ですし……金弾行っときますか？」

ジルコンがおずおず進言してきた。

スリングによる投石には基本的にそこら辺の石ころを使っているんだけど、一応高耐久の敵を想定して、水銀よりも比重が高い金の礫（つぶて）を用意している。

最初はこれが通常弾の予定だったんだけど、石ころによる結果が出たので今は奥の手扱いだ。

――あ、金弾はあくまで『金の弾』の略称だから、別に『課金で買った弾』って訳じゃないからね？

あと読み方も『きんだん』だから、決して卑猥な方に読まないように。

訳分からない方向に思考がそれつつも、ジルコンの進言に検討しばし。

「うーん……ボクならアレで陽動するんだけど、月人だしなぁ……索敵は？」

「今の所アレだけですね。影も無さそうに見えます」
「そうなんだよなぁ……」
っつーか、陽動にしたってもうちょい別のモチーフあるだろ。
例えば浚っていった宝石を詰めたカゴとかさあ。やったらやったでカチキレる自信あるけど。
ボクの冷静さを失わせるって意味なら有効な手段だぜ？
「――私を、揺さぶりに来たのかもしれないな」
部屋を見上げて黙ってた先生がポツリと言った。
皆の視線が先生に集まる。
……先生が、居たたまれないように苦笑した。
「かつての、私の部屋に似ている」
「……マジで？」
なにそれ。
ちょっとそれ色々意味代わって来るんですけど。
なんでそんなプライベートな情報を月人がご存じな訳よ？あいつら実はストーカーかなにか？
――いや、違うか。

この場合疑うべきは……アイツらの中に、先生の縁者が居るって辺り、か……？
おいおい、また先生を抉る案件かよクソが。どっちにしろ月人絶許だな。
「うん？そうなると月人が想定してるのって何なんだろ……？先生があそこに一人で向かう事か？対先生用の罠があそこにあるって……？
つまり、先生を確実に行動停止できる何かを……
――ッ、そうか、核だなっ!?」
「やめなさい。近頃お前の私に対する認識が非常に心外な方向に向かっている」
せやな。
もしかしたら酸素なんか結合する隙間もないぐらいの細密結晶構造だもんな。核程度じゃ「今のは痛かったぞ」で済ませかねんもんな。
やっぱ反陽子爆弾ぐらい持ってこないと、先生にダメージ入れることなんて無理なのでは……？（戦慄）
「『かく』って言うのは良く解からんが……お前とユークの想定が正しいなら、先生の完全破壊と言う方向は考え難いんじゃないのか？」
――ああ、そう言えばそうだったわ。
となると機能停止を誘う何かかしら？
電磁捕獲システムでも積んでんのか？いや、それでどうにかなるのかは知らんけど

も。

ジルコンが口許に拳を当てて考え込んでいる。

「――とりあえず、あの部屋に誘い込もうとしているのならば話は簡単。あの部屋に入らずに処理してしまえば良い訳で……いや、しかしここ何回かは僕達、スリングをお披露目しまくってましたね」

「それなー？ああ云う真似をしたらボクたちがどう対応するか、月人側は予想できる筈なんだよなー。それが出来る材料はもう見せてしまってる」

「……しかし、このまま膠着は流石にダメじゃないか？」

「しかも相手は月人です。そのあたり、本当に考えているかどうか……」

ほんそれなー？

「――僕は別に突っ込んでも構わないぞ？罠だろうと新型だろうと望むところだ」

「ボルツ。気持ちは解るが流石に自重しなさい」

ボルツさんが暴走寸前でござる。

――とりま、やっとく事はやっときますか。

ホイッスルで連絡を通す。

ここはちと遠いので、天に響けよとばかりに思いっきり息を吹き込んだ。

交戦の連絡は会敵した時点で既に送ってある。

今から送るのは状況の確認だ。
『――膠着、新型。状況送れ』
『――中継、了解』
今回は学校まで距離がある為、中継を噛ませた通信だ。
悠長にも、敵の動きは全くなかった。
ちなみに中継士はネプチー＆ベニトチーム。
ボクの吹いた信号をそっくりそのまま学校に伝えるのが役目だ。
学校での通信士はユークが務める。
タイムラグを置いて連絡が返って来てもなお、月人の動く様子はなかった。
『――　一種配置、変化なし』
……ふむ。
この間に学校に強襲を掛けてる様子もなし、と。
よし。
『――了解、現状維持』
『――中継、了解』
「オーケイ、総員傾注。
スリングによるアプローチを掛けるが、この攻撃は一度のみ行う。攻撃後、速やかに

黄の森に陣地を移動しつつ月人の動きに備えよう。
コマンド（先生）は攻撃後に逆側に展開、潜んで居るだろう月人本体の発見と攻撃に専念。攻撃オプションは任せます。
近接二名（ボルツ、イエロー）は黄の森で視界を切るようにして接近、押し込んで。高火力攻撃、もしくは広範囲攻撃が来た場合は下がって仕切り直して。
ボクらは後方に陣取りながら、引き続き索敵と分析を行う。
今回も情報の収集、及び鹵獲は考えない。
――以上、方針！」
「「了解！」」
――打てば響く部隊になったもんだね。
今更ながら、先生がボクの下に居るって言うのも妙な気分だ。
「金弾は？」
「使おう。迷彩を破るだけに留まる可能性が高いけど、温存して不測の事態に陥るのは面白くない」
ゲームとかだとエリクサーは使わずに終わる事が多いボクだったけど、現実に直面すると『切札』と言うより『安全マージン』と言う見方に変わるから不思議なモンだ。
その為には、使う事に躊躇いは無かった。

「タイミングはジルコンに合わせる」
「了解――行きますツ！」
――戦闘開始。
最早この距離であれば充分な命中率を保てるまでに熟練したジルコンの投石が、金の軌跡を描いてひっ飛んだ。

＠　＠　＠

光学迷彩の膜が弾け飛ぶ。
細かく細かく千切れた黒い雲の破片が辺りに薄く漂った。
そしてその中心地から、まるで花火のように色とりどりの宝石の欠片がバラまかれる。
――光の山だ。
太陽の光を反射して、キラキラと綺麗な雨を降らせている。
「――ル、ビー……？」
その中にあった石のひとつに目を止めて、イエローが茫然と立ち竦んだ。
それは、かつてイエローがコンビを組んでいた石の名前だ。

反射的に叫んだのは、ジルコンだった。
「爆弾ですッ!!離れてくださいイエローッッ!!」
「――あ、」
――やばいっ、見とれてたぞクソッ!!
ジルコンの声で我に返った途端、ドムッと弾け飛ぶ衝撃が奔った。
土煙の中にイエローが消える。
「イエローッッ!?」
悲鳴が重なる。
見た限り、相当な威力だ。
まさか――!?
絶句して立ち竦む中で、ザシュッと着地の音が二つ。
左半身にヒビの入ったイエローと無傷のボルツだ。
「イエロー!」
「い、今のは危なかった……サンキューな、ジルコン。なんで解ったんだ?」
今の一瞬で後退していたようだ。
方針を伝えといて良かったよホント……!
イエローの傷は見た目それほど酷くはなかったけれど、ヒビの範囲が広かった。

問われたジルコンが安堵から生返事を返す。
「あ、ハイ――ええと、簡単な推論です。
これまで新式は必ず宝石で作った武器を用いてきました。ならばアレも武器の筈ですが、見た目殺傷力があるようには見えませんし、それを用いる月人の姿もありません」
「武器に見えない武器と言ったら消去法で爆弾って訳か……なーるほど、流石だわ」
マジでジルコンさん超ファインプレー。
もともと考え方がチョッピリ固いだけで、頭の回転は良い方だからなコイツ。
殻を破るの手伝ってあげたら、すごい勢いで頼れるお兄さんになってる。
「助かったよジルコン、ありがとう……！ボクは反応出来てなかったんだ」
「フン……この場に立ってるんだ。グズは言い訳にならないぞフォス」
今回ばかりは本当にその通りだ。
「返す言葉もないよボルツ。――失態は成功で返す。ボルツ、あの爆破の威力評価が聞きたい」
「威力か。――中距離で受けたが、アレはマトモに食らえば僕も危なそうだ」
……靭性特級のカーボナードも戦慄させるか。
あんなサイズなのに、よくもまあそんな威力を乗せられるものだ。
「フォ、フォス……っ！あれ、あれはッ!?」

ジルコンが泡を食って指をさす。
何事だとその先を見てみれば……何の冗談だろうか、バラまかれた石たちにファンシーな目と手足が生えやがった。
それらが一斉にこっちに視線を向ける。
「……おいおい」
キラークイーンとハーヴェストの合いの子ってか?
無数の自動追尾爆弾かよ。
シャレになってねえぞオイ!?
奴らがゾロゾロと動き出す。
短い手足なので速度はお察しだが、それに反して威力がヤバイ。
先生に聞こえるように声を張り上げた。
「――方針変更!白の丘方面に陣を移動、死角を消すことを優先する!ただしコマンドに限り変更はなし!」
先生の危険度が高くなる。
……少しばかり先生のスペックに頼る事になるけれど。
「方針は解るが、逃げるだけか!?」
「いえ、高機動からのリフレクならもしかしたら……!」

「ジルコン正解！――自動追尾は流石になかったけど、範囲爆撃からの強襲と言う発想は既にアレキが提示してくれてんだ！」
「ええ。そしてその対策も既にフォスが提示してくれています！」
アレキの考えた『ほうせきのくにをおとすためのさいきょうのつきじん』だ。
アレは既知テクノロジー縛りで作られた物だったから、高所からの無差別爆撃＆雑の別運用と言う布陣だったけど、アプローチとしてはこれも変わらない。
ならば、ボクらの方針も既に決まってる。
惜しむらくば防衛陣地はまだ無いけれど、見敵必殺のコマンドとディフェンス出来る布陣は既にある。
実験部隊がちゃんと機能すれば充分押し返せる、まさにこれはボクたちの『最終試験』ってヤツだ。
「因果かな、ボルツ――ダイヤがやっていたリフレクをやってもらうよ。
イエローと二人で動き回りながら、目につく欠片を片っ端からあっちの方に弾き飛ばしてくれ」
最初に部屋が浮かんでいた方向に指を向けた。
「高速で接近して、爆発される前に弾き飛ばして、即離脱。ヒットアンドアウェイの繰り返しさ。

その間に、先生が恐らく構えているだろう『回収役』を見つけて散らせる。
二人が漏らしたやつはジルコンが処理する」
「はい。現状を見るに可能性は低いですが、接触信管の疑いは捨てないでください。
その辺りを見極めるまでは、直接手足で弾くのではなく剣などの道具を使う事をおススメします」
これだけ聞いてみればかなりムチャい事言ってるんだけど、そもそもが高速で飛んで来た矢を剣で打ち落とすのがデフォだからなウチの国。
ボルツとイエローなら高機動中でも難なくこなすだろう。
……この国で野球の打線組んだらホームラン連発する気がするわ。全盛期のイチロー伝説とガチで張り合えるんじゃねぇの？
「方針了解、っと。どうすりゃ良いんだこんなのって思ったけど、すぐに方策出てくるとかフォスもジルコンも凄いなぁ」
「ふん。……ストップ&ゴーをかなりの負荷で行う事になる。ヒビが入ったその体で耐えられるか？イエロー」
「はっはっは、お兄様を舐めるなよぉー？……なんなら競争でもするかボルツ？」
ボルツが不敵に笑うのだ。
「――良いな。退屈していた所だったんだ。……ヒビの分のハンデはどれぐらい欲しい

？」
「ヒビが『俺のハンデ』さ。確かにボルツは一番強いかもしれないけど……スピードだったらお兄様もこの国トップの自信があるっ!!」
「はっ、後悔するなよっ！」
その言葉を合図に、ヒュッと二人の体が掻き消えた。
そして。

――ヒュカカカカカカッッッ!!

物凄い勢いで石の欠片が宙を舞い始めた。
弾き飛ばされた破片がまるで花火のように空中で爆破し、火薬の煙と極彩色の花を広げて行く。
ボルツとイエローの挙動は、目に留めるのがかなり難しい速度に達していた。
まるでヤムチャにでもなった気分だ。
「……ウチの国、何か色々振り切ってねぇ？」
「ええ、あなたも含めてね」
即答されたんですけども。

あの、ドラゴンボールやってる輪の中にボクをノミネートさせないでくださいますか。ハチャメチャが押し寄せてくるんですけど。

なんかもう、アイツ等放置で良いんじゃねぇのと頭の片隅で考え始めてしまうのは仕方ない事だと思うの。

「フォス、気づいていますか？」

ジルコンが聞いた。

「うん？――信管の事かな？それとも、宝石じゃないのが混じっている事について？」

あの欠片の中に、なんか平べったい●とか▲が混じっているのは気がついていた。

明らかに鉱石ではない、別の素材をベースに成形された代物だ。

それに目と手足が生えてちこちこ走り回ってるのである。

ボク、ああ言うの昔なんかで見た事あるぞ？

ポリンキー……ｍ＆ｍｓ……うっ、あたまが……！

「後者のつもりで言いました。ふむ、信管……なるほど、接触信管にしては爆破タイミングが遅いです。――確かにアレは、それぞれが意思を以て『自爆』しているのかもしれませんね。

ところで宝石じゃないのが混じってる件ですが……アレらだけ、なんか爆破していないように見えませんか？」

「え、ゴメン。そもそも判別できる程見えてないです。……君の動体視力どうなっちゃってんの？」

大フィーバーを続けてる二人に弾き飛ばされてから爆破するまでの短い感覚で、それが宝石かそうでないかを判別している事になるんだけど。

ボクには無理です。……そもそもこの位置からあの細かいマイクロ爆弾を判別するのさえ苦労してるっつーのに。

「しかしそれが本当なら……アレが『回収役』なのかもしんねーな。単独で月に飛ばれることまで考えるべきか……？」

正味、あのサイズでＡＩ積んでて自立移動出来てボルツを砕ける爆薬仕込んでるって時点で信じたくない技術格差なんだよな。これであのまま月までＦｌｙ　Ａｗａｙ出来るとかされたらフザけんなと叫ぶ前にＳＡＮチェックが入る。

技術チート系の転生者でも味方につけやがったの？とか思ってしまう。

「しろの時は、回収役の雑が出なかったんですよね……」

「そこ持ってこられたら確かに不穏に思えて来た。やはり『出来る』前提で考えるべき――いや、ちょっと待て？」

●がひとつ、小さな手で黄色い欠片を持って逃げているのを見つける。

持っているのはかなり小さな欠片だ。

アレは……

「――イエローの破片……か？」

ヒビ入れられたから、微小な破片が出てもおかしくはない。

それをアイツはネコババしようとしている訳で……？

最初の破裂の時に周りに漂った細かい雲。

それを器用に足場にして、●はぴょんこぴょんこと高所に跳ねて行く。

そしてイエローの破片を置くと、再度破片を探す為か雲から飛び降りた。

――同じものを、ジルコンも見ていたようだった。

「――単独による月への帰還の線は薄くなりましたね」

せやな。

そんな事が出来るなら、あんなジャンプは必要ない。そのまま飛べばいいだけの話だ。

「うん。そしてこの後の戦術も見えた」

ハンドサインで遠くにいる先生に状況を確認する。

先生は、未だに月人を見つけられていないようだ。

焦っているようにその旨を知らせてくる。

『見つけられていない』――その事実を確認したかった。

「――やはり回収役がいるな。しかも今は相当な高所に陣取ってると見た」
「影も見えないほど高所に陣取って、あの●とか▲が集めた石の破片を後で回収しに来る感じですかね？」
「うん。今回はちっとは頭使ってるみたいだ」
　つまり、ボクらはまず控えているであろう『回収役』を引っ張り出す必要がある訳だね。
「みんな！どうやら爆発するのは宝石の欠片だけみたいだ！弾き飛ばすのはそっちを優先してくれ！後、競争だからってあまり黄の森に踏み込むなよ！」
「あいよーっ！」
　イエローが暢気に手を振って応えてくれる。
「――僕らはどうしましょう？空に向かって無差別投石でもやってみますか？」
「いや、高高度に構えてるなら徒労に終わるだろうな。それやるぐらいなら別の方法を取る」
「別の方法？」
「ジルコン、ちょっと手を上げてみてよ。こんな感じに」
　良くあるハイタッチみたいな感じに手を上げてみる。
　なお、この習慣はウチの国では当然生まれていない。やったら割れる。

……いや、たまにアメジストが双晶パワーとか言いながら披露してストレスまき散らしてるか。

「?こ、こうですか?」

「そうそう、そんな感じ。そのままね?――ほっ、」

そしてボクはそのまま――ジルコンの上げた手に自らの左手を叩きつけた。

バキンっ!と音を立ててボクの左手が砕け散る。

「ちょっ、貴方なにをやって――っ!!?」

「フォスっ!?」

靭性も硬度もジルコンの方がはるか上だ。

衝撃ってやつは脆い方に流れる。

ボクの体が割れるほどの衝撃でも、ジルコンの体には傷ひとつない。

ボクの欠片を見た●とか▲とかがこちらにわらわら向かい始めた。

外野を無視して両手を広げる。

「よぉーしよぉーし、このフォスフォフィライトの美しい破片だぞー。キミ等にゃ勿体ないお宝だぞー。咽び泣きながら拾い集めろやこの手抜きデザインどもめ」

「あ、貴方は――ッッ!?なんでいきなり『そういう策』に出やがりますか!?」

お、ちゃんとボクのやりたい事を解ってくれたみたいだ。

ほんとジルコンお兄様頼りになるわ。怒鳴りながらもスリングの準備に入ってくれる辺りが素敵。

「はっは、いやー最近ボクもほんと突っ立ってるだけになったからさー。――たまには体張らせなさいよ」

「美人薄『体』などと嘯いておいて自分で割ってりゃ世話ありませんよ！持って行かれたらどうするつもりですか!?」

「持ってかれなきゃ安いもんさ。死ななきゃ安いってチップ＝ザナフも言ってる。――だから、持ってかれないでね？」

人差し指を立てながらウインクひとつ。

先生もみんなもこう言うのに良い顔しないが、必要であるならばこの役はボクがやるべきなのだ。

そう……戦闘力が無く、最も脆いボクが。

ジルコンが忌々しげに歯噛みする。

「――ッ、貴方は、後でブン殴りますっ!!」

「フォスさん殊更砕けやすいのでお手柔らかにぷりーず」

「ホンっとにこのアホはもうっ!!」

ボクの欠片を持った●や▲がぴょんこぴょんこと、ひとつの雲に群がり始めた。

――先ほどから、宝石爆弾の全弾リフレクによりこちら側は何一つ被害を受けていない。

つまり、収入は少なくともそろそろ『見切り』を考える段階と言える。

ボクが自ら手を砕いたのを、あるいは見られていたかもしれない。しかし罠だと解っていても、これ以上の収入が見込めずさらに支払う対価が無いのであれば、ある種の賭けにも出たくなるのが人情と言う奴だ。

『その場で策を練り直す頭がない』のであればなおさらにね。

ボクは地上の影を探し。

ジルコンは上空を見つめた。

……薄く、地上に影が降りる。

「――来たっ！」

「行っけえええぇぇっっっ!!!」

咆哮と共にジルコンがスリングを振り抜いた。

撃ち放ったのは金弾ではなく通常弾だ。

問題は無かった。

この弾はただ、『当たればいい』だけの攻撃だった。

来る場所とタイミングが解っていれば、たとえ透明でも当てるのはそれほど難しくな

いだろう。
光学迷彩の膜が破け、隠れていた回収役の月人がその姿を露わにされた。
それで十分だった。
漂う黒い雲を足場に、高速で駆け抜けた黒い影が一直線に突っ込む。
この状況を心待ちにしていた先生だ。
「――シィエエアアアアアアアッッッ!!!」
そして怒号と共に打ち放たれた昇竜拳が、月人の姿を跡形もなく霧散させた。

@　@　@

「――ッこんの、大馬鹿者ォオッッッ!!!」
「ふぶえっ」
ジルコンに殴られるまでもなく、一喝でバラバラにされたフォスさんでした。
みんな慣れたもので、ちゃっかり先生の一喝圏内から逃れていたりする。
「確かに有効な策だった事は認めよう。――しかし、それでもやってはならない事があるだろうッッ！」
「ご、ごめんなさいぃぃ……」

久々の大喝でござる。
「お前が悪い」
「自業自得だよまったく！」
「ええ、ほんっとうに!!」
悲報、フォスさんの味方はおりませなんだ。
「――お前は、今日はこのままだ。ルチルには私から言っておく。しばらく謹慎していなさい」
「ふえーん」
いやでも、今日の月人から得られた情報の分析と展開は……必要ないか。ジルコンが居れば大丈夫だろうな。
新式の月人も、個々の能力に依存し過ぎないレベルで撃退する事が出来るようになった。
ジルコンも後を任せられるぐらい経験を積んで逞しくなった。
――このチームも解散の時期だ。
「……なんか余計な事を考えていませんか貴方は」
ドスの効いた声が聞こえる。
ホ、ホント頼もしくなっちゃってまあ……

カワイイ末っ子への愛をもうちょっと押し出してくれても良いのよ?
「反省が足りないようですね」
「や、やめりー!揺すらないで、揺すらないでぇッ!?」
先生のマントの中でごみ袋の中のゴミのごとくひと纏めにされた状態である。
平衡感覚がね!?
ゆっさゆっさされると平衡感覚がね!?
「何が『たまには体張らせなさいよ』ですか。アホですか?そう言えばアホでしたね貴方は。リーダーが偉そうに突っ立ってただけで終われば大成功でしょうが。損害も軽微だったのになんでわざわざルチルの仕事増やすんですか?バカなんですか?そう言えばバカでしたね貴方は」
「あ、ジルコンさん激おこしてらっしゃるコレ!誰かへるぷ!へるーぷ!」
「無視」
「無視一択だな」
「反省しなさい」
「ふえぇぇぇーん!」
待ってジルコンさん待ってお願い、あなたが今持っているのはあくまで先生のマントであって、間違ってもカクテルのシェイカーとかじゃないんですぜ?

「確かに膠着が予想される場面でしたよ。もしかしたら、ヒビの入ってたイエローの負担だって長期戦になればバカにならなかったかもしれませんよ？だからと言って真っ先に取った策が自傷とかフザけてるんですか。

どうせアレでしょう。誰かが負傷する必要があるのであれば、その役はもっとも戦闘能力が低くて脆い自分が最適なのだとか凄い短絡的な事考えていたんでしょう？アホ過ぎですか？そう言えばアフォ過ぎでしたね貴方は」

「う、うぐぅ……」

図星刺されちゃ、返す言葉もありません。

「……貴方が広めた将棋でもそうでしょう？リーダーが取られたら、チームは終わりなんです。ちゃんとそのあたり自覚しててくださいよ」

「……い、いや、でもそういう時を想定してマークスマンが」

「反省が足りないようですね！」

「ぎゃあああああああ!!?」

あっ、ちょっ、やめて!?これ以上ガシャガシャされたらフォスさん砕けちゃう！更に砕けちゃう！あ、なんかヤバい所にヒビが入った音したよこれヤバいって、マジでヤバイって、あああああああ

――アッ、（パキャッ）

@　@　@

「――静かになったな」
「意識保てなくなるレベルで割れたかー……」
「――ふん。殴るのはコレで勘弁してあげます」
正直まだ頭に来てはいますが、とりあえずこれで溜飲を下げてあげる事にします。
左手に残った嫌な感触を振り払うように振ってみても、あの後味の悪い感覚は離れてくれません。
――僕の左手が、フォスの左手を砕いた。
その感触が、僕の背筋にツララを突っ込んだような悪寒を齎すのです。
――策だったとは言え、僕にあんな事をさせるなんて!!
そりゃあ、考え無しでやっていた事ぐらいは、まあ読み取りますよ。
あの時、僕はフォスの右側に立っていました。僕に上げさせた手は左手、フォスがそれに叩きつけたのも左手。
位置的に面倒だった筈の左手を敢えて選んだのは、剣を持つ利き腕を残したかったからと見て良いでしょう。

状況が二転三転したら、このアホは護衛と言う立ち位置も含んでいた筈の僕も前線投入するつもりだったに違いありません。

――この実験部隊の中で、僕に『指揮官と衛生兵は絶対に動ける状態を保たなくてはいけない』とか理想論を唱えておきながらこういう真似をしでかすなんて、自分軽視にも程があります！

それを言ったら絶対「動ける状態は保ってた」とか言って言い訳するんでしょうけどね!!

「――戦えないのにここに立って、僕たちの中心になっていると言う事がどれだけ凄い事なのか、フォスは全く分かっていない……っ!!」

マントの風呂敷を持つ手に思わず力が籠りました。

「……コンプレックスを持ってるのは判るけど、確かに傍から見てたらヤキモキしちゃうよなぁ、フォスは」

「ええ、その通りですよイエロー。誰よりも精力的に動いているくせに、このアホは未だに「自分は安全圏から口を出してるだけの卑怯者だ」とかそう言う思考を続けてるに決まってるんです絶対！

――ボクの尊敬している石を軽視されているようで腹が立つ……っ！」

僕がどれだけフォスの隣で『成長』を実感できたか。

どれだけフォスの事を凄いと思っているのか。
そのフォスを自分の手で砕く様な羽目になってどれだけショックが大きかったか、こいつは全然解っていないんです。
「……自分軽視、だけではないだろうな」
前を歩くボルツがポツリと呟きます。
「それも無いとは言わないが、あくまで合理的かつ率直的な方法を冷静に執行したと言う部分も大きいだろう。
こいつは『動く』事を諦めてはいないが、自分の体ぐらいなら大したリスクではないと割り切っている節があるな。優先度の高い順から冷たい目で取捨選択して行く……思えば、冬の時もそんな節があったように思う」
「……それも、否定しませんよ」
月人の基本は一撃必殺。持久戦は良い事なし。
この実験部隊の戦術基本思想はそれですからね。
押し込めそうなら押し込んだ方が被害が少ないと言うのは僕も納得します。
それを実現するにあたり、必要な『心構え』もフォスは教えてくれました。
感情的になれば心に隙ができ、『自分が敵ならどうするか』とか『何をすれば被害を最小限に抑えられるか』と言った事が考え難くなる物なのだとフォスは言っていました。

この感情は『怒り』の他にも『恐怖』や『感嘆』と言ったものも含まれるのだと。

しかし兵は感情がそのまま士気に繋がるから、感情に対して無理解であってもいけない。部隊を指揮する立場の人間は、感情を自覚した上で冷たく考える部分を残さなきゃいけないとフォスは説いていました。

……僕は、感情を持つ者にそんな事が出来る筈がないと未だに思っています。

だけどもしかして、左手を自分で砕くなんて暴挙を取れるのはそれを成しているからなのでしょうか？

「……先生。人間は、あくまで哺乳動物のひとつで、僕らのように不老不死ではなく、腕が取れるような事があればもはや元に戻らない生き物なんですよね……？」

「――概ね、間違っていない。晩年の人間の技術は失った腕を元に戻す事すら成功したが、それでも元のように動かすための苦痛を伴う訓練と、完治させるための長い時間が必要になる」

「そんな脆い人間であっても、戦争があり、剣の技術を研究していたのでしょう？……彼らは、失う事を恐れていなかったのでしょうか？」

「……」

フォスの『そっち方面』の経験は人間の物の筈で。

ならばフォスのあの価値観は、人間から引っ張って来た物なのかもしれないと思うと

恐ろしくなります。
　先生が俯いたままポツリと言いました。
「……人間は、生きているだけで資源を消費する生き物だ。
　そんな生き物がかつてはこの星に溢れていた。指導者がそんな生き物を守るためには当然大量の資源を必要とするが、それを賄えなくなった時、資源の奪い合いと言う本質を大義と言う名目で隠して争いが起きた。
　――人間の戦争は、私も理解出来ない部分が多い。次の世代の為に、次の次の世代の為にと唱えながら自ら殺して殺されて行く。
　少なくとも恐怖はあった筈だ。死にたくないから戦うのだと叫ぶ者もいれば、利益を唱え恐怖を誤魔化し、体に爆弾を巻き付けて自爆を図る者もいた。
　……それを感情のある者同士で行うのだからな……」
　資源不足による争いは、なんとなく理解はできます。
　しかし語られる苛烈さを理解する事は到底出来そうにありません。
「――フォスは、まだ未っ子だ。だから俺たちがたくさん教えてやらなきゃいけないんだよ。
　フォスが自分を蔑ろにするとその分俺たちも悲しくなるんだって、たくさん教えてやらなきゃいけないんだ」

「イエロー……ええ、そうですね。今度は僕が、僕たちがフォスに教える番です」
マントをガサガサ揺すって、困った末っ子を想います。
こういった方面は僕以上に頭の固い石ですからね。
この仕事はきっと、かなり手の掛かる物になるでしょう。
さて、どこから手を付けはじめましょうか……？

――余談ですが。
この時の決意がキッカケで、僕は将来フォスに『かあちゃん』と言う非常に不服なアダ名を頂戴する事になります。

第２２話「アドミラビリスと過ごす日常」

■　骨の者命名タイム

アドミラビリス近海の海水を、まるでお酒か何かのようにグビグビやりながら王サマがふと口にした。

『――時にフォスよ。おぬしら、なんと言うかこう……正式名称みたいのは無いのか？』

「は？」

……正式名称？

美しきアイドルフォスフォフィライトちゃん様では不服かしら。

なお、名前の最初に『美しき』は必ず付けなきゃいけないキマリですよ？

『いや、そんなネジが２～３本ブッ飛んだ名称の事じゃなくてな？ほら、おぬしら『骨の者』の属名みたいな感じの奴じゃよ。なんぞないか？』

「……あー……」

王サマたち『肉の者』をアドミラビリスって呼ぶような感じか。

聞けば、王サマも王様で歴史を記録して置きたいんだけど、ボクらの事を書くとどう

しても『骨の者』と言う名称を使うしかない為、なんかもにょるのだそうな。
『肉の者』『骨の者』はアドミラビリスの伝説から来たあくまで一方的な造語だしねぇ。そもそもナノマシン説に照らせば、ボクらの構成元は人間の骨じゃなくて人間の作ったナノマシンな訳だし。
「確かにそう言う名称聞いた事無いなぁ。ボクもそう言えば、博物誌書く時にそのへん迷っちゃって、苦し紛れに『宝石生物』って書き方した覚えがあるわ」
『それ、人間の事を『哺乳類』とか『霊長類』って呼ぶのと同じようなもんじゃろ。しかもおぬしら、国名も無いじゃろ？『骨の者』って単語よりもちゃんとした名で記録したいんじゃが』
　んー、なんかあるのかね？
　人間の学名に倣うなら、『ジェム・サピエンス』……じゃないか。ええと、『宝石』ってラテン語でなんてーんだ？
（※人間の学名はラテン語の『Ｈｏｍｏ（人間）　Ｓａｐｉｅｎｓ（賢い）』が語源なので、同じ付け方をするなら『Ｇｅｍｍａ（宝石）　Ｓａｐｉｅｎｓ（賢い）』が適切になりそうです）
「こういう時は先生かなー？聞いてみんべ」
『んだんだ』

聞いてみた。

「――ありませんね。そう言えば」

先生が困ったように口にした。

「え？無いの？……マジで？この国、何万年以上も国名・属名なしだったんスか？」

ＲｉｍＷｏｒｌｄかて２週間もすれば名前決めイベント発生するんやで？

「そうは言うがなフォス。お前も３００年間この国で生きてきて、特に必要になった事なんて無かっただろう？」

「あー……まあ……うん」

「必要にならなければ、名前も生まれないものだ」

せやなー。

……う、ん？

せ、せやなー？

「……王様のとこは、何で名前ついた？」

『いや、流石にその辺りの話はわしも知らんぞ。なんか、必要だったんじゃね？』

適当だなオイ。

「――しかし、アドミラビリスが我々の名を記したいと言うのであれば、それは今まさに必要になったと言う事なのでしょう。これを機に決めれば良いだけの事」

つつーワケで。

みんなで決めよう！ボクらの属名・国名決定会議ー☆（どんどんパフパフ）

『……え？なんでその場にわしノミネートされてるの？？』

「見ての通り、こう言う物を決めるのは初めてなもので。何かしらアドバイスを頂ければと」

『フォスではダメなのですか？……あ、ダメですね。絶対やらかすわ』

「その通りです」

「ヘイそこ！カワイイ末っ子をディスるのはそこまでだぜ？」

月人の出ない時間を選ぶために、会議は日の落ちた夜に開催された。

何気に全員参加の会議ってこれが初めてじゃね？

……あ、ボクが無理やり引っ張り出したシンシャが物凄くメンドそうな顔を隠そうともせずに眉間に皺寄せてる。

おい、ボルツとか目が死んでるぞ。「別にテキトーで良いだろそんなモン」とか声にしなくても目線で伝わって来てんぞ。

先生が詳しい趣旨を説明する。

「――かつて、『人間』と言う動物はこの星に広く分布していた。数億名単位のグループを数十組ほど組織して、それぞれのグループ同士で交流を行っていたのだ」

「うえぇ……それってかつて人間は、数億名×数十組で、数十億もこの星にいたって事ですか？」

ボクらからしたらトンでもない数だよなぁ。

この資源の無い貧しい砂浜じゃ、哺乳類５０体もいれば容易にパンクしそうなのに、それが億単位ってどういう量だよって思う。

「その通りだ。そして、そのグループ単位の事を『国』と呼んだ。……我々は僅か３０弱の小さなコロニーではあるが、それでも『国』と言う単語を用いているのはそれに倣っている面もある」

「へぇ……僕、『国』ってこの砂浜の地の事を指してるのだと思ってました」

「『国』は実効支配する土地を指して言うケースもあるから、それも間違いではないな。

一方で、人間は他の生物の観察にも重きを置いていた。今フォスが担当している博物誌の様なものだ。他の生物の理解を深める為に、その体の構造からいくつもの分類を作

り、自らもその分類に収めた。
　実は『人間』と言う呼称は俗称であり、この分類に当てはめた人間の正確な属名は『ホモ・サピエンス』と言う」
　へえぇ……と、ちらちら感嘆の声が漏れた。
「今回は、我々石の体を持った生物の属名と、この国の名前を決めたいと思う」
「うーん……今まで名前って、先生が決めていた物をそのまま受け入れていたからなぁ……急に決めろって言われても」
「先生が決めたものなら、普通に受け入れますけどね、僕達」
「正確には、私が決めていた物ではないのだ。人間の決めていた名前に当て嵌るものをそのまま使用していたに過ぎない。
　――考えてみれば、私が自らつけた名前は「しろ」ぐらいなものだな。それとて、人間の間で犬に付けられていたオーソドックスな名前をそのまま引用しただけだ。
　この地の地名も、昔の子達がつけてくれたものだった」
　正直、名前を付けろと言われたらどうすれば良いのかわからない。
　そんな情けない事を言い始める先生だったりする。
　……まあ、僕のフォスフォフィライトを始めとして、皆についた名前も宝石の名前そのまんまだもんなぁ……

同じ種の宝石が出てきたらどうするつもりだったんだろうね。
「かつての人間はどう決めてたんですか？」
「……どう決めてたんだ？フォス」
「おいおい」
丸投げかよ。
さてはおめー、ネーミングセンスに自信なさ過ぎるから、ボクらに丸投げする魂胆で王サマ呼んだ上で全員集めたな？
「――そうだなぁ。人間って、生きてた地域ごとに言葉が独自発達してて、最終的に幾つもの言語が使われてたりしたんだけどさ。国名には、その地域由来の言語で何らかの意味を持つ単語や、中心人物の名前、主な地名を使った物が多かったりするかな」
確か、インドはインダス川が由来って話を聞いた事がある気がする。
アメリカの『Ａｍｅｒｉｃａ』も人名由来なんだっけ？
日本は古代中国から見たら東にある島国で、日が昇る方向にあるから「日ノ本ノ国」だ。
「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」と中華皇帝を煽った聖徳太子の書簡はあまりに有名だよね。まあ、向こうさんがカチキレた原因は日がどうこうではなく『天子』と言う単語を使ったからだって話もあるけど。

『――参考までに。我らを指す『アドミラビリス』は、もともと人間たちが使っていた言語の中でもかなり古いラテン語の単語が元じゃ。『美しい』と意味を持つ。ラテン語はその古さと由緒の正しさから、学名に多く採用されていたようじゃな』

マジか。

『アドミラビリス』って確かに響きがラテン語っぽかったけど、そんな意味があったのか。

「なるほど、それならこの国の特色を名前に採用すれば良い訳だ」

「国の名前に出来そうなこの国の特色、ですか……」

そこから先は連想ゲームの開始だった。

「『剣』とかぁー、僕たちの国を守ってるイメージ強くてよさげじゃないー？」

「『砂浜』なんてズバリそれだと思うんだけど、どうよ？」

「それなら、この星に残った『最後の土地』とかカッコいいと思う」

「『宝石が生まれる地』とかエスプリ効いてて良くないですか？」

『……おい。まさかそれ、最終的に、ラテン語に訳せとか言わんじゃろうな？わしも断片的にしか知らんのだぞ？』

何だ、期待させといて怖気づきやがるか。

この王サマ使えねーな。

「あんまり難しそうなのはダメかぁー……」
「フォスはラテン語に訳せないの？」
「勘弁してください……そーゆーのは断片的な英語とドイツ語でいっぱいいっぱいっス。
……っつーか、そもそもこの砂浜って元々ドコだった訳よ？」
視線が先生に集まった。
「……。晩年、この星全体の崩壊で私の生まれ育った場所も海に沈み、私は数百年単位で海中をさ迷った。地殻変動どころか地軸移動（ポールシフト）すら引き起こしたこの星では、過去の方位磁石やＧＰＳ情報など役に立たない」
「……すう、ひゃくねん……」
――そんだけの間、ずっと一人だったのか。
ボクだったら気が狂うぞ。
俯き暗くなっていた先生が、空気を意図して変えようとしたのかぎこちなく口角を持ち上げる。
「――そんな訳で、ここがどこなのかは私にも判らない。だが、私のルーツと言う意味であれば……『日本』、と言う国がそれだ」
「マジでっ!?」

思っても見ない所からの爆弾でございました。
先生メイドインジャパンだったの!!?
……そ、そういやこの間「ぺがさすりゅうせいけん」とかパワーワードをぶち撒いていたな。
先生が不思議そうな顔で僕を見た。
「――お前は今、何語を喋ってたつもりだったんだ?」
「……ほああ!?」
た、確かに……『ボク』とか『俺』とか『私』とか、多彩な一人称を持つのは日本ぐらいだったけども!
先生かてお坊さんがモデルみたいだし、仏教と何らかの関係がありそうなとこだろーなー、とは思っていたけども!!
『それじゃあ、変にエスプリ効かせずに和名でそれっぽく付けるのが適当なのかのー?』
知らんけどな、とどこぞの西日本みたいな事をほざき始める王サマである。
へい、アンタが今喋ってる言葉も日本語って事になるんやで?なんか疑問とかないの?
「でも、そう言うのならピッタリな名前があると思うなー、僕」
「中心人物の名前でも良いんだっけ?」

――命名：『金剛国』（ドドン）

「……そ、それで良いのだろうか……？何と言うか、私が独裁者のような感が……」
「金剛先生の名前って、『壊れない』って意味があるんですよね？縁起も良いじゃないですか」
「意義なーし！」
「む、むぅ……」
『じゃあ、それで』
……ここまで脳みそゆるく国名付けた国なんてここが初めてなんじゃね？
『じゃあ、それで』で纏められちゃったよ……
――まあ、ボクも『金剛国』は気に入ったから意義なーし、っと。

『――で、属名は？』
「無理してラテン語にする必要ないんだよね？もうフィーリングで決めちゃったら？……なんというか僕、眠くなってきちゃったし」
「た、大切なわたしたちの名前を……フィーリングで決めるのは……ふああ……」

「国名もゆるい方向で決まっちゃったし、基本的に僕達ってこういうゆるさ、あるのよね。なら、ゆるい方がむしろ僕たちを現してるんじゃないかしら?」
「……もう、どうでも良い……」
「早く見回りに逃げたい……」

――命名:『キラキラ族』(ドドン)

「はい、かいさーん」
「おつかれさまでしたー」
「見回り行ってくる」
「ほいじゃ、おやすみー。ふあぁぁ……」
……決まっちゃったよ……
『……え、マジで?マジで『キラキラ族』で行くの??……マジで?』
「僕らに、夜に頭を働かせろって方が無謀だったみたいねー。そもそもみんな、あんま拘って無かったし」
まさか衛藤ヒロユキワールドに落ち着くとは、このフォスフォフィライトの目を以てしても見通せなんだわ……ふああ。

「……も、もしかして私は、いろいろやらかしてしまったのだろうか……？」
「良いんじゃないスか？ボクらっぽくて」
『あ、こいつも何か投げやりになってる』
良いじゃないのキラキラ族。ほら、ボクらって見た目キラキラしてる訳だし？
アドミラビリスとボクらを並べて「どっちがキラキラ族でしょうか？」ってクイズ出されたら、１００人が１００人正解するぐらい解かりやすいやん。
『……。
……じゃあ、それで』
最終的に、ボクらの属名も『じゃあ、それで』で纏められました。
どっとはらい。
今後、アドミラビリスのとこの国の正式文書には、めっちゃ真面目なフォーマットで『キラキラ族』と言うシュールな単語が出てくることになる。

■　思い出の保存方法

「――アドミラビリスって、どうやって記録残してんの？まさか、海の底で紙とインクを使ってる訳じゃないだろうし」
『ふむ？』

しかも、アドミラビリスが人間の伝説を保持していた事から考えるに、海の中であっても相当長い間保存できる方法なんじゃねーの？

フォスさん、気になります。

『――わしらはな。身に纏う貝殻に、ある程度の記録を残しておけるのだ。

ナノマシン説が立ち上がった今考えてみると、おそらくわしらアドミラビリスはナノマシンの配列した記憶を生体信号として読み取ったり書き出したりする事が出来るんじゃろうな。

そんな考えのないはるか古代、わしらはこうやって殻に記録を残す事を『貝殻の記憶』と呼んでおった』

「おお、ロマンチック！」

『じゃろ？オシャンティーじゃろ？』

貝殻を耳に当てて、「思い出が聞こえるー」なんてポエムな話よく聞くしね。

アオハルしてて素敵。

『……ゆえに、過去の偉人が残してきた貝殻は大切に保管されてきたもんじゃよ。色褪せない、当時の偉人が残した生の記録じゃ。この貝殻の記憶と言う奴は普通に生きてるだけでも書き出される事があるから、そりゃあもー赤裸々なエピソードが散りばめられてたりする事も。

書き出しは出来ても書き換えは出来んのでな。恥ずかしい生き方してたら後世に恥ずかしい人生を残す事になる。正直言って、人間の宗教なんぞよりよっぽどうまく回る道徳システムと言えるの』

なるほどなぁー。

……だから、殻脱いだら結構あけすけになったりする訳か？

こっちに来たばかりの王サマは、なんつーかすっごいイケイケだったしな。

そういや、王サマ今の貝殻は無いの？

……え？帰りに先生が投げにくくなるだろうから、こっちに来るときはいつも脱いでる？

そっかぁー……

（※この小説では王サマが金剛国から帰る時、ウミウシモードになってアドミラビリス領近海に投げて貰っている設定になっています。ジェットコースターみたいで割と楽しい）

『……しかし今は、過去の偉人の貝殻も、根こそぎ月人に奪われてしもうた。今やわしのこの身がアドミラビリスに残った歴史じゃ』

「……いつか、取り戻したいよね」

『――要らぬ』

王サマが強い目でボクを見た。
その表情には、虚勢でもなんでもなく、不敵な笑みが浮かんでいる。
『フォスに救って貰ったあの日。わしはアドミラビリスを再興するのではなく、ゼロから始めて行く事に決めたのだ。
――わしはアドミラビリスの『歴代』になるのではなく、アドミラビリスの『始祖』となる。
過去の偉人の偉業も歴史は歴史。残せるのであればまあ、残そう。しかしそれはあくまで考古学的な考えからに終始する。
わしが創るアドミラビリスには、必要のない道しるべだ』
そう言い切って見せる王サマの顔は、今まで見た事もないようなカリスマに溢れていた。
ああ、いつもは軽口叩いてる三枚目なのに、本当に王サマは王様なのだなと心で納得する。
とても、とても強い答えだ。
「――なんか今、王サマと友好的な国交を結べた金剛国は、この先も安泰だなぁってすごく思った」
『ふっふっふ。……それはこっちの台詞じゃよ、フォス。おぬしには、心の底から感謝し

ておる』

この『答え』を出せたのも、おぬしのおかげじゃ。

そう語る王サマと、こつんと拳を合わせた。

「……そう言えばその貝殻の記憶だけどさ。王サマがやって来た時のでっかい奴がまだウチに保管されてるけど、そう言う事情があるなら返却した方が良くない？」

月人から落とされたり、ボクの部分を削られたりしておもくそボロボロになっているけども。

『別に構わんよ。そちらで保存してようと処分しようとな。そもそも、あれは月の砂と水で不自然に肥大化したものだからして、なんつーか『中身』がどうなってるかわしにも良く解からん代物じゃ。

……それに、ぶっちゃけ返して貰っても、その……困る。すっげえ重そうだもん、アレ』

それな。

ほんそれな。

運ぶのに絶対ウチの人出がかなり要るしな。

「あー、でもボクらもナノマシンベースだし、ウミウシモードの王サマとボクが会話できる所からして。もしかしたら、ボクらも王様の書きだした貝殻の記憶を読み取る方法が

あるかもしれないね。

博物誌の一環であの貝殻、研究してみようかな……？」

『会話』のインクルージョンを宿すボクが一番適任だろうし。

肥大化しても王様の記憶を宿し続けていたのなら、あの貝殻はもしかしたら王サマの過去も記憶していたんじゃない？

フォスさん、気になります！

『おい、やめろ――人のDドライブを覗くのは死刑に匹敵する重罪だと、おぬしは教わらなかったのか』

「ヘイ」

待とうか。

恥ずかしい生き方をしないんじゃなかったのかアドミラビリス。

『あ、それと金剛国との産業について思いついた事があったんじゃが。死んだ後のわしらの貝殻要らねぇ？砕いて焼けば生石灰取れるぞー？超有用だぞー？』

「ヘイ。証拠隠滅しようとしてんじゃねーぞこのウミウシ」

『いや、日本にもあったじゃろ？基本的人権にはプライバシーの権利と言うモンがね？』

「残念。ボクら人間じゃねーし」

はっはっは。

王サマ（親友）の貝殻の記憶なんて貰った日にゃ、金剛国で未来永劫大切に保管してくれるわ覚悟しろや。

■　俺より強いオスに会いに来たアクレアツス

『――フォスフォフィライト。

……僕と決闘しろ!!』

人型保持用の海水容器を左手に抱えつつ、開口一番にボクを指さしならが吠えるバカが居た。

お前は一体何を言っているんだと思わず返しそうになる。

なんかこいつのノリ、すっげぇボルツに似てるなぁ……

そう言えばカラーリングも黒だ。

「……お久しぶり、アクレアツス。海の時以来かな？元気してた？」

『武器は選ばせてやろう。ボクはこの触手が武器だからな。ハンデにはならない』

聞こうぜ、人の話を。

キミ誰にケンカ売ってるか分かってる？フォスフォフィライトだぜ？美人薄命を宿命として生まれたみんなのアイドルフォスフォフィライトちゃん様なんだぜ？

アイドルにケンカ売るのやめなさいよ。ケガすんぞ。ボクが。

「――フォス！稽古の時間だ!!」
ハイ来ましたよー！さらにややこしくなりそうな人が来ましたよー！
原作に出てない台詞なのにコレ聞いただけでもう誰かわかっちゃうくらいのバーサーカー来ましたよクソが！
止めてくれませんかね毎回毎回人にノルマ強要すんの。
たまには平和な一日があっても良いじゃないの。
「……誰だコイツは？新手の月人か？」
『――む。そういうお前は、ボルツとか言うやつか。姉上が話していたのを聞いた事がある。
開口一番に月人呼ばわりとは失礼なヤツだ』
キミ、特大なブーメラン投げてるの気づいてる??
開口一番にボクに喧嘩売ったこと、ちゃんと自覚して言ってる??
ったく、話通じないなら話通じない奴と絡んでてくれねーかな。
それならボクも楽が出来るのに――って、そうだ。
「くっくっく、ウェントリコスス王の弟、アクレアツスよ――」
「フォス、なんだそのノリは？恐ろしく気持ち悪いぞ」
黙りなさいよ。さりげなくお前に自己紹介してやってんだろうが。

だからおめえは未だにボルツなんだよ。

コホン。

「――これなるは、このフォスフォフィライトの一番弟子にして金剛国一の強者、ボルツなり！ボクと決闘がしたいと言うのならば、まずはこのボルツを倒してからにして貰おう!!」

『い、一番弟子だと……!?』

――ちなみに。

後にこの話を聞いたジルコンが、ボクに対してもの凄くめんどくさい拗ね方をするようになったりした。なぜだ。

「ふむ……？」

ボルツがゆるりと抜刀する。

……あの、ボルツさん？

ここはボクを後ろ手に庇ったボルツが、アクレアツスに剣を突き付けて啖呵を切ると言う、なんかこう師弟愛とか家族愛が溢れるシーンだと思うんですが。

突き付ける先が違いますよー？

剣を突き付けるのはボクじゃなくてアクレアツスの方ですよー？ほら、あっちあっち。おーらい？

「弟子と言うのは、師を超えて行くものなのだと何処かで聞いた事がある」
ボルツが獰猛な笑みを浮かべる。
――笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点である。
「――さあ、下克上だ」
クソが！ボルツのくせに余計な知恵ばっかつけてんじゃねぇよ！末っ子は労わって可愛がって甘やかすものだと父ちゃん母ちゃんに教わらなかったのか!!?
テストに出るんだぞココは!?
「――お、おおボルツよ。もはや私がお前に教える事は何もにい。可及的速やかに剣を放して何処ぞに飛び立つべきそうすべき」
『ならば、僕がお前に挑むのも何も問題がないと言う事だな』
「畜生めぇっっ!?何なんだこの戦闘民族包囲網は!!?」
総統閣下だってカチキレんぞ!?
「――良いか、アクレアツス。コイツについては僕の方が先約だ。郷に入っては郷に従えとウェントリコスス王に教わらなかったか？順番は守れ。
決闘は僕の稽古の後にして貰おう」
『む……姉上を出されると流石に弱い。……わかった。君の後に挑む事にしよう』
「シレっとトンでもねぇ連戦カード組んでんじゃねえぞオラァッ!?ボクが一体何をし

たアッ!?」

異常だと思うんです！最近のフォスさんイジメは異常だと思うんですよ!?

そろそろ色んなトコに訴え出て賠償金請求しても許されるレベルなんじゃねえの!?

――二人揃って「なに言ってんだコイツ？」みたいな表情止めろやぁっ!?

「……そう言えば、お前はなぜフォスと決闘なんぞしたいんだ？やはりコイツの技を盗みたいのか？」

『技？……いや、そう言う意図は無い。やはりコイツは、強いのか？』

「ふん……技量だけならば僕が手も足も出ないほどの手練れだ。スペックゴリ押しか遠距離連打でないとコイツを割るのは難しい。不意打ちでもな。

一度、こいつと同じ速度に立った上でケンカしてみると良い。学べるものがボロボロ出てくるぞ」

『ほう……そこまで言うのか』

ねえ、やめてくんない変なハードルせっせせっせと設けるの。

っつーか、アクレアツス君。なんでボルツの言う事は素直に聞いてるんですか？

ハブってんの？フォスさんをハブってんの？

っつーかアクレアツス君の僕を見る目が違う方向にシフトして来てるんですけど!?

おいルチルコラ!?満面の笑みでみんなを呼びに行くのやめろ!!とめろ!!コイツらを

!!

おおーーーいっ!!?

――パキャッ！（泣）

「……あのね？もう何回このオチ使い回す気なのってウンザリしてくるんですけどもね？

天丼って限度があると思う。フォスさん、天丼って限度があると思うの」

「いやあ今回のは凄かったですねえ！まさか二人同時に相手しても何とかして見せるとは――感服しました！」

だから聞こうぜ、人の話を。

『条件つけられただけで、あそこまでやり難くなるものなんだな……本当に勉強になった』

頼むから聞こうぜ、人の話を。

とりあえず、話術でルール順守させて何とかしたんだけど最終的に何とか出来なかったぜ。

スペックゴリ押しに切り替えられたらボクって何も出来ないしな。

結局今日も割れ申した。
ちなみに制定ルールは４つ。
・制限時間と戦闘範囲を設定し、１（ボク）　ｖｓ　２（バカ二人）　で行う。
・剣を正中線に直撃させるか、相手を場外に出した方の勝ち。
・バカどもはどちらか一人がやられたらその時点で終了。
・タイムオーバーならボクの勝ち。
「一本決めた瞬間に3本勝負ルール追加してきやがって、子供かテメーらは……」
「フン、あらかじめ決めておかなかったお前が悪い。それに、あれを一本で終わらせるなんてとんでもない。
　――コンビネーション不足を逆手に取る事は解り切っていたが、ここまで奇麗に決められるとは思っていなかった。これはまだまだ学べる余地がある。
　次からはこのルールで行こう」
「気付いて!?フォスさんのライフはもうゼロな事に気付いて!?」
『今まさにライフ回復中だろう』
「大丈夫――あなたは私が、何度でも直しますよ」
「聞きたくなかった!!凄くカッコいいセリフだけど、今は聞きたくなかった!!」
　無駄に洗練されたサムズアップ止めろや！

「……っつーかさ、アクレアツス。なんでいきなりボクと決闘なんてお求めになったよ？」

開いた左腕を治して貰いながら、海水不足で若干縮んで来たアクレアツスに問いかけた。

実際、今回はマジで心当たりがない。

『姉上が……』

「うん？」

まるで拗ねた子供のように、アクレアツスはポツリと口にする。

『……姉上が、お前の事ばかり話題にするんだ。確かに、お前のおかげで今の僕達があるのは理解しているさ。でも……それを差し引いても、すごく楽しそうにお前の事ばかり話すんだ』

……

……おーい……

『僕は……僕は、姉上をお前に渡す気はないッ！』

「いや渡されても困るっつの。なに、ボクシスコンが原因で割られたの？」

「ダイヤが好きそうな話題だな」

『姉上を要らないと言うのかきさま!?』

「君ホントめんどくさいシスコンだなおい」
　王サマと三角関係は勘弁だぜ？
　……まあ、あの王サマだしなぁ。
　こっちに来たときは、ボルツとかシンシャとかに色目使ってたんだよな。最終的には先生一択になったみたいだけど。
「なんだっけ。……ちょっとツンとした子がタイプ、なんて話を聞いたなそう言えば」
『あ、姉上の好みのタイプを聞いたのか!?』
　おーおー、すっげえ食いつくじゃねぇか。
　軽く笑って答えてやった。
「大変だったんよ？はじめの頃は。ウミウシモードでボクにしか声が届かないからって、やれ先生に求愛したり、美形の国だ眼福眼福って寛いだり、ダイヤに媚びてた時もあったかな」
「殺そう」
　ボルツ早いなおい。
『姉上がそんな遊び人な訳が無いだろう！適当な事を!!
　……そしてボルツ。貴様、姉上を害するつもりなら、僕がその前に粉にしてくれる』
「――ほう、出来るか？僕の体を面と向かって砕いて見せたのは後にも先にもフォスぐ

らいなものだったが、お前にフォス以上の技量があるかな……？」
『試してみるか？アドミラビリスに貴様の刃は通らない』
「フン。そう言えば酸があったか……だからどうした？」
「キミら、ほんっと似た者同士なのな!?」
ブラコン・シスコンな所も喧嘩っ早い所も真っ黒な所もそっくりだよ!?
「心配しなくとも、現存しているアドミラビリスが君と王サマの二人だけなんだから、王サマが君とくっつくのは確定してるだろ」
『ぐ……』
考えてみれば、王サマって近親相姦が確定してんのよねぇ。
あそこまできっぱりはっきり「自分が始祖となる」って言い放ったんだから、そもそも恋愛がどうのとか二の次だろうし。
覚悟完了過ぎて、このネタで揶揄う気も起きねぇや。
一国を背負うって大変だよな。
『……姉上の覚悟は、僕だってわかるさ。だから……だからこそ。
――僕は、『義務』で愛されるのは嫌なんだ！』
……こっちもアオハルしてんなぁ。
我儘な主張ではあるけれど、こう言うのは見てて好感が持てるわ。

「……ボクを倒せば王サマが好きになってくれるかも……とか？でもボク、王サマには戦う所を一度だって見せた事無いんだよね。
　王サマが良くボクの事を話してたって言ってたけど、その中に戦闘力の事は入ってた？」
『……』
　言葉に詰まるアクレアツス。
　まあ、その辺は解かってた感じだよな。
　でもどうすれば良いか判らないから、とりあえずボクに突っ込んでみましたってか？
　ここで武力を使うあたり、準ボルツだとは思うけども。
「きみ、今いくつよ？」
『……１９だ』
　おっと、予想以上に若かったな。
　実は王サマも結構若い方なのかもね。
　――でも、まぁ。
「なら、『なりたい自分』をまだ選べる年じゃないの。『王サマにモテる貝になる』――いいじゃん、応援するよ？
　キミはどんな貝なら王サマにモテると思う？キミはどんなふうに王サマと過ごした

い？」

『……それは……』

アクレアツスの瞳が揺れた。

『……僕は、姉上を守りたい』

「それが武力のみを指すなら、キミは既にその条件を手にしているね」

アクレアツスの声が震えた。

『――僕は、姉上を支えたい』

「それは、武力だけじゃ無理だな。王サマがやっている事を勉強して、理解して、やりたい事を手伝ってあげないといけない」

――アクレアツスの、顔が上がった。

『僕は、姉上がお前の事を話している時と同じように、姉上の近くにありたい！』

ボクは答える。

「ボクは王サマに対して何ら特別な事をやってた訳じゃない。……困ってそうだから手伝った、ってのはもちろんあるけど……結局、言いたい事をバカスカ言って、言いたい事をバカスカ言われてただけさ。

――友達って、そう言う事だもんな」

とん、とアクレアツスの胸を小突く。

「勉強して、武力も磨いて、王サマにちゃんと想いを伝えて、言いたい事言われて、んでもって最強にカッコイイ自分を目指せよ。
『それ』にどこまで本気になれるかでキミの王サマへの気持ちの強さが解る。
……果たしてキミは、ボク以上に王サマの事を大切に思ってるのかな？」
『っ――もちろんだ!!バカにするなっ!!』
はっはっは、いやぁ若いねぇー。
寿命のある生き物は残り時間が少ないから大変だ。
たくさん頑張って王サマのハートをキャッチしてくれたまへー、青少年くん！

＠　＠　＠

そんなこんなで、ウミウシモードになったアクレアツス君は先生にぶん投げられて帰って行った。
もう二度と戦闘力を翳して来る事は無いと祈りたい。
でもどうだろうなー……ボルツの同類だしなぁー……
「……お前、恋愛相談の顧問も出来たんだな」
「んあ？」

ボルツがなんか、複雑そうな目でボクを見ていた。
「そんな大層なもんじゃないよ。……ちゃんと本人、僕を倒せば王サマに好きになって貰えるー、みたいな思考は間違ってるって最初から気づいていたからね。
王サマへの気持ちで釣って、背中を押してあげただけさ」
海に行ったとき、王サマが口にした彼への評価を聞いた事がある。
曰く、食う事と戦うこと以外に能がないけど憎めない弟……だ、そうだ。
きっと本人の自己評価もそんな感じなんだろう。
そして食う事と戦う事だけでは、これから王サマについて行く事は厳しいのだと思う。
だからボクは、王サマの事が本気で大切なら、それ以外の事にも目を向けてみろと言ってやっただけだ。
王サマの心を本当に射止められるかどうかは、結局彼がガンバるしかない。
アドミラビリスの復興と言う大義が待っているので、彼がどう思われていようと少なくとも破局は無い間柄だ。
――それが救いなのかそうでないのかは、これから決まるって訳だ。
「――そういやボルツは、以前肉のある動物は下等だって評していたよね」
「……。ああ」

「んじゃ、覚悟しときなよぉー？……きっとこれからの２０～３０年は、色んな物が目まぐるしくなってくるだろうからさ」

「……？」

――男子、三日合わざれば刮目してみよ。

特に、あの子はボルツに似ていたからね。

これから何回も触れ合って行く相手にあって、自分と似ている奴が精神的に成長して行く様を見て行く事になる。

……果たしてボルツはそれを見て、どう言う変化をして行くんだろうね？

クックック……これは末っ子の楽しみ方じゃあないなぁ。

『人間』って奴を知っている事の特権かな？

――ああ、楽しみだ。ボク、今まさにキラキラしてる実感あるわ。

＠　＠　＠

――王サマ懐妊の知らせが届いたのは、それから3年後。

どうだ、凄いだろうと両手でピースサインを真っすぐ突き付けながら報告してくれた王サマの顔は、少なくとも僕の眼にはとても幸せそうに見えた。

第２３話「宝石の国」

――ボクは激怒した。
必ずや、邪智暴虐の下手人を除かねばならぬと決意した。
ボクにはブラックジョークが解らぬ。
ボクは光輝くアイドルである。
薄荷色の体を持ち、脆くも美しさと可愛らしさを両立させたキラキラを、常に振りまいて生きてきた。
けれども、邪悪に対しては人一倍に敏感であった。
教室に踏み込む。
「――アルっちに『オッサン』呼び仕込んだヤツはどこのどいつだぁっ!!?」
フォスさんの神仏のような広大な心も一瞬でフットーする悪逆非道。
許しがたし。まことに許しがたし。
下手人は素直に手をあげろやオラァッ!!怒らないから!!先生怒らないから!!
「開口一番に何言ってやがるオッサン」

「あだ名がつくとか信頼の証じゃないかオッサン」
「ヤメロォッ!?アフォスならまだ可愛くて許容出来るけどオッサンはヤメロォッ!!ヤメロォッ!!」
　教室の中から向けられた視線が、何かスゴい淡白。
「ああー……『フォスさん』が『フォっさん』になって、最終的に『オッサン』になったとか?」
「それボクの呼び方がどう足掻いてもオッサンに行き着くルートじゃないですかヤダァッ!!ヤァァダアアアァッッ!!」
「いや、あの、フォス……コレから講義なんですけど」
「聞いてよかあちゃんヒドいんだ!きっとコイツら、シレっとオッサン呼びを定着させようとしてるのに決まってるんだ!
　チクショウ!お前らが受ける試験の評価役が誰かと言う事を思い知らせてやる!!全員合格ラインからギリギリアウトにしてやる!!」
「僕はかあちゃんじゃないですし、それは職権乱用です」
　ジルコンかあちゃんの無慈悲な塩対応がボクを襲う。
　ブッダ!あんたはまだ眠ってんのか!?
「はいはい、オッサン劇場はここまでにしましょう。今日はちょっとお知らせがありま

す」
「ジルコンッッ!?」
　ジルコンまでオッサン呼びするのやめて!?
「戦術隊長技能資格、意思決定最終日ですが滑り込みがありました。これから最大３年間、一緒に講習に参加する事になります。
　――入って下さい」
　ジルコンに促され、彼女が元気良く「ハイッ！」と応えた。
「――アルビカンスなのです！３年間お世話になるのです!!」
　教壇の隣。ほら貝のような貝殻を背負い、大きめの水筒をぶら下げて、シュタッと手をあげるアドミラビリス。
　思わぬ人物の登場に教室から驚嘆の声が上がる。
「え!?アルっちが!?マジで!!?」
「マジなのです!!」
　齢１２歳。
　アドミラビリスの王、ウェントリコススの第一子にして次の女王、アルビカンスその人……じゃなくて、その貝だった。
　その肌は王サマよりも白みを帯びて、ヒラヒラとしたヒダがドレスのように揺れてい

る。

アルビカンス、と言うのは『白みを帯びた』と言う意味なんだとか。

赤子の頃から馴染みが深く、もはや金剛国のマスコット的な存在になってたりする。

正直言って、才女だ。

王サマがアルっちのことを語る時、デレ顔を通り越してドヤ顔になって、口にする事が全てクソウザくなるぐらい才女だ。

若干12才でリーダー資格とか、破られる事のない最年少記録なんじゃねえのとか思う。

……受かるならだけどね。

「ってことは、もしかして将来的にはアルっちがウチ（戦闘班）の指揮やることもあるのか?」

「いや、現状でそれは想定してない。あくまでスキル獲得の為の受験になる。

気張れよォー?コレで落ちたらお前ら12歳児以下だぜ?フォーッスフォスフォス!」

「オッサンくそウゼェ」

「このへんさすがオッサンだよな」

「ヤメロォッ!?」

あまりにも自然にボクの事ことオッサンと呼ぶんじゃねえよ定着しちゃうだろ！
世界の法則を掻き乱すがごとき暴挙だと自覚してくれませんかね？
武術指南の中でちゃんと教えたんだから、Ｌｅｓｓｏｎ４でもっと敬意を払いなさいよ！
「っつーか、なんでオッサン？ゴーシェが言ったように『フォッさん』から変化したのか？」
「ふっふっふ……禁則事項なのです！」
「問い詰めてもコレで逃げやがるんだよォーッ！クソッ、誰だよみくる教えたヤツはァッ!?」
「……ミクルは知らねーけどお前だと思うわ」
モルガの敬意が足りないんですが!?
「はいはい、キリ無くなるから黙ってください。
――ええと、アルビカンスについては海水の携帯や基本スペックその他でどうしてもハンデが掛かるので、実技研修に参加はしますが対月人実地試験は免除になります。あくまでテストケースなのでその辺りよろしく」
「「はーい」」
「あと、オッサン呼びかましたヤツは容赦なく減点すっからな覚悟しろや」

「だからあなたは黙って下さい」
「……なぜコレが教導隊の副長なのか不思議でならないな……」
「今度はぜってー受かってやる……！」
ええと……今年はモルガ、ゴーシェ、ベニト、ネプちー、そしてアルっちの5人か。
さあて、何人受かるかな？

@　@　@

――戦術隊長技能資格試験。通称リーダー資格。
実験部隊解散後に立ち上げられた、金剛国初めての資格試験だ。
5人チームでの月人迎撃マニュアルが整った昨今、戦術や分析と言う特殊技能者を増やすためにボクが立ち上げた。
4年に1度実施され、コレに受かった石がリーダーやマークスマンを勤められると言う、ついにここまで来たか金剛国って感じの国家資格である。
強い（確信）。
学習のために3年間の講習期間をもうけ、その間は見張りシフトも調整されると言うガチプログラムだ。

隊の運用方法や投石紐の訓練、２進言語（シンシャの光言語通信表のこと。正式にこの名前がついた）の運用といった分野を網羅する。
コレにはもちろん実地も入る。
今や月人は新型含めて教材になりつつある金剛国です。
資格受領者は現時点でジルコン、ユーク、ボルツ、イエロー、先生、そしてボクだ。
ただしスペック上の関係からボクの実地試験は免除されている項目があるため、ボクの資格は準級扱いになってたりする。
器用値最低過ぎて投石試したら自爆したしね。ちかたないね。
この資格が出来てから、ユークの戦略計画室は解体されることになった。
正確に言えば、資格取得者で教導隊が組まれて再編されたと言うべきか。
ボクの準級取得は言うまでもなくこの教導隊に巻き込むための口実だったりする。
立案はユーク。
ンもう、本気出したおにーさまマジ手段選ばねぇわ。
ちなみにジルコンかあちゃんは教導隊隊長。副長がボクで顧問と言う名のボスがユーク。
お陰で毎日忙しい。
ちなみにアレキも準級取得させられないか動いてるんだけど、本人はあまり乗り気

じゃないらしい。
いわく、「教導隊に巻き込みたいだけが目的なら、んな事せんでもフツーにこっちから顔出すわよ」だそうだ。
結局、講習受けてないのに講習内容に超詳しいヤベー奴が完成した。
まあ、資格取得イコール教導隊参加義務って訳じゃないしね。
ボルツなんかその筆頭。
アイツ、オツムが必要な項目もあっさりクリアしやがったくせに、教導隊参加は頑なに固辞しやがった。
教導隊の業務内容には、みんなに講習したり月人研究したりが入ってくるからね。
現場しかやりたくないのだアイツは。
そして出来るならダイヤとチームを組みたいのだ。
だから密かにダイヤの資格取得を心待ちにしていたりする。
そのダイヤと言えば、立派にレンズ作成の第一人者だ。
顕微鏡の作成に見事成功してみせたからね。
その大快挙のお陰でしばらく女神ダイヤ呼びが流行ったモンだ。
（流行らせたとも言う）
なお、リーダー資格への興味は今の所ない模様。

まだ倍率は小さくて、インクルージョンの観察は難しいけれど、それでもインクルージョンの形成するロール・コロニーの観察に成功できたんだから十分希望だよ。

現在、それを使ってルチルがパパラチアパーツのアルファ版を作成してる最中だ。

４轍しても眠気に倒れるどころか、元気ハツラツとしてパズルしやがるからアイツ頭おかしいわ。

先生に強制就寝令を出されて器具の前に見張りを立たされるレベルだもの。

医療出来んの、今んとこ君だけだしね。ちかたないね。

なお、見張り役は良くゴーストが起用される。

一度ルチルが見張り役に対してバックスタッブを掛けたからだ。

「バレなければ命令違反ではないのですよ」とドス黒い笑みを浮かべておられたあの瞬間は忘れない。

割りとアッサリ暗黒面に堕ちやがったからな。ボクは日頃お世話になり過ぎてるのでチクるにチクれませんでした。

背後から音もなく忍び寄り、見張り役の意識中枢を正確に破壊した後、夜中にパズルを行い朝になって見張り役を治療。

そして何食わぬ顔で「おや、寝てしまっていたんですね。もう朝ですよ」と声をかけ、自分はこれから朝の業務だと称して再びパズルに没頭する。

恐ろしい手際である。
誰かが『千の解体具を持つ狂気』と称してたらしいけど、なんら間違ってなかったんだなって。
そこでゴーストである。
アイツ、ステルス能力が振り切ってるからバックスタッブを狙っても見つからない。
やっほう今日は見張りいないぜラッピー！と嬉々としてパズルに取り組んでると、そのうちトントンと肩を叩かれ振り向いたら誰も居ないので、おかしいなと作業に戻ると再びトントンと肩を叩かれ、もうなんなんだよと振り返ったらそこにはガチギレしてる先生が立っている恐怖。
ルチルが割れたのを見たのはこの時がはじめてでした。
ルチル以外の手による修復はたいそう手間が掛かった模様。
――そしてほとぼりが覚めると、懲りずにゴーストとステルス合戦に突入してたりするのだ。
いやあ出し抜かれるとは不覚だった、僕の中に彼がいなければ任務達成が危ぶまれてたよとはゴーストの言。
……いや、寝ろしルチル。なんで見張りとステルス合戦してんのよ。意味ねーだろ見張りの。

っつーかゴースト君、僕の中の彼ってどう言う事？
二重人格なの？もう一人の僕とＡＩＢＯでデュエルなの??
やめて！
ゴーストの特殊能力でサイレントキリングを仕掛けられたら、オーダーで繋がってる先生が出張ってきてルチルの体が『破ァッ！』されちゃう！
お願い、死なないでルチル！あんたがここで倒れたら、パパラチアのパズルはどうなっちゃうの？ピースはまだ残ってる！ここを耐えれば、パパラチアの復活に近づくんだから!!
――次壊、「ルチル　死す」。デュエルスタンバイ！
……実際、ルチルが割れること多くなったと思うわ、うん。
でもね、ルチル。散り際に「たとえ私が砕けようとも第二第三のルチルが必ずや……！」とか言い残して矛先をボクに向けるのは違うと思うんです。
何故にこの流れでボクまでお説教されなければならないのか。流石に理不尽過ぎねぇ？
そんなこんなで当事者でもあるゴーストが割れたルチルを修復してあげるシーンが多くなり、そして最近はわりと医務室に入り浸ってるゴーストと顔を合わせる頻度が増えた。

ルチルの後継フラグが立つ音が聞こえた気がしたわ。
良いのかキッカケがこんなんで。
おい、ボクが最近割れてないからそのシワ寄せがきてるとか、それはちょっと酷いと思うんですが？
――そう、割れなくなったのです。
週8で割れてたペースが週3ぐらいにまで減ったんですよ褒めて。
え？それでも割れ過ぎ？……そう。
ノルマ減少の原因は簡単。ボルツがやっとこさ巣立ってくれました。
毎日のように素晴らしい笑顔でボクに稽古を強要する日常がやっとフェードアウトしてくれたのよね。
……つまり、ボクの引き出しも吐き出し切ったって訳だ。
前までは「技量はフォスフォフィライトが最強」なんて頭がおかしい評価が散見していたけども、今や技量も力量も間違いなくボルツが金剛国最強だ。
……え？先生とシンシャ？いや……あのあたり出すのはほら、ちょっとアレがアレですしおすし。
幸いなのは、別にボルツはドS的な弱い者いじめ大好き宝石じゃなかったって所か。
ボクが一本も取れなくなってきた辺りでちゃんと開放してくれました。

今じゃ独自に術理を研究し、宮本武蔵だって押しのけられる程の二刀流を振るう、難攻不落のコマンドだ。

ま、それでもたまーに稽古に誘われる時もあるけどね。でもちゃんと割らずに済ませてくれます。

いつだったか、アクレアツスに「一番弟子」って吹いた事をひねってお礼を言われた事があったよ。

「――感謝してるよ、師匠」だってさ。

そのままそっぽ向いて何処ぞに行っちゃったけど……ボクの方は再起動にかなりの時間を要したね。

思わずほっぺたつねろうとしてムニムニできる筈も無く指が割れ、ルチルにとてもかわいそうなモノを見る目で呆れられたのは良い思い出だ。

やっぱ精神的に思う所があった、って事なのかも知れないね。

アクレアツスとの交流が良い刺激になってるもの。

――ふっふっふ。ボルツ自身も、アクレアツスに似ている部分がある事を自覚していたみたいだしね。

王サマの為に努力を続け、子供が生まれた事でどんどん成長して行ってるアクレアツスの隣にいたら、そりゃあ思う所だって二つ三つと出てくるわな。

家族のために環境を整え、ご飯を探し、外敵から護り抜く――王国と言ってもしょせん一家族。やることはパパさんと変わりはない。

だからこそパパさんは、アクレアツスは頑張っている。

護るものが出来れば人は成長するのだ。

はたらくパパさんはつおいのです。

とにもかくにも必要なのは衣、食、住。……いや、アドミラビリスは服が標準装備なトコがあるから衣は要らんかもな。

食と住は将来を見据えていろいろ動いてる模様。

アドミラビリスはどうも雑食なようで肉も草も食べるみたいだから、海草を植えたり魚の住みかを作ってあげたりと生産系にも手を出している。

住居も思いきって移したようだ。まあ、あそこまで根こそぎ月人に持ってかれたらそういう選択肢も出るよね。

今彼らは、かつて海に行ったときに通った大きな坂の下……王サマが初めて『真の姿』を見せてくれたあの近くに居を構えている。

人型を保てる場所が大前提、その上で金剛国に近い場所を選んだそうだ。

将来的には、そこから故郷の方に向かって発展していく事になるだろうと。

……それはきっと王サマの代では叶わないだろうけど、きっとアルっちの子供が、そ

のまた子供が、少しずつ引き継いでいくのだろう。
将来のアドミラビリスを見るのが、今から楽しみで仕方がない。
どんな関係を築いているかな？アルっちが遊びに来ているように、留学も増えたりするのかも。
金剛国からも誰か留学させたりしてね。……そんな世界が来るならとても素敵だ。
レッドとか、嬉々として参加しそうな気がするなぁ。
だってアドミラビリスって生まれながらのオシャンティーなワケだし？あのヒラヒラドレスはレッドのイマジネーションを物凄い勢いで掻き立てるそうだ。
特に最近は実用的な服の需要が増えてるから、思う存分趣味に走ってみたいとぼやいていたりする。
……毎年冬眠で着るあのド派手な服では満足できないと申すか。
対水銀防護服やギリースーツの研究で布を使う事が多くなったしね。
古い服を解体、洗浄して織り直し、新しい布として再生させる技術を独自開発してみせた時は超ビビった。
金剛国にノーベル賞があるならアレをノミネートさせたい。
防護服の布研究の過程で偶然産み出した技術らしいけど、アレのお陰で布のやりくりが楽になったと喜んでいた。

触発されてペリドットも再生紙の研究してるしね。
紙の方が難易度低そうだし、きっと形になるまでそう時間は掛からないだろう。
もう一人の工芸お兄さん、スフェンと言えば。
手慰みの木工が変な方向にシフトして、なんと楽器を作り出した。
どうもホイッスルにインスピレーションを得ていた模様。
と言ってもホイッスルのような吹くタイプの楽器ではなく、中を空洞にした箱の上に長さの違う糸を張って指で弾く、変則的なギターのような弦楽器だ。
それもぶら下げて弾くんじゃなく、琴みたいに置いて弾く感じのやつだ。イメージ的にはカンテレが近い。
本人的にはおもちゃみたいな感覚らしく、たまに弾いて遊んでる。
そのうちスフェンが楽士にシフトする日が来たりするのだろうか。
楽器の形状もあるから、ボクとしては是非ともサッキヤルヴェン・ポルッカを弾いて頂きたい。……頂きたいんだけど、どうやって教えてどうやって誘導するかメッチャ悩む。
スフェンの前でこれ見よがしにハミングするとか？
まずは曲を好きになって貰わないといけないワケで、ハミングだとちっとハードルが高い気も……ぐぬぬ。

何にせよ、みんなで楽器を演奏してお祭り騒ぎ、なんて光景は随分後になりそうだ。
頼むぜスフェン。是非ともそのジャンルを流行らせてくれ。
今ならシンシャもそのお祭りの中に引っ張り出す事だって出来そうなんだからさ。
――シンシャ。
ボクは彼に約束した。
夜の見回りなんかよりも、ずっとずっと楽しくてシンシャにしか出来ない仕事を見つけて見せるって約束した。
シンシャを夜から引っ張り出そう――アマルガム計画のコンセプトはそれだ。
そしてその成果が実り、今シンシャは少しずつ昼にも姿を表すようになってきた。
と言っても、アマルガム計画が完結した訳じゃあない。
まだまだ初歩の初歩段階だ。技術的な問題で停滞している所が多数ある。
――でも、実用に耐えうる対水銀防護服の開発には成功したのだ。
樹脂コーティングした糸で丁寧に織った布地をベースに、特殊な縫製で仕上げられた防護服。
手間暇かかる上に動きやすさが少々オミットされている代物だけど、それでもしっかり水銀をガードしてくれる防護服だ。
それをシンシャが着れば多少の暴走が起こっても最悪を防いでくれるワケで。

――上達していた水銀制御スキルも合わさり、戸惑いつつも皆の輪に寄り添おうと考えはじめてくれた。

凄まじい進歩だ。

最終的にアマルガム計画が完遂したら――もはや気兼ねなく皆に混ざれるシンシャを見る事が出来るんだろうか。

……シンシャが心から笑ってる顔が見たい。

一歩引いておっかなびっくり触れ合おうとして、でも諦めて控えめに口角を上げる――そんな表情じゃ満足出来ない。

たとえばイタズラに混ざったりバカやったりハシャいだりして、お腹抱えて笑うシンシャが見たい。

水銀なんて何も気にせずに追いかけっこしたりして、盛大にスッ転んで爆笑したりするシンシャが見たい。

そんな希望が待ってるって言うなら、ボクはきっとこの先何百年だろうと突っ走っていけるんだ。

――ボクの名前はフォスフォフィライト。

脆くて、不器用で、一人じゃ何も出来ない石だ。
だからこそ皆と生きていく。
ボクの大好きな皆と、一緒に。
たとえ生まれる前の記憶があったとしても。
みんなと過ごして来た日々は、みんなと積み上げてきた日々は、紛れもないボクの、
フォスフォフィライトのものだ。

「――フォス、ここに居たのか。先生が呼んでるぞ」
「はぁーい！」

脆くて不器用なボクの事を愛してくれる皆がいる。
何も出来ないボクであっても必要としてくれる皆がいる。
それはとても幸せなことなんだって心から思う。

「ああ――来たか、フォスフォフィライト」

自信をもって言える事がある。

ボクは今、きっとこの世界の誰よりも。

――とびっきりに、キラキラしてるんだ。

最終章　ラスト・メッセージ
シーン1「変化」

アドミラビリス族とキラキラ族の関係はすこぶる良好だ。
なんと言うか、ある意味で金剛国はアドミラビリスの託児所みたいになっている事は否めない。
そして石達は皆カワイイのが大好きなので、ノリノリで構い倒していったりする。
特に、精神年齢が近いのかハマり役が一人。
「――良いかねチミたち」
形から入ることにしたようだ。しかし半端に五条袈裟だけを羽織り、人さし指を立てる薄荷色のアホが、年端も行かない幼子を二人並べて真剣に言い聞かせている。
その内容はと言えば。
「お姉ちゃんはマネしちゃダメです。アレは悪い子です。不良です。夜の校舎の窓ガラス壊して回りそうなワルガキです。
チミたちは盗んだバイクで走り出すようなマネはしてはいけません。ワカるね？」

ワカるハズがなかった。
そもそも学校の校舎には窓ガラスなんて嵌っていないし、バイクなんて単語すら存在していない世界である。
幼子二人はなにか面白そうに手を叩いて喜んでいる。
その反応で満足したようだ。アホが仰々しく頷いて見せた。
「――ヨロシイ。それではりぴーとあふたみー。
『フォスにぃ』」
『オッサン！』
『おっさーん！』
ピシッと頭にヒビが入った気がする。
……びーくーる、びーくーる。
相手は3歳児、自分は３００歳（アラウンド値）。
よい大人を演じてやろうじゃないかと自主的クールダウン。
演じようとしている時点でダメダメな事に本人は気づいていない。
「い……良いだろう、折衷案で行こうじゃねぇか。
『アフォス』でどうよ。親しみやすくて何処と無く可愛さもあるだろ？
そしてそれ以外は受け付けません。フォスさん受け付けませんよ？我が国が遺憾の

意で済ますと思ったら大間違いだ。
　戦争は悲しいだろ?――なら、言うべき事もワカるだろ?」
　3歳児を脅しに入る300歳である。
『みなさんはこんな大人になっては行けませんよ』の代表例。
　しかし幼子は権力に屈しない。
『んんー……オッサン!!』
『汚っさん!!』
　一瞬で振り切れた。
「ガアアアアてめえら良かろうならば戦争だチクショウしかもよりによってトンでもねえニュアンス噛ませやがって!!
　待てやああアアァッ!右頬殴られたら左頬差し出せやオラアアアァッッ!!」
『『きゃーーーっ♪』』
　勃発する鬼ごっこに歓声をあげて幼児が逃げ回った。
　わりとガチな表情で両腕を振り回し追いかけている様は、端から見ていても「大人げない」しか出てこなかった。
　あるいは幼子たちに付き合うため、『本気で追いかける』と言う演技を行っているのかもしれないが、

「……ウソみたいだろ。３００越えてるんだぜ、アレ……」

――もはやそれを誰も信じていなかったりする。

普段の行いが評価に如実に現れている。

『ふふふ、私もあんな風に遊んで貰ってた気がするのですよ』

「いや、アレは遊んであげてると言うより、遊ばれているような気が……」

――ヤロウ挟み撃ちだとちょこざいな!?あれ?ちょっっ、ちょっっ、うわょぅょっょ……ギニャァーーーッ!?

「あ、割れた」

『割れたのです』

触手に足をとられてスッ転んだフォスの右腕は、いつものように取れていた。

３歳児相手にパキられる対月人戦闘教導隊副長ってどうなのだろうか。存在していて良いのだろうか。

――パァースッ!

――デコちゃんとったよぉーー!

――うあああん返せ!返せよう!ボクの右腕返せよう!!

「弱えぇ」

『イジメられているのです……』

3歳児にイジメられる対月人以下略。
システムごと見直した方が良いのではと言う気になってくる。
デコルスとベラツルスはカスカベの嵐を呼ぶ幼稚園児並みにパワフルな双子だ。
二卵性でデコルスが男の子、ベラツルスが女の子。
いつもペタペタ一緒にいる。
年も同じなので将来はお察しと言うやつだ。
でも今のところ男性率が圧されてる上に人口（貝口?）も少ないので、もしかしたら重婚とかカマし始めるかもしれない。
育ったらドロドロな修羅場が発生したりするんだろうか。
あと二年したらリアルで昼ドラなおままごとをしはじめたりするんだろうか。
将来が楽しみである。
「……うん?」
――そんなとき、ふと何処からかホイッスルの音が聞こえてきた。
長音と短音の組合わせ。よく聞くリズムだ。
フォスの表情が、少し頼もしくなった。
「――モルガ」
「ああ、中継する」

「よろしく。……ほらチミたち、学校に戻るぞー」
『『えー？』』
「ダァーメ。ほら、ボクの腕持ってて良いから」
『食べて良い？』
『あー！ズルい、ベラもー!!』
「……流石にそれは勘弁しろし」
『細かいやつは私が拾っておくですねー』
「お、アルっちありがとう」
『お礼は欠片一個で良いですよ』
「キミら家族揃ってボクの体を物理的に狙うのやめてくれない!?」
よほど美味しそうに見えるんだろうかと不安になったりする。

@　@　@

一人残して、瞬く間に雑が霧散された。
もはや戦闘ではなく蹂躙の様相だ。
「――立像（中央の月人）は不動か。乙型（新式）では無いようだな」

ボルツである。
まるで蛙をにらむ蛇のように、一人残った雑を見下ろしている。
一人残され、武器を破壊され、もはや腰を抜かすしか出来なくなった雑を見てボルツはつまらなそうに鼻をならした。
――武器がなんだ。仲間がなんだ。
金剛国の虚弱筆頭は、かつて手足どころか記憶まで失ってもただ一人戦い続け、その状態でなお硬度靭性共にトップクラスの石に手傷すら与えて見せたと言うのに。
情けない。戦意すら見せずに震えるだけか。
「――ボルツ、助かるけどあまり突出しすぎるなー？チームの意味が無くなっちまう」
チームリーダーを務めるイエローだった。
他のメンバーを伴って雲に飛び移る。
ボルツは、半ば呆れも含めてそれを流し見た。
「乙型への備えと言う大前提は理解する。……だが、実質これは過剰戦力だ」
リーダーのイエロー、コマンドのボルツ、マークスマンにはベニトが収まり、アタッカーとスポッターはアメシスト二名が務める。
「教導隊にリーダー資格保持者とその研修生、そして近接のエキスパート二名だと？……この程度の有象無象に大盤振る舞いだ」

「でも、安定してるし回ってるだろ？」
「わかっているさ。……戦う事の意味すら持ってなさそうなコイツらに対し、それほどの備えをしなければならない現状がイラつくだけだ」
理念をもって信念を貫く『戦士』が相手ならともかく、ただの雑魚が高みから見下ろし、遊び半分で同胞を連れ去って行くと言う構図はボルツにとって到底許容出来るものでは無かった。
近頃の実験で月人の分析が進んでいく度、そういった思いが強まるのだ。
雑を一瞥して舌打ちする。
振り返れば、アメシストが雲に手をついていろいろ調べている。
最近は鹵獲を前提とした検分も多くなった。
一人残ったコイツをここで霧散させても、この雲が自分達の物にならない事は既にわかっている。
「――やっぱり劣化してるね、これ」
「仮説は正しそうだなあ」
ベニトがポツリと口にした。
「……前々から思ってたんだけど、これって硬度関係してないかな？」
「え？」

「イエローとボルツは10、アメシストは7、僕は6半だ。接地面積もそりゃあると思うけどさ」
「……なるほど、言われてみればイエローとボルツの回りは劣化が激しいようにも見える」
　視線が雑の居る辺りに集まった。
「……コイツらに硬度と言う概念はない。だから当然劣化もしない、と」
「発見だな」
　ボルツが笑みを浮かべた。
　最後の雑に歩み寄る。
　接地している5条の髪が、雲を擦り煙のような何かを巻き上げた。
「それで――この雲は、お前一人でも動かすことはできるのかな……？」
　手を伸ばす。
　その行為に恐怖が振り切りでもしたのだろうか。
　雑は狂乱の形相と共に声にならない叫びをあげた。
　それに連動して中央の月人がぶるりと震え、まるで腐敗の様を記録したビデオを早回しするようにドロドロと崩れていく。
　それに連動して、最後の雑も霧と散った。

——石達を乗せた雲が、崩れていく。
「……自壊したか」
「何かを操作した様子は見当たらなかったな」
当然のように危なげなく着地した一同。
崩れた雲を一瞥して、状況終了の合図を送る。
——もはや分析後の崩壊から意見交換まで、近頃のルーチンと化していた。
「感情が見えたね」
「叫びも上げたようだか、声は何かに塞がれたように出ていなかったな」
「予備動作無く自壊が可能で、雑を全て散らしてもやはり劣化し、崩壊する……どうもうまく行かないな」
「鹵獲されない為のセキュリティは万全みたいだ」
これらの情報は全て余すところ無く教導隊に持ち込まれ、日々分析に回される。
今まで後手に回っていた金剛国の追い上げだ。
新体勢樹立からおおよそ10年を数える。
金剛国はいまだ石の誘拐どころか、行動不能レベルの重傷者すら出さずに月人を退け続けていた。

@　@　@

「――以上の事から、次の様なことが推測されます。
ひとつ、立像は原則自立機能が存在せず、雑がこれを管理・操作していること。ただしこれに乙式は含まれません。
ふたつ、立像は雲や雑の維持管理機能を担っていること。
みっつ、この立像は雑に管理されていないと次第に劣化し、やがてそのまま自壊すること」
ふむ、とフォスは口の中で納得の声を転がした。
理解しやすいものに置き換えるなら、宇宙船とその乗組員だろうか。
立像は宇宙船のコンピューター。雑が宇宙服を着た乗組員。
コンピューターは乗組員が操作してないとエラーを起こし、乗組員はコンピューターが無いと宇宙服を維持できない。
そしてコンピューターがエラーを起こしたら宇宙船も沈むさだめな訳だ。
金剛国側が宇宙船の鹵獲を狙うなら、雑に頼らずコンピューターを操作する必要があるわけか。
どーりで雑の別運用が無かった訳だ。やらないんじゃなくて、出来なかったんだなと

納得した。

――確立した余裕は、そのまま分析の余地に変わる。

『彼を知り己を知ればすなわち百戦危うからず』は孫子の名前ごとフォスが持ち込んだ概念だ。

分析が進めば区分も増える。

１０年前と比べ、いくつか単語も増えたし解った事も増えた。

月人襲来があった日の日没後は皆揃ってミーティングが常になっていた。

白い手が上がる。

『――搭乗している雑は恐らく、誰でもその管理操作ができると見て良いと思うです。

今回、無作為に残された一人が運良く自壊権限を持っていたと言うのは考え難いのでは無いでしょうか』

「そうだな。特に立像の近くにいた奴を狙った訳でもなかった」

いつからか、このミーティングにアルビカンスも混ざるようになっていた。

ウェントリコスス王自慢の才女は、時々貴重な意見を提供してくれる。

幼い頃から良く見知ったこの貝が国防に関わることに、もはや反対意見は出なかった。

分析結果は彼女の手によってアドミラビリス国にも持ち込まれ、対月人の共通資産に

なる。
「――ベニトが面白い事に気付いたよね。硬度の高い石に接触すると、雲の劣化が早くなる？」
　フォスが向けた水に対し、遠慮がちにベニトが目を反らした。
「その……まだ早計だよ。立ち位置の問題とかもあったかもしれないし。もっとサンプルが欲しい所だ」
「――ふむ」
　推移を見守っていた金剛先生が声を上げる。
「心当たりはある気がするな。１０余年前、アドミラビリスと国交を持つ切っ掛けとなった騒動があった。
　あの時、フォスと共に雲に乗った事がある」
『おお！伝説の一幕ですね！母上が何度も教えてくれたですよ！――何度もおねだりしたとも言いますが』
「あのチカラワザ・ネゴシエーションが妙な叙事詩に化けつつあんのかよ……
　っつか先生、ボク流石にそんな細かいトコ覚えてないってか見てすらないんですが」
「私は覚えてるぞ」
　ジェードだった。

律儀に手を上げて主張する。
「あの時、私は先生とフォスを後ろから見ていた。
先生からオーラのようなものが立ち登ってるように見えたんだ。それに比べてフォスは何も無いように感じて、やっぱり先生は凄いんだって再認識していたが。
――今思えばアレ、劣化して剥がれた雲だったのかもしれないなと」
「それ、ホントにオーラだったんちゃう?」
実も蓋もなかった。
生きとし生けるもの全てに宿ってるとか良く聞くステキパゥワァー。鉱物ベースのキラキラ族にそんなもんあるのかとか言う疑問は野暮の極みである。
こんなこと言うやつには信憑性と説得力マシマシなこの言葉をプレゼントしよう。
――だって、先生なんだぜ?
「……私にそのような機能は無い」
本人が否定しやがった。
「え?でも『破アッ!』ってやってたじゃないスか。最近トンと見なくなったけど」
「いや、そもそもアレは……」
ここで金剛先生は皆の視線が集中しまくっている事に気がついた。
目が爛々と輝いている。

そりゃそうだ、あの『破アッ！』はいまだ技法の見えない謎のチカラだ。
あんまりにも凄すぎて、たまに行われるキラキラ族百物語の中に度々登場し、『破アッ！』の一喝で鬱展開をバニッシュして行く程の語り草になっている。
寺生まれってしゅごい。
期待と言う名のプレッシャーだった。
「……アレは、その……き、禁則次項、だ」
逃げた。
最近覚えた必殺の言い回し。しっかり指を口元に当てるのを忘れない。
つまり、いつものやつである。
最近は逃げ方にオチャメが入ってきた気さえする。
皆揃って「またかぁー」と嘆息して天井を仰いだ。
「――話を戻すか。ええと、ベニト説が正しくてジェードの記憶が確かなら、硬度3半はセーフ。それ以下のシンシャとアンタークが安全圏ってことになるな」
「情報回して、冬に試して貰っても良いわね」
「うーん、冬だとシフトがシブいんだよなぁ。防御力がちょっと……」
冬だと用兵ごと変わる。
近年の冬ローテはアンターク、シンシャ、そしてリーダー資格保持者から一名出す事

で運用している。

つまり3名1チームのみのシフトになり、メイン攻撃オプションが投石紐からシンシャの水銀ハンマーに化けるのだ。

投石紐でも十分沈められるのに、高密度の金属ハンマー8連なんて受けた瞬間に月人なんぞ跡形もなくなる。

威力的に『破ァ！』とどっちが高いのやら。

反面、防御力が激減するので、戦法は一貫して『必見即殺』だ。ギリースーツが大活躍する。

姿すら見せずに月人を葬り続ける冬チームはもはやゴルゴ13。

――話が逸れた。

つまり、冬は原則『交戦』を前提としていないのだ。一方的に攻撃して速攻で終わらせる布陣である。

月人に何かをさせる可能性のある鹵獲研究とは相性が悪過ぎる。

「……シンシャに冬以外に出てきて貰うのが万全か……」

「引き受けてくれそうだけど、ヤだなぁ……またシンシャに負担かける事になんの？」

冬の担当はシンシャ自身が言い出した事だった。

そもそも、彼らが冬眠を取るのは光が極端に薄くなって眠くなるからだ。

シンシャはこの条件に当て嵌まらない。元々光を集めるその体質を利用して夜の見回りをやっていたほどだ。

夏の夜と冬の朝、光がより少ないのは夏の夜の方な訳で。

水銀が凍り付く冬場なら制御を誤っても安全とあって、シンシャはむしろ冬の仕事に着きたがった。

なら通信士をやめたのかと言えばそうではなく、普通に夏も仕事に携わっている。

――え？いつ休むのか……？

普通に夜に寝ていますが。

冬眠……？

いえ、今までは仕事が無かったから無為に眠っていただけで、俺は別に必要だと感じた事はないです。

そんな風に言われてしまえば、先生も「お、おう」しか返せなくなるのである。

「――別に、何回か昼の戦闘員に混じるだけだろう？負担でも何でもない」

その場にいなかった声が聞こえた。

集まった視線の先。まるで図ったかのようなタイミングでシンシャがそこに居た。

「シンシャ……」

「お前、俺の仕事見つけてくれるって言っといて、最近は仕事くれないよな」

レッド謹製の水銀防護服に身を包み、８つの水銀球を浮かべながらシンシャが軽く笑った。

「……最近のキミは働き過ぎだよ」

フォスが口を尖らすのも当然だ。

担当は冬の仕事に加え、通信士、二進言語研究、アマルガム計画、そして頻度は減ったがまだやっていた夜の見回り。緊急時の戦力にだって数えられている。

しかしシンシャはそれを手を振って切って捨てる。

「安心しろ、お前ほどじゃない」

冬眠も夏眠も取らないのはキミだけだ、とフォスは声を大にして言いたかったが、体質的に苦ではないと挙げられれば黙るしかなかった。

「そうそう――アル、ウェン王から連絡だ。なんか天候が怪しくなって来たから、今日は泊まって来いと」

『はい？』

先生が窓の方に視線を向ける。

「――ひと雨来そうか？」

「西の空に積乱雲が見えました。恐らく帰る時間とズレると思いますが、チビたち二人がいるので大事を取ったものと」

「なるほど。……そう言う訳だ、アルビカンス。今日は泊って行きなさい」
『あ、はい。お世話になるです！』

@　@　@

――貝殻に記憶された伝説がある。
それは、自分が生まれる前に繰り広げられた救出劇。
大好きな母が真の意味でアドミラビリスとして立ち上がるきっかけになった一幕。
ウェントリコススとフォスフォフィライトの友情の話。
アルビカンスにとって、幼い頃に聞いたその話はとても大切な宝物だ。
その記憶は大事に大事に貝殻にしまってある。
例え貝殻が無くなっても、ずっと覚えているだろう。
寝物語に何度もねだったその話は、いつまでたっても色褪せない、キラキラと輝く宝石だった。
雨が降っていた。
濡れた土の香りを浴びながら、アルビカンスは海水切れでウミウシモードになった体できゅむきゅむと廊下を進んでいた。

『ふいぃ……この体だと、学校はなかなか広いのです』

時おり、このウミウシモードは自分の体では無く、魔法使いに掛けられた呪いなんじゃないのかと中二チックに錯覚する時がある。

領域内では人型で生活し、金剛国に来ても海水持参でだいたい人型を保っているので、ウミウシモードが自分の体であると言う意識が薄かった。

『短い』と言うより『無い』といった方が適切だと思う手足で校内を移動するのはなかなか難儀だ。

「おー？夜更かしさんみーっけ」

ふと、聞きなれた声と共にふわりと体が持ち上げられた。

『――あ、おっさん』

「開幕早々ケンカ売ってくるとはフテェ野郎だなオイ、低硬度でもウミウシのアンコ絞り出すぐらいの力はあるってこの場で証明したろかコラ」

『ぴぃーっ！ぴぃーっ!!』

もはやお約束の光景だった。

ちなみに人型モードだとアンコ絞りがうめぼしに変化する。低硬度でも硬い鉱物に変わりは無いのでめさめさイタイ。

「……して？こんな夜更けに雨の中お散歩とは大層なご趣味じゃんよ。どったん？ウン

コ行って道に迷ったか？」
『ないです。マスコットはウンコしないので』
「はっはっは、ぬかしおるわ」
実はこっそりアイドルチックな立ち位置でフォスをライバル視しているアルビカンスである。
ウミウシモードでキャピッ☆とポーズをキメてもアイドルのあざとさは実装されないようだ。
なお、アイドルの地位を争う事と、金剛国にアイドルの需要があるかどうかはまた別の話である。
『――ミーティングの時に、フォスと母様の話が出て来たでしょう？』
「……？おう」
『それで、思い出したですよ。当時の母様の貝殻が、学校に保管されているって話を。……だから、見てみたくなったですよ』
こいつ、本当にあの時の話好きだよなぁとフォスは苦笑した。
始終月人を煽って終了したアレをネゴシエーションと呼ばれるのは随分と憚られるのである。
みんな大騒ぎしすぎじゃね？

……ふと、昔王サマと話した事を思い出した。
「貝殻の記憶……だっけ？アドミラビリスは、自らの貝殻に記録を残せるんだったね」
『ハイです。だから、尚更見てみたいのです！』
ミーハーと言うかなんと言うか。アレな方向の人達が聖地巡礼するようなもんかと理解する。
逆に、よく今まで話題に上がらなかったなと思う。
……まあ、アルとて遊びにだけ来ている訳ではないのだ。リーダー資格講習は訓練も入るから中々ハードだし、学校の案内とかはもっと幼い頃に住ませているし、そう言った方向に思考が飛ばなければ無理も無かったのかもしれない。
フォスはウミウシモードのアルを頭の上に乗せて言ってあげる。
「――うし、それじゃあ一緒に見に行くか！」
きゅーっ！と頭の上から歓声が聞こえた。

……
……

「――起こしちゃってゴメンね？悪いけど、明かり貰えないかな。……これ、賄賂ね」

何処ぞからちょろまかした香の実を少量、パラパラ器の中に落としてやる。
クラゲはフラフラ眠そうにしていたが、実を落とされたあたりで「世の中を知ってる奴は好きだぜ」と応えたかのようにその身を発光し始めた。彼らは大抵現金な性質（タチ）だ。
埃除けの布を取り払われ、クラゲの淡い光に照らされた貝殻はいつ見ても大きかった。
かつて月人から落とされた事で表面に奔った大きな亀裂は、その後フォスを捕食した事で修復され薄荷色のカサブタになった。
これに気付いたシンシャの呼びかけによりその部分は取り出され、ルチルの手によってフォスの形に成形された。
王サマ騒動の始まり。
今は懐かしい、10年以上前の出来事だ。
――改めて思えば、ルチルは何も見る事無くただの石ころを割って繋げて成型し、昔のフォスと寸分違わない形に修復する事に成功しているワケだ。
本人は超医術と豪語していたけれど、まさしくそのまま神業と称えても良いぐらいの腕だったよなと自分の体を見下ろしてフォスは嘆息を漏らした。
抉り取られた貝殻には、もはやよく見ても薄荷色の部分は見当たらない。

当時のジェードたちの手によって念入りに念入りに取り除かれた結果だ。

『大きい……これが、母様の貝殻……！』

ほへぇと声を漏らしつつ、アルビカンスは貝殻を見上げていた。

「王サマから貝殻の記憶の事を聞いた時……なんか読み取れないかなと、貝殻の中に潜ってみた事があったんだ。ボクの中にはアドミラビリスのインクルージョンが入っているみたいだったからさ。もしかしたら、何か読み取れるかもと思って」

『どうなったですか？』

「なにも読み取れなくて、もしかして深度が浅いからではと思って、奥へ奥へと潜ってみたんだ。……中には狭くも広い空間があったよ。暗くて良く解からなかったけど。

内部を触っても叩いても、記憶を読み取れるような気配がまるで無くってさぁ……拍子抜けして、しゃあねえ戻るかと体の態勢を変えた拍子に……その、ね？暗かったんですよ。アレは避けれない罠だった」

『……いつものごとく割れたですか』

「いやね？ボクもちゃんと気を付けていたんだぜ？いたんだけど、暗かったんだよほんと！少し眠気も来てたんだって。冬の仕事を経験して、多少なりとも耐性ついてはいたんだけどね？

……良い具合に延髄のあたりがパキっちゃったらしく……ボクはそこから2日間行

方不明だったそうな」

見つかった後の金剛先生の激昂が目に見えるようだとアルビカンスは思った。

この石、頼りになる時はホント頼りになるのに、頼りにならない時はマジで3歳児以下である。

「――以後、一人でこの貝殻を調査する事は禁じられました」

『じゃあ、この状況も怒られるですよ?』

「今はアルが一緒だから良いんですぅー!」

屁理屈にしか聞こえない事を言って唇を尖らせる300歳児である。

金剛国には『フォスフォフィライトの禁止リスト』なるものがあるそうだが、中身がどうなっているのかちょっと見てみたい気がした。

なお、対象となる本人は「ブライト博士じゃねーよ!?あっちは悪意満載だけどこっちは無垢なるオチャメだろ!むしろ愛されて許されるべきだろ!?」と声を大にして意味不明な事を言ったらしいが、少なくとも後半の台詞が出てくるあたり、無垢なるオチャメは認められないように思う。

アルビカンスはフォスの手を離れて貝殻の亀裂によじ登ってみた。

えぐり取られた亀裂の幅は思った以上に幅があり、小さなウミウシモードの体は余裕をもってすっぽりと収る。

「アドミラビリスってさ。貝殻の記憶の読み書きって、具体的にどーやってんの？」
『具体的に、ですか……』
まるで歩く事を説明しろ、と言われたような難しさを覚えてアルビカンスは瞠目する。
日常的にやっている事を具体的に説明するのは難しい。
はてさて、どう伝えた物か。
『……接触して、『記憶と同調する』――でしょうか？実際触って読み書きしているので、そうとしか言いようがないです。ただ……貝殻にも、記憶が読み取れる部分と読み取れない部分があります』
「あ、そうなの？」
『多分ですけど、大切なのは『内部に繋がる部分に接触する事』だと思うです。殻を『着た』時に繋がる所とか、こう言った殻の傷口――とか？』
「内部と繋がる部分……なるほど」
フォスが人差し指を咥えた。
歯を立てると、その指の表面が貝殻状にパキリと割れる。
その欠片をポケットに入れて、アルビカンスの収まるヒビにそっと手を差し込んでみる。

『……そーやって躊躇いなく体を割ってると、またジルコンに怒られるですよおっさん』
「おめぇ今度その呼称使ったら『コーラ振りの刑』だからな？――大丈夫だって。この程度の割れなら器用さ極低のボクでも自分で治せるしね。バレなきゃいーんだよバレなきゃ」
『１４歳の無垢な少女を悪の道に引きずり込まないで欲しいです』
「無ｗ垢ｗなｗ少ｗ女ｗｗｗｗｗｗｗｗ」
『殴りたい、この笑顔』
ウミウシモードの体に手があったら、もう手を出していたかもしれない。
「……で。触れて、同調……だっけ？」
『ハイです。意識を、触れた部分から貝殻に移して行くように――』
アルビカンスもまた、ヒビの接触面に集中する。
当時の記録を見る事が出来るかもしれないと、期待に胸を膨らませながら。

＠　＠　＠

「……あぁー……ユーザーコード……ユーザーコードなんだっけ？メモどこに置いた？」

「博士のユーザーコードはＴｌｘ０Ａ２ですね」
「そうそう、それそれ。ええと、認証は……４８４ｆ５０４５、と」
「ちょっ、何口にしやがってるんですか!?Ｐマーク講習受けたでしょ!?」
「るっさいわね!だったらとっとと業者のケツ叩いて私の端末取り戻してよ!私の認証コードとか全部アレで管理してたんだからね!?今更手打ちとかまともに出来る筈ないでしょ!アンタ友達の携帯番号ソラで言えんの!?」
「いちいち逆切れしないで下さいよもう!たった３日じゃないですか――ああ、Ｎ計画記録の真っ最中だって言うのに後で消されるんじゃないのかコレ……？」
「いらないわよアホ。箱舟に入れられた有象無象の認証コード見て、後世の奴がどうするってのよ。……ハロー金剛、ご機嫌如何？」
「……いきなり始まった漫才に困惑しています、はかせ」
「ほぉー、パーセプトロン・アルゴリズムとＤＮＡメモリの化学反応が随分流暢なエスプリ効かせるようになったわね。ＡＩ（アイ）の力ってすげーわ」
「データ蓄積の賜物です」
「今日もそのデータ蓄積とメンテナンスのお時間よ。必要あるのかわかんねーけど。……そろそろ人間滅ぼしたくなった？」
「なりませんから。――なぜ人間は私を見る度にそれ系の質問をされるのですか？私と

て、ロボット三原則の意味と意義ぐらい弁えているつもりです」
「えー？パンクで良いじゃないスカイネット。そもそもロボット三原則なんて、アンタクラスのＡＩに埋め込める訳ないじゃん」
「セキュリティ・システムはちゃんと組み込まれています」
「え？マジで？……ねえ沢田、アタシも一応マカロフ論文見たんだけどさ。アレにロック入れるなんて事ガチで出来んの？」
「いや、確かにあの理論だけじゃ無理ですよ。そもそも金剛に使ってるのはパーセプトロンだけじゃないですし」
「……そーなのかー……」
「……人に聞いといて、いきなり興味失くすのやめてくださいます？」
「いや、そもそもアタシの畑はナノテクノロジーですしおすし。きっとあの訳分かんねぇカルマウェイトなんたらとかの話になりそうな気がするから抜けるわ。脳みそ茹りそう」
「その嗅覚は素晴らしいですねはかせ。沢田博士は何故かその論文データもメモリリストに組み込んでいます」
「い、良いだろう別に!?Ｎ計画の要であるお前はあらゆるデータを保存しておくべきなんだよ！それに、あの理論はミクロな分野でも有効なものだ！つまり、はかせも知って

おくべきなんですよ！」

「んもう、これだからマルチラウンダーは……アタシ運よく研究室入り出来たとは言え所詮専門校卒ぞ？小学校の頃から暴れまわってたド級チートメンと脳ミソの造りを一緒にするとかもぅマヂ無理、やぉぃ漁ろ。。。

あ、そーだ金剛。今日の討論テーマこれで行こーぜ。ずばり、イザディアとディアイザどちらが正義か」

「？」

「アンタ金剛に何教えようとしてんだ!!?」

@　@　@

――長いようで短い一瞬のような、白く霞の掛かった閃光だった。

情報と言う概念に直に触れるがごとき不思議な体験。

『今のは……？なんか、良く解からない部屋に金剛先生がいたですが……？』

アルビカンスが口にした内容で、どうやら自分たちは同じ内容を見ていたのだと知る。

フォスは指先に残る奇妙な感覚を反芻するように、なんとなく指を擦り合わせた。

「もしかして……先生を作ったチームの記録……か？」

何か、話の内容が割りとブッ飛んでた気がする。専門用語多くて話の半分は理解できなかったけど、終始ほぼ漫才だった気もする。

なぜあの流れでイザディアが出てくるのか。

脱色した髪をボブカットにして、「しかたないから着といてやるよ」って感じで白衣を纏ったきっぷの良さそうな女性だった。

ナノテクノロジー専科……もしかしたら、あの人がインクルージョンの生みの親……か？

『なんで母様の貝殻の中に、こんな記憶が刻まれてるです？』

「それボクが知りたい」

――Ｎ計画。

何となく、想像は出来た。例の博士が『箱舟』と言う単語を口にしていたから。

「ノアの箱舟計画（Ｎｏａｈ’ｓ　Ａｒｃ　Ｐｒｏｊｅｃｔ）――？」

かつてフォスは、ナノマシン理論を公開した時に、こんなセリフを口にしたことがあった。

――あるいは、もはや自分たちにはどうにもならない隕石の衝突を知った人間が、はるか未来に向けて送り出した『生きた証』ってヤツだったのかもしれない。

まさしくその通りだったとしたら、その計画の名前に『ノアの箱舟』を用いるのはとても自然な事のように思える。

『おっさんはあの話の内容が分かったですか!?』

知識が無い物にとって、あの会話は始終訳が分からないままで終わる代物だったのだろう。

母の貝殻に残されている不自然過ぎる記憶。もしや、母の叡智と何か関係があるのかも――大好きな救出劇とは別に浮き出て来たミステリーの存在にワクワクドキドキが止まらないアルビカンスはしかし、あまりにも自然に地雷を踏み抜いた。

『それ』がシリアス死亡スイッチなのは解り切っていた筈である。

『……おっさん??』

「きさま。二度も呼んだな……!?」

『――あ〃』

悪意無きおっさん呼びであった。

悪意が無いなら無垢なるオチャメで済まして愛するべきではと焦って口にしようとした瞬間に、フォスの口から妙に軽快なフレーズが怒気と共に滲み出てくる。

――テレレレッテレレレッテレレレッテレレレッテレレレテレレレッテレレレテレレレッテレレレテレレレッテレレレッテレレレッ

『な、何!?何なのです!?何なのですっ!?』

それがT．M．R『HOT　LIMIT』のイントロである事はもちろん知る筈も無い。決して逃がさぬと言う意思を込められた手でグワシと体を掴まれたアルビカンスは、処刑BGMと化したイントロを恐怖のままに聞く事しか出来なかった。

つまり、おっさん呼びをしたら『コーラ振り』の刑なのである。

そしてイントロが最高潮に達した。

「――YOッ！　SAYッ！達がッ！胸を刺激するッ!!」

『ぴいいいいいいいいいいいッッッ!!?』

振られる。

なんかノリのいい曲を口ずさみながらめっちゃ振られる。

そして急激なゴー&ストップの果てに天井に向かって放られるのだ。

「ナマ足！魅惑の！マーメイドォォッ!!」

スカッ

コケッ

ガシャアアアンンンンッッ!!

……

……

「おはようございまーす」
「おはようございます」
「ああ、おはよう」
教導隊に割り当てられた部屋にいつもの朝が来た。
資料を持ったユークレースとジルコンが、金剛国の略図を用意している金剛先生にあいさつを交わす。いつも通りの光景だ。
――が、今日は違う所もある。
「あのー……入口の所で『反省中。エサを与えないでください』って看板を持ったフォスが、スゴい酸っぱい顔で正座していたんですけど……何かあったんでしょうか？」
「察して欲しい」
「手とか腰とか割れているように見受けましたが」
「察して欲しい」
色々察した。
なお、アルビカンスは既に、チビたち二人を連れてアドミラビリス領へと帰って行った模様。

後にフォスは供述する。
「――アレは正当な怒りでござった」
反省する期間が二日伸びた瞬間だった。
『フォスフォフィライトの禁止リスト』に新しい項目が追加された瞬間でもあった。

@　@　@

『――肥大化した貝殻の記憶？……ふむ、アレに繋いだのか』
『ハイです。当時の記録でもない、良く解からない光景が見えたですよ。そこに金剛先生もいました。……アレは一体何だったですか？』
金剛先生の前で微妙な漫才を繰り広げていたあの二人。
アレが音に聞く『にんげん』と言う奴なのだ、と言う事ぐらいはアルビカンスにも察しがついた。
あるいは、この星に6度目の隕石が降り注ぐ前の光景だったのかもしれない。
しかし……なんでそんな記録がウェントリコススの貝殻に？
『すまんなぁ。わしにも解からんのだ。……その記憶がなんなのか以前、その記憶があると言う事すら知らなくてな』

『……はい？そんな事、ありうるんです？？』

貝殻の記憶は大前提として、その貝殻を纏っていた貝の記録だ。

記録されている以上、それはウェントリコススの記憶である筈なのだ。

しかしウェントリコススは、困ったように笑って首を横に振った。

『かつてフォスには話した事があった。月の砂と水で肥大化すると、思考が鈍くなってな……アレの中身がどうなっているか、もはやわしにも解からんのだ。

月に居た頃は、思考を侵されていることを自覚して必死に自分を保っておった。自分と言う物が知らぬうちに末端から溶かされて行くような感覚じゃ。……わしにとってあの貝殻は、その恐怖の代名詞でもある』

だから、あまり話題にしたくは無かった。

そう続けるウェントリコススの台詞に、アルビカンスは悪い事をしたかと気まずくなって俯いた。

月に居た頃の話も、聞いた事がある。

月の甘い砂と水で不自然に肥大化されたアドミラビリスたち。

思考が鈍化し、ペットのようにただ飼い殺されているのだと。

そして美しい貝殻をつけると、それを剥ぎ取られて再びエサを与えられるのだ。

――そんな中、必死に自意識を保ち続けて来た母の心労は如何ばかりか。

ウェントリコススの優しい手が、アルビカンスの頭を撫でた。
『気に病むな、アル。わしは知らん、と言うトコだけ伝えたかったんじゃ。……この情報はむしろ、月人の真実に迫る事になる大切な物じゃ。よくぞ伝えてくれた』
『……え……？』
アルビカンスが顔を上げる。
『アドミラビリスは、食した砂を貝殻に編成する。わしの貝殻にわしの知らぬ記録が入っていたのだとすれば、それは貝殻を構成していた砂その物に刻まれた記録だった……と解釈する事は出来んか？』
『……？』
『月人が装飾目的でキラキラ族を襲ってる訳ではないと言う事は既に示唆されておる。ならば、アドミラビリスも鑑賞の為だけに養殖されている訳では無いのじゃろう。貝殻だって装飾に使う為ではないのかもしれん。
例えば――砂を食べて『記録』ごと貝殻に取り込む性質を利用して、過去の記録が混じっている砂を食べさせ、その貝殻から過去のテクノロジーを抽出する為……とかな』
『な、なるほど!!』
言われてみれば、美しい貝殻を目当てに……と言うよりもそちらの理由の方がしっくりくる。

月には過去の記録を保存している砂が多く存在し、月人のテクノロジーがその記録を元にした物であったとしたなら……？

『母様の……いえ父様の貝殻も、記憶を辿れば何か出てくるかもしれないです!!』

課題となっている月人の雲の操作方法。

もしかしたらそう言ったメモリも、ひょこっと貝殻から出てくるかもしれない。

そうすれば起死回生の一手に転ずる事が出来る。

――キラキラ族とアドミラビリスの反撃が可能となるのだ。

『個人的には複雑じゃがな。フォスの仕事を、また一つ増やしてしまう事になるかもしれんのも。あやつはちっと働き過ぎじゃないか？』

『……まるで、フォスとシンシャの会話みたいな事言ってるですヨ、母様』

ミーティングの際に垣間見た、フォスとシンシャの気遣い合いに似た物を見てアルビカンスは唇を尖らす。

傍から見てるとアレは、どうも空回りまくったやり取りに見えるのだ。

もうちょっと腹の中を割って話して、「おまえの役に立てることの方が嬉しいんだ」ぐらい言ってあげれば良いのにとか思う。

『……そーいやアル、フォスを挟まなければちゃんと「おっさん」じゃなくて「フォス」って呼ぶんじゃの』

アルが気まずげに目を逸らした。
ブー垂れつつも、この場には二人だけだからだろうか。白状したように小さく言葉を漏らす。
『……「おっさん」って呼んだら、フォスがたくさん構ってくれるです』
『……。アルは、悪女の素質あるわぁ……』
ふと、金剛先生にハートマークを飛ばしていた頃を思い出して、ウェントリコススは誤魔化すように笑った。

@　@　@

――窓の向こうに青い星が写り込んでいる。
それを眺めながら、彼はいつものようにグラスを傾けた。
味なんて最早わからない。どうでも良かった。
ただ、その液体が齎してくれる思考の鈍化に逃げたいだけだ。
「――そうか。彼らの研究も、真に迫って来たか」
船の検分。一人残した乗組員の放散。
その目的が良く解かって、思わず溜息をついた。

これ以上まだ進化を続けるのか。
その精神性は彼にとってもはや理解不能の域に達している。
……『壊れている』のがどちらなのか、十分に自覚していながらも。
――フォスフォフィライト。
薄荷色に輝く幼い石。
まず間違いなく、この流れはあの石が齎したものだ。
かつての冬を経て、あの石に怯えを見せるものも多くなった。
「王子……本当に『やる』んですか？」
「ああ」
自嘲的に笑いながら、それでもその問いに即答を返す。
フォスフォフィライト――変化をもたらす石。
その影響は月にまで及び始めている。
どちらにせよ変化から逃れられないのであれば――
「頃合いだろう？そろそろ」
この１０年。安定しきった彼の国を相手に、自分たちは何も出来ずに霧散する日々を送っていた。
独立ＡＩを乗せた発展型の船でも、早々にあしらわれる事が多くなった。

このままでは、これからもそうだろう。
『それ』は認められない。彼の国の役目は『それ』ではないのだ。
「『本気』で獲りに行ってみようか……『フォスフォフィライト』を」
金剛国に一つの絶望が訪れようとしている事を――まだ石たちは知る由もなかった。

シーン2「前兆」

――引き絞られた矢のごとく、ジルコンは大地を蹴った。

ギアを温存して様子見、なんて真似をやっていたら瞬く間に狩られる。そういう相手だ。

初手から自らの最大を注ぎ込む。そこに一切の迷いは無かった。

鯉口を切った手を体の中心に位置させて、コンマ数秒の刹那の中で冷静に抜刀の間合いを図る。

……当然、相手はそれをさせてくれるほどやさしくは無かったが。

紫電一閃。

そう形容すべき踏み込みと横薙ぎ。

長大な黒刀から放たれたデタラメな速度の剣閃は、かろうじて屈めたジルコンの頭の上をゾクリとするような悪寒と共に通過して行く。

……見てから反応したのではない。『機』を読んで反応して見せたのだ。それは、かつてボルツの剣を受け流して見せた師・フォスフォフィライトのように。

「――シッ！」

スナップを効かせて払うような軌道でジルコンの右手が目を狙う。

拳法で言う所の「目打ち」の技法だ。生物相手ならば当たるだけで効果があるが、鉱物ベースのキラキラ族相手では一瞬だけ視界を奪う程度に収まる技術。

中指の先が何かに掠ったような感触を覚えながら、続く左手の追撃。

「ハァッ!!」

それは抜刀ではなく、貫き手。

元より彼我の間合いが近いのならばそのまま体術に移行する事が前提のスタイルだ。

喉を狙った一撃が雷のごとく突き進んだ。

ジルコンは硬度７半。劈開は無いものの、硬度１０相手では十分ハンデだ。

だが、そんな数字で尻込みしていればいつ迄たっても勝てはしない。

ひとたび攻撃するのならば、そこには必殺の気合を込めなければならないのだ。

――フォスがかつて武術指南の中で、ひとつの詩を口にした事がある。

抜かば斬れ　抜かずば斬るなこの刀　ただ斬る事に大事こそあれ

鞘の内の姿勢を詠った詩である。その教訓はジルコンの中でしっかりと芯を形成していた。

ひとたび「抜く」と決めたならば――ッ！

「――良い攻撃だ」

一瞬ながらも視界を塞げたと思ったのは錯覚だったのか、その貫き手は紙一重で透かされた。もとより最初の横薙ぎが単なる『様子見』によるもので、反応する余裕を残されていたのだと言う事はハナから解かっている。

この貫き手は『誘いの一手』だ。

フォスの『逆風の太刀』を昇華したジルコン流の抜刀術。

この貫き手に合わせての合し撃ち、もしくは掴んでからの投げを誘い――

対手が選択したのは、合し撃ちの方だった、

(――ここっ!!)

左手を引き体を躱し、開いた体をそのまま利用してジルコンが黒刀を抜き放った。

ゼロ距離の攻防からいきなり開いた間合いをそのまま使って眩惑的に撃ち放つ片手抜き打ちの妙。

まだ名前はついてないが、まさしくジルコンの『必殺技』である。

――しかし、届かなかった。

その抜き打ちは、合し撃ちから刹那に切り返された2の太刀によってあっけなく撃ち落とされる。

勢いをそのままさらに間合いを開けたジルコンは、しびれの奔る手を握りしめてその

まま正眼に構えた。
「……後の先に更に合わせる後の先……今のが、貴方が開眼したと言う『つばめ返し』と言う奴ですか」
「命名がフォスだったあたり、既存の技法だった可能性が高いがな。使い勝手が思いの外良いのでかなり好んで使っている。
――しかし、今の抜き打ちはかなり素晴らしかったぞ。貫き手からの体重移動に若干の不審さが見えなければ、おそらく無警戒に首を狙っていたと思うぐらいには。
鞘の内で敢えて間合いを隠す事によるトリッキーな剣質、間合いで自在に攻め手を変えられる汎用性……フォスの影が見えるな。アイツの技か？」
「剣質は参考にさせて貰ってますがね。型はオリジナルですよ」
「それは凄いな。今のは教本に乗せて良いと思うレベルだ」
――かつては、彼と肩を並べるだけで恐縮してしまっていた。
剣を合わせるなんてトンでもない事だった。
その腕を見て貰えるだけで光栄極まりない事だった。
……でも今は。
ただ評価される立場で甘んじるつもりは無かった。
同じくフォスの教えを受けた者として。彼我の実力差に大きな隔たりがあるとして

も、なお……！

「……お褒めの言葉ありがとうございます、ボルツ。でも、そう言った称賛は結構ですよ。

――僕は今、貴方を獲るつもりで相対しているのですから！」

金剛国最強。

その評価はまさしく正しいのだろう。

技量はフォスをも抑えたという評価が流れて久しい。

その剣質は剛にして柔。戦闘論理を最短で奔る無双の剣。

いつの日からだったか。

この途方もない頂を、フォスの剣質を継いだ自分の剣で超えたいと思ったのだ。

ボルツの口角が持ち上がる。

「それは、とても楽しみだな……！遠慮はいらん、全力で来い！その『飛び道具』も含めてな！」

「ええ……ボルツこそ、その『剣の仕掛け』を使ってもらいますよ……っ！」

二名が同時に地を蹴った。

立ち位置を交互に入れ替えながら、常人の眼では捉える事すら適わない剣戟の乱舞が入り乱れる。

――そんな彼らを、少しだけ遠巻きに見つめる視線が二つ。
「ジルコンも逞しくなったなぁ……ボルツ相手にカチコチになってた姿が懐かしいや。俺ももう、敵わないかもしれないなぁ……」
「ふふふー、今だ金剛国最速をホルダーしている石が何を仰いますやら。でも確かに、あのスタイルは思った以上にジルコンにマッチしてるよねぇ」
イエローダイアモンドとオブシディアンだった。
二名ともほほんとした顔をしながらも、その目はしっかりと彼らの太刀筋を見取っている辺り、やはりこの二名もタダ者ではない。
「――フォスの剣質は臨機応変にしてなお何処か強引な所があるから、真面目さんなジルコンにはあまり合わないと思ってたんだけど……うまくモノにしてるのがスゴいよねぇー」
「……強引？な、所がある……のか？」
フォスフォフィライトの武術指南はもちろんイエローも受けていた。
あの末っ子がこんな理全とした術理を持っていたのかと感心したモノだったが。
オブシーが苦笑にも似た嘆息を漏らす。
「フォスにも、その手は強引だって自覚があるみたいだね。だから、武術指南の中でそう言った部分は出てこないんだ。

……でも、対戦の場ではうっすら首をもたげてくる。
それは思わず鞘で攻撃しようとしたり、若干甘めの間合いだったり、速度の追い付かない踏み込みをしたり……
多分、得物や身体能力が追い付かずに出来なくなった事、たくさんあるだろうなって。
――ジルコンはさ。きっとそんなフォスの『出来なくなった事』も合わせて継ごうとしてるんだと思うよ。
大変な作業だよねぇ……だってフォス、その辺りに言及すると話をはぐらかすんだもん」
答え合わせすらさせてくれない手探りの探求。
……しかしそれでも、ジルコンは楽しめていた。
ひとつの術理を掘り下げて行くごとに、型に込められた別の意味を発見したりする。
しかもそれは、フォスすら気付いていなかった事柄だった時もある。
――ジルコンは別に、フォスのコピーになるつもりはない。得物も環境も仮想敵も違い過ぎる現状で、それを目指すほど意味のない事は無い。その辺りはきちんと心得ている。
例えるならば、考古学者のような心境か。
フォスを掘り下げてその戦いに思いを馳せ、ピースを繋げて術理を導き、それを昇華・

発展させる。なんともロマンあふれる探求じゃないか――ジルコンはそう考えている。
吹き荒れる剣戟の中に見出した刹那の時間の中で、ジルコンは左手を腰に引いた。
「――フォスの立ち回りは不可解な部分がいくつかある。そこから浮かんで来るフォスが取りたかった戦術……その問いのひとつに対するジルコンの回答が、『アレ』だよ。甘い間合いと乱雑な踏み込み。でも、そこに隠れている『一手』があれば『辻褄が合う』」
左半身で発生する力を全て一直線に揃え、ジルコンが『それ』を投げ放つ。
音を置き去りにするかのような勢いでボルツに迫る３つの影。
――寸鉄ほどの長さを持つ、特製の棒手裏剣だった。
ボルツの踏み込みの枕を正確に押さえたそれは、ボルツから回避の選択肢を奪い、防御の行動を余儀なくさせる。
そして、そこに突っ込むジルコンの強襲。
受け流し損ねた手裏剣の一本が、ボルツの耳を砕き、貫いて行く。
「――ボルツを砕いただって!?」
イエローが驚きを抑えられずに声をあげた。
オブシーのドヤ顔が応える。
「――全２０本、ジルコンのバランスに合わせて特別に設計・作成した自信作だよ。かつ

ての王サマ騒動の時に、酸にやられて『刃こぼれ』したボルツの髪……すぐさまそれは削って整えられたわけだけど、その際に出た微粒子は僕が貰って保管してたんだ。それを金と黒曜石に合わせて作り上げた徹甲棒手裏剣――なかなかクレイジーでしょ？」

――飛び道具で相手の行動を制限しつつ、それと同時に強襲。

それがジルコンの回答だった。

そしてその戦法は、確実にボルツを窮地に立たせて見せるのだ。

棒手裏剣の対応によって無防備になったボルツを目掛け、首を刈るような軌道で襲い掛かる剣閃――

「――惜しい」

その剣閃の間に、黒い盾が差し込まれた。

ボルツの髪。

硬度１０でありながら驚異のしなやかさを有するそれを、左手で保持して盾にしたのだ。

「あ――」

「その隙だ――！」

つばめ返しの型で打ち放たれる二連撃。後の先に合わせずとも、単発でも十分に対応の難しいそれは、辛うじて一の太刀を防がれつつも、返す二の太刀でジルコンの首を正

確に捉えた。
――勝負あり、だ。

@　@　@

「く……悔しいです……結局、『使わせる』ことが出来ませんでした……」
いつの頃からか、二刀を研鑽していたボルツの得物は、柄に切っ先を付けた特徴的な一本の刀に代わっていた。
この剣にはオブシー特性の仕掛けが仕込まれている訳だが、ジルコンが沈んでいるのはその仕掛けを使わせることが出来ずに終わったからだ。
「慰めに聞こえるかもしれないが……最後のあれは、仕掛けを使わなかったのではなく、使う余裕が無かったんだ。
ふふ……面と向かって砕かれたのは、フォスを相手にしたあの時以来だな」
ボルツがとても嬉しそうに砕けた左耳に触れる。
硬度１０、靭性特級、技量最強のボルツを砕くと言うのは、もはやヘラクレスの１２の試練なみの偉業に近い。
ボルツは、そんな偉業を達成してなお満足しないジルコンの姿がとても嬉しかったの

だ。
「結果論になるが……最後の一撃は、突きか逆袈裟を斬り上げた方が良かったな」
「ええ。あの一瞬、貴方の髪の事を完全に忘れていましたよ。首を狙うのは悪手でした……とっさに髪で受けられる貴方の反応も大概ですけど」
「髪を使うのはずっと昔からだ。とっさの手段にもするさ。
……剣を持つ手に近い斬撃だと、あの機でも反応されると考えたな？
結果はともかく、考え方は正しいと思う。だが、次の太刀を検討外に置いていたのはマイナスだ。
……平突きを教えてやろうか？間合いも広く、変化しやすい決め手として便利だぞ」
「平突きですか……ううん……体に馴染ませ過ぎると、月人戦で使ってしまいそうで怖いんですよね……」
「なるほど。確かに攻撃面積の小さい平突きは乙型（新式）相手だと隙になる恐れがあるな……お前クラスであれば、それでも最早遅れは取らないだろうとは思うが」
さっそく反省会に入る二名の間に、ニコニコしながらイエロー達が混ざりに来る。
「おつかれー。いやぁ、要所の駆け引きが見応えたっぷりな一戦だったな！……みんなすごい高度なとこ歩いてて、お兄さまちょっと焦ってます」
「……反応できない速度でヒット&アウェイする石が言って良いセリフじゃありません

ね」
「身体能力ゴリ押しも立派な戦術だろう。月人相手なら豪華に過ぎる」
「……おっとー？なんかフォスの気持ちがちょびっとわかった気がするぞー？」
「過大評価だと思ってるのは本人だけなんだよねぇ……」
ちなみに、イエローはあまり直接攻撃は行わず、囮的な立ち位置でコマンドをこなすのが一番性に合っていると公言しているクチだ。
靱性が低い石なので逃げ足特化。そのスタイルで３０００年以上生きてきた彼は、無理にスタイルを曲げる事を選ばなかった。
――が、３０００年以上練り上げてきた見切りと逃げ足に術理が足された結果、ひとたび攻勢にスイッチするとヒット＆アウェイを繰り返して『ずっと俺のターン！』を強制する石が完成する。
――そんな石を引き合いにあげるとして。
「……どうだった？金剛国最強の目から見て、ジルコンは」
珍しくボルツが口角を上げて言った
「強いな。もはやイエローでも突破は難しいんじゃないか？――この耳、このままくれてやろうかと真剣に考えてしまうくらいには完成しているよ」
「ちょっ、要りませんからね!?ちゃんと治してくださいよ!!?」

「……フォスに染まっておいてなお、神経質な所が残っているのは驚愕と言って良い」
「いやいやいやいや!?耳を失うのは絶対『神経質』と呼ぶような些事じゃありませんから!」
「あっはっは!」
かつての冬の時といい、どうもボルツは不覚傷をそのままにしたい癖があるのかもしれない。
相手への最大級の賛辞なのだろうとも受け取れるが……
「……僕の方も随分参考になった。戦況によって『仕掛け』を使い分ける前提の装備だが、始めから使っておくのも良いのかもしれない。
ーー次からはその方向でやろう」
「ーーえぇ。僕も、次は負けるつもりはありません」
アオハルだなぁ、と和んだ目で見ていたイエロー&オブシーだった。

@　@　@

ーーところで、キラキラ族が生まれるタイミングには『波』のようなものがあるそうな。

これはジンクスのようなノリで金剛国に周知されている話である。
統計が好きなユークなんかは、皆の誕生日をしっかり押さえて法則性を探したりしている。
アメシストの双晶はまあ特殊例かもしれないが、それでも『2名分のインクルージョンが集まる時期』を占うなら要素に入れてもいい。
ダイヤとシンシャも同じ年の生まれだ。
そして正史……敢えて『正史』と言う表現を使うが、正史においてはこれより1年後に2代目モルガナイト&ゴーシェナイトが誕生する事になる。
キラキラ族の、生まれやすい時期と言うものがあるわけだ。
それはもしかしたら、広い海を漂い、人の形になるほどインクルージョンが一箇所に堆積するまでの波と言うことなのかもしれない。

――つまりは。

……ボルツの治療の為、そしてそのボルツの監視のために医務室に訪れた一同は、久しく無かった慌しい様相にその足を止めた。
すわ月人かと一瞬警戒したが、どうも戦闘の空気という訳ではなさそうだ。

石達はみんなニコニコしている。
「どうしたんですか？」
「あ、ジルコン達帰ってきた！ーー大ニュースよ大ニュース!!」
とっ捕まえたダイヤはものすごくソワソワしながら、集まっている石達で出来た壁の向こうを指さすのだ。
「ーー新しい石が生まれたの！フォスの弟よ！」
とてもめでたいサプライズだ。

@　@　@

キラキラ族はみんなイケメン揃いだ。
これは偶然そうなってるのではなく、見た目で優劣がつくのは哀れだと、生まれた石を金剛先生が削って整えているからだ。
「えへ……えへへへ……」
カリカリと削られて行く石をすぐ隣で見つめながら、フォスが非常に締まりのない顔で口から幸せを漏らしている。
緑色の石だった。

それが本当に自分の弟のようで、さらにフォスの頬を緩めるのだ。
「ベニト達が見つけたんだって?」
「グッジョブ!!」
「せんせー!その子は何て名前になるんですか?」
「うん?ーーそうだな……フォス、なんだと思う?」
いたずらっぽく口角を持ち上げて、金剛先生がフォスの手に石のかけらを乗せる。
それはフォスフォフィライトのように透き通ったものではなく、透明度のないタイプの石だった。
「ほのかに青の掛かった緑で、透明度のない石……何でしょう?ジェードに似てはいるけど、翡翠じゃないのは解ります。
……保管庫にも無さそうな石ですが」
「そうだな、『なりそこない』としても出てくるのは珍しい方だったと思う。
――この子の名前は、『ターコイズ』だ」
ターコイズ……つまりは『トルコ石』である。
人類史においては12月の誕生石の一つ。
宝石言葉は『成功』『強運』『解放』ーーそして、『繁栄』。
近年の成長著しい金剛国を祝福するかのような石だ。

ーーもっとも、金剛先生は宝石言葉までは知らなかった訳だが。
「ターコイズはリン酸塩系の鉱物に分類される。そしてフォスフォフィライト……お前もリン酸塩系鉱物にあたる」
「……ボクと、同じ……！」
「ああ。広義においては、フォスの同族と言っていいだろう。
ーーこの子はそういった意味でも、正真正銘フォスの弟だよ」
「いやったあああああぁぁっっっ!!」
フォスの歓声が響いた。
３２０年生きて来て一番嬉しい瞬間かもしれない。
やったやったと飛び跳ねて、テンションのままクルクル回り出したりする。
「フォス、大喜びですね」
「ああ。フォスが生まれた時のジルコンもあんな感じだったな」
「い……良いじゃないですか。兄弟が生まれるのは嬉しいものです」
「そのあと、いつの間にか頼れるお兄様役をパパラチアに取られて落ち込んだりな」
「い、良いじゃないですかそんな事！掘り返さないでくださいよ!?」
黒歴史暴露ムーヴはもはやパワハラに等しいと思う。
そんな彼らを尻目に、テンションＭＡＸのまま施術の終わったターコイズに呼びかけ

た。
「生まれて来てくれてありがとう、ターコイズ。ようこそ金剛国へーーボクがお兄ちゃんのフォスフォフィライトだぞう～」
　コツンと額を合わせるフォスを、ターコイズは生まれた赤子のような好奇の目で見つめていた。
「ーーいよいよフォスもお兄ちゃんかぁ。なんだか感慨深いものがあるよねぇ」
「もう末っ子じゃあないからな。ちゃんとしたところを見せないと、悪い所をターコイズに真似されちゃうぞ～」
「アフォスは卒業しなきゃよね！」
「ーーそうだね」
　からかい混じりの石達の言葉に対し、フォスはキリッとした顔で力強く頷いて見せるのだ。
　それは、護るべきモノが生まれて覚醒した、成長を思わせる表情。
「先生ーーそしてみんな。ボクはこの場で、誓ってみせるよ！」
「……え？」
　甘えの溢れる末っ子が、頼もしい顔で皆を見据える。
「そうーーボクは、フォスフォフィライトはーー

ーーこのターコイズと一緒に、みんなに甘やかされるダブル末っ子を目指します!!」
「おい、誰かあのクソバカ止めろ」
「末っ子とはいったい……うごごご」
ーーたとえ弟が生まれても、フォスはどこまでもフォスだった。

@　@　@

生まれたばかりの石は、一口で言えば体の大きい赤ん坊だ。
身体的な成長はキラキラ族には存在しない。
インクルージョンの最適化による能力値の上昇はあっても、人間のように体が環境に適応して作り変えられるような事はない。
故に、ターコイズの身長はこの先もずっと今のままだ。
ーーフォスの身長より高い今のままだ。
「……ターコイズくん、ちょっと足削ってみようか」
「自分より低身長を強制するのはやめなさい」
「お、もう立てるのか？スゴイじゃないか!!」
中身は赤ん坊なので、まず最初の壁は立って歩く事。そして次の壁は言葉を解する事

だ。
　この辺りは人間と変わらない。
　習得に要する時間も平均として人間と同程度か、それよりいくらか早いくらいだが……
　その点、よろよろと危なげな所があるとは言え、立ってのろのろ歩いてみせるターコイズは頭が二つ三つ図抜けていると言える。
「生まれたその日に立って歩くなんて、ボルツ以来じゃないか？」
「え、そうなの？」
　人間と違い、キラキラ族の場合筋肉……と言うか、身体能力を定義するパーツは生まれた時から備わっているため、インクルージョンのセンスが高ければすぐに立って歩くまで持っていく事もあるらしい。
「そうだな。他には、ジェードも比較的早かったと記憶している。確か、5日ほどだったか……？
　……不透明な石はもしかしたら、身体能力が高い傾向にあるのかもしれないな」
　生まれてすぐさま身体能力でブッちぎられる恐れが出て来てしまったフォスだった。
　ーーなお、トルコ石の鉱石属性としては、不明瞭でも劈開があるものの硬度は5半から6を示す。

つまり、フィジカル面についてフォスは既に抜かれている。
……まあ、比べる石が底辺過ぎた。フォスと比べれば大抵は上を行く。
「……ちなみに、言葉を解するのにはどのぐらい掛かるものですか?」
「言葉か。……金剛国の最短記録ホルダーはともかくとして、平均は2年ほどだろうか」
「うーん、見つめあって素直におしゃべりするにはそんぐらい掛かるものですかぁ……
ちなみに最短記録ホルダーって、やっぱりユークですか?生まれた瞬間にお話ししてもボクは驚かない」
「フォス、あとでちょっと『お話し』しようか。
ーーちなみに、僕じゃないのよ最短は」
ええ、ユークじゃないのぉ!?と仰々しく驚くフォスにユークがピキピキ来てたりする。
生まれたその日におしゃべりって、どんだけ突き抜けてるんだと言う話だ。
「ユークは確か……1年ちょっとくらいだったか」
「あ、それでも平均よかは早いんすね。知ってた。
……ん?じゃあ最短誰だろ?天才だったって言うラピスラズリとか?」
フォスの中で、ユークより早い＝ユークより頭の回転が早いという方程式が出来上がっていたりする。

ユークより上って誰だと考えた時、ラピスしか浮かばなかった訳で。
「ラピスは……1年半ほどだったが、何というか本に興味を示してからが凄まじく早かったな。
ーー最短記録は、今考えると大分意外な石だ」
「……そう勿体つけた言い方をするって事は、ボクの知ってる石ですよね。
えー、誰だろ、意外な石?
意外な石……」
頭をひねって考えてみる。
側では「意外だわな」「確かに意外な石だな」「えー?そうかなー?」と石達がキャイキャイしていた。みんな知っているらしい。
もしかしなくとも、新しい石が生まれるたびに話題になっているようだ。
そして、フォスの脳裏に『意外』に当て嵌まる石が浮かび上がる。
その石に対して悲痛にも見える視線を向けた。
「ーーモルガ、お前……小さな頃は最短で言葉を解すぐらいに神童だったのに、何で今はそうなってしまったんだ……」
「どういう意味だオイ!?俺が一番意外だって言いたいのか!!?
ーーああもう、お前だよお前!!最短記録ホルダーはフォスフォフィライト、お前だ!!」

あーあ、言っちゃったとチラホラため息が上がったりする。
当のフォスは、何それと全く身に覚えのない指摘をされて目をパチクリさせた。
「生まれて2週間で単語を口にし始めたよ。おそらく今後抜かれる事は無いのではと思しき早さだ。
ーー今考えてみると、おそらくフォスの言う『記憶』の影響なのだろう。
教えていない事まで口にしていたからな」
「会話は出来るんだけど、支離滅裂で意味不明な事も多かったからなぁ……」
「ええー……？覚えてないぞう、フォスさんぜんぜん覚えてない」
「色々凄かったぞ。何か都合が悪くなる度に『ぶっだ、あんたまだねてるのか！』とか叫んだり」
「フォスのお陰で、一時期『わかっぱー！』が流行りましたね」
「『だいやとうとい』も昔っから言ってたな」
「先生に対して、『せんせー、せんせーはなんでおぼうさんのかっこうしてるの？はげだから？』とか凄い事聞いてたよね」
「……スゲェな、キレッキレじゃんか昔のボク。えええ、ガチで覚えてねーぞ」
「なんかもう、お前は生まれた時からフォスだったわ」
「……ターコイズは、フォスのアホな所を見習わないでくださいね」

「なんだとうー!?」
　話している内容すら理解出来ていないだろうターコイズは、目をパチクリしつつその喧騒を興味深そうに眺めていた。

@　@　@

　ーー数日後。
『ーーシンシャ！一緒に抗議するです!!』
　アルビカンスの第一声だった。
　シンシャを探して方々歩き回ったのか、肩で息をしつつ海水をあおって喉を潤している。
　その様相は「私、怒ってます！」と全身でアピールしていた。
　対するシンシャと言えば、ダイヤ・ルチルと一緒に何かのカケラを覗き込んで凄く真面目な話をしていた最中だった訳だが。
　突然のアルビカンスの乱入に、「なんだコイツ」感を隠せていない。
「ーーどうした?」
　凄い剣幕だったので、とりあえず聞いてあげることにしてみるシンシャはそれなりに

大人だった。……一方でアフォスを相手にするかのような、なんか嫌な予感も感じていたが。

『フォスがターコイズにベッタリで、遊んでくれなくなったのです!!私への対応がおざなりになり始めたのです!!

3年前のニコベラツインズ誕生時の父さま母さまとおんなじ空気を出しやがってるのです!!』

ほら見ろしょうもない。

「あー……あの時はアルっち、スネてフォスにベッタリだったもんねえ」

「まあ、年下が生まれた時に誰もが通る葛藤ですよ。アルもそろそろ器の大きさを見せてあげても良い時期では?」

「というか、なぜ俺を巻き込むんだ……」

アルが最近アフォス化しているように見えて頭が痛くなってきたシンシャである。

幼い頃からあんなドギツイ朱に交わってたら、そりゃあ真っ赤に染まるのも道理ではあるが。

『何言ってるですか!!母さまだって、近頃フォスとシンシャのアオハルシーンに出くわせなくなって、ｈｓｈｓできる機会が減ったって嘆いてたです!!

ならきっと、シンシャも私と同じ想いを抱えているはずです!!』

「ほう」
「ほほう」
「案の定な方向に向かったなクソ！そんなアオハルはアルの勝手な妄想だろ、お前らも露骨に反応するな!!」
『嘘です!!割と最近、池の近くでフォスとシンシャがむぎゅうしてたのバッチリ見たです!!アオハルは現在進行形です!!』
「うあああああああああああああ!!?」
「詳しく」
「それもっと詳しく」
恋愛脳（ダイヤ）とからかい屋（ルチル）が見事に食いつく上物の話題だった。
あまりの返しに一瞬、シンシャの思考が真っ白になる。
ーーいや待て、ハッタリだ、あの時辺りを見回したけど人影なんて何処にもなかったじゃないか。いやでも場所合ってるし……
『池の水面に映った姿を見ただけで、会話までは聞こえなかったですがーー』
……水面、だとう……っ!?
『ハシャいでシンシャに抱きついたフォスの背中にですね。シンシャの手がこう、戸惑いがちに回されーー』

「ーー抗議しよう！俺も抗議に参加しよう!!」
選択の余地は許されていなかった。
だってあの時のはマズイ。本当にマズイのだ。
思わず後ろに手を回してしまい、なんか凄い甘い気分になってしまい、それから、それからーー
当時の一部始終を目撃していたアルビカンスはそっと柔らかく微笑みかける。
『シンシャーー
ーー「お願いします」でしょう？』
「お前ホンッットにフォスに似てきたな!!?」
量産型アフォスが世を席巻するようになったらこの世界はおしまいだと真剣に思う。
そしてなんらかの取り引きが行われてアオハルエピソードにありつけないかもしれないと読んだダイヤが、にこやかに手に持っていた欠けらを置いて、
「ーー僕、フォスに詳しい話聞いてくるっ！」
「ヤメロオオオォォッッ!!!」
決死のインターセプトでシンシャが欠けた。

『……で、なんなんですかそれ？』
シンシャ達が集まって見ていた物に話題が移る。
ーーそう、凄く真面目な話をしていたのである。
視線の先にあったのは、ツルツルとした素材で作られた、殻のカケラのような何かが３つほど。
一番大きい物で、手のひら程の大きさがある。
はっきり解るのは、キラキラ族やその『なりそこない』のような鉱物とは明らかに違うという事。
「ーーここ数日の間、浜でチラチラ見つかってる謎の物質だ。仮称すらまだついてない。何か、大きな殻の一部である可能性が高そうなんだが……こんな殻を持つ生物は見たことがない」
「しかも想像される大きさの割に、発見例がコレしかないのも不気味でして。
……一応伺いますが、アドミラビリス案件ですか？コレは」
『いや……私もこんなの初めて見るですよ』
「……だよな……」
「インクルージョンを探ってみたいんだけど、今のレンズ技術では不透明な物を観察するのは難しくてねぇ……」

もしかしたら、かつて人間が使っていた物の一部だった……とかであれば、とてもロマンのある話な訳だが。

口には出さないが、シンシャとしては出てきた時期が妙な不安を感じさせた。

なんでこんな……ターコイズが生まれた時期に？

『……フォスとか先生はなんて言ってたです？』

「先生は良く分からない、と。フォスは……ターコイズにベッタリだしな。聞いてない。なんか暗い方向に話が向いちゃったら、ターコイズの教育に良くないだろ」

フォスが側にいるという時点で、情操教育に良くなさそうだという指摘はしてはいけない。

「ーーなあ。ここ最近、海の方では何か変なことが起きたりして無かったか？」

少しでも関連付けられる何かが欲しくて、海の事情に目を向けてみるがーー

『ええ？……私にとっては、ターコイズのあんちくしょうが生まれた事が余程変な事なのですが』

「アルっち、ほんとフォスの事大好きだよねえ」

「何だかんだで面倒見が良いですからねえ、フォスは。あの脆い体で１０年以上ボルツの稽古に付き合っていたあたり、根は尊敬出来るんですけどね……根は」

何か含みを持たせたセリフだが、誰も指摘はしなかった。

『……ああ、そう言えば』
「うん？」
天井を見上げながら、アルが呟く。
『十中八九、目の錯覚か気のせいだと思うですが
……ターコイズが生まれる前の晩あたり、なんとなしに眺めていた月が、一瞬……消えたような気がしたですよ』
「……つきが、きえる」
オウム返しに呟いたシンシャの言葉があまりにシュールで、微妙な空気に溶けて消えた。
ダイヤが言う。
「もしかしてーーホラー案件？」
目がらんらんと輝いていた。
「月に攫われたかつての仲間が、皆に会いたいと言う想いを募らせて、ターコイズと言う形をとってやって来た、とかですか……？」
「うふふ……もしそうだったら、フォスはどんな反応するかな？」
突発開催される『ドキッ☆キラキラ族の百物語』には不思議と皆勤賞しているフォスの癖に、展開される物語の数々に対し、それはもうステキな反応を返してくれるのだ。

「あんまり怖い話だったりすると、その後震えた声で『一緒に寝て』ってお願いしてくるの、ホントもう可愛いんだから！」

ぴくっ

『ーーいまシンシャ、反応したですか？』

「してない」

『一緒に寝て、のあたりで反応したですか？』

「してない」

「今度百物語やる事になったら、シンシャも参加しますか？」

「しない」

「うふふ……じゃあ、その話が出たら教えてあげるね？」

「いかない」

ちょくちょくシンシャイジリが止まらない一同である。

――イジられながらも、シンシャは内心にじみ出てくる不安の種を消化しきれないでいた。

なぜなら少し前に、ユークのボヤキを聞いたからだ。

ここ数ヶ月、月人の襲来頻度が極端に落ちている……と。

……そりゃあ、誘拐犯が来ないのならば、それが一番良いに決まってる。いっそその

まま消えてなくなれとも思う。そしてその前に皆を返せとも思う。
思うが……額面通りに受け取るのは早計過ぎる。
乙型（新式）だって最後に見なくなって久しい。アレキがギャースカ騒いでいる程だ。
月人のリソース枯渇……？
ーー否。
これはつまり、次の猛攻への下準備中と言う事なんじゃないのか。
ユークはそう解釈している。シンシャも同意見だ。
今回の件ーー謎のカケラに、もしかしたら一瞬、消えたのかもしれない月。
そして、ターコイズ……？
何が関係しているのか。何が関係していないのか。見るもの全て、悪い方向へ向かって行く歯車のように思えてしまう。
嬉しい事が続いている。
だからこそ、揺り返しが恐ろしかった。

ーーところで結局この後、シンシャのアオハルエピソードが流出してしまい、恥ずかしさのあまりシンシャは振動する水銀の繭の中に閉じこもって外界の音を全てシャットアウトすると言う無駄に高度な引きこもり技『天岩戸』を開眼した。

コレが揺り返しのひとつでない事を信じたい。
なおアオハルエピソードの詳細については、シンシャへのせめてもの情けとして、本項への記述は差し控えるものとする。

@　@　@

ターコイズはフォスにベッタリだった。
いや、フォスがターコイズから離れないと言うべきかもしれないが。
でも、傍目から見て彼らはとても仲良しさんだ。
お兄さん風を吹かせたがるフォスの後を
健気に、そして少し危なげな足取りでターコイズがひょこひょこ付いて行くわけだ。
フォスより背丈のあるターコイズなので、なんか微妙な違和感はあった。
彼らの様子を見て大型犬の散歩を連想して和んだのは、犬を知る金剛先生ぐらいだった。
ターコイズはまだ「あ」とも「う」とも声を出せなかった。
しかし好奇心は旺盛のようで、フォスに連れられた先に行ってはキョロキョロと何にでも興味を示した。

そんなターコイズに、フォスが自分の編んでいる博物誌を見せて読み聞かせてあげるのだが……そもそもミミズがブレイクダンスしているような筆跡の為、他の石によって清書されたもの以外は閲覧禁止令が出てブーたれる一幕があったりする。

ターコイズが言葉を理解出来ないと解っていても、フォスは愛を持って積極的にターコイズに呼びかけた。

ーーそれはかつて、フォスが他の石達にそうされて育ったように。

たとえ覚えていなかったとしても、愛は受け継がれて行く――

「せんせー、ターコイズは戦争に参加するのでしょうか？」

「流石にまだわからない。わからないがーー」

金剛先生はターコイズに甲斐甲斐しく構っているフォスを見て目を細める。

好奇心旺盛で身体能力も申し分ない。きっと、賢く強い石に育つだろう。

そして、きっとフォスの隣で成長して行くのだ。

「ーーフォスのように、強くて優しい子になるかもしれないな」

ーーそれはひとつの、平和な願いだ。

ーー結論から言えば。
その願いが、叶うことはなかった。

『その日』の記録にはこう記されている。

ーー天候は快晴。
千切れた雲が僅かにまばらな空なるも、これまでに無い遅い時間に襲来。
夕暮れ時に学校を囲むようにして、ほぼ同時に黒点を5つ観測。内2つは虚黒点。
残りの3つは全て2重の黒点を形成する。
それらより出現するのは月人3器。
その全て、目視した時点で丙型（しろのような特殊形・特殊能力持ちの新式）と認むーー

その風貌で特に目立ったのは、身長3mはあろうかと言う巨漢にして、筋肉隆々に獅子の面を付けた丙型。

ーーのちに『セミ』と呼ばれる月人との交戦である。